

主要地方道成田松尾線VI

芝山町小池地蔵II遺跡・宮門遺跡

1991

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

主要地方道成田松尾線VI

芝山町小池地蔵II遺跡・くもん宮門遺跡

1991

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

千葉県の北東部に広がる下総台地東部は、東は太平洋に面し、豊かな自然環境に恵まれており、原始・古代の人々の生活の場である遺跡が数多く残されています。現在、この地域は農業をはじめとする第一次産業が主要産業として位置づけられている一方、新東京国際空港を擁していいるため各種の地域整備事業が進められているなど、急速な発展をしています。

千葉県土木部は、これら開発事業に伴う道路整備事業の一環として空港と九十九里沿岸地域を結ぶ主要地方道成田松尾線地方道改良事業を進めており、その一部については既に供用されているところです。

当該事業地内に所在する遺跡の取扱いについて千葉県教育委員会は千葉県土木部と慎重に協議を重ねた結果、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講じることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが、昭和53年度から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は『主要地方道成田松尾線』ⅠからⅤとして既に報告しているところです。

この度、昭和59年度に調査を実施した芝山町宮門遺跡及び、昭和60年度の芝山町小池地蔵Ⅱ遺跡の調査成果がまとまり『主要地方道成田松尾線』Ⅵとして刊行する運びとなりました。両遺跡からは縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が多数検出され、共に大規模な集落跡であることが明らかとなりました。これらの資料は、当該地域の歴史を知るうえでたいへん貴重なものです。

この報告書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史を理解するために活用されるとともに文化財の保護・普及に貢献できることを切望しております。

最後に発掘調査から報告書刊行まで多大な御協力、御指導をいただきました千葉県土木部成田土木事務所、千葉県教育庁生涯学習部文化課、芝山町教育委員会をはじめ関係諸機関に感謝の意を表すとともに、調査に携わっていただいた調査補助員の皆様に心からお礼申し上げます。

平成3年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 岩瀬 良三

凡 例

1. 本書は主要地方道成田松尾線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に収載する遺跡は、山武郡芝山町小池地蔵932-1に所在する小池地蔵Ⅱ遺跡、芝山町大台字宮門城2622-2他に所在する宮門遺跡である。
3. 調査は千葉県教育庁生涯学習部文化課の指導のもと、千葉県土木部との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
4. 遺跡コードは小池地蔵Ⅱ遺跡(409-019)、宮門遺跡(409-018)を使用した。
5. 発掘調査は宮門遺跡が昭和59年度、小池地蔵Ⅱ遺跡が昭和60年度、整理作業は宮門遺跡が昭和60・61年度、小池地蔵Ⅱ遺跡が昭和61・平成元年度に行った。
6. 発掘調査の担当者は下記の通りである。

宮門遺跡 調査部長 鈴木道之助、部長補佐 根本弘、班長 高橋賢一

調査研究員 高橋博文

小池地蔵Ⅱ遺跡 調査部長 鈴木道之助、部長補佐 岡川宏道、班長 高橋賢一

調査研究員 岡田光広

7. 整理作業の担当者は下記の通りである。

宮門遺跡 調査部長 鈴木道之助、部長補佐 岡川宏道、班長 高橋賢一

班長代理 三浦和信、調査研究員 岡田光広

小池地蔵Ⅱ遺跡 調査部長 鈴木道之助・堀部昭夫、部長補佐 岡川宏道・阪田正一

班長 高橋賢一・藤崎芳樹、班長代理 三浦和信、技師 渡邊高弘

8. 本書の執筆は小池地蔵Ⅱ遺跡の縄文時代を技師石橋宏克、宮門遺跡の縄文時代土器とまとめを班長代理宮重行、岡田光広、石器を技師新田浩三が担当し、それ以外は高橋賢一、渡邊高弘が行った。

9. 本書の編集は渡邊が行った。

10. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関の御協力を頂いた。ここに感謝の意を表します。

千葉県土木部道路建設課、千葉県成田土木事務所、芝山町教育委員会

用 例

1. 遺構番号は住居跡に0番台、土壌に100番台の通し番号を発掘調査時に付しているが、本書では、番号の後に遺構の種類を付け加えている。
2. 遺構の縮尺は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壌1/80、カマド1/40である。
3. 遺物の縮尺は縄文土器1/3・1/4、土製品1/2、石器1/3・2/3、古墳時代・奈良・平安時代土器1/4、土製品・石製品・鉄製品1/2である。
4. 遺物出土状況図で使用している記号は、●が土器、○が土製品、■が石器・石製品、▲が鉄製品である。
5. 本書に使用した地形図のうち第1図は、国土地理院発行の1:50,000成田・東金、第2図は、芝山町役場発行の1:2,500芝山町17・18・22・23をそれぞれ編集したものである。
6. 本書に使用した航空写真は、京葉測量株式会社撮影のものである。
7. 各遺構の実測図に使用したスクリーントーンは以下のことを示している。



カマド・炉等の被熱赤化部分



カマド構築材



カマド構築材崩壊土



カマド掘り方埋め土



焼土



焼土を多く含む土層

8. 各土器の断面、表面のスクリーントーンは以下のことを示している。



須恵器



施釉陶器



赤彩土器



内黒土器



漆



油煙痕

9. 本書では、須恵器と同様の回転力を用いて成形・調整され、酸化焰焼成された土器を土師質土器と呼称している。

本文目次

序文

凡例

用例

| | |
|-----------------------|-----|
| 序 章 | 3 |
| 第1節 遺跡の立地と周辺の遺跡 | 3 |
| 第1章 小池地蔵Ⅱ遺跡 | 11 |
| 第1節 調査の方法と概要 | 11 |
| 第2節 縄文時代 | 14 |
| 第3節 古墳時代 | 17 |
| 第4節 奈良・平安時代 | 28 |
| 第2章 宮門遺跡 | 39 |
| 第1節 調査の方法と概要 | 39 |
| 第2節 縄文時代 | 40 |
| 第3節 古墳時代 | 89 |
| 第4節 奈良・平安時代 | 112 |
| 第3章 まとめ | 159 |
| 第1節 縄文時代 | 159 |
| 第2節 古墳時代 | 161 |
| 第3節 奈良・平安時代 | 163 |

挿 図 目 次

| | |
|--|----|
| 第1図 遺跡位置図 | 4 |
| 第2図 周辺地形と遺跡 | 7 |
| 第3図 小グリッド分割図 | 11 |
| 第4図 小池地蔵遺跡・小池地蔵Ⅱ遺跡全測図 | 12 |
| 第5図 小池地蔵Ⅱ遺跡全測図 | 13 |
| 第6図 グリッド出土縄文土器 | 15 |
| 第7図 001号住居跡・カマド実測図 | 18 |
| 第8図 002号住居跡・カマド実測図 | 19 |
| 第9図 003号住居跡・カマド実測図 | 21 |
| 第10図 007号住居跡・カマド実測図 | 22 |
| 第11図 111号土壤実測図 | 23 |
| 第12図 001・002号住居跡出土土器 | 24 |
| 第13図 002・003・007号住居跡・111号土壤・A2-00グリッド出土土器 | 25 |
| 第14図 002・003号住居跡出土土製品 | 27 |
| 第15図 004号住居跡・カマド実測図 | 28 |
| 第16図 005・008号住居跡・カマド実測図 | 29 |
| 第17図 006号住居跡実測図 | 30 |
| 第18図 004・006・008号住居跡・A3-00・B2-00・B3-00グリッド出土土器 | 31 |
| 第19図 宮門遺跡全測図 | 37 |
| 第20図 小グリッド分割図 | 39 |
| 第21図 021号住居跡実測図 | 40 |
| 第22図 014号土壤実測図 | 41 |
| 第23図 101・102・104・105・108号土壤実測図 | 43 |
| 第24図 106・107・109・110・111・112・113・114・115・116・117・118・130号土壤実測図 | 45 |
| 第25図 119・120・121・122・123・124・125・126・127・128・129号土壤実測図 | 48 |
| 第26図 021号住居跡出土土器 | 51 |
| 第27図 014・101号土壤出土土器 | 52 |
| 第28図 102号土壤出土土器 | 53 |
| 第29図 104・105号土壤出土土器 | 55 |
| 第30図 105号土壤出土土器 | 56 |

| | | |
|------|--|-----|
| 第31図 | 106・108・110号土壙出土土器 | 57 |
| 第32図 | 111・113・114・115・117・118・119・120号土壙出土土器 | 58 |
| 第33図 | 121・122・123・124・125号土壙出土土器 | 60 |
| 第34図 | 126・127号土壙出土土器 | 62 |
| 第35図 | 126・127号土壙出土土器 | 63 |
| 第36図 | 127号土壙出土土器 | 64 |
| 第37図 | 128・129・130号土壙出土土器 | 65 |
| 第38図 | グリッド出土縄文土器（1） | 67 |
| 第39図 | グリッド出土縄文土器（2） | 69 |
| 第40図 | グリッド出土縄文土器（3） | 71 |
| 第41図 | グリッド出土縄文土器（4） | 73 |
| 第42図 | グリッド出土縄文土器（5） | 75 |
| 第43図 | グリッド出土縄文土器（6） | 76 |
| 第44図 | 縄文時代土製品（1） | 78 |
| 第45図 | 縄文時代土製品（2） | 79 |
| 第46図 | 縄文時代石器（1） | 82 |
| 第47図 | 縄文時代石器（2） | 83 |
| 第48図 | 縄文時代石器（3） | 84 |
| 第49図 | 縄文時代石器（4） | 86 |
| 第50図 | 002号住居跡実測図 | 89 |
| 第51図 | 009号住居跡実測図 | 90 |
| 第52図 | 015号住居跡実測図 | 91 |
| 第53図 | 016号住居跡実測図 | 93 |
| 第54図 | 017号住居跡・カマド実測図 | 94 |
| 第55図 | 018号住居跡実測図 | 96 |
| 第56図 | 019号住居跡実測図 | 97 |
| 第57図 | 020号住居跡実測図 | 98 |
| 第58図 | 022号住居跡実測図 | 99 |
| 第59図 | 009号住居跡出土土器 | 101 |
| 第60図 | 009・015・016号住居跡出土土器 | 103 |
| 第61図 | 016・017・018号住居跡出土土器 | 104 |
| 第62図 | 018号住居跡出土土器 | 105 |
| 第63図 | 019・020号住居跡出土土器 | 106 |

| | | |
|------|---|-----|
| 第64図 | 017号住居跡・B6-13グリッド出土土製品 | 110 |
| 第65図 | 016・018号住居跡出土石製品 | 111 |
| 第66図 | 016号住居跡出土鉄製品 | 111 |
| 第67図 | 001号住居跡・カマド実測図 | 113 |
| 第68図 | 003号住居跡・カマド実測図 | 114 |
| 第69図 | 004号住居跡・カマド実測図 | 116 |
| 第70図 | 005号住居跡実測図 | 117 |
| 第71図 | 006号住居跡実測図 | 118 |
| 第72図 | 007号住居跡実測図 | 119 |
| 第73図 | 008号住居跡実測図 | 120 |
| 第74図 | 010A号住居跡実測図 | 122 |
| 第75図 | 010B号住居跡実測図 | 123 |
| 第76図 | 011号住居跡・カマド実測図 | 124 |
| 第77図 | 012号住居跡実測図 | 125 |
| 第78図 | 013号住居跡実測図 | 126 |
| 第79図 | 023・024号住居跡実測図 | 127 |
| 第80図 | 025号住居跡実測図 | 128 |
| 第81図 | 026号掘立柱建物跡実測図 | 129 |
| 第82図 | 001・003号住居跡出土土器 | 133 |
| 第83図 | 003号住居跡出土土器 | 134 |
| 第84図 | 004・005号住居跡出土土器 | 135 |
| 第85図 | 005・006号住居跡出土土器 | 136 |
| 第86図 | 006・007・008号住居跡出土土器 | 137 |
| 第87図 | 008・010号住居跡出土土器 | 138 |
| 第88図 | 010号住居跡出土土器 | 139 |
| 第89図 | 010号住居跡出土土器 | 140 |
| 第90図 | 010号住居跡出土土器 | 141 |
| 第91図 | 010・011号住居跡出土土器 | 142 |
| 第92図 | 011号住居跡出土土器 | 143 |
| 第93図 | 011・013号住居跡出土土器 | 144 |
| 第94図 | 013・024・025号住居跡・026号掘立柱建物跡・C10・C11グリッド出土・表採土器 | 145 |
| 第95図 | 001・011号住居跡・B4-11グリッド出土石製品 | 154 |
| 第96図 | 003・004・008・010・011・012・013・024号住居跡出土鉄製品 | 155 |

表 目 次

| | |
|----------------------------|-----|
| 第1表 古墳時代土器観察表 | 26 |
| 第2表 古墳時代土製品計測表 | 27 |
| 第3表 奈良・平安時代土器観察表 | 33 |
| 第4表 繩文時代土製品計測表 | 80 |
| 第5表 繩文時代石器属性表 | 87 |
| 第6表 古墳時代土器観察表 | 107 |
| 第7表 古墳時代土製品計測表 | 110 |
| 第8表 古墳時代石製品計測表 | 111 |
| 第9表 古墳時代鉄製品計測表 | 111 |
| 第10表 奈良・平安時代土器観察表 | 146 |
| 第11表 奈良・平安時代石製品計測表 | 154 |
| 第12表 奈良・平安時代鉄製品計測表 | 156 |
| 第13表 宮門遺跡墨書き・線刻土器一覧表 | 165 |

図 版 目 次

| | |
|-----------------|-------------------|
| 図版 1 遺跡周辺航空写真 | 古墳時代土製品 |
| 図版 2 小池地蔵Ⅱ遺跡遠景 | 図版 8 奈良・平安時代土器 |
| 調査区全景 | 図版 9 宮門遺跡遠景 |
| 001号住居跡 | 繩文時代遺構検出状況 |
| 図版 3 002号住居跡 | 021号住居跡 |
| 003号住居跡 | 図版10 014号土壤 |
| 007号住居跡 | 101号土壤 |
| 図版 4 004号住居跡 | 102号土壤 |
| 005・008号住居跡 | 図版11 102号土壤遺物出土状況 |
| 006号住居跡 | 103号土壤 |
| 図版 5 グリッド出土繩文土器 | 125号土壤 |
| 図版 6 古墳時代土器（1） | 図版12 126号土壤 |
| 図版 7 古墳時代土器（2） | 126号土壤遺物出土状況 |

| | | |
|------|----------------------------------|-------------------------|
| | 127・128号土壙 | 118・119・120・121・122 |
| 図版13 | 調査区南部全景 調査区北部全景 | 123・124・125号土壙出土土器 |
| | 002号住居跡 | 図版25 126・127号土壙出土土器 |
| 図版14 | 009号住居跡 015号住居跡 016号住居跡 | 図版26 126・127号土壙出土土器 |
| | 017号住居跡 018号住居跡 019号住居跡 | 図版27 128・129・130号土壙出土土器 |
| 図版16 | 001号住居跡 003号住居跡 004号住居跡 | 図版28 グリッド出土縄文土器（1） |
| | 005号住居跡 006号住居跡 007号住居跡 | 図版29 グリッド出土縄文土器（2） |
| 図版18 | 008号住居跡 010A号住居跡 010B号住居跡 | 図版30 グリッド出土縄文土器（3） |
| | 011号住居跡 013号住居跡 023号住居跡 | 図版31 縄文時代土製品 |
| 図版20 | 024号住居跡 025号住居跡 026号掘立柱建物跡 | 図版32 縄文時代石器（1） |
| | 021号住居跡 014号土壙出土土器 | 図版33 縄文時代石器（2） |
| 図版22 | 102・104・105号土壙出土土器 | 図版34 縄文時代石器（3） |
| 図版23 | 102・105・106 108・110号土壙出土土器 | 図版35 縄文時代石器（4） |
| 図版24 | 111・113・114・115・117 | 図版36 古墳時代土器（1） |
| | | 図版37 古墳時代土器（2） |
| | | 図版38 古墳時代土器（3） |
| | | 図版39 古墳時代土器（4） |
| | | 図版40 古墳時代土器（5） |
| | | 図版41 奈良・平安時代土器（1） |
| | | 図版42 奈良・平安時代土器（2） |
| | | 図版43 奈良・平安時代土器（3） |
| | | 図版44 奈良・平安時代土器（4） |
| | | 図版45 奈良・平安時代土器（5） |
| | | 図版46 奈良・平安時代土器（6） |
| | | 図版47 奈良・平安時代土器（7） |
| | | 図版48 奈良・平安時代土器（8） |
| | | 図版49 古墳時代土製品 |
| | | 古墳時代石製品 |
| | | 奈良・平安時代石製品 |
| | | 古墳時代鉄製品 |
| | | 図版50 奈良・平安時代鉄製品 |

序 章

序 章

第1節 遺跡の立地と周辺の遺跡（第1・2図、図版1）

房総半島の地形は、富津市磯根岬と茂原市を結ぶ線により景観が二分され、南側は標高200～300mの丘陵・山地が連続と続く上総丘陵、横岡山系、安房丘陵があり、北側は第四紀の洪積世台地（下総台地）と利根川、東京湾、太平洋に面する低地が広がる。

下総台地は、浅海性の砂層の上に下末吉・武藏野・立川ローム層が堆積した起伏の少ない平坦な台地であるが、利根川、東京湾に流入する河川によって侵食され、台地は樹枝状に複雑に入り組んだ変化に富んだ地形を作り出している。芝山町は下総台地の中央に位置し、利根川と太平洋の分水嶺にあたる新東京国際空港付近に源を発する栗山川の支流である高谷川と木戸川によって開拓された台地から成る。小池地蔵Ⅱ遺跡は芝山町市街地から南西に延びる標高40m前後の舌状台地の基部の南辺に位置し、南側には小池新林遺跡、北側には小池麻生遺跡の台地がある。宮門遺跡は木戸川と高谷川の支谷が大きく入り込んだ台地上に位置する。

近年、本地域では新東京国際空港建設をはじめとする各種の開発に伴い、活発に発掘調査が行なわれている。これらのうち、ある程度広範囲の周辺遺跡については、これまで『主要地方道成田松尾線』I～Vに掲載されたものとほとんど変わることはない。したがって今回は、小池地蔵Ⅱ遺跡・宮門遺跡の周辺で比較的近接して調査が行なわれた遺跡のうち、成果が公表されているものについて概要を紹介する。

1. 大台西遺跡（平岡 1979）

宮門遺跡と谷をはさんだ北側の台地上に立地する。昭和52年に成田用水幹線水路建設に伴い発掘調査が行われた。3.4m幅の限られた範囲の調査であったが台地を貫いているため、その時期・性格の一端を知ることができる。遺構は古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡1棟、製鉄遺構、中世の溝などが検出された。かなり広い台地であるが、住居跡は旧県道成田松尾線の東側に集中しており、集落はさらに台地の東側に広がっていると考えられる。県道の西側では住居跡はほとんど検出されず、台地縁辺から製鉄遺構が検出された。炉などの遺構は検出されなかったが、土壌数基に伴って鍛冶滓、羽口などの遺物が出土している。

2. 高田権現遺跡（平岡 1979）

宮門遺跡と谷をはさんだ北西側の舌状台地上に立地する。昭和52・53年に成田用水加圧機場建設に伴い発掘調査が行われた。遺構は古墳時代後期の竪穴住居跡6軒、円墳1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒、近世の塚40基が検出された。円墳は周溝が検出されたのみであるが、ここから北側に2.3mにわたって分布する山田宝馬古墳群のはば南限と捉えられるものである。



第1図 通跡位置図 (1/50,000)

全測図が掲載されていないため遺構の分布状況は不明であるが、遺物としては第8号住居跡から「上総家」、「上新家」、「福」、「寸小福」と墨書きされた土器などが検出されている。土器の時期は8世紀後半であり、宮門遺跡との関連が注目される。この舌状台地のつけ根から先端にかけては塚群があり、径3~6m、高さ1~1.5mのマウンドからなる塚が密集している。調査された塚からの出土遺物は少なく、五輪塔空風輪部分、瓦質土器、元祐通宝、文久永宝、寛永通宝などが検出されているにすぎない。

3. 宮門遺跡（平岡 1974）

今回報告する宮門遺跡と同一の台地上で東側約20mの平坦面上に位置する。昭和48年に宅地造成に伴い発掘調査された。縄文時代中期阿玉台、加曾利E期の竪穴状遺構2基、炉穴1基、土壙6基、古墳時代後期の竪穴住居跡4軒などが検出された。今回報告する地点からもほぼ同時期の遺構・遺物が検出されており、さらに南東の平坦面に集落は広がっていると考えられる。古墳時代後期の住居跡からは剣形・有孔円板などの石製模造品、ガラス製の小玉などが出土している。

4. 猪ノ堤遺跡（越川他 1978）

宮門遺跡と小支谷をはさんだ南側の台地に立地する。昭和53年に成田松尾線建設に伴い発掘調査された。南西に面する緩斜面から古墳時代後期の竪穴住居跡3軒が検出された。1号住居跡からは手捏ね土器、3号住居跡からは土製勾玉、土玉が出土しており、報告者は祭祀的な様相が強いとしている。

5. 小池麻生遺跡（萬崎他 1983）

木戸川に面する扇状の台地のつけ根に立地する。昭和53年に成田松尾線建設に伴い発掘調査された。縄文時代では中晩期の竪穴住居跡1軒、加曾利EⅢ期の竪穴住居跡2軒、古墳時代後期の竪穴住居跡12軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡1棟が検出された。遺構は平坦面から南に面する斜面側に集中している。

6. 小池麻生遺跡（平岡・戸田 1976）

成田松尾線の調査区から約30mほど北西側の地点に位置する。昭和50年に宅地造成に伴い発掘調査された。縄文時代では中晩期1軒、加曾利EⅢ期3軒の竪穴住居跡が検出された。その他に古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡4軒が検出されている。

7. 小池地蔵遺跡（奥田 1985）

今回報告する小池地蔵Ⅱ遺跡と同一の台地上、県道八日市場八街線をはさんだ北西側に位置し、本来同一の遺跡である。検出遺構などは次章で触れる。

8. 小池新林遺跡（奥田 1985）

小池地蔵Ⅱ遺跡の小支谷をはさんだ南東側の隣接する台地上に位置する。昭和54年・61年・62年に成田松尾線建設に伴い発掘調査された。このうち昭和54年調査分についてはすでに報告

済である。未報告分も合わせると、古墳時代中期1軒、後期23軒、奈良時代1軒の竪穴住居跡、掘立柱建物跡3棟などが検出されている。他に遺構に伴うものではないが、縄文時代中後期、弥生時代後期の土器も出土している。

9. 三田遺跡（福間 1989）

小池新林遺跡と同一の台地状東側に隣接する本来は一つの集落であって、昭和62年に芝山町文化センター建設に伴い発掘調査が行なわれた。従来、点と線の調査しか行なわていなかつた本地域での初めて大規模な調査と言え、5世紀代から7世紀代に至る合計106軒の竪穴住居跡が密集して検出された。周辺の成田松尾線関係で調査された例と比較しても、木戸川左岸の台上地ではかなりの密集度で集落が展開していることを示唆させるものである。

10. 御田台遺跡

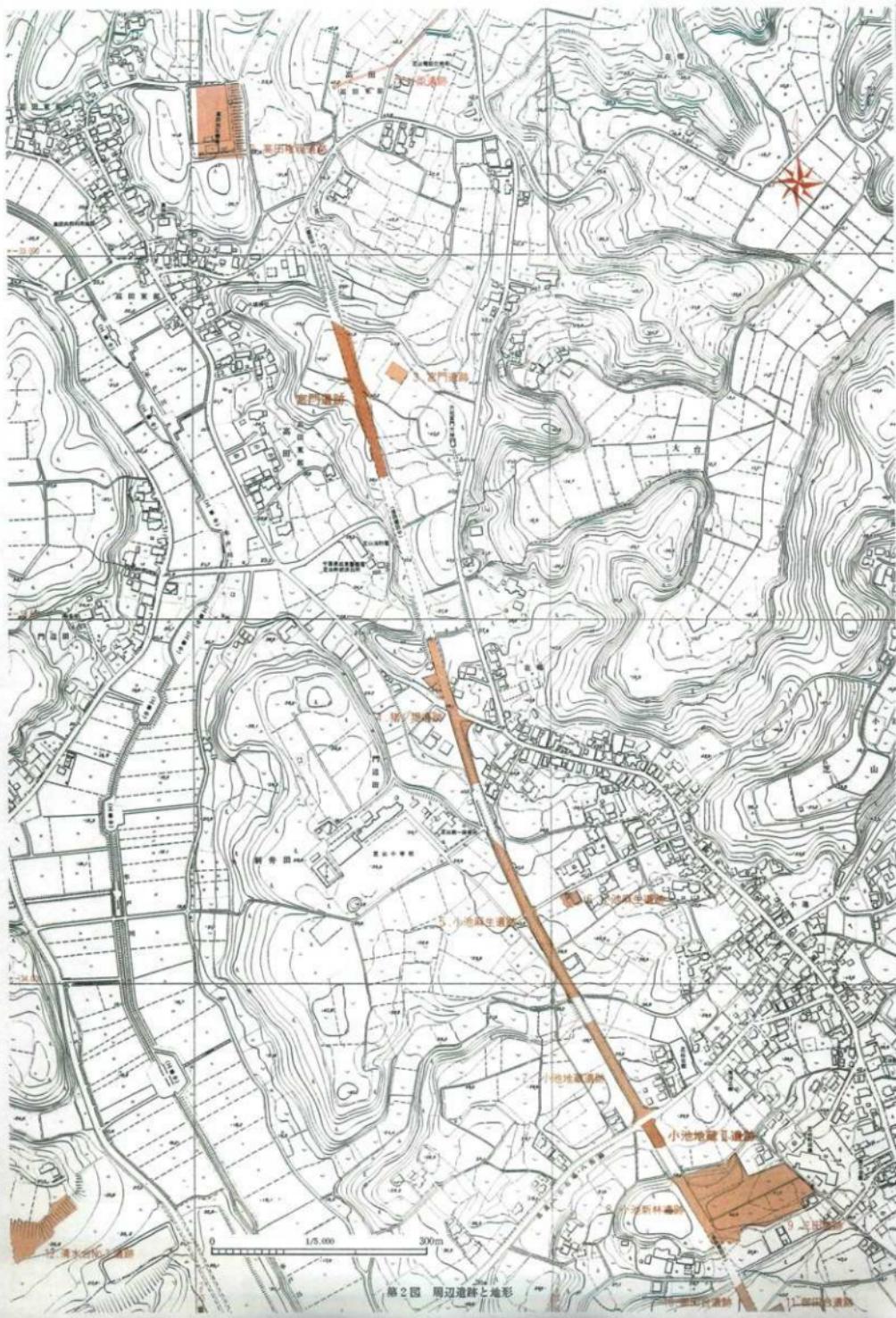
小池新林遺跡の南側の台上地に立地する。昭和61年に成田松尾線建設に伴って発掘調査され、古墳時代後期を中心に37軒の竪穴住居跡が検出された。遺構に伴うものではないが弥生時代後期の土器片なども出土している。

11. 御田台遺跡（新井 1986）

成田松尾線の調査区の東側に隣接する。昭和61年に宅地造成に伴って調査された。検出された遺構は古墳時代後期1軒、平安時代1軒の竪穴住居跡、時期不明の溝1条である。

12. 清水台No.1遺跡（柿沼他 1980）

木戸川右岸の標高40m前後の台上地に立地する。宅地造成に伴い調査された。第2図では、すでに粗造成後の地形しか分からぬが、東側・南側はかなり急な斜面となっていた。先土器時代では住居跡の覆土中であるが柳葉形の槍先形尖頭器が1点出土している。縄文時代では遺構は検出されていないが、早期の撚糸文系土器がまとまって出土している。遺構は古墳時代後期の竪穴住居跡16軒、平安時代の竪穴住居跡1軒が検出された。



第2図 周辺道路と地形

第 1 章

小池地蔵Ⅱ 遺跡

第1章 小池地蔵II遺跡

第1節 調査の方法と概要（第3～5図）

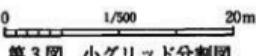
小池地蔵II遺跡は、芝山町市街地の南西約300mに位置し、西方約500mに流れる木戸川の支谷によって樹枝状に開析された舌状台地の南辺に立地する。本遺跡は、昭和54年に調査された小池地蔵遺跡（奥田 1985）の県道八日市場八街線をはさんだ南側に隣接し（第2・4図）、本来は同一の遺跡であるが、事業の進捗に伴い別年度に調査することになり、前回の調査と区別する意味で小池地蔵II遺跡とすることにした。

調査対象となったのは県道の南側の緩斜面部700m²であり、芝山町小池地蔵932-1に所在する。発掘調査は昭和60年10月3日から11月29日まで実施した。小池地蔵遺跡の調査では道路中心杭を基準にしてグリッドを設定したが、今回は公共座標に基づいた20×20mの大グリッドを設定し、大グリッドは調査区域の北から南に向かって1～3、西から東にA～Cとし、これを組合せてA1、A2、A3の名称で呼称した。さらにその中を第3図に示した

ように4m四方の小グリッドに分割して00～44の番号を付け、これに先の大グリッドの名称を組合せてA1-00、A1-01などと呼称した。なお、A1-00グリッドの北西隅の点の座標は公共座標X=-34.180、Y=52.620に対応する。発掘調査は、まず上層の確認調査として調査区全域に2×2mの確認グリッドを入れ、対象面積の10%、70m²の調査を実施した。その結果、調査区のほぼ全域から遺構が検出されたため全域を上層本調査範囲とし、表土除去を行い遺構の調査を行った。上層遺構の調査後、下層の確認調査を対象面積の4%、28m²行ったが先土器時代の遺物は検出されなかつた。

遺跡は調査前は畠であったことから、すでにソフトローム面まで削平されており、遺構の遺存状態は不良であった。検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡3軒、土壙1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒で、その他に時代を特定できないピット・竪穴状遺構・溝などが計23基検出されている。これらの覆土はいずれもローム粒・塊を多量に含み、締まりのないものであり、方形を呈する浅いものが多いことから近現代以降の農作業に伴うものと判断し、本書では削愛した。

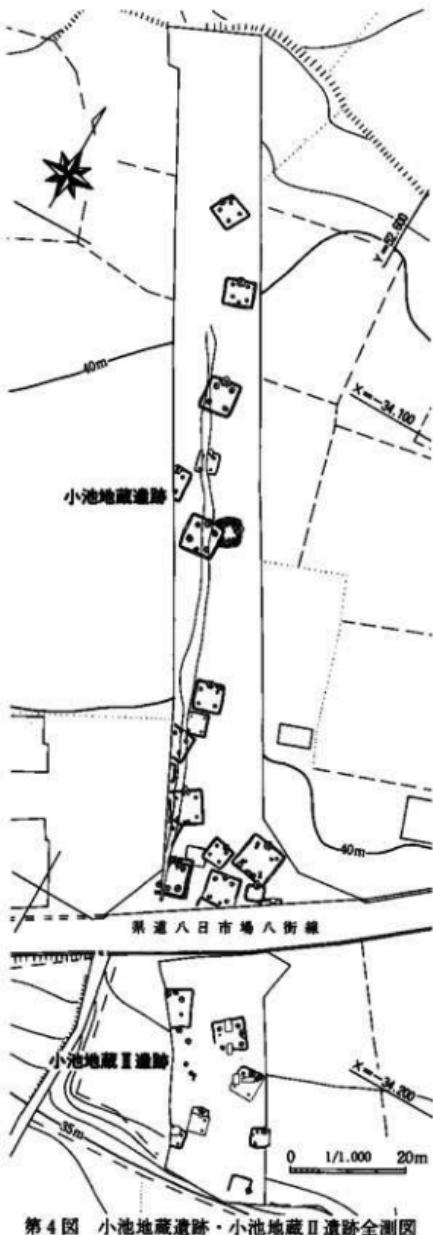
| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 00 | 01 | 02 | 03 | 04 |
| 10 | 11 | | | |
| 20 | | 22 | | |
| 30 | | | 33 | |
| 40 | | | | 44 |



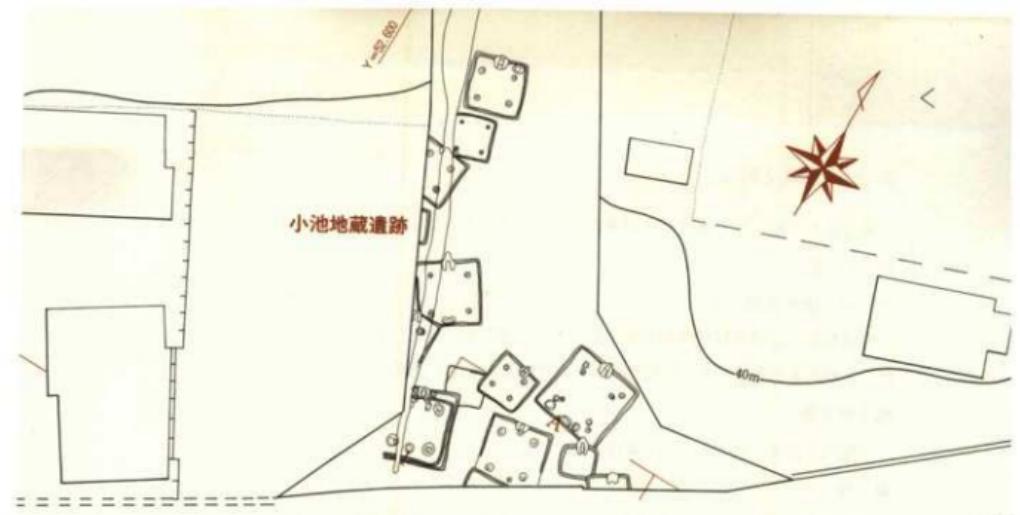
第3図 小グリッド分割図

— 小池地蔵遺跡 —

ここではすでに報告済みである小池地蔵遺跡について触れておきたい。芝山町小池地蔵876-8他に所在し、調査対象面積は2.400m²で、幅15m平均、延長距離約150mの南北に細長い調査区域である。平均標高40m舌状台地をほぼ直交する形で貫いており、南西緩斜面～平坦面にかけて遺構が検出された。縄文時代は遺構は検出されなかつたが、中期の阿玉台式から晩期の前浦式までの土器片を出土している。相対的な量から言えば晩期のものが多いようである。古墳時代の遺構としては、後期の竪穴住居跡が14軒検出され、遺物は、見込に田あるいは臼状の赤彩が施された土師器壺や017号住居跡から出土した7世紀末～8世紀初頭と考えられる須恵器の良好なセットなどが注目される。奈良・平安時代の遺構としては、9世紀代を中心として5軒の竪穴住居跡が検出された。遺物は、018号住居跡から「宮之里家」、019号住居跡から「子和水」と墨書きされた土器などが出土している。他には時期不明とされるカマドを持つ竪穴住居跡3軒が検出されている。



第4図 小池地蔵遺跡・小池地蔵II遺跡全測図



第5図 小池地蔵II遺跡全測図

第2節 繩文時代

本遺跡から出土した縩文時代の遺物はすべてグリッド出土のもので、当該期の遺構は検出されなかった。

グリッド出土土器（第6図、図版5）

本遺跡からは縩文時代中期から晩期に至る土器片が出土している。中期に属するものを第I群、後期のものを第II群、晩期のものを第III群として以下説明を加える。

第I群土器（1～5）

中期の土器を一括する。出土量は少ない。

第1類（1）

中期初頭の五領ヶ台式土器である。胎土に長石などの白色微細粒子を多く含む。1は口縁部の破片で口縁部直下に沈線と刺突による鋸歯状文を施し、以下には縩文を地文とした上に沈線によるジグザグ文を施す。鋸歯状文は2条の沈線間にできあがった隆起帯状の盛り上がりに交互に刺突を施すことによって構成されている。

第2類（2～4）

中期中葉に属する阿玉台式土器である。胎土に雲母粒子を多量に含む焼成の良好な土器である。3は口縁部直下の頸部に相当するもので、2条の角押文が施される。2・3は胴部の無文部の破片である。器面の調整が粗い。

第3類（5）

5は加曾利E式土器である。口縁部直下の渦巻き状文の一部の破片である。

第II群土器（6～36）

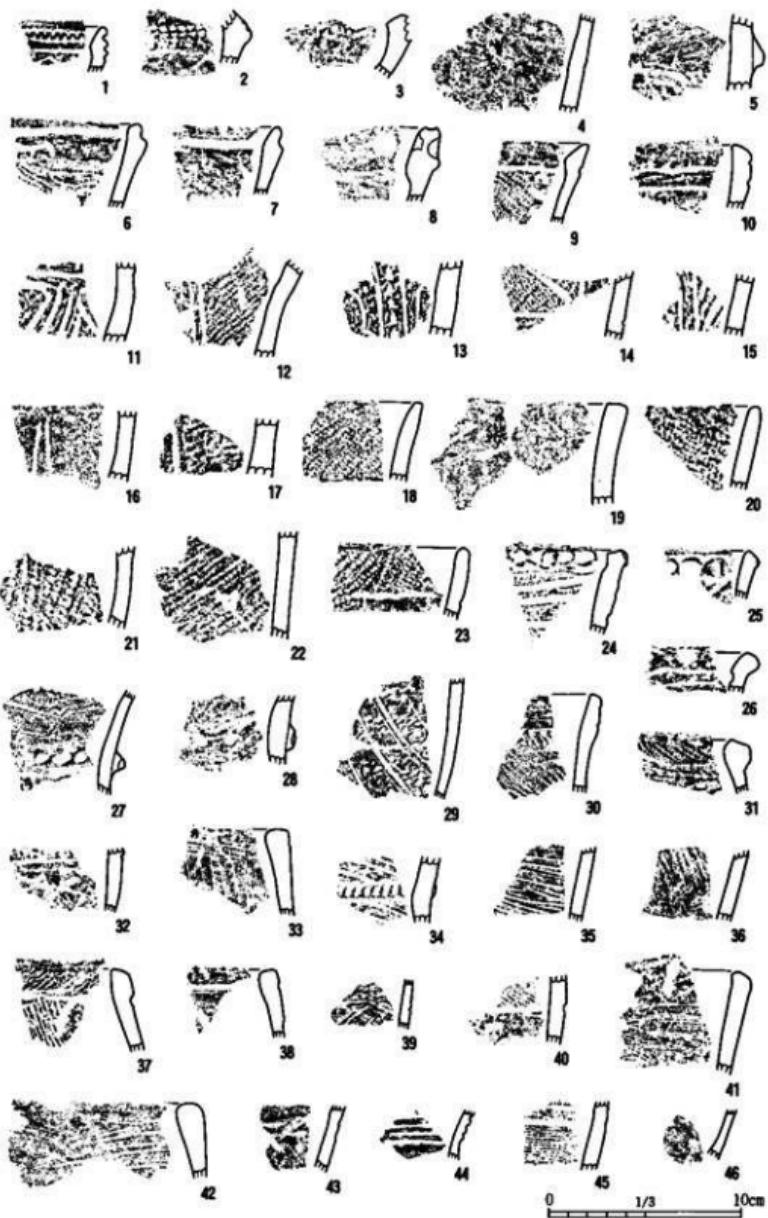
後期の土器を一括した。本遺跡から出土した土器の中で最も多いものである。

第1類（6～22）

後期前半の堀之内式土器である。地文として縩文を施し、口縁部直下に数条の沈線を巡らし、胴部に継位・斜位などの沈線を施すことによって文様を構成するものと口縁部直下から底部直上に至るまで縩文のみを施すものとが認められる。6～10は口縁部の破片で、口縁部直下に1条もしくは2条の沈線を施している。8は小波状を呈する口縁部の破片で、外と内からそれぞれ円形の刺突を施す。11～17は胴部の破片で、沈線によって継位分帶されている。13には沈線間に刺突が施される。14は継位の沈線の他に斜位の沈線が施され幾何学的な文様を構成する。18～22は口縁部直下から縩文を施すものである。19は浅い縩文が施される。

第2類（23～29）

加曾利B式土器である。加曾利B式土器は比較的丁寧な文様を施す精製土器と縩文・沈線文・紐線文によって構成される粗製土器とに分けられる。23は口縁部直下より縩文を施した後、



第6図 グリッド出土繩文土器

横位の沈線によって帯縄文帯を作出するものである。沈線間の縄文帯は一部磨消縄文の技法が観察できる。24~29は粘土紐の貼り付けによる紐縄文を主体とする土器である。24~26は口縁部の破片で、口縁部直下に縦線による隆起帯が認められる。隆起帯上には棒状工具による押捺が施される。地文は燃りの粗い縄文を器面全体に施し、縦線直下から斜位の沈線を施すものである。なお、24・26の裏面には1条の沈線が巡らされる。27・28は胴部の屈曲部の破片で、この部分にも紐縄が巡る。

第3類 (30)

加曾利B式土器から安行1式土器に移行する中間の土器である。所謂、曾谷式土器に相当する。口縁部直下から地文に縄文を施した後、2条の沈線によって区画する。沈線間の区画内は磨消縄文により無文となる。この破片にはないが、おそらく口縁部に瘤状の貼り付けがなされているものと推定される。

第4類 (31~36)

後期後半の安行式土器である。加曾利B式土器と同様精製土器と粗製土器に分けられる。31・32は精製土器である。31は口縁部が内湾し、胴部で最大径を測るものであろう。文様が縄文・沈線・刺突によって構成される帶縄文系土器である。32は沈線と刺突文が認められる。33~36は粗製土器である。33は口縁部の破片で、器面全体にケズリ調整を行った後、沈線によって文様を作出している。文様は口縁部直下で2条の沈線、胴部で斜位の沈線である。34は胴部の屈曲部の破片で、紐縄文が認められる。35・36は胴部の破片である。

第Ⅲ群土器 (37~46)

晩期の土器を一括した。出土量はきわめて少なく、図示したものがすべてである。

第1類 (37~42)

晩期前半の安行3b式土器である。典型的な安行3b式土器ではなく、一地方的な土器群として捉えられる姥山II式土器である。精製土器と粗製土器に分けられる。37~40は精製土器である。37は口縁部の破片で、長梢円の沈線区画文が認められる。区画外には無節の縄文が施される。38は口縁部に沿って1条の沈線が施される。37・38はいずれも口縁部が内湾する。39・40は胴部の破片で、沈線と縄文を用いて文様を施す。39には磨消縄文が認められる。41・42は粗製土器である。口縁部が内湾し、胴部で最大径をもつ深鉢形土器である。文様は口縁部から斜位の沈線を交互に施す。

第2類 (43~46)

晩期終末に位置づけられる土器群である。所謂、荒海式土器に相当しよう。43・44は器面に沈線文を施すものである。44は沈線文は角状工具を用いて施され、全体の文様として変形工字文を作出している。45には沈線文と燃糸文が施される。46は底部付近の破片で、器面に燃りの細かな縄文が施文される。

第3節 古墳時代

1. 造構

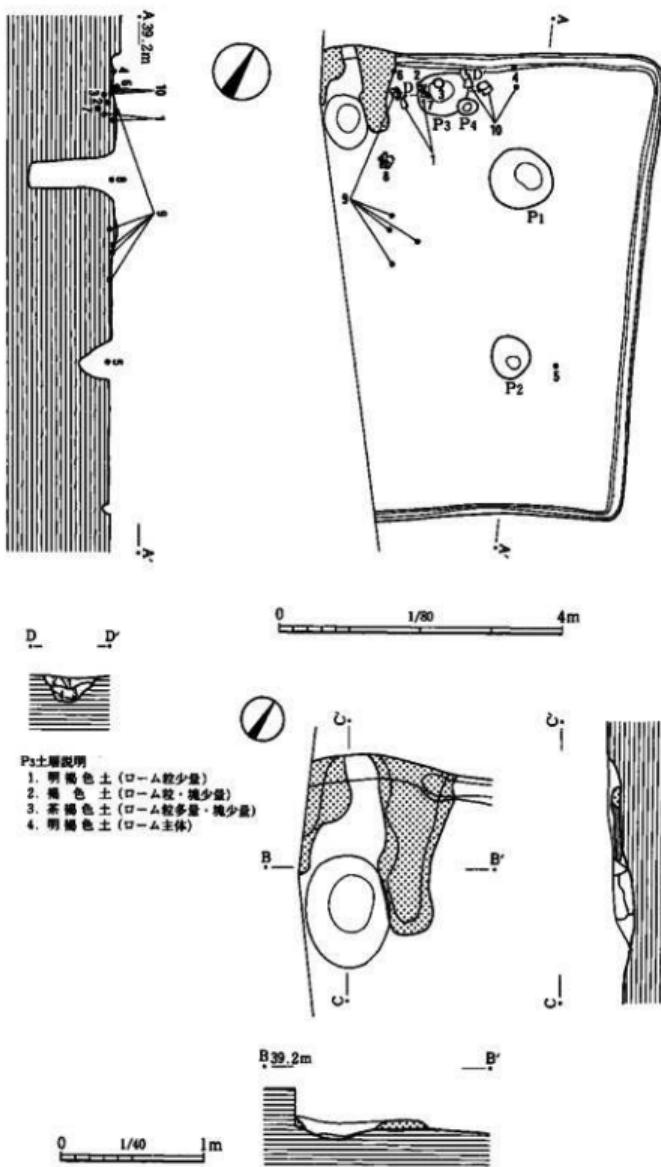
001号住居跡（第7図、図版2）

調査区北西部、A2-02・03・12・13・22・23に位置する。南西に面する斜面に立地する。南西側1/2は調査区域外にかかっていたため調査できず、南東側では擾乱が著しく、南東壁はほとんど検出することができなかった。規模は北東壁で6.5mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-26°-W。覆土は締まりのある暗褐色土が主体であった。床面はP₁の周囲を除き貼床しており、ほぼ平坦で全体に硬く締まっている。壁高は北西壁で15cmを測り、約65度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて巡っており、最大幅24cm、深さ28cmを測る。ピットは4か所検出された。P₁は径90cm、深さ1.2mを測り、二段に掘り込まれている。P₂は径55cm、深さ40cmを測る。覆土はP₁・P₂ともローム粒・塊を多量に含む締まりのない褐色土・明褐色土を主体とする。P₂はP₁に比較するとかなり貧弱な掘り方であるが、他に対応する柱穴がないので、主柱穴と捉えておく。柱間寸法は2.6mを測る。P₃は貯蔵穴で、平面形は楕円形を呈し、長軸70cm、短軸60cm、深さ35cmを測る。覆土はローム粒を多量に含む茶褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。P₄は貼床下から検出されたもので、住居跡掘り方に伴うものと考えられる。径約25cm、深さ50cmを測る。カマドは北西壁に位置する。左袖部の西半分は調査区域外にかかっており、調査できなかった。上面は削平されており、両袖の基部と掘り込みが検出されたのみである。主軸方位はN-29°-Wを測り、住居跡のそれに比して西に振れている。壁外に約10cm掘り込み、全長約1.5m、幅約1.1mを測る。左袖部は壁からの長さが約85cm、右袖部は約1.25m、床面からの高さは約7cm遺存していた。焚口は楕円形に浅く掘り込まれ、長軸約80cm、短軸約60cm、深さ約10cmを測る。底面直上にはよく焼けた赤変したローム土が約10cmの厚さで堆積していた。燃烧部直上には天井部構築材の砂質粘土が崩落した状態で検出された。

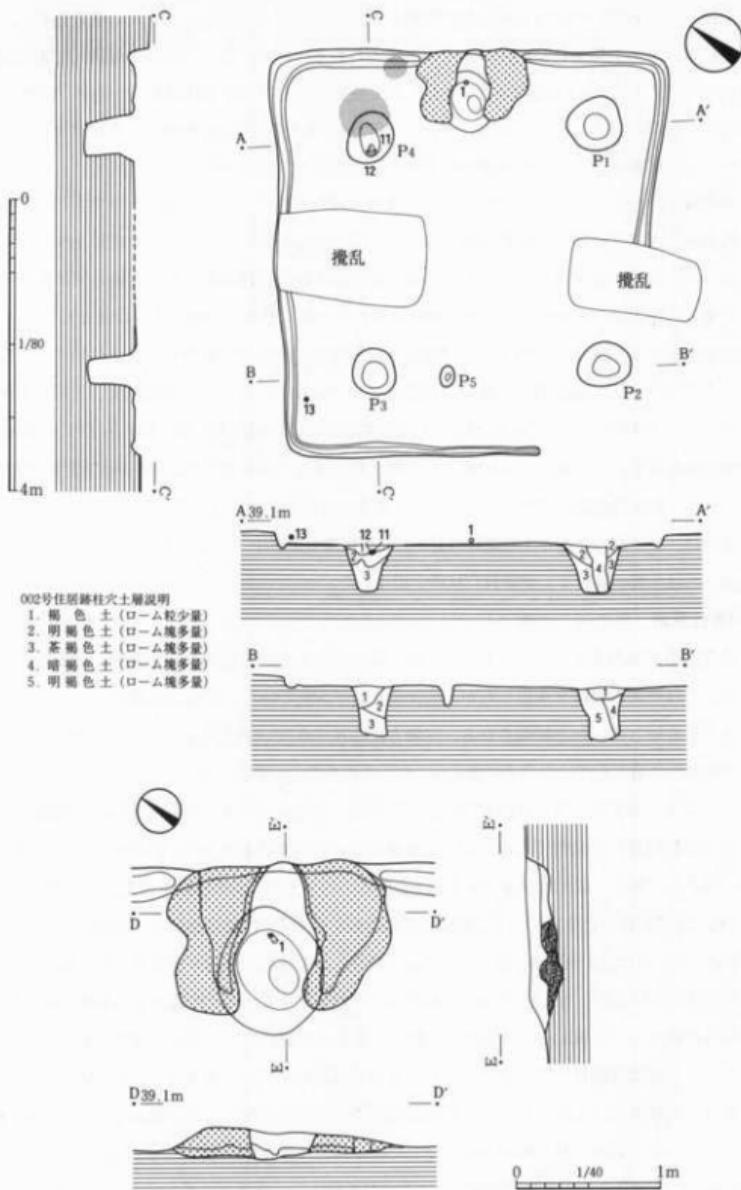
遺物は、貯蔵穴P₃を中心としてややまとまって土師器片が出土した。壺(2・3)、高壺(7)は貯蔵穴内から出土した。他の図示した土器もすべて床面直上から出土したもので、一括遺物と考えられる。

002号住居跡（第8図、図版3）

調査区中央部やや北寄り、A2-04・14・B2-00・10・11・20に位置する。所々擾乱を受け、斜面下方の南側コーナーは壁・周溝とも欠失していた。規模は北東壁で5.5m、北西壁で5.7mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-53°-E。覆土はローム粒を少量含む褐色土を主体とする。床面はハードロームでほぼ平坦であった。壁高は北東壁で約20cm、南西壁で約10cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は本来はカマド内を除いて全周していたと考えられ、最大幅40cm、深さ10cmを測る。ピットは5か所検出された。P₁～P₄は主柱穴で、径60～70cm、深さ65cmのほぼ均



第7図 001号住居跡・カマド実測図



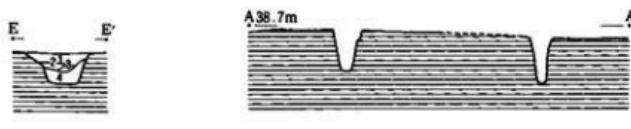
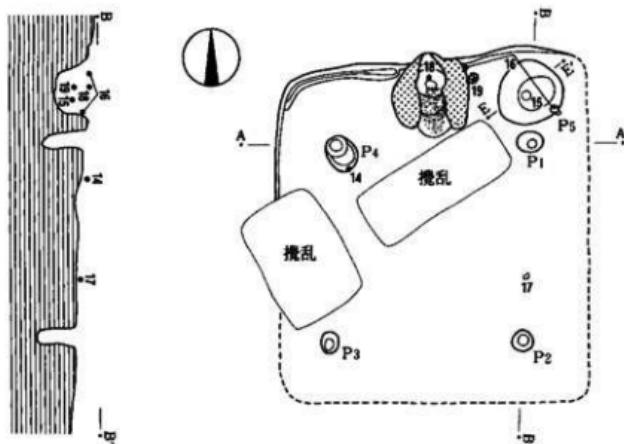
第8図 002号住居跡・カマド実測図

一な掘り方である。そのうち柱痕跡が明瞭に認められたのはP₁のみであった。またP₄の北東側半分には、カマド構築材が流入したものと考えられる山砂が約3cmの厚さで堆積しており、さらに柱穴内から完形の土師器坏（11・12）が2点重なった状態で検出された。各柱穴の柱間寸法はP₁—P₂が3.4m、P₂—P₃が3.2m、P₃—P₄が3.3m、P₄—P₁が3.2mを測る。配置はほぼ正方形を呈し、住居跡に対してやや南東側に偏在し、方向としては北西側に振れている。P₅は出入り口部施設に伴うピットと考えたもので、位置的にはP₂—P₃ライン上にあり、カマドの対角線から約30cm北西方向に寄る。規模は最大径30cm、深さ30cmを測る。カマドは北東壁中央に設けられている。上面が削平されているものの遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN—57°—Eを測り、住居跡のそれに比してやや東側に振れている。壁外への掘り込みはほとんどないが、煙道部が若干突出する。全長1.2m、幅約1.6mを測る。両袖部は壁からの長さは約1m、床面からの高さは最大20cmを測る。構築材は基部にローム粒・山砂を含む暗褐色土、上部に砂質粘土を用い、二層構造となっている。焚口から燃焼部にかけては橢円形に浅く掘り込まれ、長軸90cm、短軸70cmを測る。この掘り込みの直上には焼土粒を多量に含む褐色土が約10cmの厚さで堆積していたが、赤色硬化面は認められなかった。煙道部は約60度で立ち上がる。

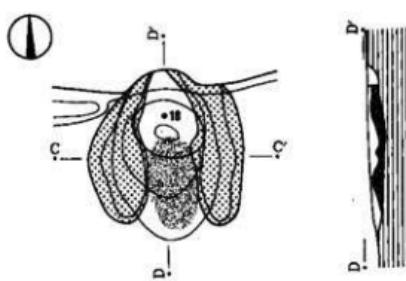
遺物は、先述したとおり土師器坏（11・12）がP₄覆土上層中から出土した。カマド内の燃焼部底面からは土製支脚（1）が倒れた状態で出土した。

003号住居跡（第9図、図版3）

調査区中央部南東より、B2—12・21・31・32に位置する。遺存状態は不良で、北壁及び西壁北半分では壁面の痕跡を検出したが、他は全く削平されていた。規模は北壁で4.5mを測り、本来は方形を呈していたと推測される。主軸方位はN—0°で、真北を向いている。覆土は北壁付近で痕跡的に遺存していたのみであるが、ローム粒を含む暗褐色土が主体であった。床面はハーフドームで、南東側の遺存状態が特に悪く、南側に向かって下方に傾斜していた。壁高は遺存状態が比較的良好な北壁でも最大10cmにも満たない。周溝は北壁カマド西側～北西コーナーにのみ施されており、最大幅22cm、深さ6cmを測る。ピットは5か所検出された。主柱穴はP₁—P₄で、P₄は2段に掘り込まれており、開口部で橢円形を呈する。径は長軸50cm、短軸40cm、深さ60cmを測る。P₁—P₃は径30—35cm、深さ45—65cmを測り、本来は均一な掘り方であったと考えられる。柱間寸法は各柱穴間とも2.8mを測り、配置は正方形を呈する。P₅は貯蔵穴で、不整円形を呈し、規模は長軸1m、短軸90cm、深さ45cmを測る。覆土は下層はローム塊を少量含む締まりのある褐色土、上層は暗褐色土が主体であった。カマドは北壁中央に位置する。上面が削平されている他は、遺存状態は比較的良好で、両袖部及び橢円形の深い掘り込みが検出された。主軸方位はN—5°—Wを測り、住居跡のそれに比してやや西側に振れている。壁外へは約10cm掘り込み、全長約1.2m、幅1.1mを測る。袖部は壁からの長さ約1m、床面から約10cmの高さで遺存していた。両袖部の内側の間隔は燃焼部で約40cmを測る。構築材は山砂とローム土との混成土を用い



- 003号住居跡P1土層説明
 1. 塗褐色土 (ローム粒・焼土粒・砂質
 粘土少量)
 2. 黒色土 (ローム粒少量)
 3. 明褐色土 (ローム粒多量)
 4. 黑色土 (ローム粒少量)



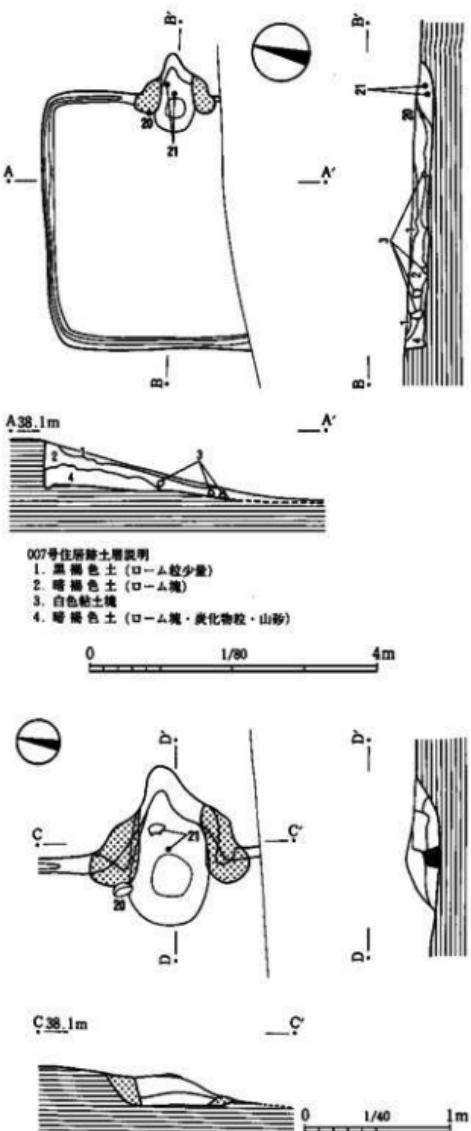
第9図 003号住居跡・カマド実測図

ていた。掘り込みは長さ1.1m、幅75cm、深さ約6cmを測り、燃焼部面で一段やや窪む。焚口底面はよく焼け硬化し、赤色を呈していた。また、焚口～燃焼部の底面上には多量の焼土粒を含む赤褐色土が充满していた。煙道部は約40度で立ち上がる。

遺物は、土師器坏(15)が貯蔵穴P₅覆土中から、壺(19)はカマド東側からつぶれた状態で出土した。その他の図示した土器は床面直上から出土したもののがほとんどであり、一括遺物と考えられる。

007号住居跡(第10図、図版3)

調査区南部、B3-13・14に位置し、南西に面する斜面に立地する。斜面下方の南側1/3は消失。規模は北壁で3.4mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-80°E。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土が主体で、締まりがあり自然堆積と考えられる。中層には白色粘土塊を含んでいる。床面はハードロームでやや凹凸がある。壁高は遺存状態が最良の北壁で55cmを測り、ほぼ直角に立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅約20cm、深さ6cmを測る。ピットは検出されなかった。カマドは東壁に位置し、南側が削平されていた他は、遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN-75°Eで、住居跡のそれに比してやや西側に振れている。壁外へは約60cm三角形状に掘り込み、全長約1.1m、



第10図 007号住居跡・カマド実測図

幅約1.1mを測る。袖部は山砂を構築材とし、右袖部は壁からの長さ約60cm、左袖部は床面から約20cmの高さで遺存していた。掘り込みは楕円形を呈し、焚口から煙道部まで及んでおり、長さ90cm、幅55cmを測る。焚口底面直上には焼土粒を多量に含む赤褐色土が厚さ10cmほど堆積していたが、赤色硬化面は認められなかった。煙道部は約30度で立ち上がる。

遺物の出土量は少ないが、土師器坏(20)がカマド左袖部前から横位で、同(21)がカマド内覆土中から出土した。

111号土壙(第11図)

調査区中央部西より、A1-34に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.2m、深さ80cmを測る。底面は平坦で、壁面は約80度でやや内湾しながら立ち上がる。覆土は4層に分かれるが、いずれも縮まりがあり自然堆積と考えられる。

遺物は、赤彩された土師器坏(23・24)が覆土上層中から出土した。流入あるいは投棄されたものと思われる。

2. 遺物

001号住居跡(第12図、第1表、図版6)

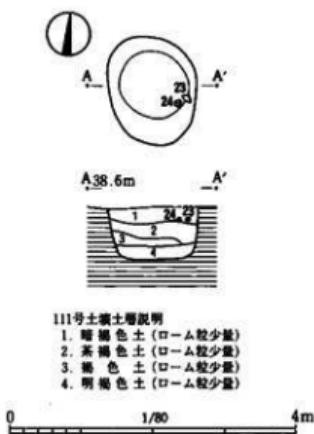
本住居跡からは土師器坏5点、高坏2点、甕3点を図示した。1・2・4は口縁部が外方に直立する坏で、1・2は見込に円状の赤彩が施されている。3は粗雑な作りの坏で、粗いヨコナデによって内傾する口縁部を作出している。体部内面には指頭押圧痕、口唇部には粘土紐巻き上げの接合痕を残している。5は口縁部の小片である。弱く内傾する口縁部の坏である。6・7は高坏の坏部破片で、体部と口縁部との境に稜を有し、直立気味に立ち上がり、のち外反するものである。8・10の甕は口縁部が直立するもので、煮沸に用いられたものでないと考えられる。

002号住居跡(第12~14図、第1・2表、図版6・7)

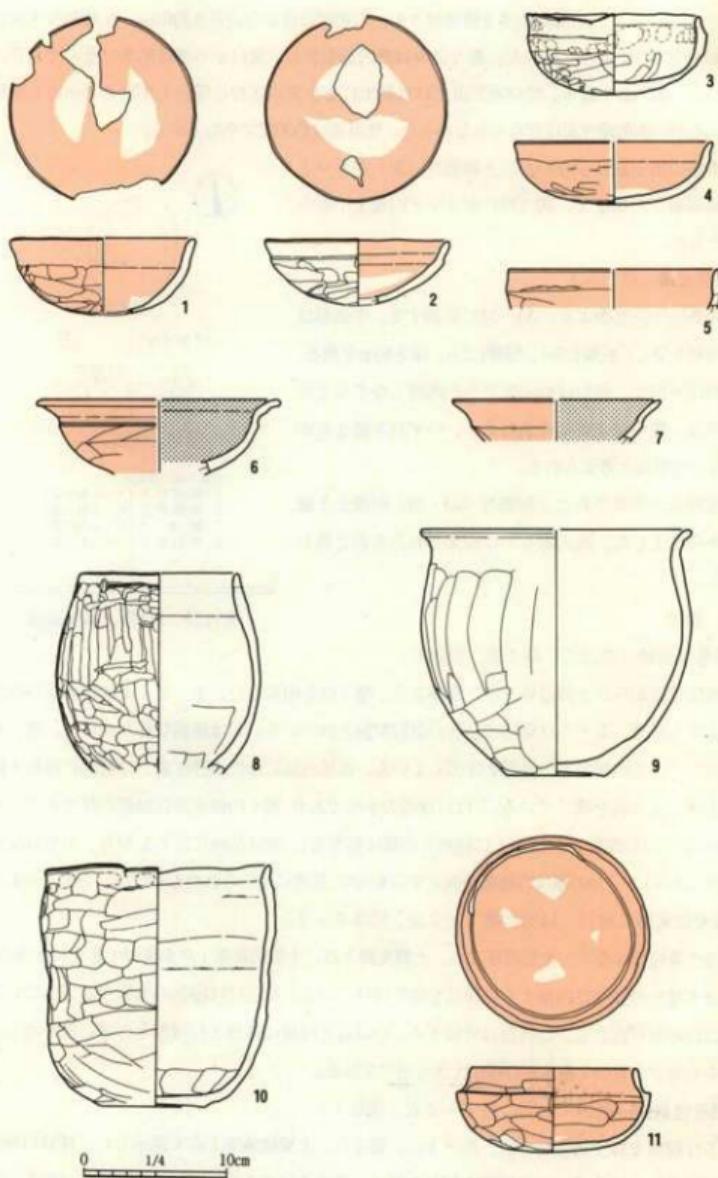
出土遺物は少なく、土師器坏3点、土製支脚1点、土製紡錘車1点を実測できたにすぎない。11は半球形の体部に内傾する口縁部を貼り付けている。見込には円状の赤彩が施されている。12は口縁部が直立し、口唇部は外傾する。13は11と同様に体部と口縁部との境に段を有し、受部を形成するものであるが口径が大きく扁平である。

003号住居跡(第13・14図、第1・2表、図版7)

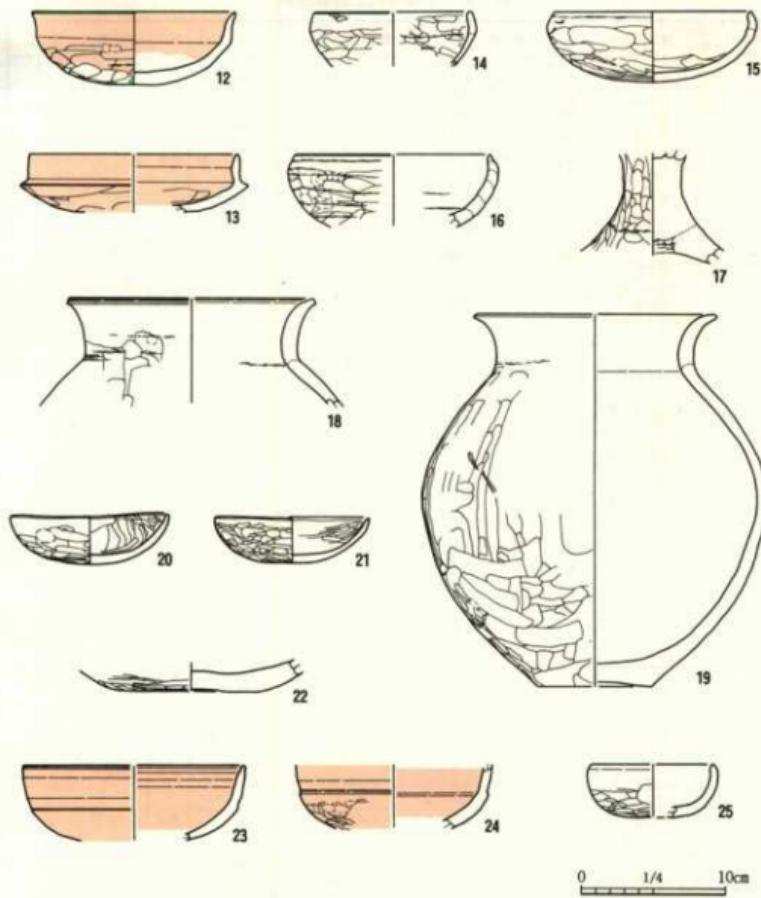
本住居跡では土師器坏3点、高坏1点、甕2点、土製紡錘車1点を図示した。坏は口縁部が内傾するものである。16は粗雑な作りの坏で、巻き上げ痕を残している。19の甕は球形の胴部に外反する口縁部が付される。



第11図 111号土壙実測図



第12図 001(1~10)・002(11)号住居跡出土土器



第13図 002(12・13)・003(14~19)・007(20~22)号住居跡・111号土壤(23・24)
A2-00グリッド(25)出土土器

007号住居跡（第13図、第1表、図版7）

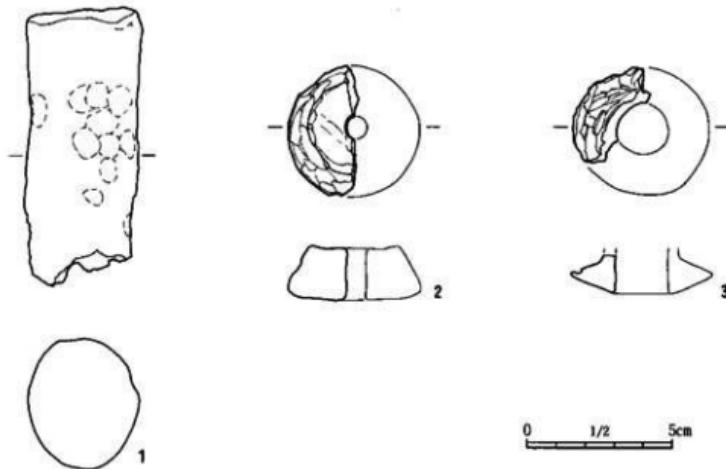
出土遺物は少なく、図示できたのは土師器壺2点、壺1点のみである。20・21は半球形の体部に短い口縁部を有するものであるが、20の口唇部は若干内側に折り返されている。

111号土壤（第13図、第1表）

図示できたのは土師器2点のみであった。両者とも赤彩され、体部と口縁部との境に稜を有し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。23は口唇部内面に一条の沈線が巡っている。

第1表 古墳時代土器観察表

| 遺物番号 | 坪田 番号 | 種類・器種 | 法量(cm) 口・底・高 | 造存度 | 成形・調整手法の特徴 | 胎 土 | 焼成 | 色 調 | 備 考 |
|---------------|----------|--------|---------------------|-----|--|-------------|----|------|-------------|
| 001号 住居跡 | 1 | 土師器 壺 | 12.8 — 5.3 | 5/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | 長石粒 酸化鉄粒 | 良好 | 橙褐色 | 赤影△ |
| | 2 | 土師器 壺 | 12.9 — 4.6 | 5/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | 長石粒 酸化鉄粒 | 良好 | 橙褐色 | 赤影△ |
| | 3 | 土師器 壺 | 11.8 — 5.7 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | 長石粒 | 普通 | 褐 色 | 内面火だす き灰 |
| | 4 | 土師器 杯 | 13.6 — 4.4 | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | | 普通 | 茶褐色 | 赤影 |
| | 5 | 土師器 壺 | 14.5 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 6 | 土師器 高杯 | 16.0 — — | 1/6 | 口縁部—体部内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 内黒 |
| | 7 | 土師器 高杯 | 14.2 — — | 1/6 | 口縁部—体部内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 内黒 |
| | 8 | 土師器 壺 | 13.7 — — | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ | | 良好 | 暗茶褐色 | |
| | 9 | 土師器 壺 | 18.6 6.7 17.1 | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 10 | 土師器 壺 | 15.5 7.2 16.9 | 4/6 | 口縁部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ | | 普通 | 褐色 | |
| 002号 住居跡 | 11 | 土師器 壺 | 11.4 — 5.7 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 良好 | 赤褐色 | 赤影△ |
| | 12 | 土師器 壺 | 13.9 — 5.2 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 13 | 土師器 壺 | 14.3 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| 003号 住居跡 | 14 | 土師器 壺 | 10.7 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 普通 | 褐色 | |
| | 15 | 土師器 壺 | 13.6 — 5.0 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | 石英粒 酸化鉄粒 | 良好 | 暗茶褐色 | |
| | 16 | 土師器 壺 | 13.5 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 普通 | 暗茶褐色 | 毛上げ後 調査 |
| | 17 | 土師器 高杯 | — — — | 2/6 | 體部外面ヘラケズリ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 18 | 土師器 壺 | 15.6 — — | — | 口縁部ヨコナデ 體部外面ヘラケズリ 體部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 19 | 土師器 壺 | 16.5 7.8 25.6 | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 體部外面ヘラケズリ 體部内面ナデ | | 普通 | 暗褐色 | |
| 007号 住居跡 | 20 | 土師器 壺 | 10.8 — 3.4 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ | 石英粒 酸化鉄粒 | 普通 | 明茶褐色 | |
| | 21 | 土師器 壺 | 10.6 — 3.1 | 5/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後一部ヘラミガ キ、体部内面ヘラミガキ | 石英粒 酸化鉄粒 | 普通 | 茶褐色 | |
| | 22 | 土師器 壺 | — 10.1 — | — | 體部外面—底部ヘラケズリ 體部内面ナデ | 石英粒 酸化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| 111号 土壤 | 23 | 土師器 壺 | 15.2 — — | 1/6 | 口縁部—体部内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 24 | 土師器 壺 | — — — | 1/6 | 口縁部—体部内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| A2-00 グリッド | 25 | 土師器 壺 | 8.5 — 3.6 | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ | 石英粒 | 普通 | 褐色 | |



第14図 002(1・2)・003(3)号住居跡出土土製品

第2表 古墳時代土製品観察表

| 出土位置 | 拂団番号 | 種類 | 計測値(cm) | ()は遺存部 | 重量(g) | 備考 |
|---------|------|-----|---------|------------|-------|----|
| 002号住居跡 | 1 | 支脚 | 長さ(9.7) | 幅 3.85-3.9 | 189.2 | |
| | 2 | 筋輪車 | 径(4.5) | 厚さ 1.75 | 15.3 | |
| 003号住居跡 | 3 | 筋輪車 | 径(4.5) | 厚さ 1.25 | 4.8 | |

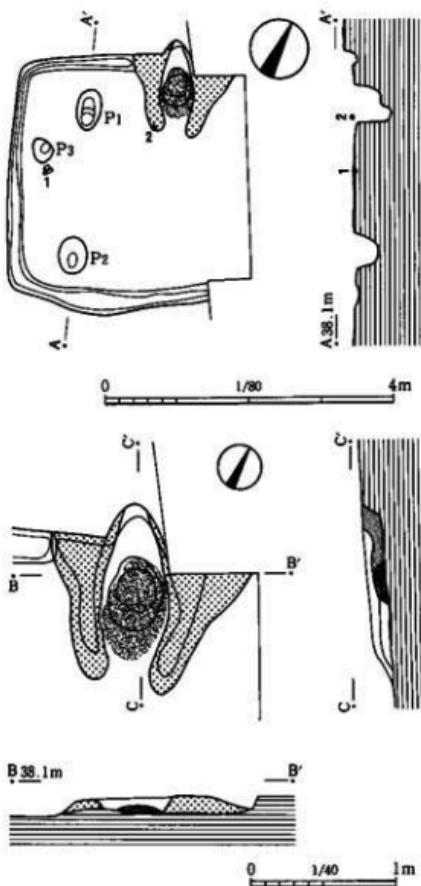
第4節 奈良・平安時代

1. 遺構

004号住居跡（第15図、図版4）

調査区南東部、B2-33・43・44に位置する。南西に面する斜面に立地する。住居北東側は調査区域外にかかっていたため調査できず、斜面下方の南側の遺存状態は不良であった。規模は南西壁で3mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-26°-W。覆土は暗褐色土が主体であった。床面はハードロームで、比較的平坦で硬く締まっている。壁高は北西壁で約15cmを測り、約70度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、遺存状態が良好な北西壁で幅約10cm、深さ6cmを測る。ピットは3か所検出された。P₁は2段に掘り込まれており、径30-60cm、深さ1m、P₂は径50cm、深さ30cmを測り、位置関係から両者は主柱穴と捉えられる。柱間寸法は約1mを測る。P₃は径30cm、深さ60cmを測り、出入口部施設に伴う柱穴の可能性がある。カマドは北西壁に位置し、右袖部上半が調査区域外に及んでおり、上面が削平されている他は、遺存状態は良好であった。主軸方位はN-26°-Wを測り、住居跡のそれと同じである。壁外への掘り込みは三角形を呈し、約25cmを測る。全長約1.3m、幅約1.5mを測る。袖部は山砂・白色粘土・ローム土の混合土を構築材としており、壁からの長さは1.3m、床面からの高さは最大12cm遺存していた。燃焼部底面は浅く掘り込まれ、赤色に硬化しており、直上には焼土が厚さ8cmほど堆積していた。煙道部は約55度で立ち上がる。

出土遺物の量は少ないが、土師器壺(1)が西側P₃際から、甕(2)がカマド左袖部上から出土した。



第15図 004号住居跡・カマド実測図

005号住居跡（第16図、図版4）

調査区南部、B2-40・41、B3-00・01に位置する。南東壁側で008号住居跡と重複関係にあるが、南東壁が破壊されており、008号住居跡のカマド燃焼部の痕跡が存在することから、本住居跡が先行すると考えられる。規模は北壁で約2.8mを測る。覆土は北壁付近に痕跡的に遺存していたのみであるが、暗褐色土を主体とする。床面は南側に向かって傾斜していた。壁高は北壁で最大5cmを測る。周溝及びピットは検出されなかった。カマドは北壁に位置し、上面は削平されていたが、袖部の基部は遺存していた。主軸方位はN-12°-W。掘り方は、床面よりまず一段低く掘り下げ、焚口及び袖部構築面を形成し、さらに一段掘り下げ、燃焼部を構築するというものであった。壁外へは約25cm掘り込み、全長1m、幅約1.6mを測る。袖部は山砂主体のローム土との混成土によって構築されており、壁面からの長さは左袖部が50cm、右袖部が60cm、床面からの高さは約15cmを測る。燃焼部奥底面直上には厚さ14cmほど焼土が堆積していたが、赤色硬化面は認められなかった。煙道部は約50度で立ち上がる。

遺物は、カマド周辺からまばらに土師器片が出土した。細片がほとんどで図示できるものはなかった。

006号住居跡（第17図、図版4）

調査区南部、B3-00・10に位置する。南西に面する斜面に立地する。南西部1/4は調査区外にかかっていたため調査できず、北側に大きく擾乱も入っていた。規模は東壁で3.3mを測り、方形を呈すると推測される。カマドが検出されないため主軸方位は不明だが、東壁はN-8°-W方向に走っている。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土を主体とする。床面はハードローム

で、ほぼ平坦であった。壁高は北壁で40cmを測り、85度で立ち上がる。周溝は検出部分では全周しておらず幅10~20cm、深さ約8cmを測る。ピットは2か所検出され、ともに主柱穴と考えられるものである。P₁は径35cm、深さ40cm、P₂は径35cm、深さ70cmを測る。P₂は底面が平坦でしっかりと握り方であった。柱間寸法は1.6mを測る。

遺物は北東コーナー付近から赤彩された土師質土器壺(3)・土師器甕(11)が床面からやや浮いた状態で出土した。南西調査区際の須恵器盤(10)、土師器甕(12)は覆土上層中から出土した。

008号住居跡（第16図、図版4）

調査区南部、B2-40・41、B3-00・01に位置する。005号住居跡を破壊して構築されている。上面がほとんど削平されており、床面の一部とカマドと2か所のピットのみを検出したにとどまった。よって平面形態及び規模は推測の域を出ないが、カマドを北西壁の中心におき、2か所の柱穴に対する南西側の柱穴が検出されていないが、P₁-P₂を結んで主軸方位(N-14°-W)と考え、プランを復元したのが図中の破線で、一辺約3mのほぼ正方形を呈する住居跡であったと推測される。2か所の柱穴は径約30cm、深さ約85cmを測る比較的しっかりとしたものである。柱間寸法は約95cmを測る。カマドは燃焼部とその直上に堆積した若干の焼土が検出されたのみであり、袖部は完全に欠失していた。

遺物の量は少ないが、カマド内から土師質土器壺(14)、カマド西側から土師器甕(15)などが出土した。

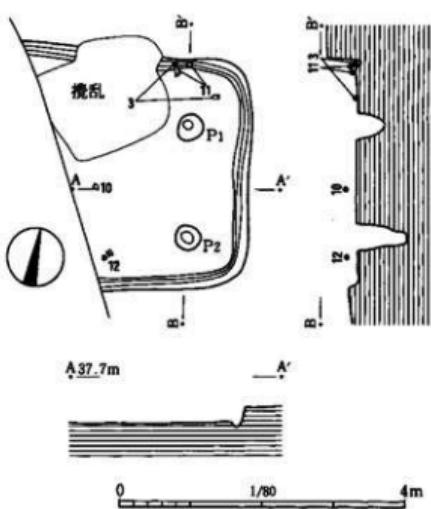
2. 遺物

004号住居跡（第18図、第3表、図版8）

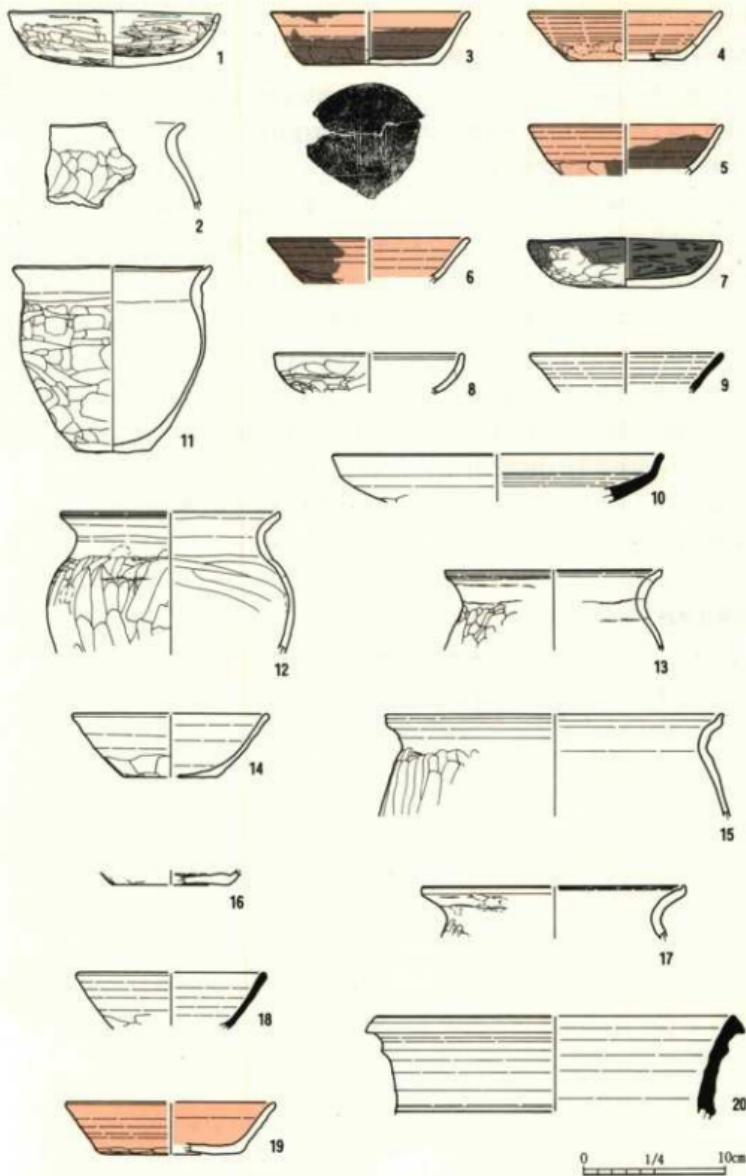
出土遺物は少なく、図示できたのは土師器壺1点、甕口縁部破片1点であった。1は弧状の底部が強く屈曲し、口縁部は内湾しながら立ち上がる。内面はやや粗いヘラミガキが施されている。

005号住居跡

図示できる資料はないが、ひじょうに器肉の薄い土師器甕片が出土しており、奈良・平安時



第17図 006号住居跡実測図



第18図 004(1・2)・006(3～13)・008(14・15)号住居跡・A3-00(16・17)
B2-00(18)・B3-00(19・20)グリッド出土土器

代の所産と判断した。

006号住居跡（第18図、第3表、図版8）

出土遺物は本遺跡の中では比較的多く、土師質土器坏4点、土師器坏2点、壺3点、須恵器坏1点、盤1点を図示した。土師質土器坏は所謂、赤彩盤状坏の系譜を引くものと考えられる。3は静止糸切り後、体部下端～底部外周に手持ちヘラケズリが加えられる。4以外は体部下半に丸みがあり、口縁部が外反気味になっており、すでに盤状とは呼べないものである。なお、3・5・6は内外面に部分的に黒漆のような光沢を持ったものが付着している。これらの土器は赤彩が施されていることから漆仕上げ土器として製作されたとは考えられず、3は体部内面下半に集中していることから、漆、あるいは他の植物性樹脂の容器として使用された可能性が高い。7の土師器坏は底部が平底化したものであるが、内面は丁寧なミガキが加えられ、漆仕上げがなされている。なお、この漆仕上げとは別に先の土師質土器にみられたものと同様の黒色の付着物が口縁部外面付近に認められる。8は体部外面に巻き上げ痕を残し、口唇部内面には沈線が巡る。9の須恵器坏は口縁部が外反気味に開き、口唇部は肥厚する。10は須恵器盤で、胎土中には雲母粒を多く含み、焼成もやや甘い。底部にははっきりしないものの手持ちヘラケズリが観察される。高台は付かないと考えられる。12・13の土師器壺は口唇部が上方に弱くつまみ上げられている。

008号住居跡（第18図、第3表、図版8）

本住居跡では、土師質土器坏1点、土師器壺1点を図示した。14は器肉が薄く、底径に比して口径の開きが大きい。底部は全面手持ちヘラケズリがなされている。

第3表 奈良・平安時代土器観察表

| 通査番号 | 辨別番号 | 種類・器種 | 寸法(cm) 口・底・高 | 盛容度 | 成形・調整手法の特徴 | 胎 土 | 焼成 | 色 調 | 備 考 |
|---------------|------|---------|---------------------|-----|--|------------|----|------|-----------------------|
| 004号 住居跡 | 1 | 土師器 壺 | 14.6 3.9 — | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後一部ヘラミガキ 手・体部内面ヘラミガキ | 長石粒 | 良好 | 暗褐色 | |
| | 2 | 土師器 壺 | — — — | — | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナダ | 石英粒 長石粒 | 普通 | 赤褐色 | |
| 006号 住居跡 | 3 | 土師質土器 壺 | 13.9 9.2 3.7 | 3/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部静止部切り抜外周手持ちヘラケズリ | | 普通 | 暗赤褐色 | 赤彩 内外面に 擦?付着 |
| | 4 | 土師質土器 壺 | 14.0 8.6 3.5 | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端一帯手持ちヘラケズリ | | 普通 | 暗赤褐色 | 赤彩 |
| 006号 住居跡 | 5 | 土師質土器 壺 | 13.5 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | 石英粒 | 普通 | 暗赤褐色 | 赤彩 内外面に 擦?付着 |
| | 6 | 土師質土器 壺 | 14.0 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | | 普通 | 暗赤褐色 | 赤彩 内外面に 擦?付着 |
| 006号 住居跡 | 7 | 土師器 壺 | 13.4 — 3.3 | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ | | 普通 | 暗褐色 | 内面擦仕上げ 外周に 擦?付着 |
| | 8 | 土師器 壺 | 13.2 — — | 1/6 | 口縁部一帯内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ | | 普通 | 暗灰色 | |
| 006号 住居跡 | 9 | 須恵器 壺 | 13.4 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ | 長石粒 | 良好 | 暗褐色 | |
| | 10 | 須恵器 壺 | 22.9 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ | 石英粒 長石粒 | 普通 | 白灰色 | |
| 006号 住居跡 | 11 | 土師器 壺 | 13.6 5.1 12.6 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナダ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 12 | 土師器 壺 | 15.2 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナダ | | 普通 | 黑褐色 | |
| 006号 住居跡 | 13 | 土師器 壺 | 15.1 — — | — | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナダ | | 普通 | 黑褐色 | |
| | 14 | 土師質土器 壺 | 13.5 6.4 4.4 | 3/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端一帯手持ちヘラケズリ | | 普通 | 橙褐色 | |
| A3-00 グリッド | 15 | 土師器 壺 | 23.5 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナダ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 16 | 土師質土器 壺 | — 8.2 — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ | | 良好 | 暗褐色 | |
| B2-00 グリッド | 17 | 土師器 壺 | 18.3 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナダ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 18 | 須恵器 壺 | 12.3 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | | 良好 | 暗褐色 | |
| B3-00 グリッド | 19 | 土師質土器 壺 | 14.5 9.8 3.6 | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端一帯手持ちヘラケズリ | | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 20 | 須恵器 壺 | 25.0 — — | — | 口縁部ヨコナデ | | 良好 | 灰 色 | |

第 2 章

宮 門 遺 跡



第19圖
宮門遺跡全圖

第2章 宮門遺跡

第1節 調査の方法と概要（第19・20図）

宮門遺跡は木戸川と高谷川の支谷によって開析された台地上に立地する。西側は眼下に木戸川を臨み、台地との間には沖積微高地が形成されている。一方、東側は高谷川の支谷が迫っており、台地との比高差が大きく急な斜面となっている。また、南側・北側は木戸川の支谷によつて画されているため、台地は島状になっている。

調査対象となったのは宮門神社の西方約100m、台地の西側平坦面～南西斜面にかけての地点で、芝山町大台字宮門城2622-2他に所在する。面積は3.340m²であり、幅20m平均、延長距離約220mの南北方向に長い調査区域である。発掘調査は昭和59年4月2日から6月30日まで実施した。調査にあたっては公共座標に基づいて20×20mの大グリッドを設定し、調査区域の北から南に向かって2～14、西から東にA～Eとし、これを組合せてA2、A3、A4と呼称した。さらにその中を第20図に示したように4m四方の小グリッドに分割して00～44の番号を付け、これに先の大グリッドの名称を組合せてA2-00、A2-01などと呼称した。なお、A2-00グリッドの北西隅の点の座標は公共座標X=-33.060、Y=52.180に対応する。発掘調査は、まず上層の確認調査として調査区全域に2×4mグリッドを均等に配置し、対象面積の10%、334m²の調査を実施した。その結果、調査区の全域から遺構・遺物が検出されたため全域を上層本調査範囲とし、表土除去を行い遺構の調査を行なった。遺構の調査後、下層の確認調査として2×2mのグリッドを入れ、対象面積の4%、約134m²を行なったが、先土器時代の遺物は検出されなかった。

遺跡は調査前は畑であり、農業用機械による削平・攪乱が著しく、遺構の遺存状態は不良であった。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土壙31基、古墳時代の竪穴住居跡9軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡15軒で、その他に道路状の溝が4条検出されたが（第19図）、覆土はローム粒・塊を多量に含み繕まりないのであり、現在の農道と重なることから近現代以降のものと判断し、本書では遺構としては取扱わなかった。なお、序章で触れたように宮門遺跡はかつて調査されており、その地点は東方約50mに位置する。近接していることから、第19図に全測図を図示すべきであるが、正確な位置が不明なため今回は控えた。

| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 00 | 01 | 02 | 03 | 04 |
| 10 | 11 | | | |
| 20 | | 22 | | |
| 30 | | | 33 | |
| 40 | | | | 44 |

0 1/500 20m 第20図 小グリッド分割図

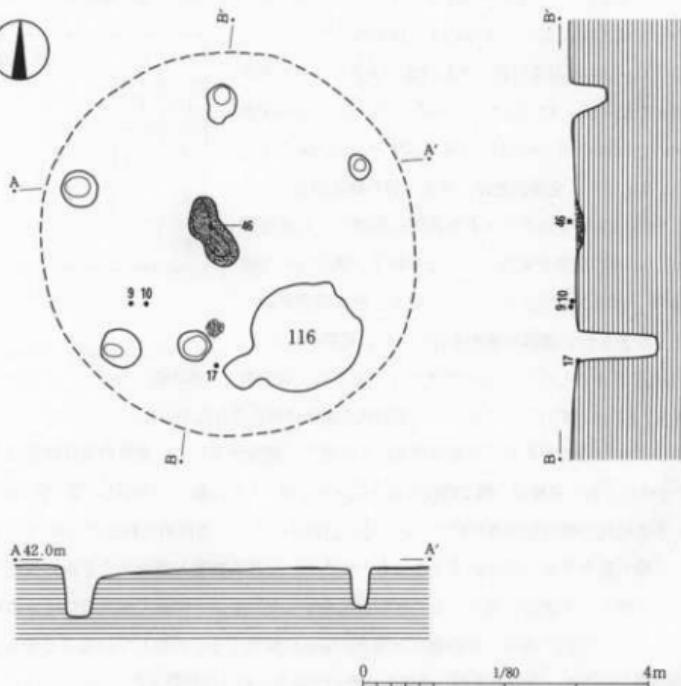
第2節 繩文時代

1. 遺構

021号住居跡（第21図、図版9）

調査区北部やや中央寄り、B6-34・44、C6-30・40に位置し、南西に面する緩斜面に立地する。周囲には土壌が群在する。炉を中心として径約4mの環状に柱穴が巡るもので、壁は検出できなかった。おそらく円形に近いプランをなす住居跡と思われる。南西部で116号土壌と重複している。床は、炉周辺の一部のみが硬化しているが、全体的に擾乱が入り軟弱で凹凸が激しい。炉址は短軸40cm、長軸1mで浅い掘り込みをなす。覆土に焼土を残すのみで、底面に焼けた痕跡は認められない。柱穴は6か所検出されているが、間隔的にみて土壌の北東部にさらに1か所存在する可能性がある。規模は径30cm~40cm、深さ40cm~1.1mを測る。

出土遺物は、第II群から第IV群の土器片が約470点出土している。ただし、この中には本来



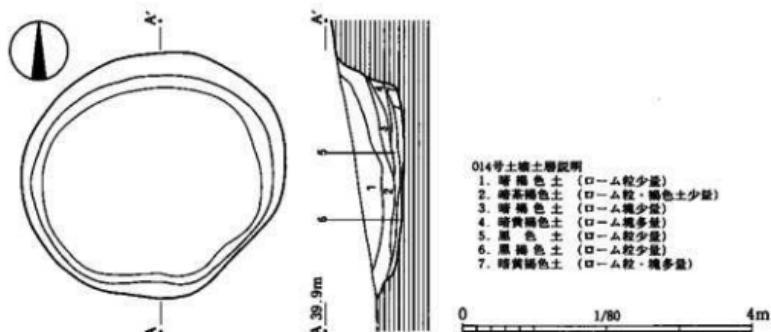
第21図 021号住居跡実測図

116号土壙に属するものがかなり含まれている可能性が高い。床面近い9・10をみると、文様の特徴はあまりないが第Ⅲ群あるいは第Ⅳ群と考えられるものであり、他の破片も主体は同時期であるので、本住居跡の時期は中鉢式から加曾利E I式の幅の中で捉えられよう。

014号土壙（第22図、図版10）

調査区中央部、C8-42・43に位置し、土器廃棄場と考えられるC9グリッドの谷近くの南西斜面に立地する。規模は長軸3.7m、短軸3.4mの梢円形を呈しており、底面はひとまわり小さい。斜面に位置することから、壁高が北側で1m、南側で30cmほどの差がある。底面はやや擂鉢状を呈する。炉や柱穴は検出されなかった。覆土は自然堆積と考えられる。

遺物は、第Ⅱ群から第Ⅳ群までの土器などが180点ほど出土している。量的には第Ⅲ群から第Ⅳ群の古期にかけての土器が主体であるが、第Ⅱ群土器では比較的大形の破片も多数出土している。この状況から本土壙は阿玉台期の所産と考えられる。



第22図 014号土壙実測図

101号土壙（第23図、図版10）

調査区北東部、C5-00に位置する。東側約半分は調査区域外にかかっていたため調査できなかつた。開口部は梢円形を呈すると考えられ、長軸1.9m、深さ約80cmを測る。底面は梢円形を呈し、長軸1.6mを測る。北壁はオーバーハングしており、袋状を呈す。底面南側には径約50cm、深さ約80cmのピットが穿たれていた。覆土はローム粒・塊を多量に含む褐色土が主体で、全体的に締まりがなく人為的堆積と考えられる。

出土遺物は土器片2点のみであり、時期を断定しえないものである。

102号土壙（第23図、図版10・11）

調査区北東部、B5-04・14に位置する。開口部は梢円形を呈し、長軸約1.8m、短軸約1.4m、

深さ80cmを測る。底面は楕円形を呈し、長軸約2.2m、短軸約1.9mを測る。壁面はオーバーハングし、袋状を呈する。底面はほぼ中央には径約60cm、深さ約60cmのピットが穿たれていた。覆土は、下層はローム粒・塊が全層に含まれていることから人為的堆積、上層は炭化物・ローム粒を含む層で自然堆積と考えられる。

遺物は、第Ⅲ群から第Ⅳ群土器を主体に約500点が出土している。壁際中層から正位の状態で54の深鉢形土器が出土しており、下半部の埋め戻し時に配されたことが想定される。この土器は第Ⅳ群と思われる。よって本土墳は加曾利EⅠ期の所産のものと考えられる。

103号土壙（第23図、図版11）

調査区北西部、B5-12に位置する。開口部は長楕円形を呈し、長軸約2.8m、短軸約1.4m、深さ最大1.6mを測る。底面は長楕円形を呈し、長軸約2.9m、短軸約80cmを測る。長軸方位はN-30°-Eである。北東側壁面は下半がオーバーハングする。覆土は全体的にローム塊を多く含み、縫まりに欠け、人為的堆積状を示す。所謂“陥し穴状土壙”であろう。

出土遺物はなかった。

104号土壙（第23図）

調査区北東部C6-20・21に位置する。北東側で108号土壙と重複関係にあり、新旧関係は本土墳が重複部分で切られていることにより、108号土壙より先行すると考えられる。平面形は不整円形で、径は開口部で約2m、底面で約1.7m、深さは最大約40cmを測る。覆土は暗褐色土で若干のローム粒・塊を含むが、自然堆積であると思われる。

遺物は、第Ⅲ群土器を主体に約110点の土器片が出土しており、本土墳は中晩期の所産のものと考えられる。

105号土壙（第23図）

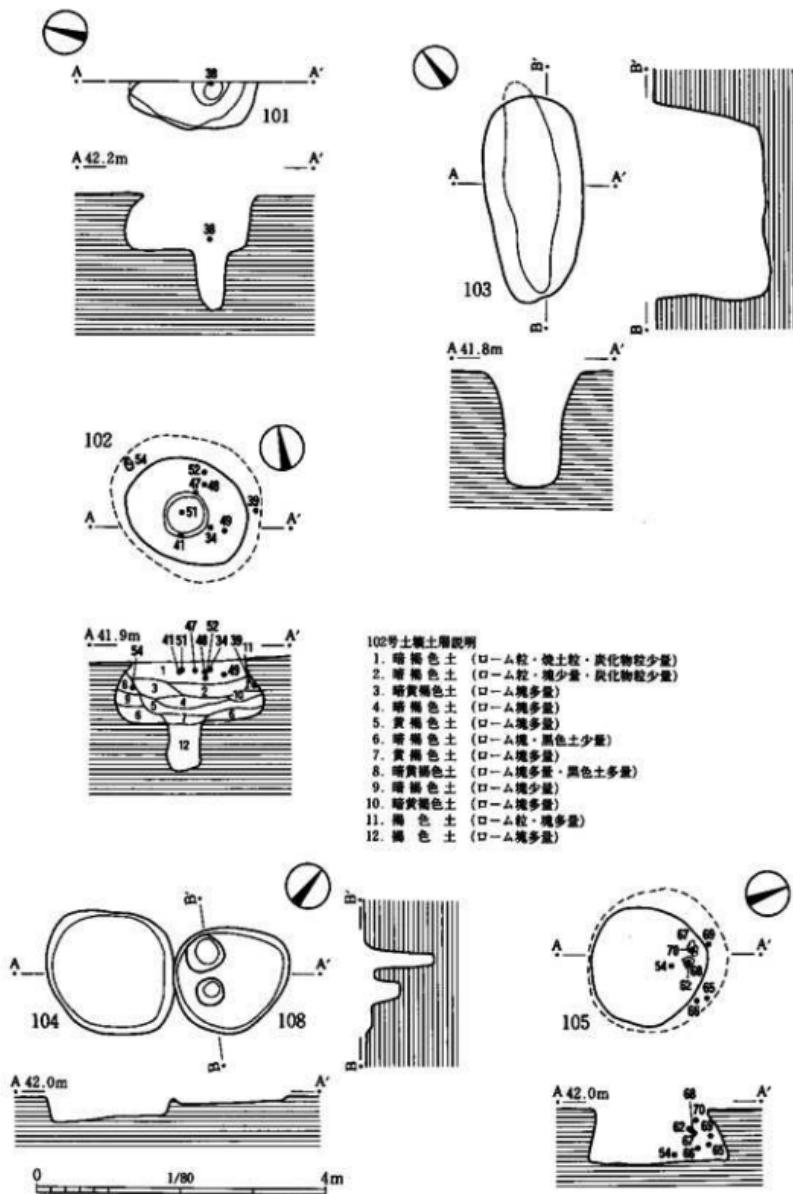
調査区北東部、B6-24、C6-20に位置する。開口部は不整円形を呈し、径1.6m、深さ最大80cmを測る。底面は楕円形を呈し、径2cmを測る。壁面はオーバーハングしており、袋状を呈する。覆土はローム粒・塊を若干含む暗褐色土で、縫まりも有することから、自然堆積と考えられる。

遺物は、第Ⅳ群土器を主体に約160点の土器片が出土した。大形破片は北東側中層からの出土であり、他に中央部の底面直上から蔽石（54）が出土している。本土墳は時期的には加曾利EⅠ期の所産と考えられる。

106号土壙（第24図）

調査区北西部、B6-23・24に位置する。開口部は楕円形を呈し、長軸2.2m、短軸1.8mを測る。底面は不整円形で径2.1m、深さ90cmを測る。壁面は南東側を除いてオーバーハングしており、袋状となる。底面東側隅には楕円形のピットが掘り込まれており、径約30cm、深さ30cmを測る。覆土はローム塊を含む暗褐色土からなり人為的堆積と考えられる。

出土遺物は第Ⅱ群から第Ⅳ群までの土器が約90点と少ない。大形の破片としては中央部覆土



第23図 101・102・103・104・105・108号土壤実測図

上層から76の第Ⅳ群土器胴部が出土している。第Ⅱ群の土器の量が比較的多いことが特徴だが、強いて遺構の時期を阿玉台期に特定するには根拠が弱いと思われる。

107号土壙（第24図）

調査区北西部、C6-30に位置する。平面形は開口部で楕円形を呈し、長軸約1m、短軸80cm、深さは最大80cmを測る。底面は不整円形で、径約60cmを測り、北側に傾斜している。

遺物は縄文中期土器片若干の他、古墳時代の五領式の台付壺形土器破片が若干出土しており、その時期の土壙である可能性も考慮される。

108号土壙（第23図）

調査区北東部、C6-10・11・20・21に位置する。前述した通り、104号土壙と重複関係にあり、本跡の方が新しい。平面形は不整円形で、規模は開口部で長軸1.6m、短軸1.5m、底面で長軸1.5m、短軸1.4m、深さ約20cmを測る。底面南西側にはピットが2か所穿たれており、西側が径50cm、深さ80cm、東側が径40cm、深さ40cmを測る。

遺物は、第Ⅲ群から第Ⅳ群のものと考えられる小破片が20点余りが出土した。

109号土壙（第24図）

調査区北東部、C6-21・31に位置する。南西壁側で110・130号土壙と重複している。平面形は径約1.7mの不整円形と推測される。深さは約20cmで断面形は皿状となる。

遺物は出土しなかった。

110号土壙（第24図）

調査区北東部、C6-21・31に位置する。西壁側で109・130号土壙と重複する。開口部は不整円形で長軸2.3m、短軸2.1mを測り、底面は不整円形で長軸1.9m、短軸1.8m、深さは最大60cmを測る。覆土はローム塊を多量に含む褐色土が堆積しており、人為的堆積と考えられる。

出土遺物は中期土器約10点と、磨製石斧1点（30）である。図示したものは覆土上層から出土した第Ⅱ群から第Ⅲ群の土器である。したがって、遺構の時期は阿玉台期から中峰期と捉えられる。

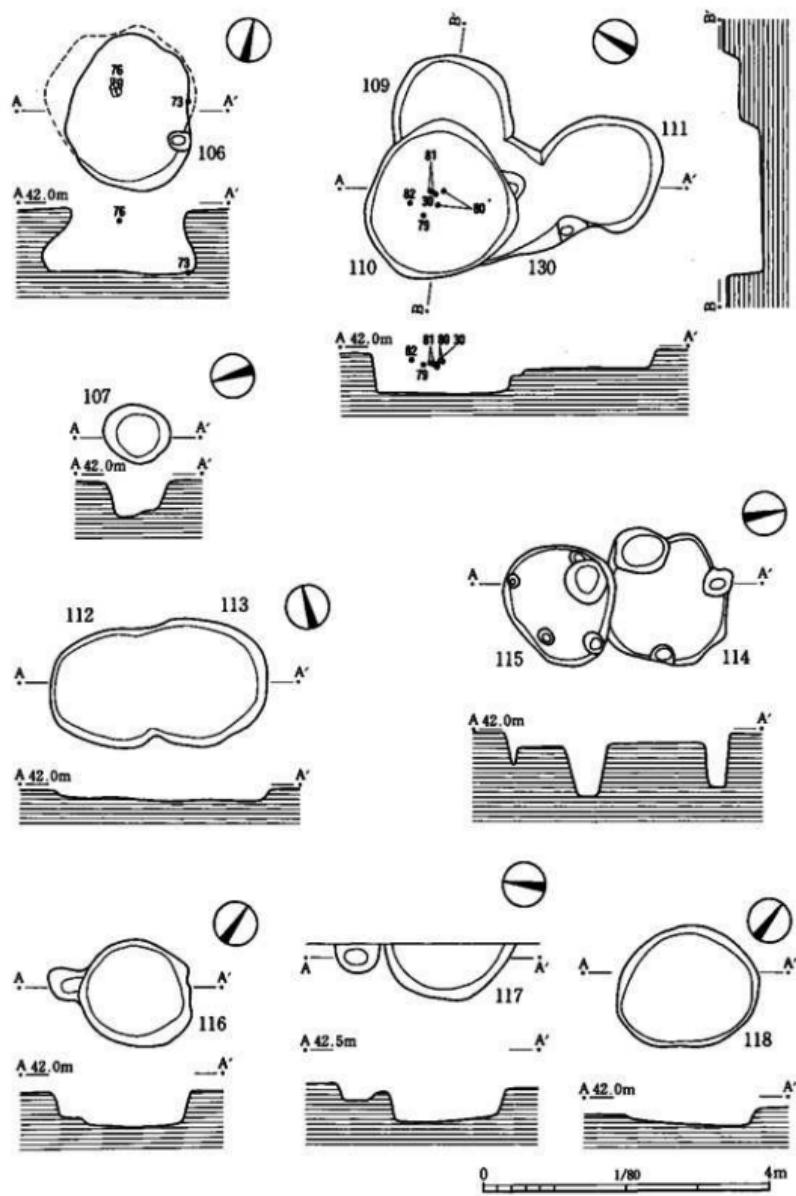
111号土壙（第24図）

調査区北東部、C6-31・32に位置する。北西壁側で130号土壙と重複する。平面形は径1.7m前後の楕円もしくは不整円形と考えられ、深さは30cmを測る。西壁には径45cm、深さ約30cmの半円形のピットが穿たれている。覆土はローム塊を多量に含む暗褐色土が堆積しており、人為的堆積と考えられる。

遺物は、第Ⅳ群を主体に約40点の土器が出土した。遺構の時期も加曾利EⅠ期に捉えられる。

112号土壙（第24図）

調査区北東部、C6-30に位置する。東壁側が約1/3ほど113号土壙と重複している。平面形は径1.7m前後の楕円もしくは不整円形と考えられ、深さは約10cmを測る。



第24図 106・107・109・110・111・112・113・114・115・116・117・118・130号土壤実測図

遺物は出土しなかった。

113号土壙（第24図）

調査区北東部、B6-30・31に位置する。東壁側は112号土壙と重複している。平面形はやや東西に長い梢円形を呈していたと推測され、現存長軸は開口部で1.8m、深さは最大約20cmを測る。

出土遺物は第Ⅱ群から第Ⅳ群の土器約40点である。

114号土壙（第24図）

調査区北東部、C6-31・41に位置する。南壁側で115号土壙と重複している。平面形は不整円形を呈し、径約1.8m、深さ約10cmを測る。ピットは3か所あり、西側のものは壁面から外に出しており張り出し状となる。平面形は梢円形で、長軸80cm、短軸70cm、深さ約50cmを測る。北側のものも壁面から張り出しており、平面形は梢円形で長軸約50cm、短軸40cm、深さは約60cmを測る。東側のものは底面及び壁面に穿たれており、半円形を呈する。規模は最大径30cm、深さ30cmを測る。

遺物は、第Ⅱ群から第Ⅳ群の土器が約100点出土している。

115号土壙（第24図）

調査区北東部、C6-42に位置する。北壁側で第114号土壙と重複する。平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で長軸1.8m、短軸1.6m、深さ2cmを測る。壁面、壁際にはピットが5か所あり、北西壁際のものが最大で径約60cm、深さ70cmを測る。他のピットは径20cm-30cm、深さ10cm-30cmの小規模なものである。

出土遺物は、第Ⅲ群から第Ⅳ群の土器が約70点であり、遺構の時期も中晩期から加曾利EⅠ期と考えられる。

116号土壙（第24図）

調査区北西部、C6-40に位置する。021号住居跡内に構築されている。平面形は不整円形を呈す。規模は径約1.6m、深さ40cmを測り、南西側には長さ50cmを測る張り出しを有する。

遺物は、本土壙出土遺物として取り上げられたものは皆無であるが、先述したように調査経過からみて、021号住居跡出土遺物の中に含まれている可能性が高い。

117号土壙（第24図）

調査区北東部、C6-42に位置する。東側半分は調査区域外にかかっていたため、調査できなかつた。平面形は、径1.8m前後の梢円形もしくは不整円形と考えられる。深さは最大約50cmを測る。底面は北側に向って傾斜している。なお、北側には隣接して径60cm、深さ20cmのピットがあり、一応伴うものと考えた。

遺物は、中期土器が10点ほど出土した。

118号土壙（第24図）

調査区北西部、B7-04、C7-00に位置する。梢円形を呈し、規模は開口部で長軸1.9m、短軸

1.5mを測る。底面は梢円形を呈し、東側に向かって傾斜している。

出土遺物は中期土器片約30点である。

119号土壙（第25図）

調査区北西部、C6-40、C7-00に位置する。平面形は不整円形を呈する。規模は径約1.8m、深さ10cmを測る。北東壁側には、ピットが2か所あり、いずれも壁外に張り出している。西側のピットは隅丸方形を呈し、長辺40cm、短辺30cm、深さ約20cmを測る。東側のピットは梢円形で、長軸40cm、短軸30cm、深さは70cmを測る。

遺物は中期土器片の他、刺片（11）が出土した。

120号土壙（第25図）

調査区北西部、C6-40・41に位置する。平面形は梢円形で長軸2m、短軸1.6m、深さ10cmを測る。西壁にはピットが1か所張り出している。平面は隅丸方形、規模は一辺0.4m。開口部からの深さは60cmを測る。底面は南に向かってやや傾斜している。

出土遺物は中期土器片約30点である。

121号土壙（第25図）

調査区北東部、C6-41、C7-01に位置する。平面形は梢円形で規模は径約1.6m、深さ最大20cmを測る。底面は西に向かって傾斜している。

遺物は、覆土中から第Ⅱ群から第Ⅳ群にかけての土器片が約280点出土したが、小破片や無文のものが多く、図示できるものは少なかった。

122号土壙（第25図）

調査区北東部、C6-41・42、C7-01・02に位置する。平面形は梢円形を呈し、規模は開口部で長軸1.8m、短軸1.6m、深さは40cmを測る。底面は長軸1.8m、短軸1.4mを測る。南西側壁面はオーバーハンプしており袋状となる。覆土はローム塊を多量に含む暗褐色土であり、人為的堆積と考えられる。

出土遺物は中期土器1点のみである。

123号土壙（第25図）

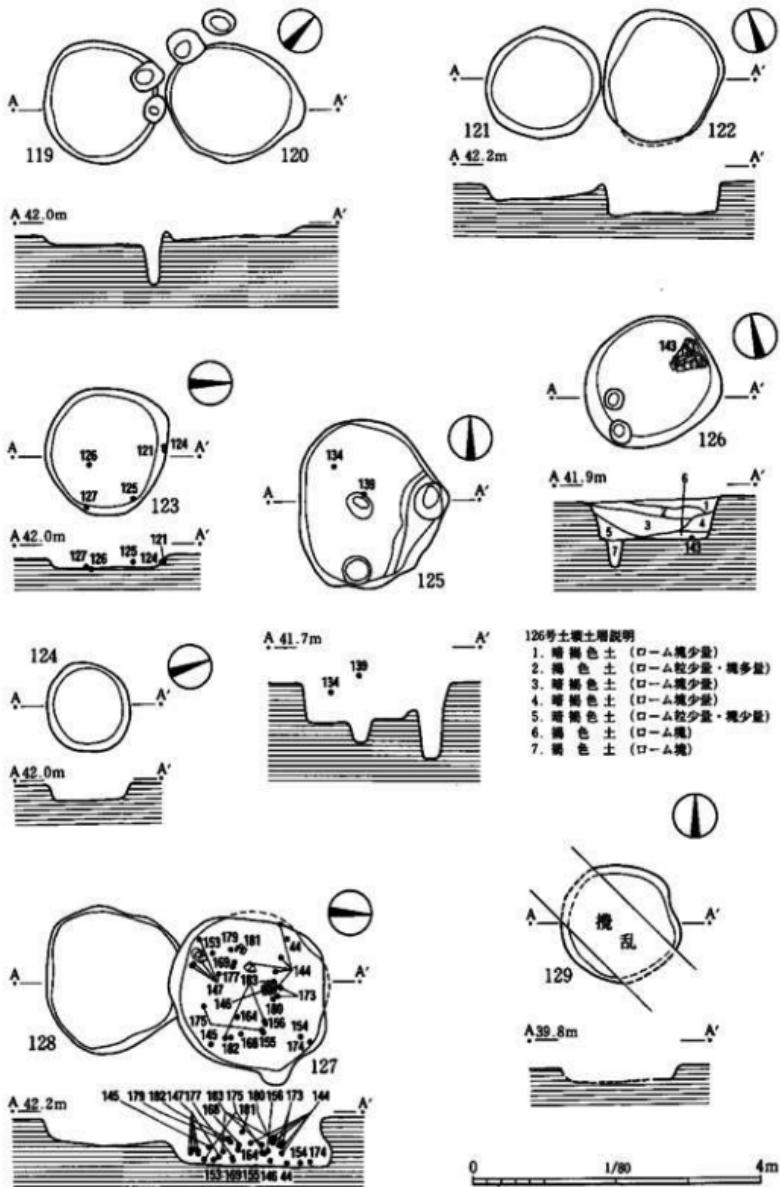
調査区中央部北西より、C7-32・33に位置する。平面形は不整偏円形で、径約1.7m、深さ20cmを測る。底面は南側に向かってやや傾斜する。

出土遺物は中期土器が約10点と少ないが、第Ⅱ群のものが大半を占めている。したがって、本土壙の時期は阿玉台期と捉えられる。

124号土壙（第25図）

調査区北東部、C6-31・40・41に位置する。平面形は径約1.2mを測る。底面は南側に向かってやや傾斜する。

遺物は中期土器片約20点が出土した。



第25図 119・120・121・122・123・124・125・126・127・128・129号土壤実測図

125号土壙（第25図、図版11）

調査区北西部、B5-13・23・24に位置する。古墳時代の017号住居跡の床面下から検出された。平面形は長椭円形で東側に張り出しを有する。規模は長軸2.4m、短軸1.5m、深さ50cmを測る。底面には中央及び、南壁際にピットがあり、中央のものは椭円形で長軸40cm、短軸1.5m、深さ30cmを測る。南側のピットは径は40cmの円形で、深さ50cmを測る。張り出し部は南東方向に50cm出ており、底面は約10cm高い。東壁際には、不整な椭円形のピットが穿たれている。規模は長軸50cm、短軸40cm、深さ1mを測る。覆土はローム粒・塊を少量含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物は、第Ⅱ群から第Ⅳ群までの土器及び、土器片錠2点を含む計80点が出土している。

126号土壙（第25図、図版12）

調査区北西部、B5-33・34に位置する。平面形は椭円形、規模は開口部で長軸1.9m、短軸1.7m、深さ60cm、底面で長軸1.6m、短軸1.5mを測る。西壁面と壁際には、ピットが2か所穿たれており、北側のものは径約30cm、深さ40cm、南側のものは径約30cm、深さ10cmを測る。覆土は全層にローム粒・塊を含むが、概ね自然堆積と考えられる。

遺物は、第Ⅱ群から第Ⅳ群にかけての土器片が90点ほど出土しているが、東壁際の底面に143の第Ⅳ群の深鉢形土器がつぶれた状態で出土しており、それにより本土壙の時期は加曾利EⅠ期と捉えられる。

127号土壙（第25図、図版12）

調査区北東部、C5-40に位置する。古墳時代の019号住居跡の床面下から検出された。また、128号土壙とも重複関係にあり、本土壙の方が新しい。平面形は不整円形を呈し、規模は開口部で径約2.2m、深さ約70cm、底面で径約2.1mを測る。北壁と西壁の一部はオーバーハングしており袋状となる。底面は北側に向かって傾斜している。覆土はローム粒を少量含む暗褐色土であり、自然堆積と考えられる。

遺物は、第Ⅱ群から第Ⅳ群（加曾利EⅠ・Ⅱ式）までの土器などが約370点ほど出土している。特に第Ⅳ群の深鉢形土器（146）は底面近くからの出土であって、本土壙の所属時期を示す可能性が高いが、第Ⅲ群の出土割合も高く、即断できない。

128号土壙（第25図、図版12）

調査区北東部、C5-40、C6-00に位置する。127号土壙と重複し、北側壁面の一部を破壊されている。平面形は不整円形で、規模は開口部で径約2m、底面で約1.9m、深さは最大40cmを測る。底面は中央でやや凹んでいる。覆土はローム粒・塊を主体とするものであり、人為的堆積と考えられる。

遺物は、第Ⅱ群から第Ⅳ群までの土器約90点が出土した。

129号土壙（第25図）

調査区中央部、C8-14に位置する。北西方向に通る溝状の擾乱によって、中心部がほとんど失われており、遺存状況は不良であった。平面形は径約1.6mの不整円形と考えられ、深さは20cmを測る。

遺物は第II群から第IV群にかけての土器が出土したが、すべて小破片である。

130号土壙（第24図）

調査区北東部、C6-31に位置する。北側で109・110号土壙、南東側で111号土壙と重複する。平面形は径2m前後の楕円もしくは不整円形であったと推測される。深さは最大35cmを測る。底面には径約25cm、深さ約6cmを測る浅いピットが穿たれているが、西側半分は110号土壙に破壊されていた。

遺物は、第III群土器主体に約230点の土器片が出土した。他に土器片鍤も2点出土している。遺構の所属時期は不確実であるが、111号土壙や第III群を出土した110号土壙に切られていることから、阿玉台期から中峰期にかけてのものではないかと思われる。

2. 遺物

遺構出土土器

本遺跡出土土器は以下のように大別した（グリッド出土土器の項参照）。

第I群土器：勝坂式土器

第IV群土器：加曾利E式

第II群土器：阿玉台式

第V群土器：後・晚期の土器

第III群土器：中峰式土器

021号住居跡（第26図、図版21）

1～4は第II群土器である。1・2は隆起帯に沿った角押文がみられる。3は微隆起状の枠形文になるものとみられ、枠内側には沈線が添えられている。4は肥厚した口線上に斜綱文が施文され、その下位には沈線文が配されている。5～8は綱文地に枠形、「L」字状などの沈線がみられるもの。5は内湾、6は端部が極端に肥厚する口縁部である。7は連続刺突文が沈線内に付加されている。8は横位沈線を有する。9は縦位の綱文、10・11では縦位の条線文がみられる。12は無文の口縁部で、口唇部は角頭状である。13は口縁部隆起帯部分で、渦巻文を形成している。14は枠状の隆起帯を有し、下位に綱文地に沈線文を施文されるものである。これらは第III群ないし第IV群土器である。15・16は第IV群土器（加曾利E式）と考えられる口縁部で、15は縦位に、16は上端部を横位に沈線で無文帯を区切り、綱文を充填している。17・18は無文の平底をなす底部である。

014号土壙（第27図、図版21）

19～23は角押文を主文様とするもの。19は口唇に太い刻みを有する扇状把手で、単独の角押文による施文がみられる。20は隆起帯に沿い角押文を伴い、枠形を構成する。21は口唇に連続



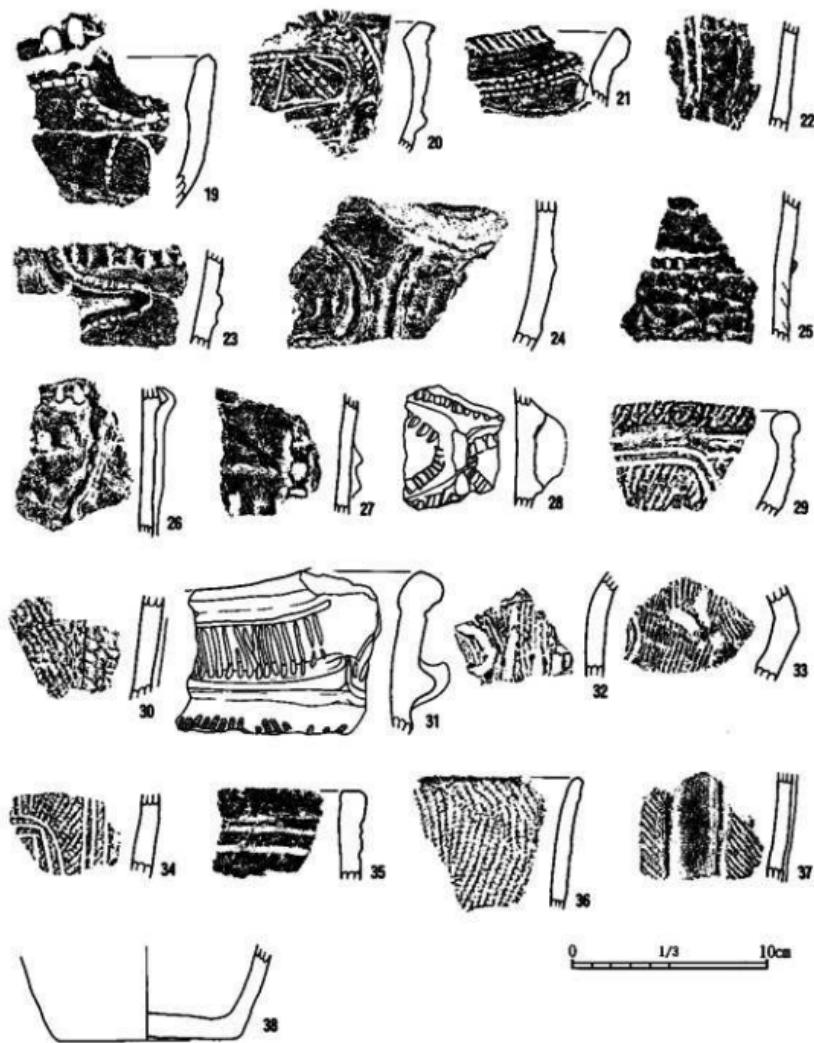
第26図 021号住居跡出土土器(1~18)

する鋭い刻みを有する。22~27は隆起帯がみられるものである。器面には成形時の凹凸が残されており、22には角押文が伴う。23は角押文に加え爪形の刺突文もみられる。28は棹形をなす隆起帯に幅広の角押文を伴うものである。29は縄文地に2本単位の沈線を有する。30は幅広角押文・縄文がみられる。これらは第Ⅱ群土器である。31~35は第Ⅲ群か第Ⅳ群（加曾利E式）の古手とみられる土器である。35は横位沈線のみのみられる口縁上部で、口唇部は角頭をなす。6は撫糸地に沈線の施文されるものである。36は縄文のみの施文されたもので、口縁部は横位施文となる。37は縦位の平行微隆起線を有し、無文帯をはさん

で細かい縞文が充填施文され、あたかも磨消されたような効果をなすものである。第IV群土器のうち、加曾利E IV式に相当すると思われる。

101号土壙（第27図）

38は無文平底の底部である。



第27図 014号(19~37)・101(38)号土壙出土土器



第28図 102号土壤出土土器(39~54)

102号土壙（第28図、図版22・23）

39・40は第Ⅱ群土器である。39は貼り付けによる粘土紐の隆起帯が波状口縁の口唇部にまで及んでおり、角押文による文様は2列一単位に施される。隆起带上にはキザミ目を有している。40は隆起帯に沿って角押文・沈線が施文されている。41～46は第Ⅲ群土器である。41は鋸歯状刺突文と沈線による文様がみられる。42・44・45は縄文を地文に沈線が主文様となるもので、42は波状口縁、44は円形窓を有し、内外面に同心円文がみられ、また交互刺突文も配されている。45は平坦な口唇面に沈線文様が施文されている。46は沈線の施された浅鉢形土器で、赤彩されている。47～53は第Ⅳ群土器である。47～51は主として粘土紐の貼り付けによる隆起帯で文様が構成されるもので、隆起帯に沿って太い沈線が伴う。47は口唇部が平らに面取りされ、隆起帯も「S」字に近く、古い要素がみられる。48は胸部が沈線文様で構成される。53は縄文のみのもので、口唇部に沈線を有している。54は口径13.8cm、高さ17.2cmを測る小形で粗製の深鉢形土器で、綱位の縄文がみられる。口縁部直下と底部付近は無文になっている。縄文原体は多条と複節の原体を組み合わせた特殊なものである。第Ⅳ群土器（加曾利E I式）と考えられる。

104号土壙（第29図、図版22）

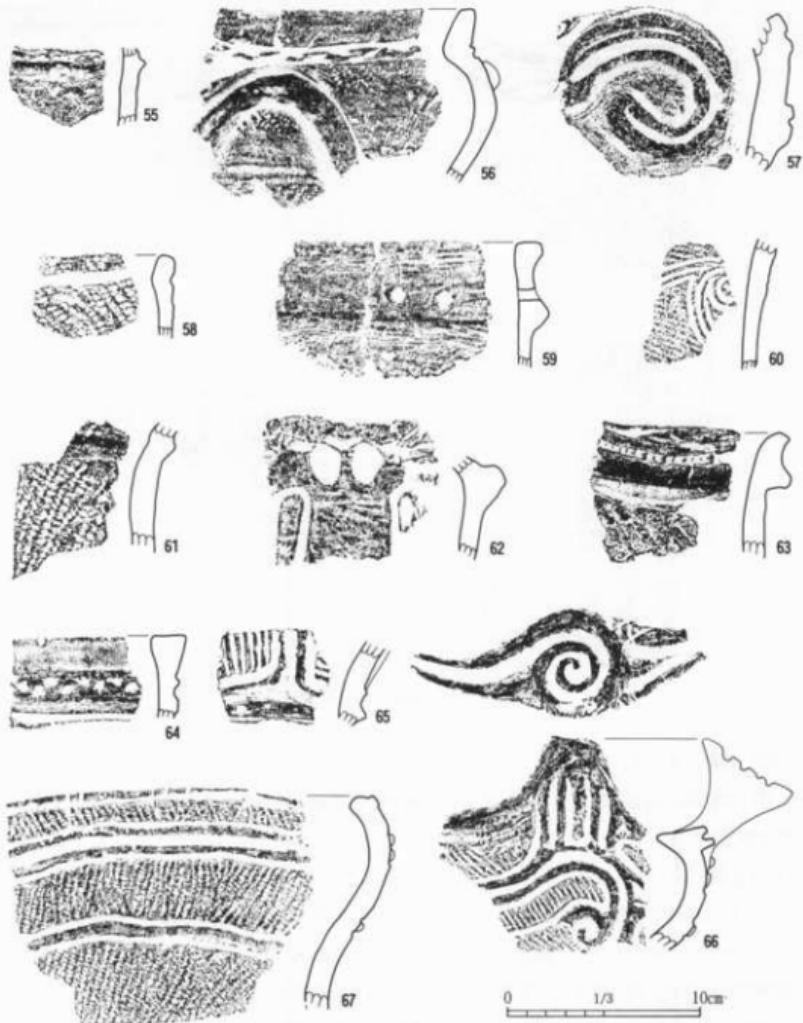
55は微隆起帯に連続刺突文が伴っている。第Ⅱ群土器である。56～59は第Ⅲ群土器である。56は口縁部に巡る交互刺突文と貼付けの隆起帯により文様が描出される。地文には縄文が施されている。57は渦巻状の隆起帯がみられ、その中軸に沿って沈線を伴う。58は縄文を主体とする群に含まれる。59は無文で、口縁部との境が張り出す。口縁部下端に2個の孔が開けられている。60は縄文を地文に曲線の沈線が施文されるもので、第Ⅴ群土器（堀之内式）と思われる。61は縄文を地に隆起線がみられるものである。

105号土壙（第29・30図、図版22・23）

62・63は第Ⅱ群土器である。62は貼り付けの隆起帯上に圧痕文を有しており、舌状の沈線文が配されている。63は折返し口縁を呈し、角押文が巡る。64・65は第Ⅲ群土器である。64は颈部に交互刺突文が施文されており、下位には沈線文がみられる。65は隆起線の区画に集合沈線が施文されている。66～71は第Ⅳ群土器である。66は隆起帯により畫形・渦巻文を形成するもので、口唇部外縁に沈線が施文され、波頂部分では渦巻文をなしている。67は縄文地に貼付けの隆起帯を有するキャリバー形土器である。68・69は胸部縄文を主文様とし、口唇部には沈線が施文され、68は口縁部下端に横位沈線、69では縦沈線を有している。70は筒形をなす底部で、斜縄文を有し、底面付近は無文となっている。内面には炭化物が付着している。71は条線文の施文された胸部片である。

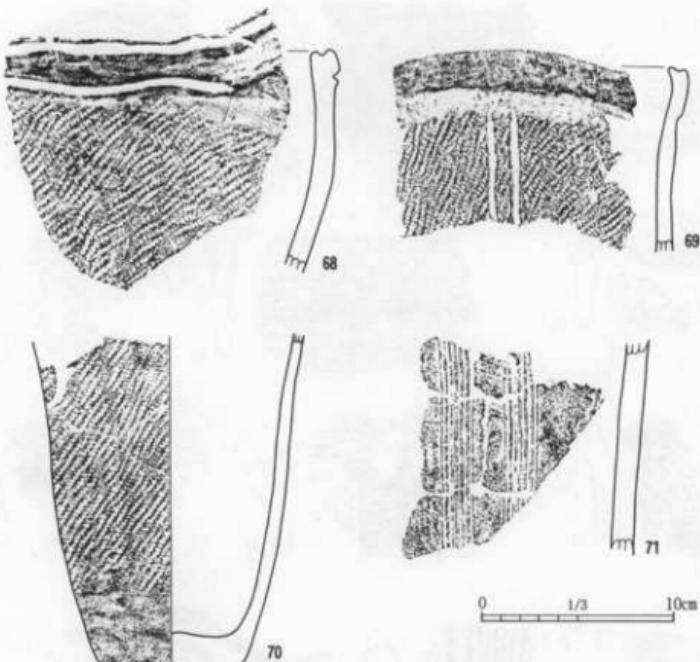
106号土壙（第31図、図版23）

72～74は第Ⅱ群土器である。72は縄文地に沈線を有し、口唇には角押文が施されている。73は胴下部付近の破片で、垂下する隆起帯と結節沈線による文様を施され、地文にはL R縄文が施



第29図 104(55~61)・105(62~67)号土壤出土土器

されている。74は縄文地に角押文を伴い隆起線文様を持つものである。75・76は第IV群土器である。75は隆起線文様を有するものである。76は筒形を呈する胴部で、縦位R L縄文を地に平行・波状の縦位沈線がみられる。



第30図 105号土壤出土土器(68~71)

108号土壤 (第31図、図版23)

77は沈線地に渦巻沈線を有している。78は縄文地に沈線文のみられるものである。いずれも第Ⅳ群土器であろう。

110号土壤 (第31図、図版23)

79~81は浅鉢形土器である。79は第Ⅲ群土器の口縁下部で、太い沈線で渦巻・直線文を施している。80は角のついた口縁部で、上方からみれば八角形状を呈するものと思われる。赤彩痕が認められる。81は無文の小形のもので、口径23.2cmを測る。内面は赤彩されている。これらの無文土器は第Ⅱ・Ⅲ群土器であろう。82は縄文を有する胴部である。

111号土壤 (第32図、図版24)

83は撚糸文を地文に沈線が施されるもので、把手の円形の窓の部分とみられる。84は縄文地に沈線文を有している。

113号土壤 (第32図、図版24)

85は第Ⅱ群土器で、幅広のものに加えて、幅の狭い角押文も併用されている。86~90は第Ⅳ



第31図 106(72~76)・108(77~78)・110(79~82)号土壙出土土器

群土器である。86・87は隆起線を特徴とする。88は縄文単独、89は撚糸文に縦沈線を有する底部近くである。90は条線文を有する底部片である。

114号土壙（第32図、図版24）

91・92は縄文を地文とし、沈線を施したもので、第Ⅲ群土器と思われる。93・94は隆起線、95は沈線文かいずれも縄文地にみられるもので、第Ⅳ群土器と考えられる。



第32図 111(83・84)・113(85～90)・114(91～95)・115(96～100)・117(101～104)
118(105～110)・119(111～113)・120(114・115)号土壤出土土器

115号土壙（第32図、図版24）

96は爪形文と沈線のみられるもので、「く」の字に内湾しており、浅鉢形土器になるとみられる。97~100は縄文地に沈線を有するもので、98は口唇部にも一条の沈線が施される。98までは第Ⅲ群土器、他は第Ⅳ群土器であろう。

117号土壙（第32図、図版24）

101は隆起帯に伴い幅広の角押文がみられるもので、第Ⅱ群土器である。102・103は縄文施文のもの。104は横位の隆起線を有する有孔土器である。

118号土壙（第32図、図版24）

105は縦枠沈線を有している。106は隆起線文様のものである。107は縄文地に縦位の波状沈線が施文されている。108・109は撚糸施文のものである。これらは第Ⅳ群土器であろう。110は横位沈線のみられる平底の底部である。

119号土壙（第32図、図版24）

111は細かい角押文を有するもので、第Ⅱ群土器である。112は縄文が帶状施文される。113は縄文地に縦無文帯が区画されている。

120号土壙（第32図、図版24）

114は縄文地に沈線文をもつ。115は波状の条線文がみられる。

121号土壙（第33図、図版24）

116は小突起部分で、隆起線と幅広の角押文を有しており、第Ⅱ群土器である。117は第Ⅲ群土器で、隆起線上にも縄文が施文される。118は縄文が施文された口縁部で、口唇部にも縄文が横位に配されている。119は無文のものである。

122号土壙（第33図、図版24）

120は縄文を有する脇部である。

123号土壙（第33図、図版24）

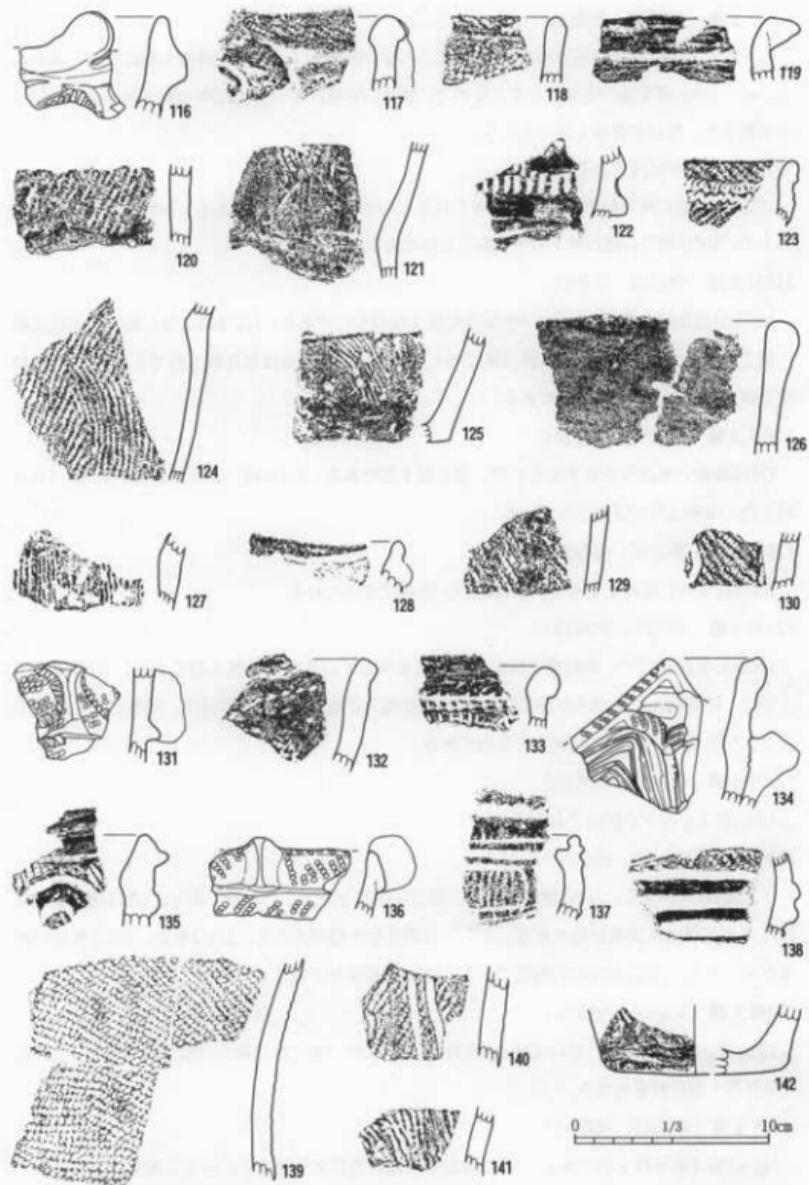
121は細い角押文を、122は隆起線沿いに幅広角押文を施文したものである。123は縄文を地文に角押文及び波状沈線が施される。これらは第Ⅱ群土器であろう。124は単節、125は無節の縄文がみられる。126は無文の口縁部である。127には構造工具による条線文がみられる。

124号土壙（第33図、図版24）

128は隆起線を有する。129・130は縄文施文のもので、130には沈線が附加されている。これらは第Ⅳ群土器に含まれよう。

125号土壙（第33図、図版24）

131~134は第Ⅱ群土器である。131は隆起帯に幅広角押文を併有し、全面に縄文が施文されている。132は2列の角押文、133は連続爪形文を有する。134は山形をなす波状突起部で、貼り付けられた隆起帯上にまで縄文が施文され、隆起帯に沿って2条の沈線が施されている。135・



第33図 121(116~119)・122(120)・123(121~127)・124(128~130)
125(131~142)号土壤出土土器

136は第Ⅲ群土器である。135は縄文地に隆起線を有するもの。136は耳タブ状の隆起を有する折返し状口縁をなすもので、縄文が全面に施文されている。137・138は隆起線文様を有するもので、第Ⅳ群土器である。139は縄文施文、140・141は縄文地に沈線文を有する胴部である。142は上部に縄文のみられる底部片である。

126号土壤（第34・35図、図版25・26）

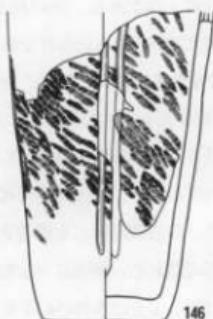
143は大小の波状突起を有するキャリバー形の深鉢形土器で、第Ⅳ群土器にあたる。口縁部最大径31.5cm、高さ45.9cmを測る。口縁部突起は4単位の波状をなし、波底部にさらに小突起が配されている。口縁部には隆起線を主体に横位の渦巻区画文がみられ、地文は横位のR L縄文である。口唇部外縁にも渦巻き沈線文がみられる。頸部は隆起線で区切り磨消され、横位無文帯が形成される。胴部以下は縦位の縄文を地に垂下する平行沈線と釣鉤形沈線を施している。内面はひじょうにきれいにミガキ調整がなされている。148は隆起線に角押文を伴うもので第Ⅱ群土器、149は縄文地に隆起線を有するもので、第Ⅲ群土器である。

127号土壤（第34～36図、図版25・26）

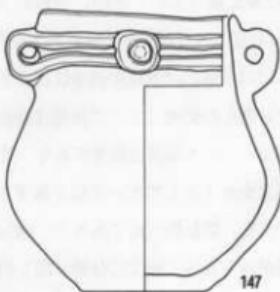
144はキャリバー形の深鉢形土器の上部で、推定口径28cm、最大径30.4cmを測る。隆起線を主体に口縁部には横位の渦巻区画文が、その直下の頸部には横位の杵形区画がなされている。地文はR Lの斜縄文で、口縁部は横位に、以下は条が縱走する形で深く明瞭に施文されている。内面のミガキ調整は顯著である。第Ⅳ群土器（加曾利E I式）と考えられるものである。145は縄文を地文として太い沈線が施文されているもので、口縁端部が外反する。口径は29.4cmほどである。第Ⅲ群土器であろう。146は深鉢形土器の筒型を呈する胴下半の部分で、縦位の平行沈線がみられる。地文には撫り戻しの縄文が施されるが、器面が荒れており不明瞭である。内面は磨かれており、黒色を呈する。第Ⅳ群土器に含まれるものであろう。147は小形の広口壺形土器で、口径13.6cm、胴部は球状に膨らみ、最大径19.2cm、高さ18.9cmを測る。無文で、口縁部には平行隆起線が巡り、一对の耳が配され、それと直交する位置に環状の貼付文が一対付されている。内外面はケズリ調整され軽いミガキが入る。150～158は第Ⅱ群土器である。153～157は隆起帶に角押文を伴うもので、153は隆起帯と角押文に沈線を添えて杵状の文様を構成し、円形把手をなす。158は隆起線と爪形の刺突文を有している。159・160は隆起線が沈線を伴って施文されているものである。161～163は口縁に沈線が施文され、赤彩された浅鉢形土器になる。これらは第Ⅲ群土器であろう。164～172は隆起線が主体的にみられるもので、多くは縄文を伴う。164は器壁が内面に折り返され、肥厚している。167は貼付した紐状粘土の縁がナデ調整されず、貼付線単独で施文され、口唇部には沈線が配されている。170・171は渦巻隆起線がみられ、特に171では明確な沈線を伴い施文されており、ともに第Ⅳ群土器（加曾利E II式）以降の新しい様相をもつとみられる。172は環状突起部分で、麻手文がみられる。太い沈線を密に施文し隆起効果をなしている。173・174は縄文のみ施文の口縁部。175は縦の条線文を有し、折り返し状口縁を



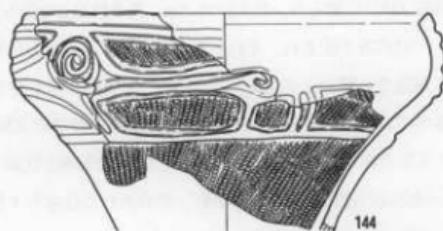
143



146



147

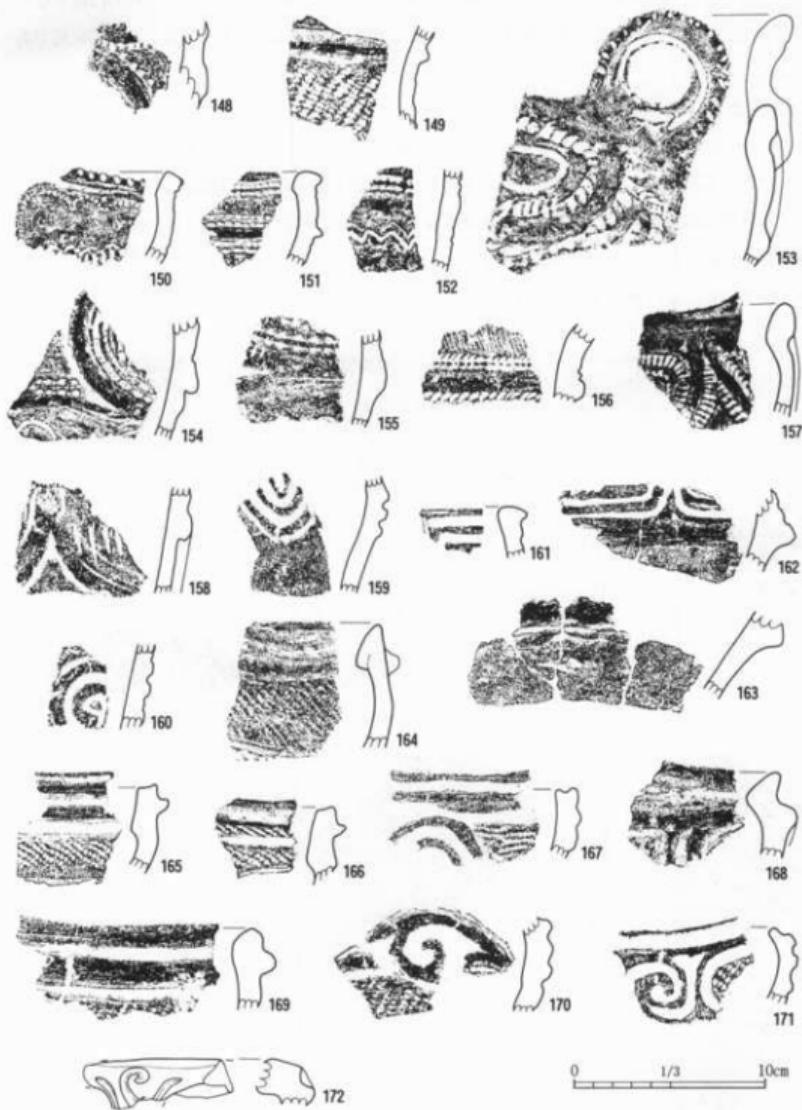


144



145

第34図 126(143)・127(144~147)号土壤出土土器

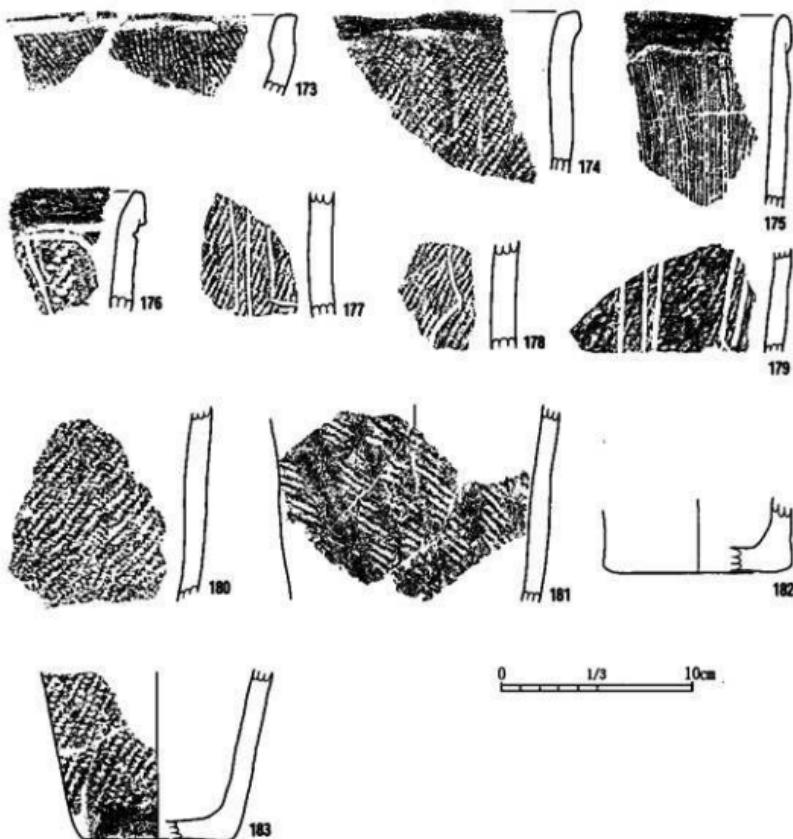


第35図 126(148・149)・127(150~172)号土壤出土土器

なす。176～179は縄文を地文とし、沈線文を施されたものである。176は折返し状の口縁をなしている。180・181は縄文施文の胴部である。182は無文、183は縄文を有する深鉢形土器底部である。

128号土壤（第37図、図版27）

184・185は隆起線に沈線を伴うもので、第Ⅱ群土器である。186は縄文を地文に粘土紐の貼り付けによる隆起帯で文様が構成されるもので、第Ⅳ群土器である。口縁上部を巡る横位隆起帯上には短沈線が連続的に施文され、鎖状をなしている。口縁の文様帯内は波状隆起帯と縦沈線が組み合わされている。187～189は縄文のみ施文されたもので、189は底部で、裏面には網代痕が残されている。190は条線文の施されたものである。



第36図 127号土壤出土土器(173～183)



第37図 128(184~190)・129(191~196)・130(197~206)号土壤出土土器

129号土壙（第37図、図版27）

191は杵形の隆起線にキザミ目が施されており、第Ⅱ群土器である。192は折反し状の口縁のもので、無文である。193は隆起線を有するもので、第Ⅳ群土器である。194は帯状施文の縄文のみられるものである。195は密接した2条の凹線の上下に条線文が施文されており、上部には沈線が配されている。196は底部付近の部分で、内外面ともよく磨かれている。

130号土壙（第37図、図版27）

197は隆起線に角押文を伴うもので、第Ⅱ群土器である。198～200は縄文地に沈線文を有する胴部破片である。201はキザミ目のされた隆起線を口縁部に巡らしており、202は口唇沿いに隆起帯を施すもので、口唇面は凹帶をなす。両者とも縄文を有している。203は撲糸施文されている。204～206は条線文を有するもので、205は折返し状口縁をなす。これらは第Ⅲ群土器である。

グリッド出土土器

本遺跡出土の縄文土器は、総数整理箱で35箱にのぼる。グリッド出土はほぼ半数である。本項ではそれらを大まかに分類して記載することにしたが、分類が可能な大形の破片は大半が住居跡ないし土壙から出土したものであり、グリッドの包含層からの出土は比較的少ない。よって、包含層の分だけでは分類に不足が生じるため、遺構出土のものも加味して、下記の5群に分類した。時期的には中期所産のもの、なかでも阿玉台Ib～IV式・中峠式・加曾利E I式が大半を占めており、かつ三者はほぼ同比率であった。分布面では谷地頭で包含層の残りが良好なC9グリッドが出土量の約6割を占めている。

第Ⅰ群土器（第38図1～6、図版28）

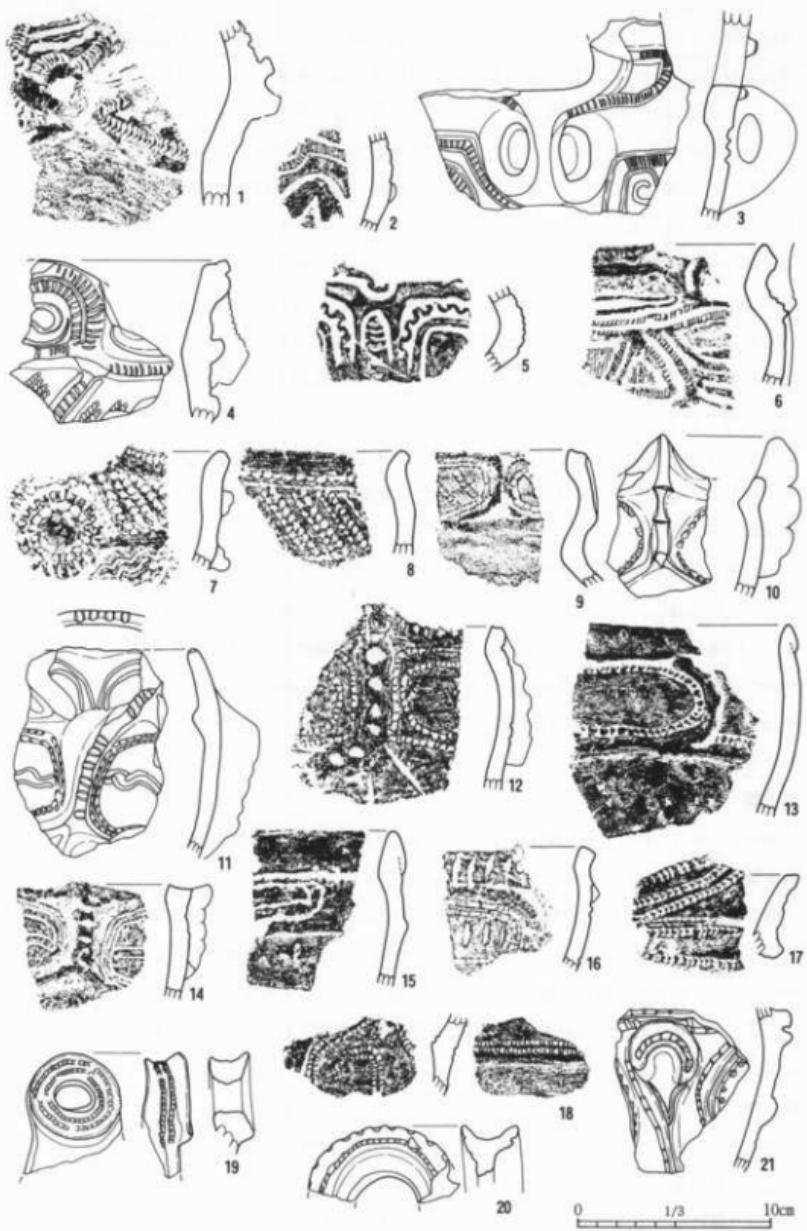
本群は勝坂式土器を一括した。1は把手部を欠損した口縁部破片で、隆起帯を主に文様が構成されている。隆起带上には細かなキザミ目が施されている。2・3は沈線により区画した文様内にキザミ目が施されるもので、3は眼鏡形の突起があり、それから連なる把手部を欠損する。4はキザミ目を加えた隆起帯に文様を区画し、沈線・縄文を附加している。5は強く内湾する器形を呈し、文様は沈線を主体に交互刺突による鋸歯状文が加えられるもの。6はキザミ目を持つものの主体の隆起帯をめぐり、一部縦の沈線が区画内に配されている。

第Ⅱ群土器（第38・39・40図、図版28・29）

本群は阿玉台式土器を一括した。胎土中には雲母・石英・長石が多量に含まれる例が多いことを特徴とする。焼成は良好なものが多い。本群はさらに文様要素の違いにより以下のように分類した。

第1類（7～25）

幅の狭い角押文を施すもので、多くは窓状文を構成し、かつ隆起帯を伴う。7～9は斜行の角押文を多用するものである。7では口縁部の中央付近に円形文が貼り付けられており、円形文上にも角押文・キザミ目が施されている。8では角押文の間隔が開いて、連続刺突文的になる。



第38図 グリッド出土縄文土器（1）

9は微隆起状の隆起帯を伴い、梢円状の窓枠文が施される。10は波状口縁の頂部で、鋸状突起が施される。11は微隆起状の隆起帯の窓枠文が施される。11・12は貼付けによる粘土柱の隆起帯が波状口縁の口唇部にまで及んでいる。隆起帯上にはキザミ目を有し、角押文による文様は2列一単位に施される。13は微隆起線・半截竹管を用いた結節沈線の枠形文を有し、口縁端部は折返し形状である。14・16は口縁部の文様が2列を一単位とする角押文により梢円状に施されるもので、16は口縁端部および枠形文内に爪形文が施文されている。15は13と同様に折り返し口縁を呈する。17は波状口縁をなすもので、2列単位の結節沈線が口唇部・隆起帯に沿ってみられる。18は内外面に角押文の施文されるものである。19・20は環状の把手部分で、両面に環状に角押文が施文されている。21～24は角押文を伴う隆起帯を有するもので、21では弧状・「Y」字状隆起帯をなしている。22は2条単位の結節沈線が施される。23・25は隆起帯を有する胴部で、角押文は有していないが、それらの下半部とみられるのでここに含める。いずれも貼り付けの隆起帯上の圧痕文を有するものであり、23は連続刺突文を有している。24は底部で、網代痕を残している。

第4類 (26～29)

爪形文・貝殻文のみのみられるものである。26は環状の突起を有する山形の把手部分で、突起上に貝殻腹縁の押引文が施文されている。27は爪形文を連続して施文し胴下半から底部の破片で、円筒形を呈している。底部付近の器面には細かい繊維の圧痕が認められる。28はアナグラ属の貝腹縁によって施文されているもので、29は竹管状工具による爪形文が認められる。器形はいずれも口唇部をわずかに外側に向けるが、全体としては円筒形の器形を呈するものと思われる。

第5類 (30～32)

条線文の施文されたもの。30は継位に、31・32は口縁端部に横位に波状施文されている。

第6類 (33～37)

幅の広い角押文を持つものである。33は貼り付けによる隆起帯に沿って、半截竹管状工具を用いて連続爪形文状を呈する。34は口唇部付近から、キザミ目・キャタピラー文・連続する三角刺突といった文様を横位に濃厚に施す。35は側面円板状の突起を有する口縁部である。36は隆起帯による立体的な装飾が加えられた把手部分で、隆起帯上にキザミを有する点は勝坂式の影響がみうけられる。37は耳状の隆起文を有している。

第7類 (38～40)

隆起帯、あるいは沈線による文様が施されるものの、全体に文様の描出が簡略化された印象を受けるものを一括した。38は隆起帯による枠状文を有し、枠状文に沿って沈線が併走する。39は貼り付けによる隆起帯を山形に施している。40は微隆起状の隆起帯により梢円状の枠状文が重なるものである。



第39図 グリッド出土縄文土器（2）

第8類 (41~43)

地文に縄文を施文される類。阿玉台IV式である。41は貼付けられた隆起带上にまで縄文が施文されるもので、口唇上及び隆起帶に沿って2条を基本とする沈線が施され、一部内面にも及んでいる。42・43は山形突起部で、板状をなす。42は隆起带上に縄文が施文されている。43は口唇沿いが幅広く肥厚し、縄文が施文されている。

第9類土器 (第40~42図、図版29・30)

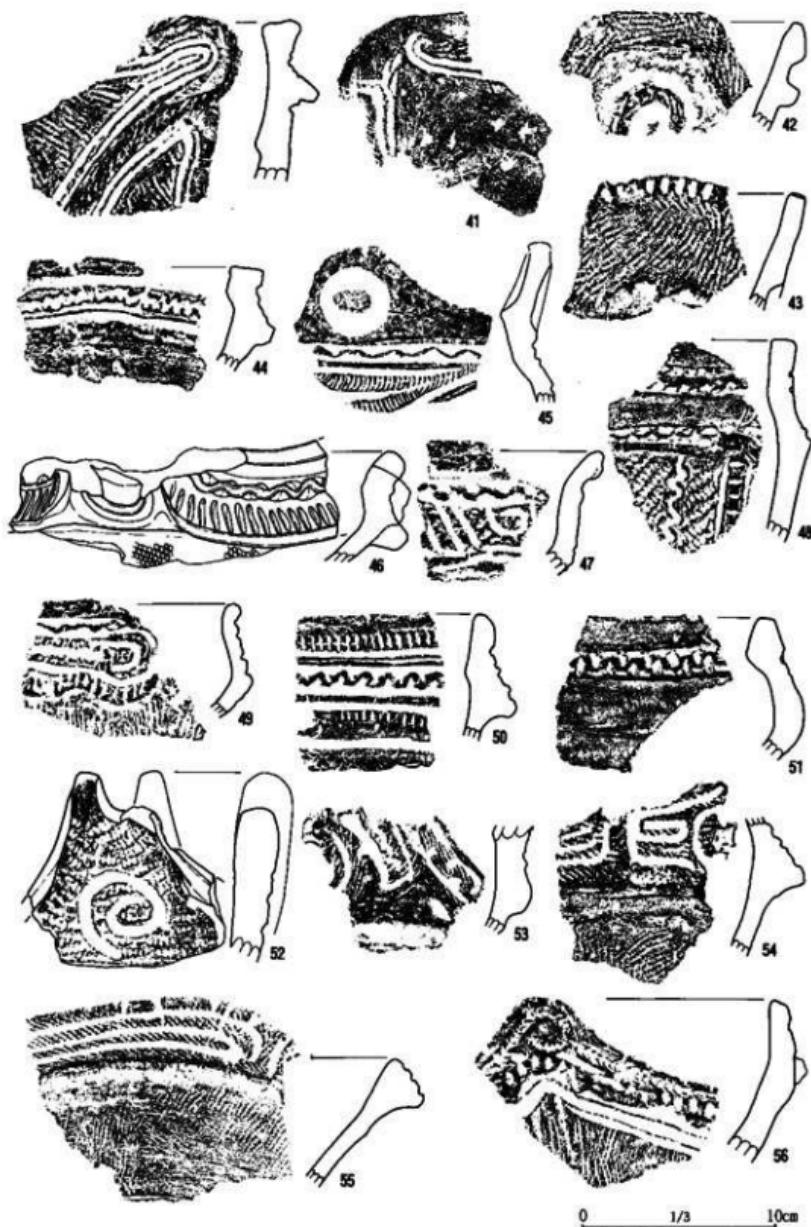
中鉢式土器及び、加曾利E式と共通の要素を有しており、分離が困難な土器などを一括した。阿玉台式のような胎土に雲母他の礫を含むものも少なからず存在している。

第1類 (44~51)

鋸歯状文・波状文を持つもので、多くは交互刺突を用いることにより表出されたものである。44は口縁部に平行沈線間に鋸歯状沈線を配されたもの。45は交互刺突による波状文と間隔の狭いキザミ目が施される。波状口縁の波頂部下方に沈線による円形文も施されている。口縁部内面にも微隆起帶による円形文がみられる。46は口縁部に枠形の区画（おそらく4単位）を有するキャリバー形土器で、枠形区画内には交互刺突による鋸歯状文、縦沈線列が配されており、破損しているが枠間には有孔の把手を有する。47は縄文を地文にしており、鋸歯状文以下に沈線が施文されている。48は横位の交互刺突文に加えて、垂下する蛇行沈線・キザミ目を有する隆起帶が併用される。49は口縁端部に鋸歯状文を配し、加えて隆起帶と沈線で枠状区画を構成するもので、地文に撚糸文が施文されている。50は口縁部にキザミ目・沈線・交互刺突による鋸歯状文を織り混ぜている。全体としては横位に支配された口縁部文様構成である。部分的にしか観察できないが、胴部下部には縄文が施文されるようである。51は口縁下部に施される交互刺突文以外は無文で、器形が極端に内湾することから浅鉢形土器と思われる。

第2類 (52~61)

地文として縄文ないし撚糸文が施され、主文様の描出には沈線文が用いられるものである。52は「M」字形に突出する把手で、縄文地に渦巻沈線を有している。口縁部は肥厚し、口唇には凹帯が入る。53はキャリバー形土器で、円形の窓を有している。54は円形窓を有するもので、隆起帶を伴っており、隆起帶間に鋸歯状文、口唇部には交互刺突を加えた文様がみられる。55は口縁部にのみ沈線文様の施される浅鉢形土器である。56は口唇部に沿って連続するペン先形刺突が施され、波状口縁の波頂部で渦巻状に描出される。キザミ目を有する隆起帶を伴う。57は口縁下部に横位2列の隆起帶を貼り付け、さらに2本の隆起带上にツマミ状の突起が付されている。沈線は口縁部と隆起帶に沿って施されている。58は比較的幅の広い沈線により、直線・曲線・ジグザグ文が描出されている。地文の縄文は原体R Lである。59・60は横位沈線がみられる。61はR L縄文を地文に、同心円状の文様が描出されている。



第40図 グリッド出土繩文土器（3）

第3類 (62~65)

隆起線が主文様となるものである。62・63は口縁で横位に、胴部で縦位にR L繩文が施文されている。64は口唇部に太いキザミを入れて小波状に隆起線を作出し、口縁部には渦巻ないし雲形の隆起線が横位に施されている。地文には繩文が施文される。65は隆起線が横位のS字形に連続するものであろう。

第4類 (66~68)

沈線文のみ施文された土器である。66は口縁部と胴部の境が張出す器形をなし、縦位の沈線を連続的に施している。67・68は「く」の字状に内湾し、太い沈線文を施文しているもので、深鉢形土器になる。器面には赤彩痕が認められる。

第5類 (69~70)

無文の土器である。69・70は口唇部がやや肥厚する器形を有し、角頭に成形されている。69は口唇部にキザミ目を有している。

第6類 (71~73)

突起である。71は「8」の字形を呈している。72は眼鏡形突起、73は3方向に短くラッパ状をなした開口部を有する中空の球形突起であり、頂部にも孔が穿たれている。

第7類 (74~81)

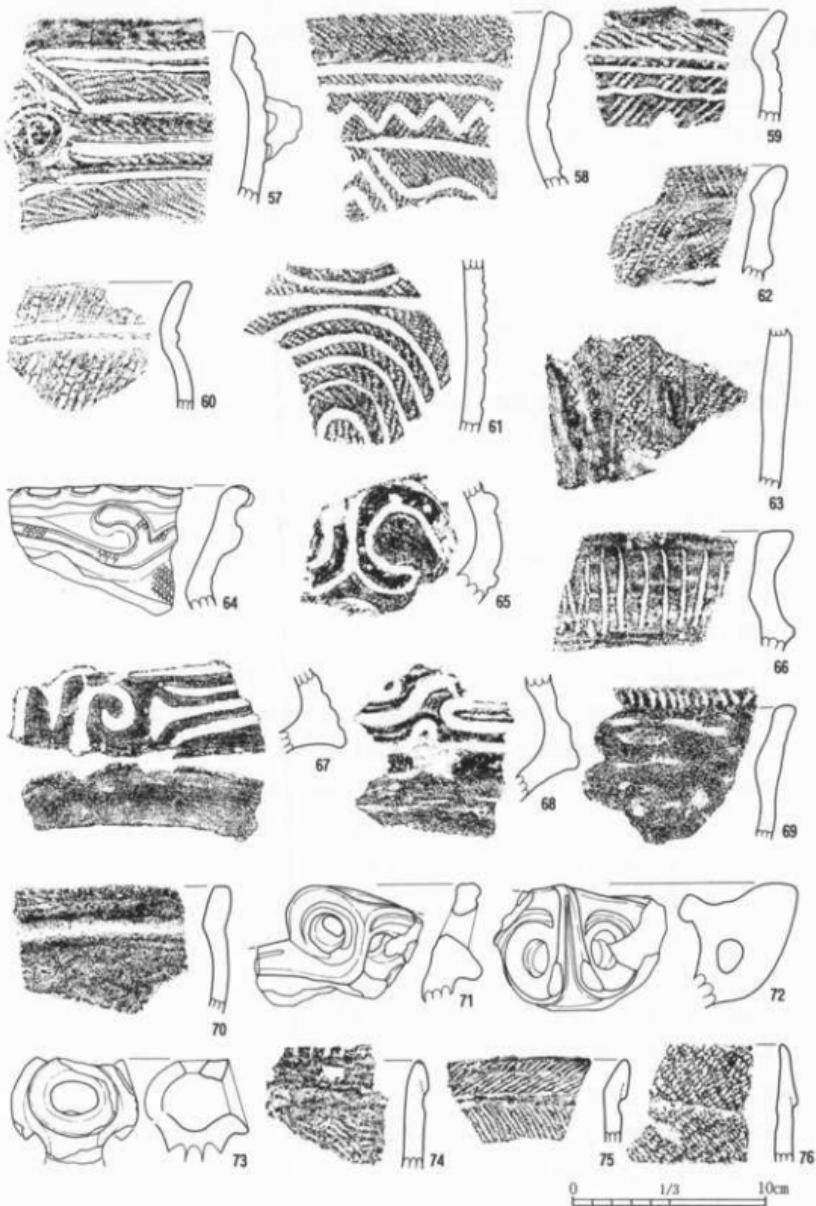
繩文や条線文を主文様とするもの。折り返し口縁をもつものが主体で、下小野式に類似している。直線的な断面形を呈する円筒形の深鉢形土器の器形をとるものであろう。口縁部の形状は口唇部が尖って断面三角形状を呈するものが多い。加曾利E I式と分離し難く、この類に位置づけておく。74は無節の繩文のもので、口唇部にキザミ目を有している。75はやや外傾する口縁部形態を呈する。折返した口縁部に沿って沈線が横位に巡り、口縁部と胴部との境を明瞭にしており、無節の繩文を羽状に施している。76は折り返した口縁部上にも繩文が施文され、原体はR Lである。77も口縁を折り返して胴部に接する位置に刺突文が施される。78の口唇部は角頭になる。79~81は櫛歯状工具による条線文を有するものであり、79・80は口縁が両側に折り返されている。

第IV群土器 (第42・43図、図版30)

加曾利E式土器を一括した。本群はさらに従来の型式設定にしたがって細分することができるが、そのうち第1類から第3類までは加曾利E I式に、第4類は加曾利E II式以降にそれぞれ比定できる。胎土に雲母他の礫の混和はまれになる。焼成は第II群土器と比してやや不良の感がある。

第1類 (82~84・95)

明らかな口縁部文様帯を形成せずに繩文を地文とするのみ、あるいは地文上に簡潔な沈線文のみ施されるものである。82~84は口唇部上にも沈線が施されることを特徴とする。84には幾



第41図 グリッド出土繩文土器（4）

何学的な沈線文が施文されるようである。95は波状口縁の頂部で、口唇部に蕨手文がみられる。

第2類（85～93）

主として粘土紐の貼付けによる隆起帯で文様が構成されるものである。実際には隆起帯に沿って沈線の施されるものが多い。87は渦巻文を伴う横位文様帯を形成するもので、口縁部の文様帯下に頸部無文帯が認められ、後出的な様相を呈する。88は単独の隆起帯が2条平行し、波状に施文されている。古い様相の強いものである。90・91は波状の2条の隆起帯間に指状工具による調整が加えられている。

第3類（94・96～98・107～110）

縄文を地文に沈線文の施される胴部破片及び、加曾利E I式土器でありながら上記のいずれかの類にも属さないものである。94は波状口縁の頂部で、蕨手状の沈線がみられる。96は波状口縁のキャリバー形土器で、隆起帯で形成した舟形区画内に縦沈線が連続して施文され、区画端部には円形の窪みが配置されている。結果としては横方向の文様帯を構成する。97は内湾する器形で、庇状に突出した隆起帯上に渦巻文が描出されている。大木式土器の影響の濃いものである。98は2条の平行沈線を口縁下部に巡らし、無文の口縁部と縄文地文の胴部との境とするものである。縄文原体はL Rが施され、さらに平行沈線による波状文を施す。大木式系統の土器である。

第4類（92～94・99～105）

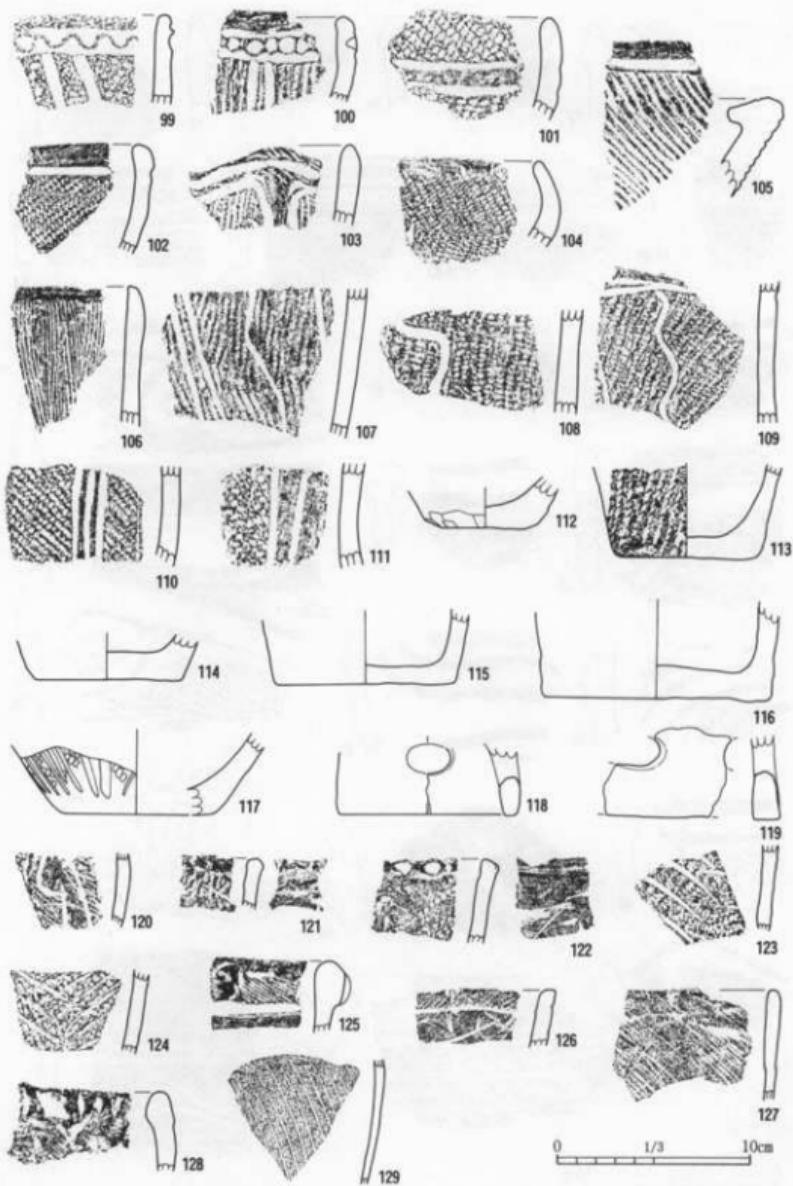
加曾利E II式から加曾利E III式以降の縄文時代中期終末期に位置づけられる土器である。全体からみた出土量は少ない。92・93は大柄な横位区画文有する個体で、縄文は複節L R Lが施される。94は波状口縁の波頂部で、沈線による曲線文を有する。99は口唇部直下に交互刺突による波状文を巡らされ、波状文から2本の沈線がやや斜方向に垂下している。100は燃糸文を地文とし、口唇部に沿って連続刺突が沈線文とともに施されるもので、連弧文系の土器である。101はR L Rの縄文地に横位の磨消縄文帯を施される。102は弱く内湾する器形の口縁部で、施文される縄文原体は複節でL R Lである。103は緩い波状口縁を呈し、磨消縄文帯により「T」字状の文様構成がとられる。104は原体R Lを羽状に施し、口唇部付近はナデにより調整される。105は口縁端部で「く」の字に内折し、密接に斜行沈線が施文されている。曾利系の土器である。106は縦位の条線文による地文を有し、口唇部付近はナデにより調整され、幅の狭い無文部を形成する。

胴部（107～111）・底部（112～117）

107～109は波状沈線が垂下する胴部破片である。110は3本単位の沈線の垂下がみられる。これらは加曾利E I式である。111は磨消縄文帯の垂下する胴部破片で、縄文はL R Lが施されている。加曾利E II式以降のものであろう。112は小形のもので、縫から底部にかけてケズリ調整が施されている。113～116は円筒状をなすもので、113には燃糸文が施文されている。117は底部



第42図 グリッド出土縄文土器（5）



第43図 グリッド出土縄文土器（6）

からやや開く器形をとり、縄文地に縦沈線が施文されており、加曾利E II式以降のものと思われる。

器台（118・119）

118・119は器台形土器の破片と思われるもので、梢円形の孔が設けられている。

第V群土器（第43図、図版30）

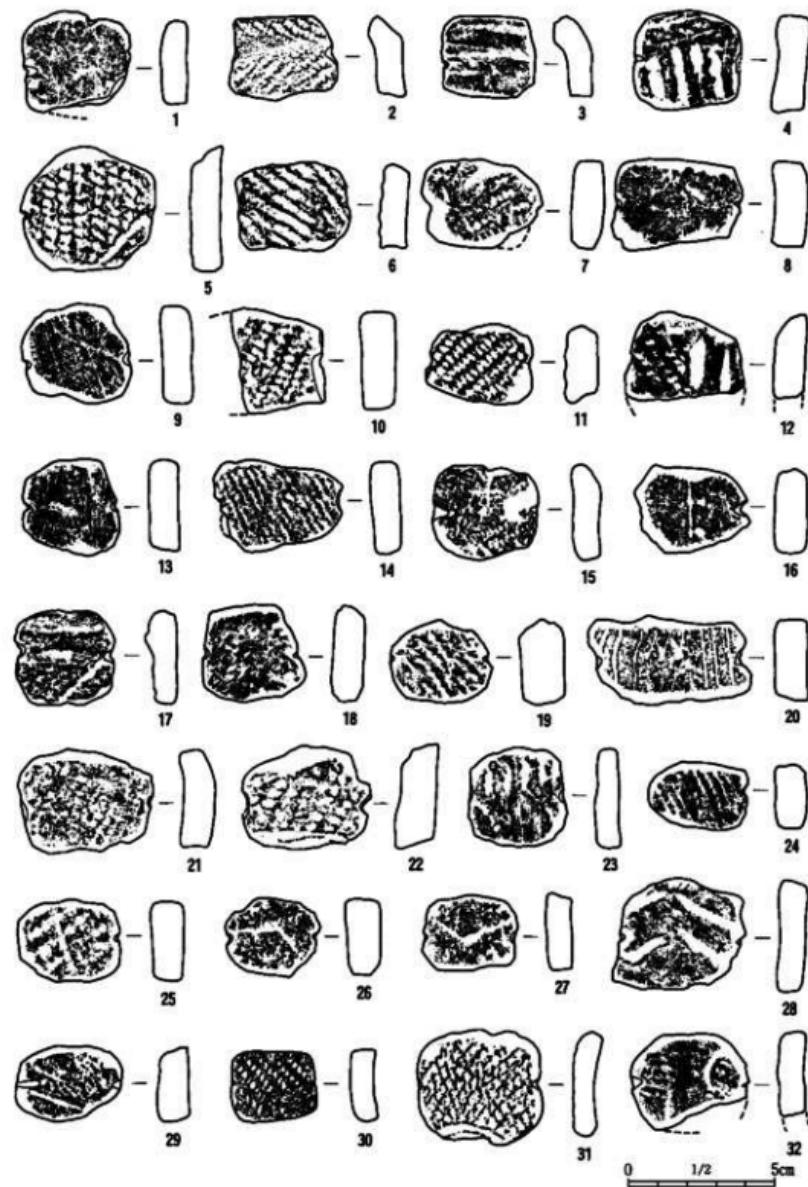
後期以降の縄文土器である。出土量は僅少であり、ほぼすべてを図示した。120は逆「J」字形の磨消縄文を有しており、称名寺式とみられる。121～124は加曾利B式の粗製土器で、121・122は縦線を有し縄文地に沈線で施文され、内面にも口唇部直下に沈線が巡る。123・124はその胴部である。125は隆起帶縄文と貼付文を有しており、安行2式であろう。126は薄手で、弧状沈線が配され、縄文が部分的に充填されている。安行3b式であろう。127は斜行の密集沈線のみられるもので、後期安行式とみられる。128は安行3式の内溝する器形の深鉢形土器口縁破片で、口縁端部にキザミ目がみられる。129は斜行連続弧状線の施文された薄手の土器である。

土製品

縄文時代の土製品は、土器片錐、土製円盤併せて総数56点を数える。このうち住居跡・土壙などの遺構に伴うものは少なく、ほとんどがグリッドの包含層から検出されている。

土器片錐（第44図1～32、第45図33～49、第4表、図版31）

住居跡・土壙およびグリッドから56点の土器片錐が出土している。このうち口縁部土器片を利用したものは2点（2・3）だけで、他はすべて胴部土器片が利用されている。土器片の周囲は丁寧に研磨されるもの、打ち欠いただけのもの、あるいは部分的に研磨されるものや簡単に研磨されるものといった状態が観察できるが、数量的な偏在は認められない。糸掛けのための切り込みは、1を除いてすべて土器片の両端の2ヶ所に施され、その位置は、土器片の長軸上にあるものが大半を占める。ここでは土器片にみられる粘土紐輪積痕の方向を観察し、A：粘土紐の方向に対して平行に切り込みを持つもの（1～29）、B：粘土紐の方向に対して垂直に切り込みを持つもの（30～49）とに分類したが、数量的に大きな差異は認められなかった。土器片錐の切り込みの位置は、粘土紐方向を意識せずに、とにかく土器片の長軸上の施すということが通常的であったと思われる。一方、明らかに土器片の短軸上に切り込みを持つ土器片錐（34・37）も出土している。他遺跡においても検出頻度は低く、構造的に破損しやすいなどの不都合があったのかもしれない。土器片錐が漁網錐であるとするならば、一つの漁網に複数的に用いられた土錐のうちで、長軸上の切り込みを持つものとは異なる位置に取り付けて使用されたとも考えられる。なお、本遺跡出土の土器片錐の重量は、最大で43.3g（37）、最小で7.8g（30）を量り、平均重量は16.3gである。



第44図 繩文時代土製品（1）



第45図 縄文時代土製品（2）

土製円盤（第45図50～56、第4表、図版31）

土製円盤は7点出土している。形状的にはすべて方形を基本としており、円盤というよりは単に土盤と呼ぶにふさわしい。55のみ打欠調整品で、51・52・53の周囲は良く研磨される。また、研磨による整形が施される52・53・54・56は、いずれも一部が欠損する。重量は最大で22.2 g (54)、最小で10.9 g (50)を量り、平均重量は15.9 gである。

第4表 繩文時代土製品計測表

| 出土位置 | 辨別番号 | 計測値(cm) | | 重量(g) | 出土位置 | 辨別番号 | 計測値(cm) | | 重量(g) |
|---------|------|---------|---------|-------|--------|------|---------|---------|-------|
| | | 長さ | 幅×厚さ | | | | 長さ | 幅×厚さ | |
| C8-21 | 1 | 3.3 | 3.7×0.9 | 14.8 | 表 拠 | 29 | 2.6 | 3.6×1.1 | 11.4 |
| 021号住居跡 | 2 | 3.3 | 3.2×0.9 | 14.4 | 114号土壙 | 30 | 2.4 | 3.0×0.9 | 7.8 |
| C8-32 | 3 | 2.8 | 3.3×1.1 | 11.8 | 125号土壙 | 31 | 3.9 | 4.3×0.9 | 19.2 |
| 014号土壙 | 4 | 3.4 | 3.7×1.3 | 18.7 | B5-01 | 32 | 3.2 | 4.0×0.9 | 13.5 |
| 125号土壙 | 5 | 4.3 | 4.6×1.0 | 24.8 | C5-20 | 33 | 3.4 | 3.5×0.9 | 14.3 |
| 130号土壙 | 6 | 3.0 | 3.9×1.0 | 15.7 | C5-20 | 34 | 2.8 | 4.0×1.1 | 15.7 |
| B5-14 | 7 | 3.1 | 4.2×1.1 | 15.0 | C6 | 35 | 3.0 | 4.7×1.1 | 16.0 |
| B5-14 | 8 | 3.1 | 4.4×1.1 | 17.7 | C6 | 36 | 4.3 | 4.3×1.1 | 11.4 |
| C5-20 | 9 | 3.2 | 3.7×1.1 | 16.7 | C6 | 37 | 4.4 | 5.3×1.9 | 43.3 |
| C5-20 | 10 | 3.5 | 3.0×1.2 | 15.0 | C6 | 38 | 3.2 | 3.9×0.9 | 13.9 |
| C5-20 | 11 | 2.7 | 3.7×1.1 | 12.6 | C6-30 | 39 | 2.8 | 3.1×1.1 | 10.5 |
| C5-20 | 12 | 2.9 | 4.1×1.1 | 13.8 | C7-02 | 40 | 3.0 | 3.5×1.1 | 14.1 |
| C6-30 | 13 | 3.3 | 3.4×1.1 | 13.8 | C8-02 | 41 | 3.9 | 3.4×1.0 | 11.8 |
| C7 | 14 | 3.1 | 4.4×1.0 | 16.9 | C9-02 | 42 | 4.3 | 4.1×1.1 | 26.0 |
| C7-20 | 15 | 3.2 | 3.7×0.9 | 13.1 | C9-04 | 43 | 3.0 | 3.8×1.0 | 14.1 |
| C8 | 16 | 3.0 | 3.7×1.1 | 14.3 | C9-04 | 44 | 3.7 | 3.6×0.9 | 13.8 |
| C8-32 | 17 | 3.2 | 3.4×1.1 | 13.4 | C9-04 | 45 | 4.9 | 3.7×1.1 | 26.0 |
| C8-32 | 18 | 3.2 | 3.6×1.1 | 14.1 | C9-24 | 46 | 3.6 | 3.4×0.8 | 12.7 |
| C9-02 | 19 | 2.8 | 3.5×1.6 | 16.3 | C9-24 | 47 | 3.2 | 3.9×1.0 | 15.2 |
| C9-04 | 20 | 3.0 | 5.4×1.1 | 22.7 | D9 | 48 | 3.6 | 3.8×1.0 | 14.6 |
| C9-04 | 21 | 3.4 | 3.4×0.8 | 20.7 | 表 拠 | 49 | 4.1 | 2.7×1.1 | 14.2 |
| C9-04 | 22 | 3.5 | 4.4×1.4 | 25.2 | 130号土壙 | 50 | 3.2 | 3.1×0.8 | 10.9 |
| C9-04 | 23 | 3.4 | 3.4×0.8 | 13.0 | 121号土壙 | 51 | 2.5 | 3.6×1.2 | 11.3 |
| C9-24 | 24 | 2.2 | 3.4×1.1 | 9.7 | B6-04 | 52 | 3.7 | 3.2×1.1 | 17.5 |
| C9-24 | 25 | 2.8 | 3.5×1.1 | 14.0 | B6-13 | 53 | 3.3 | 3.2×0.9 | 12.2 |
| C9-34 | 26 | 2.6 | 3.3×1.2 | 11.5 | C8-21 | 54 | 4.4 | 4.1×1.3 | 22.2 |
| C9-34 | 27 | 2.6 | 3.2×0.8 | 9.3 | C9-04 | 55 | 4.3 | 4.0×1.0 | 19.2 |
| C10 | 28 | 3.8 | 4.7×1.0 | 18.5 | D9 | 56 | 3.7 | 4.9×1.1 | 20.7 |

石器

剥離痕のある石器は55点出土した。その内訳は、石鎚7点、尖頭器1点、二次加工のある剝片4点、微細剝離痕のある剝片4点、打製石斧10点、磨製石斧7点、磨石・敲石・凹石22点である。

石鎚（第46図1～7、第5表、図版32）

1～3は奥まで入る桶状の調整が施されている。1は正三角形を呈し、抉りが大きい。最終的な調整（以下仕上げ痕とする）は両面の左側縁に集中する。2は104号土壌から出土したもので、五角形を呈し、抉りが大きい。仕上げ痕は図上左側（以下A面とする）の両側縁に集中する。3は126号土壌から出土したもので、二等辺三角形を呈し、抉りが小さい。4～7は周縁に微細な調整が施されている。4は周縁は鋸歯状を呈し、基部は欠損している。5は二等辺三角形を呈し、抉りが小さい。仕上げ痕は両面の右側縁に集中し、A面左側縁は欠損。6はA面左側縁は鋸歯状を呈する。先端部及び基部は欠損しており、表面は火熱を受け白色化している。7は横長剝片を素材とし、末端部・打面部に微細な調整が施される。未成品の可能性もある。

尖頭器（第46図8、第5表、図版32）

8は奥まで入る桶状の剥離によって両面を調整した尖頭器である。仕上げ痕は交互剥離による。そのため側面形状は波状を呈する。断面形状はD字形をなす。先端部及び基部欠損している。

二次加工のある剝片（第46図9～12、第5表、図版32）

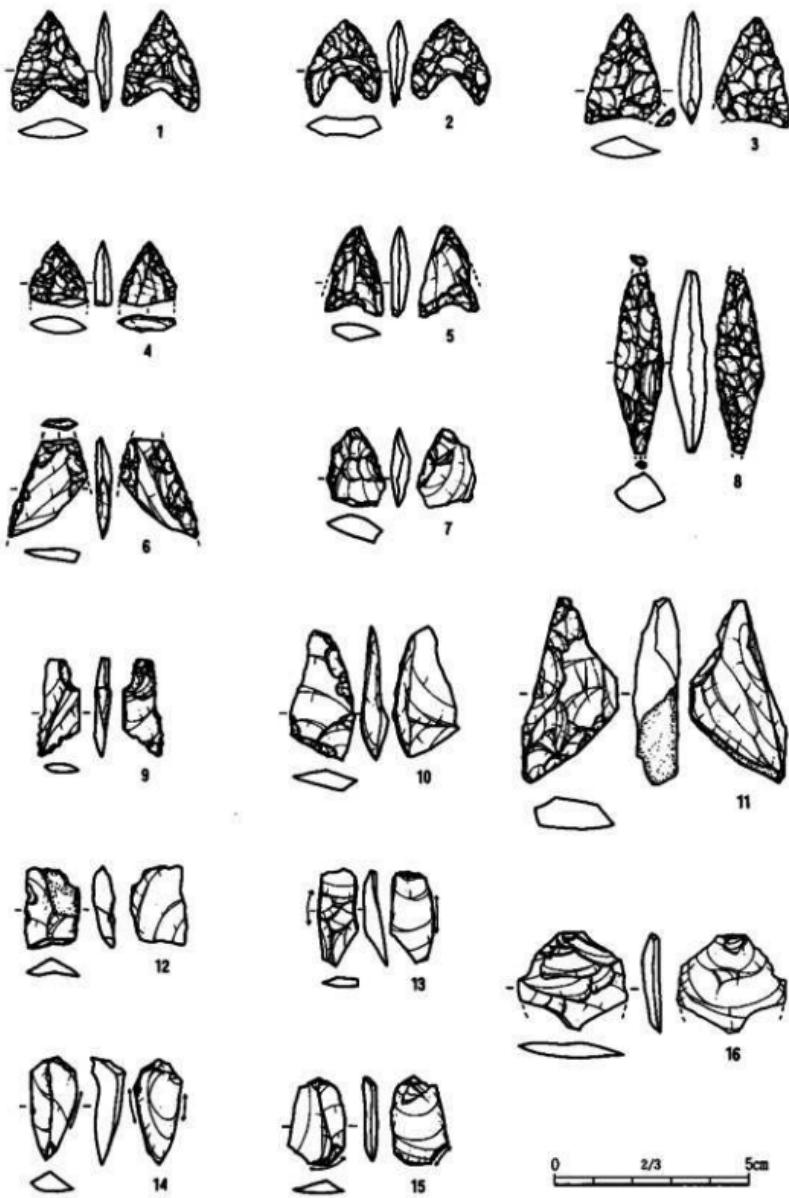
石鎚の未成品の可能性がある。そのため、これらは石鎚の石器製作工程を復元できる資料となるかもしれない。9～12はいずれも折断後調整が行われている。石鎚の製作工程においても折断を多用し大まかに成形した後に、調整加工を行い石鎚を作出したものがあると推定される。小形で薄い剝片に微細剝離が多く、使用痕の可能性が高い。なお、11は119号土壌から出土したものである。

微細剝離痕のある剝片（第46図13～16、第5表、図版32）

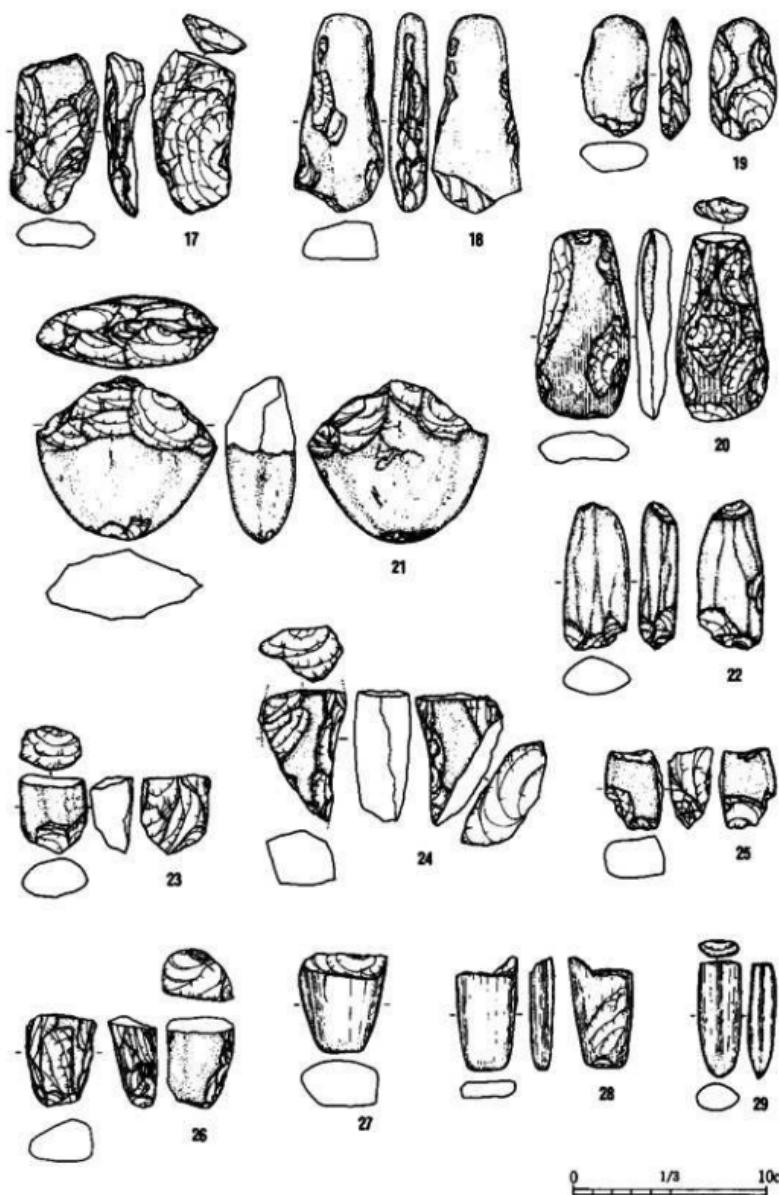
小形で薄い剝片微細剝離が多い。使用痕の可能性が高い。

打製石斧（第47図17～26、第5表、図版33）

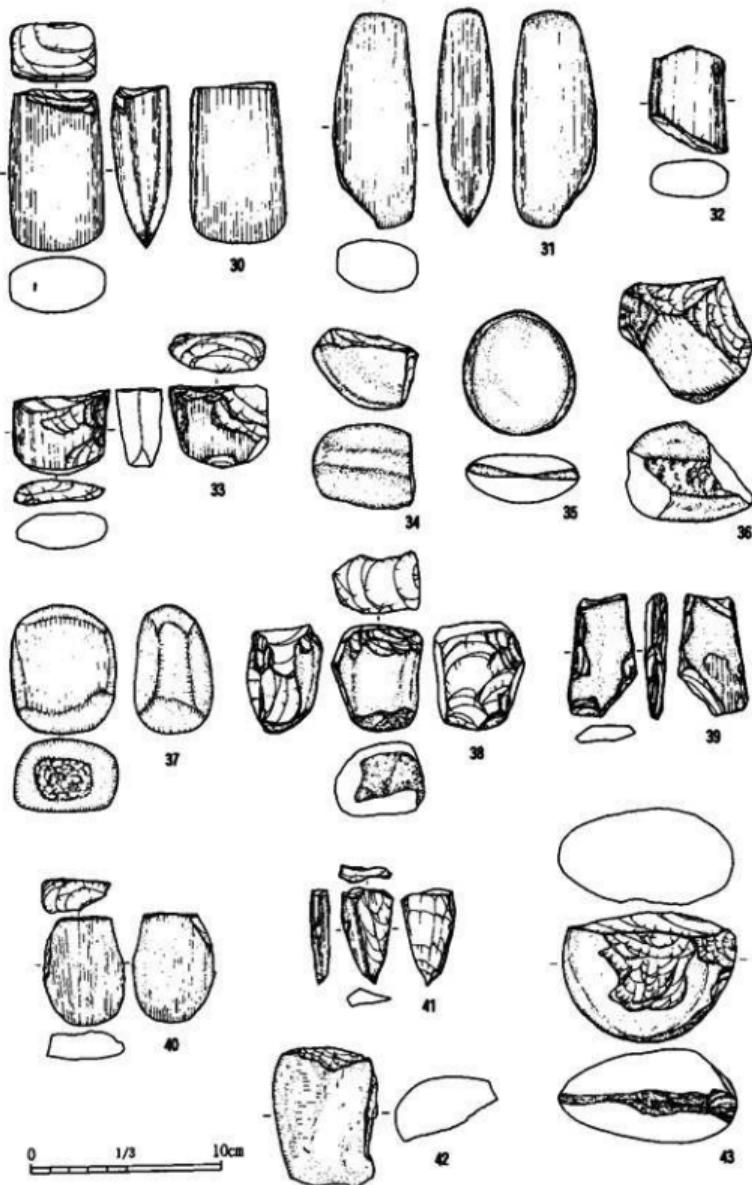
石材は砂岩・硬砂岩・凝灰岩・安山岩で構成されている。形態は短冊形（17～20・23～26）のものが主体を占める。その他に、礫・剝片を素材とし、長軸の末端部を折断によって成形後、階段状の剥離によって調整している。17は横長剝片を素材とする。図上上端部は2度の折断によって成形後、両側縁に階段状に交互剥離を行なっている。18は礫を素材とする。図上下端部は2度の折断によって整形後、A面（図上左面）に階段状の剥離が集中する。19は礫を素材とする。B面（図上右側）に奥まで入る比較的大きな剥離によって調整されている。20は素材は不明である。粗削→整形剝離→敲打→研磨されているが、研磨はそれほど行なわれていない。21・22は礫を素材とする両刃石斧である。21は比較的大きな剥離が交互に施されている。刃部の側



第46図 繩文時代石器（1）



第47図 繩文時代石器（2）



第48図 繩文時代石器（3）

面形状はS字形を呈す。22は上下両端に粗い加工が施されている。これは、敲打による可能性もある。23～26は短冊形石斧の破損品と思われる。いずれも縞を素材とし、幅広の比較的大きな剝離を階段状に施している。剝離面が少し磨耗しているのに比べ、折れ面が新鮮なことから破損品と考えた。

磨製石斧（第47図27～29、第48図30～33、第5表、図版33・34）

形態は定角式（27・28・30）と乳棒状（29・31）のものと破損品（32・33）がある。27～30・32・33は研磨後折れている。それは、折れ面部分までは研磨されているが、折れ面部分・縁辺部分に研磨がないことによる。30は110号土壙から出土した。

定角式磨製石斧（第47図27・28、第48図30、第5表、図版33）

27は図上右側縁・下端部が主に研磨されている。28は板状の剥片を素材とし、両側縁・下端部が主に研磨されている。B面には整形剝離痕が残っている。30は全体を丁寧に研磨している。刃部は角度が46度で微細な剝離痕がある。断面は隅丸長方形を呈す。典型的な定角式磨製石斧である。

乳棒状磨製石斧（第47図29、第48図31、第5表、図版33・34）

29は全体を研磨している。刃部は角度が48度で微細な剝離痕がみられる。断面は梢円形を呈す。31は全体を研磨しているが、A面左側縁下半部に整形剝離痕を残す。断面形状と上端面は隅丸長方形を呈す。刃部は角度が63度で微細な剝離痕がみられる。

不定型磨製石斧（第48図32・33、第5表、図版34）

整形剝離痕を残し、両端部分が欠損している。

磨石（第48図34～42、第5表、図版34）

34～38は円縞を素材とし、周縁部分に主に磨耗痕がある。34は102号土壙から出土した。このうち36～38は敲打痕をもつ。39～42は扁平縞・板状剥片を素材とし、平坦面に磨耗痕がある。

凹石（第48図43、第49図44～47、第5表、図版34・35）

凹面の部分に磨耗面をもつ。44は127号土壙、46は021号住居跡から出土した。片面に浅い凹面をもつもの（43・44）、両面に円錐状の深い凹面をもつもの（45～47）の二種類がある。46・47は複数の凹面で構成され、形態も類似している。また、石材においても46は軽石、47は玄武岩であり、表面が粗いことも共通している。また、凹面は磨石と敲石の機能を伴ったと思われるものが多い。

敲石（第49図48～55、第5表、図版35）

梢円形の縞を素材とする。上下両端に敲打痕をもち完形品のもの（48～50）と敲打によつて破損したと思われるもの（51～55）がある。



第49図 純文時代石器（4）

第5表 繩文時代石器属性表

| 出土位置 | 検出番号 | 器種 | 石材 | 計測値(mm) | | | 重量(g) |
|--------|------|------------|------|---------|------|-------|-------|
| | | | | 長さ | 幅 | 厚さ | |
| C8-21 | 1 | 石刀 | 黒曜石 | 長さ 25 | 幅 19 | 厚さ 5 | 1.9 |
| 104号土壤 | 2 | 石刀 | 黒曜石 | 長さ 22 | 幅 20 | 厚さ 4 | 1.8 |
| 126号土壤 | 3 | 石刀 | メノウ | 長さ 29 | 幅 19 | 厚さ 6 | 2.6 |
| C8-32 | 4 | 石刀 | 黒曜石 | 長さ 16 | 幅 15 | 厚さ 4 | 1.4 |
| D9-30 | 5 | 石刀 | 安山岩 | 長さ 22 | 幅 15 | 厚さ 5 | 1.5 |
| C7-02 | 6 | 石刀 | 黒曜石 | 長さ 29 | 幅 14 | 厚さ 4 | 2.0 |
| C8-32 | 7 | 石刀 | 黒曜石 | 長さ 19 | 幅 15 | 厚さ 5 | 1.1 |
| D10-01 | 8 | 尖頭器 | 黒曜石 | 長さ 46 | 幅 13 | 厚さ 8 | 4.5 |
| C8-02 | 9 | 二次加工のある剝片 | 黒曜石 | 長さ 26 | 幅 11 | 厚さ 4 | 1.1 |
| C6-30 | 10 | 二次加工のある剝片 | 安山岩 | 長さ 33 | 幅 17 | 厚さ 7 | 2.7 |
| 119号土壤 | 11 | 二次加工のある剝片 | チャート | 長さ 47 | 幅 22 | 厚さ 12 | 22.7 |
| C8-32 | 12 | 二次加工のある剝片 | チャート | 長さ 21 | 幅 15 | 厚さ 6 | 1.6 |
| C8-32 | 13 | 微細剝離痕のある剝片 | 黒曜石 | 長さ 24 | 幅 13 | 厚さ 4 | 1.3 |
| C8-21 | 14 | 微細剝離痕のある剝片 | 黒曜石 | 長さ 28 | 幅 12 | 厚さ 8 | 2.2 |
| D9-30 | 15 | 微細剝離痕のある剝片 | 黒曜石 | 長さ 23 | 幅 14 | 厚さ 3 | 1.8 |
| D9-20 | 16 | 微細剝離痕のある剝片 | 黒曜石 | 長さ 28 | 幅 25 | 厚さ 4 | 2.5 |
| D9-30 | 17 | 打製石斧 | 黒曜石 | 長さ 85 | 幅 44 | 厚さ 20 | 81.8 |
| D11 | 18 | 打製石斧 | 董灰岩 | 長さ 102 | 幅 46 | 厚さ 19 | 123.7 |
| C9-04 | 19 | 打製石斧 | 砂岩 | 長さ 63 | 幅 34 | 厚さ 16 | 41.9 |
| 表採 | 20 | 打製石斧 | 砂岩 | 長さ 94 | 幅 84 | 厚さ 37 | 326.0 |
| 表採 | 21 | 打製石斧 | 砂岩 | 長さ 96 | 幅 48 | 厚さ 19 | 111.2 |
| B4-41 | 22 | 打製石斧 | 董灰岩 | 長さ 75 | 幅 34 | 厚さ 19 | 74.0 |
| C11 | 23 | 打製石斧(破損品) | 砂岩 | 長さ 40 | 幅 35 | 厚さ 23 | 38.6 |
| C6-30 | 24 | 打製石斧(破損品) | 砂岩 | 長さ 62 | 幅 42 | 厚さ 30 | 95.2 |
| B4-41 | 25 | 打製石斧(破損品) | 砂岩 | 長さ 41 | 幅 29 | 厚さ 20 | 33.8 |
| D9-30 | 26 | 打製石斧 | 安山岩 | 長さ 49 | 幅 35 | 厚さ 22 | 46.2 |
| C9-24 | 27 | 磨製石斧 | 安山岩 | 長さ 50 | 幅 40 | 厚さ 24 | 77.5 |
| C9-02 | 28 | 磨製石斧 | 董灰岩 | 長さ 58 | 幅 32 | 厚さ 12 | 34.6 |
| C6 | 29 | 磨製石斧 | 安山岩 | 長さ 58 | 幅 23 | 厚さ 13 | 25.1 |

| 出土位置 | 標図番号 | 器種 | 石材 | 計測値(mm) | | | 重量(g) |
|---------|------|-----------|------|---------|-------|--------|-------|
| 110号土壤 | 30 | 磨製石斧 | 砂岩 | 長さ 85 | 幅 50 | 厚さ 30 | 212.0 |
| 表探 | 31 | 磨製石斧 | 凝灰岩 | 長さ 114 | 幅 44 | 厚さ 30 | 257.9 |
| 表探 | 32 | 磨製石斧(破損品) | 硬砂岩 | 長さ 56 | 幅 41 | 厚さ 21 | 78.5 |
| B5-24 | 33 | 磨製石斧(破損品) | 安山岩 | 長さ 51 | 幅 40 | 厚さ 21 | 70.5 |
| 102号土壤 | 34 | 磨石 | 安山岩 | 長さ 52 | 幅 40 | 厚さ 45 | 118.8 |
| C9-04 | 35 | 磨石 | 砂岩 | 長さ 64 | 幅 61 | 厚さ 23 | 123.5 |
| C9-04 | 36 | 磨石・敲石 | 安山岩 | 長さ 74 | 幅 58 | 厚さ 56 | 253.9 |
| 表探 | 37 | 磨石・敲石 | 硬砂岩 | 長さ 65 | 幅 56 | 厚さ 40 | 226.3 |
| C9-04 | 38 | 磨石・敲石 | 安山岩 | 長さ 54 | 幅 46 | 厚さ 36 | 150.9 |
| C11 | 39 | 磨石 | 安山岩 | 長さ 63 | 幅 35 | 厚さ 101 | 31.8 |
| D9-01 | 40 | 磨石・敲石 | 砂岩 | 長さ 57 | 幅 42 | 厚さ 17 | 57.5 |
| B4-41 | 41 | 磨石(破損品) | 凝灰岩 | 長さ 47 | 幅 27 | 厚さ 8 | 13.2 |
| C9-04 | 42 | 磨石 | 硬砂岩 | 長さ 72 | 幅 58 | 厚さ 28 | 154.5 |
| C8-01 | 43 | 凹石・敲石 | 砂岩 | 長さ 90 | 幅 69 | 厚さ 46 | 359.0 |
| 127号土壤 | 44 | 凹石・敲石 | 硬砂岩 | 長さ 82 | 幅 59 | 厚さ 51 | 290.9 |
| E14-02 | 45 | 凹石 | 砂岩 | 長さ 122 | 幅 102 | 厚さ 62 | 842.0 |
| 021号住居跡 | 46 | 凹石・磨石 | 燧石 | 長さ 112 | 幅 74 | 厚さ 34 | 53.5 |
| D9-40 | 47 | 凹石・磨石・敲石 | 玄武岩 | 長さ 120 | 幅 85 | 厚さ 40 | 625.0 |
| C5-20 | 48 | 敲石 | 硬砂岩 | 長さ 95 | 幅 32 | 厚さ 31 | 146.9 |
| C9-24 | 49 | 敲石・磨石 | 石英岩 | 長さ 87 | 幅 41 | 厚さ 38 | 170.7 |
| D9-40 | 50 | 敲石 | チャート | 長さ 67 | 幅 53 | 厚さ 36 | 154.0 |
| D11-02 | 51 | 敲石 | 硬砂岩 | 長さ 72 | 幅 32 | 厚さ 27 | 79.4 |
| C8-34 | 52 | 敲石 | 泥岩 | 長さ 55 | 幅 51 | 厚さ 43 | 159.9 |
| C8-02 | 53 | 敲石 | 泥岩 | 長さ 70 | 幅 50 | 厚さ 45 | 181.5 |
| 105号土壤 | 54 | 敲石 | 硬砂岩 | 長さ 82 | 幅 65 | 厚さ 34 | 222.0 |
| C7-02 | 55 | 敲石 | 硬砂岩 | 長さ 37 | 幅 21 | 厚さ 30 | 42.0 |

第3節 古墳時代

1. 造構

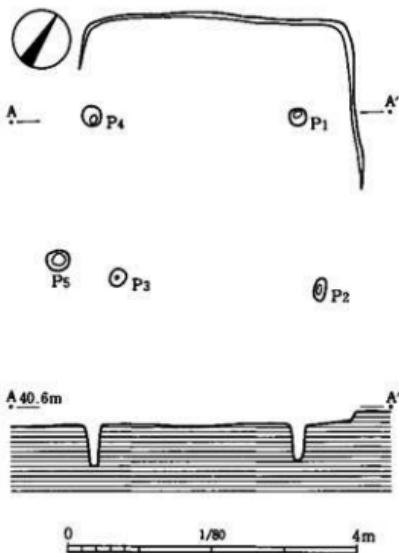
002号住居跡（第50図、図版13）

調査区南部、E13-00・10・11・20に位置する。南に面する緩斜面に立地する。攪乱と削平が著しく、遺構確認時で斜面下方の南側1/2壁面覆土が失われ、ハードロームが露呈していた。026号掘立柱建物跡と重複するが、026号掘立柱建物跡は本住居跡の覆土中に構築中されていることから、本住居跡が先行すると考えられる。規模は北西壁で3.6mを測り、不整な方形を呈する。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、北東壁はN-43°-W方向に走っている。覆土はローム粒を少量含む暗褐色土が主体であるが、北西側のみしか残存していないかった。床面はハードロームで、南側の使用面はほとんど削平されており、遺存状態は不良である。壁高は最大12cmを測る。周溝は検出されなかった。ピットは5か所検出された。主柱穴はP₁～P₄で、径は15～30cm、深さはP₁が45cm、P₂が15cm、P₃が20cm、P₄が60cmとかなり不規則な掘り方である。柱間寸法はP₁-P₂が2.4m、P₂-P₃が2.8m、P₃-P₄が2.2m、P₃-P₁が2.8mを測る。P₅は径約30cm、深さ28cmを測る。位置的に本跡に伴うものか疑問である。

遺物は覆土中から土師器片が少量出土したが、いずれも細片であり図示できる資料はなかった。

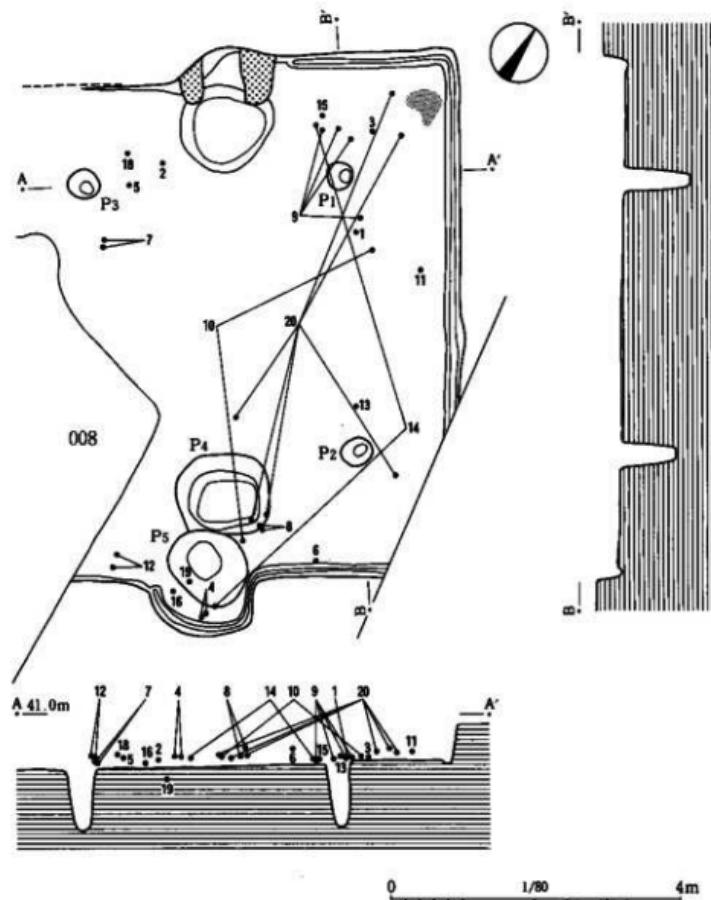
009号住居跡（第51図、図版14）

調査区中央部、C9-14・24、D9-10・11・20・21・30・31に位置し、西に面する緩斜面に立地する。南側は奈良時代の008号住居跡に切られており、西側コーナーは欠失、東側コーナーは調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は北東壁で約7.2mを測ると推測され、南東壁中央には隅丸方形の張り出しを持ち、中軸線は8mを測る。カマドが北西壁の中心に位置するとすれば、やや縦長の方形を呈する住居跡と考えられる。主軸方向はN-32°-W。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土・黒褐色土が主体で、一部耕作による攪乱を受けている他は、締まりがあり自然堆積と考えられる。床面はハードロームで、中央付近に硬質部分がある他は、全体



第50図 002号住居跡実測図

に軟弱で、南西側に緩やかに傾斜していた。また、北側コーナー付近床面上には白色粘土が堆積していた。壁高は南東壁で約30cm、北東壁で約50cmを測り、約80度で立ち上がる。張り出し部は南東壁から80cm掘り込み、幅1.4mを測る。周溝は南東壁張り出し部西側で途切れ、北西壁カマド西側は不明である。最大幅25m、深さ3cmを測る。ピットは5か所検出された。主柱穴はP₁～P₃で径約40cm、深さ80～90cmのはば均一な掘り方である。柱間寸法はP₁～P₂が3.7cm、P₃～P₄が3.6cmを測る。配置はほぼ正方形をなすと推測され、主軸に比して西側に振れている。P₄・P₅は貯蔵穴で、P₅がP₄を切って構築されている。P₄は平面形は隅丸方形、規模は径1.3～1.1m、深さ75cmを測り、断面形は擂鉢状を呈する。覆土は下層が締まりのない暗褐色土、上層はロー



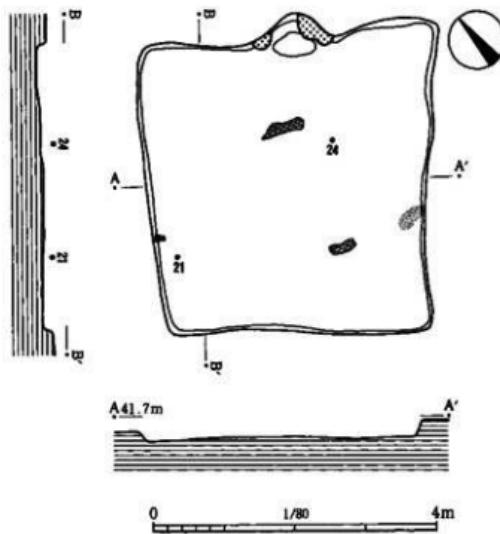
第51図 009号住居跡実測図

ム塊によって埋め戻されていた。 P_5 は楕円形で規模は径1~1.2m、深さ75cmを測り、断面形は擂鉢状を呈する。覆土は住居跡覆土と同質の暗褐色土で自然堆積と考えられる。カマドは北西壁に位置する。耕作による擾乱を受けており遺存状態は不良であった。主軸方位は住居跡と同じ $N-32^{\circ}-W$ 。壁外に約10cm掘り込み、前長約1.6m、幅約1.4mを測る。焚口は楕円形の浅い掘り込みである。左袖部は壁から60cm、右袖部は壁から80cmの長さで、床面からは約30cmの高さで遺存していた。袖部は基部をローム粒と黒色土の混成土、上半を山砂を用いて構築していた。燃焼部底面直上には焼土粒を含む暗褐色土が堆積していたが、焼土及び赤色硬化面は認められなかった。煙道部は約15度で緩やかに立ち上がる。

遺物は、覆土下層～床面直上にかけて多量の土器器片が出土した。図示した資料は床面からやや浮いた状態で出土したものが多い。北東側から散らばった状態で出土した壺(20)などは本住居跡廃絶直後に投棄された可能性が高い。北側覆土下層中の壺(1)、カマド左手前、覆土下層中の壺(2)は遺存度も大きく、直接本住居跡に伴うと判断できるものである。

015号住居跡（第52図、図版14）

調査区北部、B4-32・33・42・43に位置し、北に面する緩斜面に立地する。耕作による擾乱を受け、遺存状態は不良であった。規模は北東壁で4.2m、南東壁で4.4m、南西壁で3.7m、北西壁で4mを測り、不整な方形を呈する。主軸方位は $N-40^{\circ}-E$ 。覆土は暗褐色土が主体であった。床面はハードロームで全体的に軟弱であり、やや凹凸がある。また、床面上からは炭化材



第52図 015号住居跡実測図

及び白色粘土が検出された。壁高は南東壁で約25cm、北西壁で約15cmを測り、共に約70度で立ち上がる。周溝及びピットは検出されなかった。

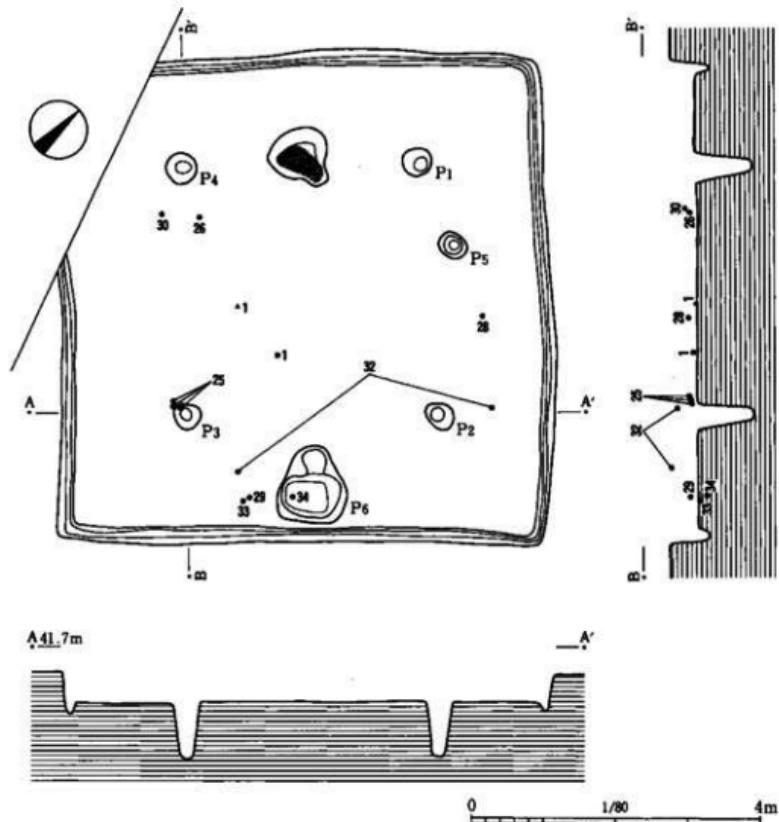
カマドは北東壁のほぼ中央に位置し、両袖の一部と椭円形の掘り込みが検出された。主軸方位は住居跡と同じN-40°-E。壁外に約40cm掘り込み、全長約75cm、幅約1.1mを測る。左袖部は壁から25cm、右袖部は45cmの長さで、床面からは約10cmの高さで遺存していた。袖部は基部に暗褐色土を貼り、その上に山砂をのせて構築していた。掘り込みは床面から約15cmほど掘り込まれており、燃焼部から煙道部にかけての中層に厚さ12cmほどの焼土が、上層には焼土粒を多く含む暗褐色土が堆積していた。煙道部は約75度で立ち上がる。

遺物は、覆土中から少量の土器片が出土した。西側壁際の土器片（21）、中央西寄りの甕（24）はいずれも覆土上層からの出土であり、流れ込みの可能性が高い。

016号住居跡（第53図、図版14）

調査区北部、B4-31・40・41・42、B5-00・01・02・11に位置する。北西に面する緩斜面に立地する。耕作による擾乱を受け、遺存状態は不良であった。西側コーナー部分は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は北東壁・南東壁で6.7mを測り、正方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-45°-W。覆土は上層は擾乱で失われており、中層以下はローム粒・塊をわずかに含む褐色土を主体とし、床面直上にはローム粒・塊を少量含む暗褐色土が約3cmの厚さで堆積していた。自然堆積と考えられる。床面はハードロームで全体に軟弱であった。壁高は南西壁で40cm、北西壁で36cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は未調査部分を除いて全周し、幅最大24cm、深さ16cmを測る。ピットは全部で6か所検出された。 P_1-P_4 が主柱穴と考えられ、径30-40cm、深さ76cmのほぼ均一な掘り方である。断面形は漏斗状を呈す。柱間寸法は P_1-P_2 が3.4m、 P_2-P_3 が3.5m、 P_3-P_4 が3.4m、 P_4-P_1 が3.3mを測る。配置は P_1 がやや西側に振れているがほぼ正方形をなす。 P_3 は径約40cm、深さ28cmを測り、壁面から1.1mと離れているが、出入口部施設に伴う柱穴の可能性がある。 P_6 は南東壁中央下に位置する貯蔵穴である。開口部では琵琶形状を呈し、長軸1m、短軸70cm、深さ60cmを測る。北西側には長さ40cm、深さ35cmの張り出しが取りついている。覆土は下層に暗褐色土、中層にローム塊を多量に含む明褐色土、上層に暗褐色土が堆積しており、埋め戻しを行ったと考えられる。炉は P_4-P_1 ラインのほぼ中央に位置する。主軸方位はN-100°-W。掘り込みは琵琶形状を呈し、規模は長軸90cm、短軸80cm、深さ8cmを測る。覆土は底面直上に厚さ10cmほど焼土が堆積し、底面は赤色に硬化していた。

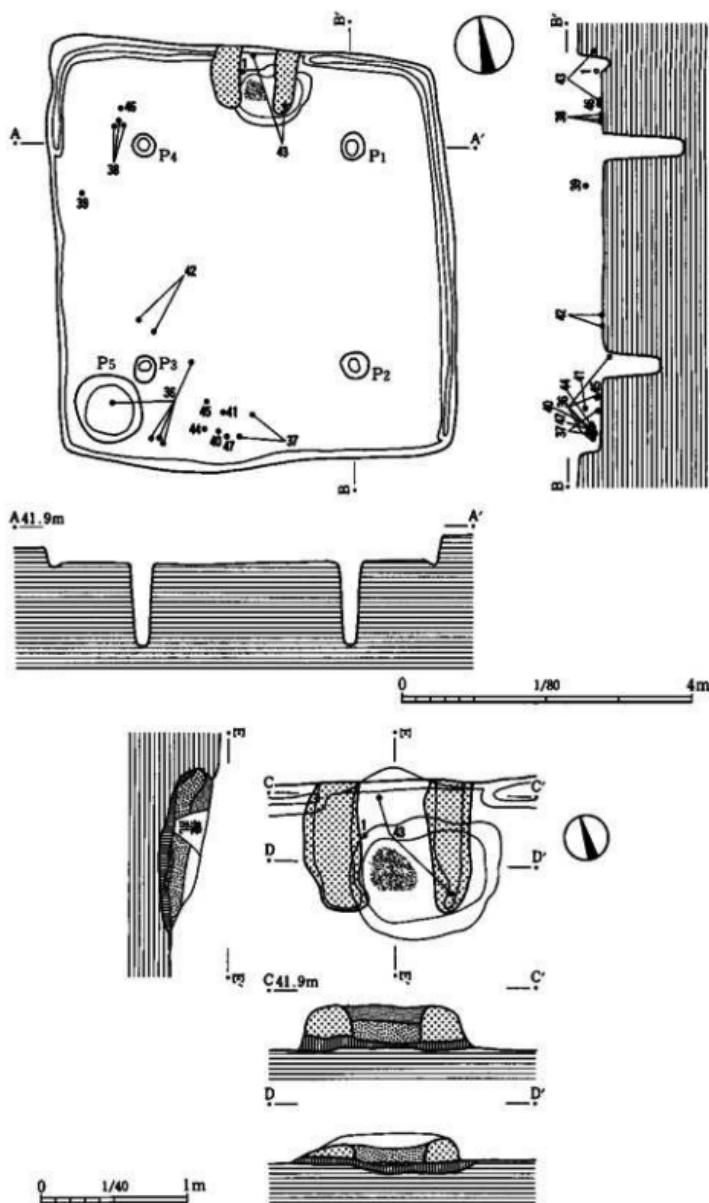
遺物は、覆土下層-床面にかけてまばらに出土した。刀子（1）、南東壁際の土器片（33）は床面直上から出土した。西側覆土上層中から出土した土器片（32）は流れ込みによるものと推測される。他の出土位置を図示した遺物については床面からやや浮いた状態であるが、一括遺物と考えられる。



第53図 016号住居跡実測図

017号住居跡（第54図、図版15）

調査区北西部、BS-13・14・23・24に位置し、ほぼ平坦面に立地する。縄文時代の125号土壙と重複する。規模は北壁で5.3m、東壁で5.2m、南壁で5.4m、西壁で5.6mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-11°-Eである。覆土は擾乱によってほとんど遺存していないが、山砂・焼土粒・ローム粒を少量ずつ含む暗褐色土が厚さ約10cmほど床面直上に堆積していた他は、ローム粒を多量に含む暗褐色土が主体であり、埋め戻しが行われたと考えられる。床面はハードロームで、特にP₁～P₄を囲む部分一帯が堅く締まっていた。壁高は北壁で32cm、西壁で24cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除く西壁1/3～東壁隅まで施されており、斜面側には施されていなかった。最大幅40cm、深さ10cmを測る。ピットは5か所検出された。主柱穴はP₁～P₃



第54図 017号住居跡・カマド実測図

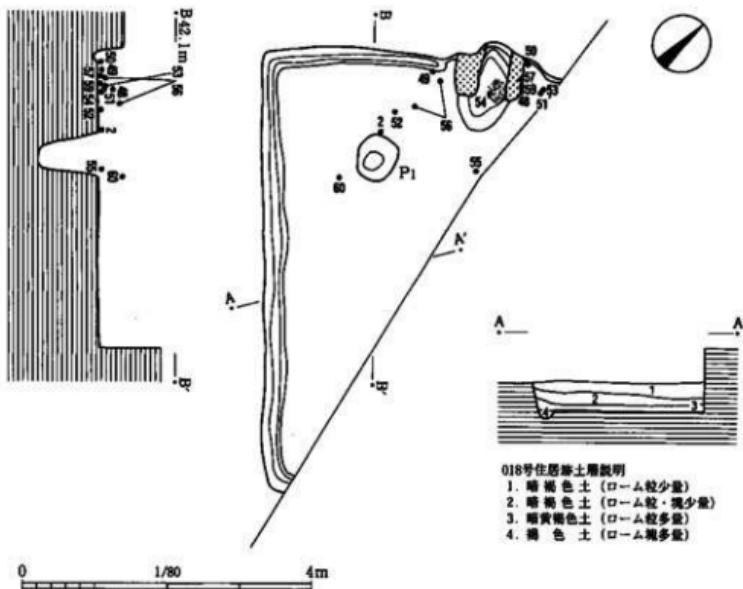
で径30~40cm、深さはP₂が80cm、他は1.1mを測り、ほぼ均一な掘り方である。柱間寸法はP₁~P₂が3m、P₄~P₂が2.9m、P₄~P₃が3m、P₃~P₁が2.9mを測る。P₅は南西コーナー部に位置する貯蔵穴で不整円形を呈し、径約90cm、深さ約40cmを測る。覆土は自然堆積の暗茶褐色土、黒褐色土を主体とする。カマドは北壁中心よりやや東寄りに位置する。遺存状況は耕作による擾乱を受けているものの、比較的良好であった。主軸方位はN-25°-Eで、北壁にほぼ直交して構築されており、住居跡のそれに比して東に振れている。壁外には約8cmオーバーハングして掘り込まれており、全長1.1m、幅約1.4mを測る。焚口から燃焼部にかけて径約1m、深さ10cmの隅丸方形に掘り込まれているが、直接掘り方のハードロームを底面にしているのではなく、壁下から焚口前部にかけて山砂・ローム塊を混ぜた暗褐色土を用いて、一旦埋め土及び盛り土をすることによってほぼ平坦な面を作り出し、底面としている。袖部は山砂を用いて埋め土上に構築されており、左右とも壁からの長さ約90cm、高さは約25cm遺存していた。燃焼部の底面は赤色に硬化しており、直上には焼土粒を多量に含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は、住居跡西半分から土師器片がまとまって出土した。南西側床面直上出土の壺(42)、北西コーナー側床面直上の壺(38)、甕(46)、カマド内から出土した壺(43)は本住居跡に伴うものと考えられる。南西側覆土中の壺(36・37・41・44)、高壺(45)、甕(47)はいずれも横位で出土しており、廃絶後の流れ込みによるものと思われる。

018号住居跡（第55図、図版15）

調査区北東部、C5-10・20・21に位置する。東側約1/2は調査区域外にかかるので調査できなかった。規模は南西壁で約6mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-48°-W。覆土は暗褐色土・暗黄褐色土が主体で自然堆積である。床面はハードロームで、全体的に軟弱であった。壁高は南西壁、北西壁とも36cmを測り、約85度で立ち上がる。周溝はカマド内を除く北西壁西半分～南東壁検出部分まで施されている。周溝最大幅34cm、深さ12cmを測る。ピットは1か所検出された。P₁は径約60cm、深さ86cmを測り、断面漏斗状のしっかりした掘り方で、主柱穴と考えられるものである。柱間寸法及び配置は不明である。カマドは北西壁は中央に位置すると推測される。耕作による擾乱を部分的に受けているが、構築材は比較的よく遺存していた。主軸方位はN-35°-Wで、住居跡のそれに比して東に振れている。壁外に約20cm掘り込み、さらに煙道部分が約20cm突出する。全長約1.3m、幅約1mを測る。焚口～燃焼部奥は浅く掘り込まれ、規模は全長約1.2m、最大幅80cm、深さ5cmを測る。両袖部は壁から約60cm、床面からは約30cmの高さで遺存し、山砂を主材としている。燃焼部底面直上には奥側から炭化物を多量に含む黒色土が厚さ5cm、手前側には焼土粒に灰を含む層が厚さ10cmほど堆積していた。また、その直上には天井部が崩落したと思われる山砂が約12cmほど堆積していた。燃焼部底面はよく焼け硬化していた。煙道部は約60度で立ち上がる。

遺物は、住居跡北西側カマド周辺から多量の土器が出土した。特にカマド東脇では直立した

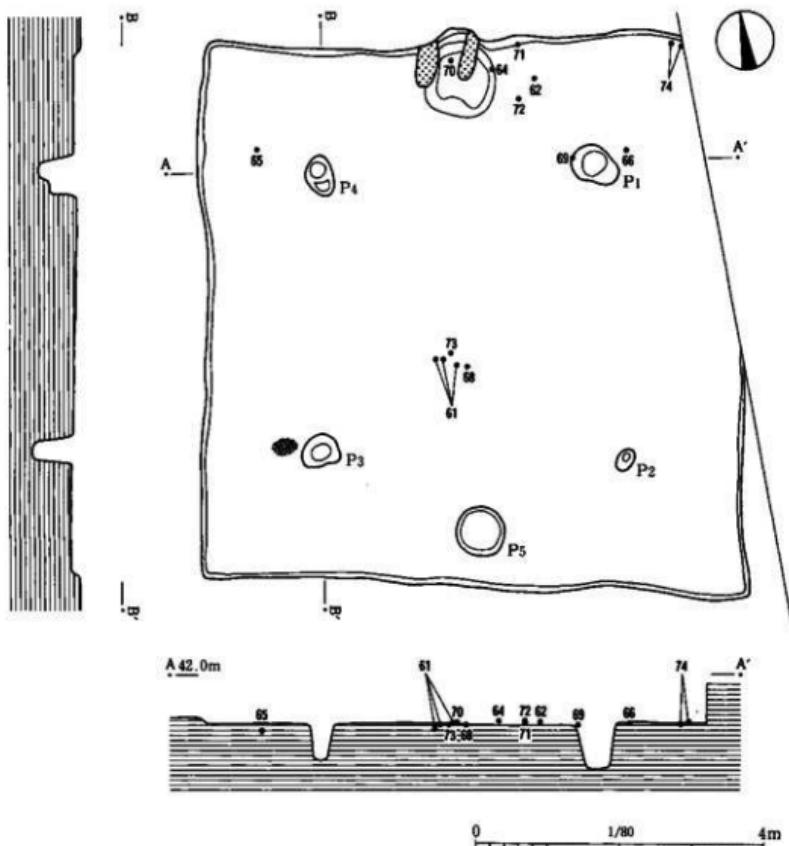


状態の土器壺（57・59）、その周囲には倒立した状態の壺（48）、高壺（51・53）、須恵器壺（50）が出土した。いずれも使用時、あるいはそれに近い位置を留めていると考えられる。カマド燃焼部底面直上からは、逆位に置かれた状態の口縁部を打ち欠かれた土器高壺（54）が出土した。支脚に転用されたものと思われる。カマド西側では覆土上層から出土した須恵器壺（60）を除いて床面直上ないし覆土下層からの出土で、一括遺物と考えられる。

019号住居跡（第56図、図版15）

調査区北部、B5-44、B6-04・14、C5-40・41、C6-00・01・10・11に位置し、平坦面に立地する。北東コーナー東壁北半は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。縄文時代の128号土壙と重複している。規模は西壁で7.4m、南壁で7.6mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-10°-E。覆土はローム粒を含む暗褐色土・褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。床面はハードロームで、全体に軟弱であった。壁面は痕跡的にしか遺存していなかったが、壁高は西壁で10cm、南壁で12cmを測り、約60度で立ち上がる。周溝は検出されなかった。ピットは5か所検出された。P₁～P₄は主柱穴であり、径20～70cm、深さ50～60cmを測る。P₄は2段に掘り込まれている。柱間寸法はP₁-P₂が4.1cm、P₂-P₃が4.3cm、P₃-P₄が3.9cm、P₄-P₁が3.9cmを測る。配置はほぼ正方形をなす。P₅は貯蔵穴で、平面形は不整円形を呈し、径約70cm、深さ約30cmを測

る。覆土はローム粒を少量含む暗褐色土・褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。カマドは北壁中央に位置する。耕作による擾乱を受けており遺存状態は不良であった。主軸方位はN-25°-Eで、住居跡にそれに比して東に振れている。壁外に約25cm掘り込み、全長約1.25m、幅約1.1mを測る。床面の掘り込みは不整円形を呈し、径約1m、床面からの深さは最大60cmを測る。底面は凹凸が激しい。なお、この掘りの方は直接使用面として使われておらず、ローム粒を含む暗褐色土によって床面とほぼ同一のレベルまで埋め戻されている。両袖部は山砂を構築材として用いており、この掘り方埋め土上に構築されている。袖部は壁からの長さ約60cm、高さは15cm遺存していた。燃焼部底面はそれほど焼けていなかったが、直上には焼土粒・塊・炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積していた。焼土及び天井部構築材崩壊土は認められなかった。



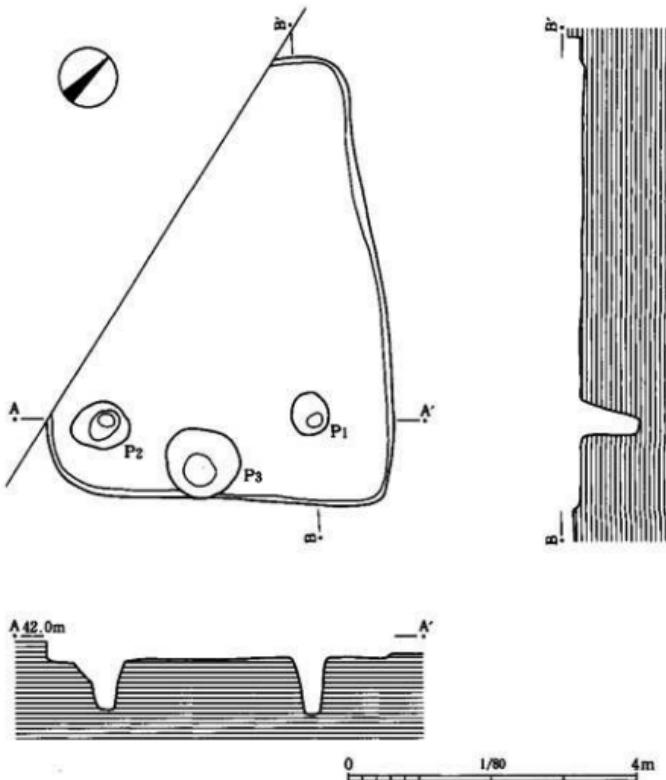
第56図 019号住居跡実測図

煙道部は約75度で立ち上がり、壁面の傾斜より急である。

遺物は、住居跡中央とカマド東側にややまとまって土師器片が出土した。いずれも床面上からの出土であり、一括遺物と考えられる。

020号住居跡（第57図）

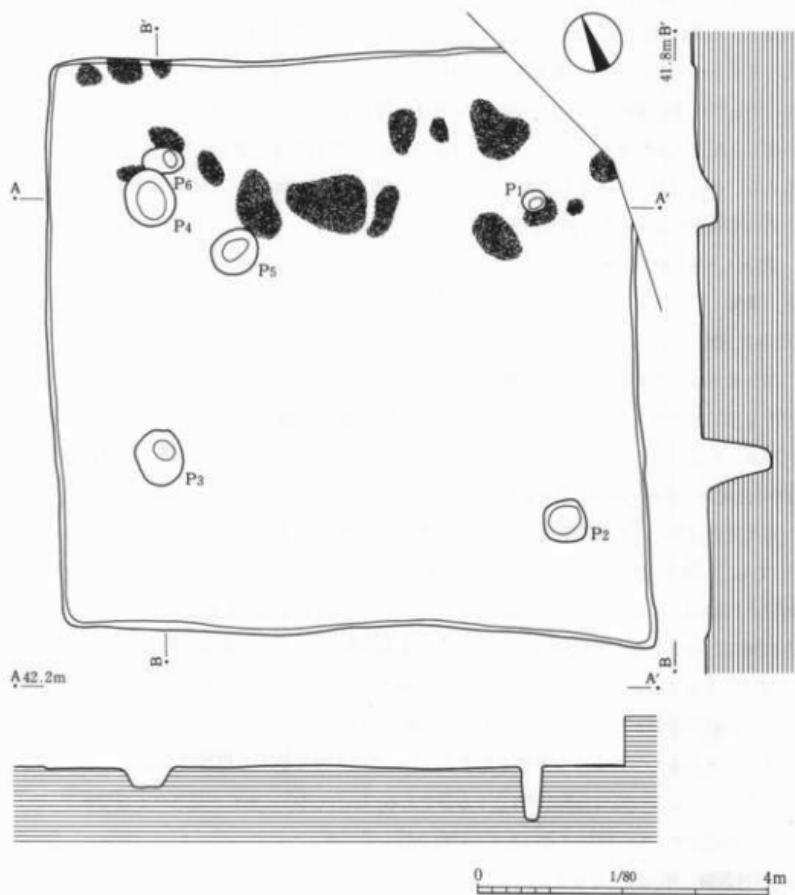
調査区北部、B6-02・03・04・13・14に位置する。西に面する緩斜面に立地する。北西コーナーから住居跡1/3は調査区域外にかかっており調査できなかった。規模は北東壁で6m、南東壁で4.6mを測り、カマドが北西壁に位置するすれば縦長の長方形を呈すると考えられる。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、北東壁はN-55°W方向に走っている。覆土は遺存状態が悪くほとんど残存していなかったが、ローム塊を含む暗褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。床面はハードロームで全体に軟弱で凹凸がある。壁はほとんど遺存していないが、壁



第57図 020号住居跡実測図

高は南東壁で10cmを測る。周溝は検出されなかった。ピットは3か所検出された。主柱穴はP₁・P₂と考えられるが、対応する北西コーナー側のピットは検出することができなかった。P₁は径50cm、深さ80cmを測る。P₂は中場から屈曲し漏斗状を呈する。径約80cm、深さ60cmを測る。P₁・P₂の柱間寸法は2.8mを測る。配置は不明であるが、P₁・P₂ラインは南東壁とほぼ平行している。P₃は貯蔵穴で楕円形を呈し、径約1m、深さ最大40cmを測る。覆土は、下層はローム塊を含む暗褐色土、中層はローム塊を多く含む褐色土、上層はローム塊を含む暗褐色土であり、人为的堆積と考えられる。

遺物は、覆土中から土師器の小片がまばらに出土した。盤(75)は貯蔵穴P₃覆土中から出土



第58図 022号住居跡実測図

した。

022号住居跡（第58図）

調査区中央部、C6-41、C7-00・01・02・10・11・12・21・22に位置し、西に面する緩斜面に立地する。北西側コーナーは調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は西壁で7.7m、南壁で8.1mを測り、方形を呈する。炉跡が検出されなかたため主軸方位は不明だが、西壁はN-21°-E方向に走っている。覆土は耕作による削平のため、ほとんど遺存していなかつたが、ローム粒を含む暗褐色土が主体で、住居北半分の床面上には焼土粒・塊が集中していた。焼土の厚さは最大10cmを測る。これは火灾によるものと推測されるが、炭化材が出土しなかつたこともあり、確証はない。壁面はほとんど遺存しておらず、壁高は南北コーナー側で最大10cmを測る。周溝は検出されなかつた。ピットは全部で5か所検出された。主柱穴は位置的にP₁～P₄と考えられ、径30～80cm、深さはP₁が70cm、P₂が20cm、P₃が1m、P₄が23cmを測る。P₂・P₄はP₁・P₃に比して極端に浅い。柱間寸法はP₁-P₂が4.4m、P₂-P₃が5.6m、P₃-P₄が3.4m、P₄-P₁が5.3mを測る。配置は不整な方形を呈する。P₅は径約60cm、深さ約50cmを測り、支柱穴の可能性も考えられる。炉跡ははっきりとした掘り込みを伴う焼土は検出されなかつたが、北側に集中する焼土のいずれかが該当する可能性がある。

遺物は、覆土中から土師器の小片が少量出土したが図示できる資料はなかつた。

2. 遺物

002号住居跡

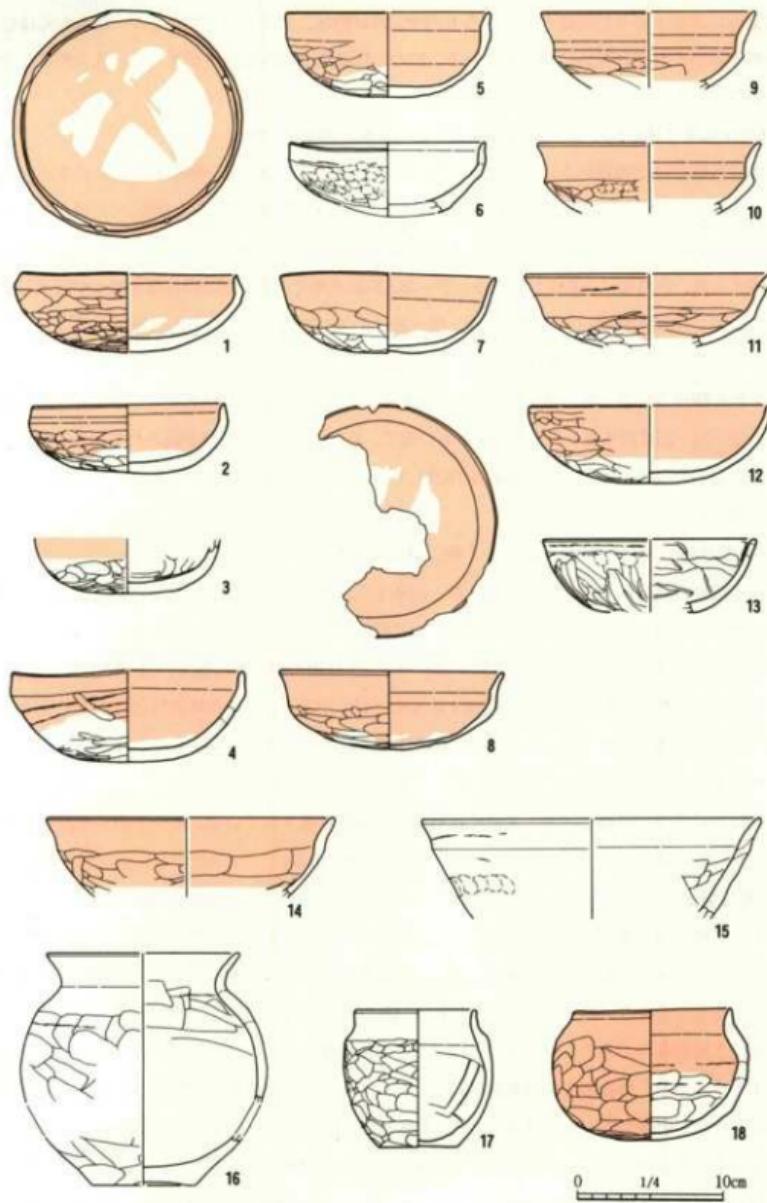
出土遺物はきわめて少なく、土師器の小片が出土したのみで図示できるものはなかつた。器形の全体を知り得るものはないが、器肉が厚い単純口縁の土師器壺が出土しており、古墳時代の所産と判断した。

009号住居跡（第59・60図、第6表、図版36・37）

出土遺物は多く、土師器壺13点、鉢2点、壺3点、壺1点、盤1点を図示した。土師器壺（1～13）は、口縁部が内傾するもの（1・2）、直立するもの（4～6）、直線的に外傾するもの（7）、体部と口縁部との境に稜を有し、直立気味に立ち上がり、その後外反するもの（8～11）、体部と口縁部との境がなく半球形のもの（12）、体部は内湾気味に開き口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさめるもの（13）がある。6・13を除く壺には内外面に赤彩されるが、1・8は見込に田字状の赤彩が施されている。14・15は鉢で、14は器肉が薄く内外面に赤彩が施され、壺をそのまま大きくしたような形態を呈する。15は器肉が厚く胎土も粗雑である。16の壺は胴部外面が荒れている。17は口縁部が直立する壺である。18は内外面に赤彩が施される盤である。19・20は大形の壺で、20は胴部内面に巻き上げ痕を残している。

015号住居跡（第60図、第6表、図版37）

出土遺物は少なく、土師器壺2点、壺2点が図示できたのみである。土師器壺は口縁部が内



第59図 009号住居跡出土土器 (1~18)

傾気味に立ち上がり口唇部が直立するもので、21は円状、22は欠損しているが、もしくは円状の赤彩がそれぞれ見込に施されている。23の土師器壺は内外面へラケズリ後、部分的にナデを施している。

016号住居跡（第60・61・65・66図、第6・8・9表、図版37・49）

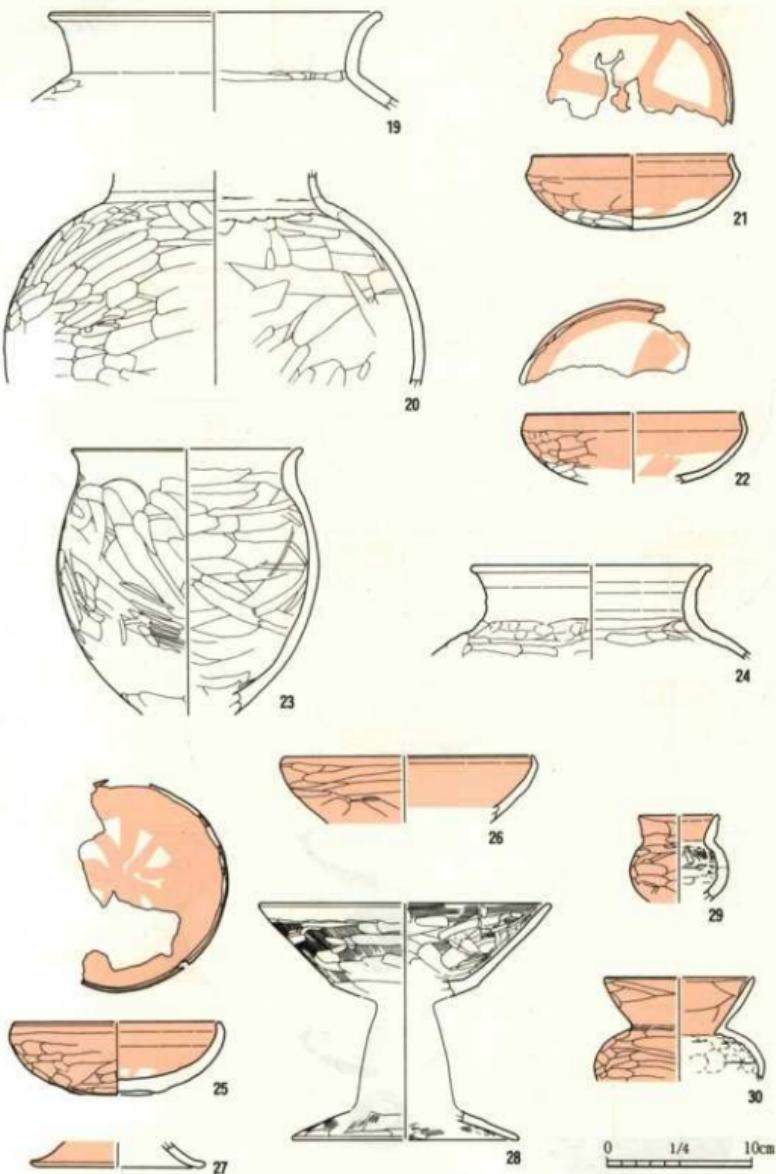
本住居跡では土師器壺2点、高壺3点、壠2点、壺2点、壺2点、劍形石製模造品1点、刀子1点を図示した。25は底部が上げ底状を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。1/2ほど欠損しているが、見込には放射状の赤彩が施されている。26は口唇部が内側に屈曲し、外面はナデによって調べられ、内外面に赤彩されている。27・28・31は高壺である。28は脚柱部を欠くが復元して図示した。体部内外面ハケメ調整の後、部分的にナデが加えられている。口縁部外面はヨコナデされている。31は口縁部破片で内外面に赤彩されている。29・30は壠で、29は体部内面にはシボリ目が観察される。32・33は壺で、32の口縁部は強く外反する。33は底部にヘラケズリが認められる。34・35は折り返しの二重口縁をもつ壺で、35は下端にキザミ目が施されている。第65図1は剣形石製模造品で、片面に稜線を作出している。第66図1は刀子の断片であり、茎に木質の付着が認められる。

017号住居跡（第61・64図、第6・7表、図版38・49）

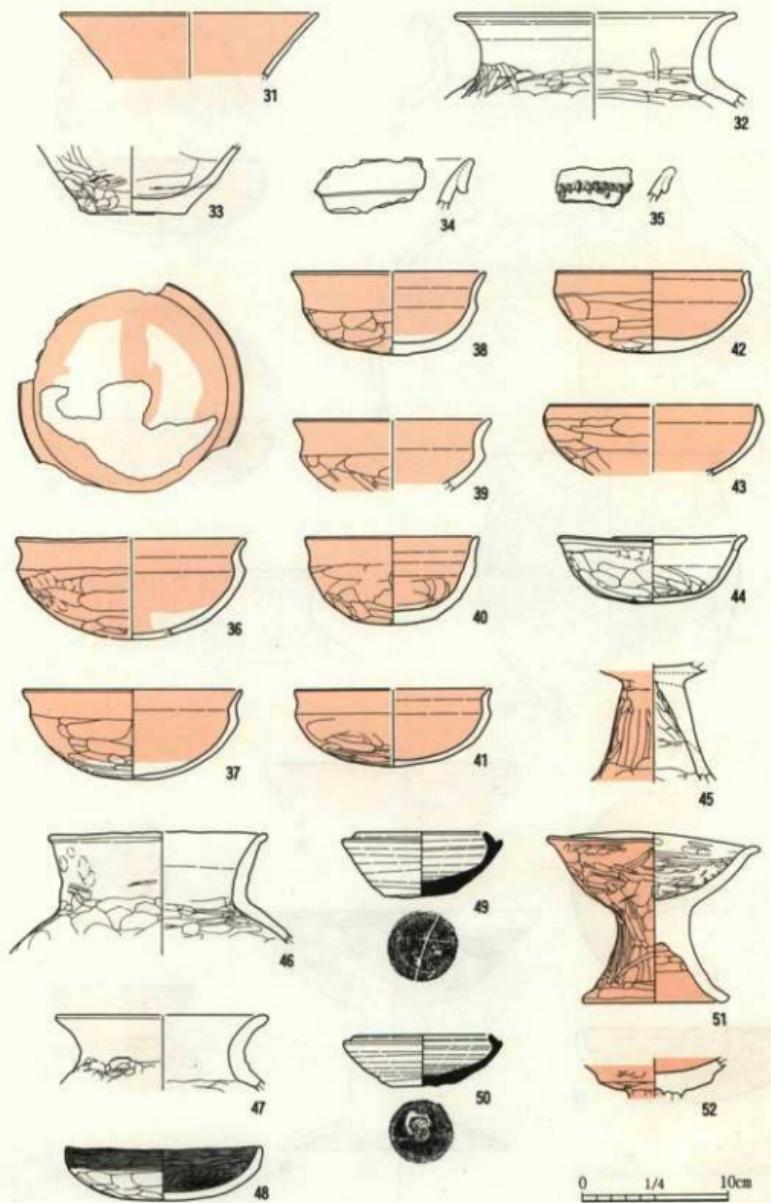
出土遺物は比較的多く、土師器壺9点、高壺1点、壺2点、土製模造品1点を図示した。壺は口縁部が内傾気味に立ち上がり、その後内面に明瞭な稜を残して外方に屈曲するもの(36・37・41・42)、外反しながら立ち上がるものの(38・40)、半球形の体部から短く内傾するもの(43)、半球形の体部から口唇部が外方に屈曲するもの(44)がある。45の高壺脚柱部は内面にシボリ目と接合痕を残す。壺はいずれも口縁部の破片であるが、直線的に外反するもの(46)、曲線的に外反するもの(47)がある。土製模造品(第64図1)は、粘土紐をやや平らに形成したもので、一方は横に捻りだされている。表面には何らかの圧痕が残されている。カマド内から出土したことから模造品としたが、何を模倣したものは不明である。

018号住居跡（第61・62・65図、第6・8表、図版38-40・49）

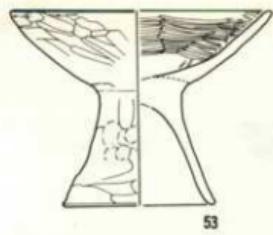
本住居跡では土師器壺1点、高壺5点、壺3点、瓶1点、須恵器壺2点、壺1点、砥石1点を図示した。48の土師器壺は見込に方斜状、口縁部内外面に横方向のヘラミガキを加え、漆仕上げを行なっている。49・50は須恵器壺身で、49は底部に「X」のヘラ書きが施されている。51～55は土師器高壺である。51は体部と口縁部との境に稜がなく、口唇部が外方に屈曲し脚端部も大きく広がる。外面の赤彩は痕跡的にしか残っていない。53は粉っぽい胎土で焼成も悪く、器面がかなり磨耗している。54はカマドの支脚として転用されたもので、口縁部は打ち欠かれ、脚端部もかなり擦れている。55は体部と口縁部との境に明瞭な稜を有し、口唇部は外反しながら開く。脚端部は故意に打ち欠かれている。56・57・59は土師器壺で、56は胴部外面をナデ調整後、下半部に縱方向のヘラミガキが部分的に施されている。胎土中には雲母粒・長石粒を多量



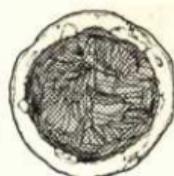
第60図 009(19・20)・015(21~24)・016(25~30)号住居跡出土土器



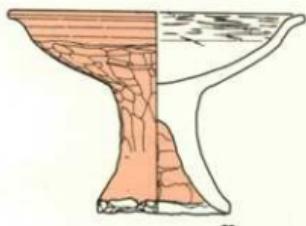
第61図 016(31~35)・017(36~47)・018(48~52)号住居跡出土土器



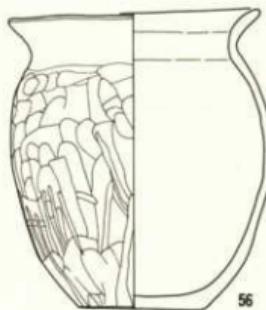
53



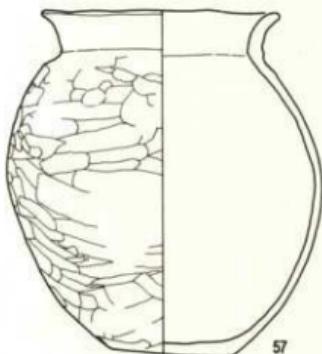
54



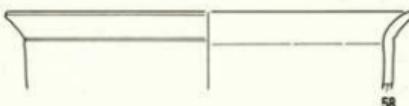
55



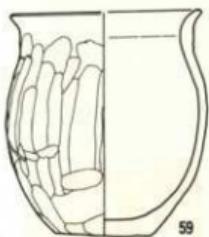
56



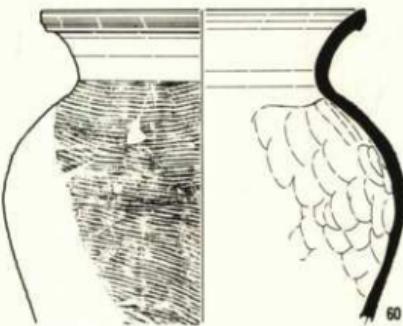
57



58



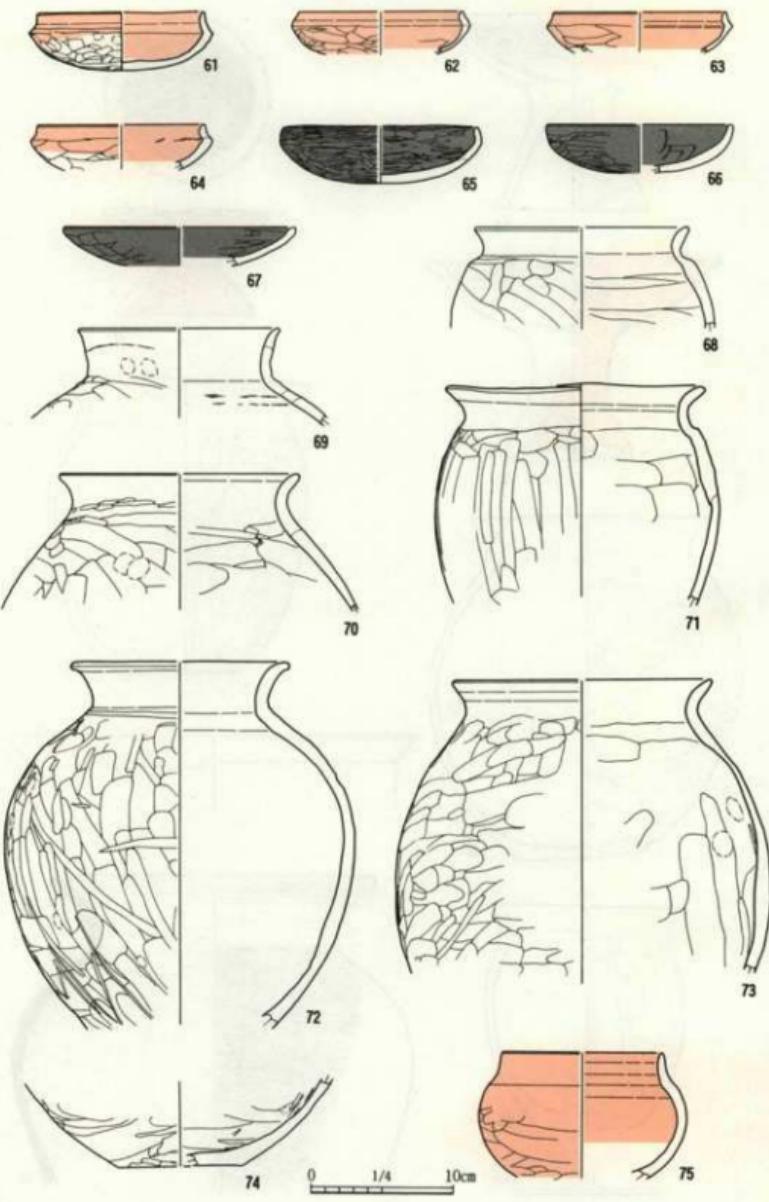
59



60

0 1/4 10cm

第62図 018号住居跡出土土器 (53~60)



第63図 019(61~74)・020(75)号住居跡出土土器

に含む。57は胴部が球形を呈す。60の須恵器壺は口縁部を若干下方につまみ出す口縁帯を作出し、胴部外面には横方向の叩き目が施され、内面には当木痕が観察される。

019号住居跡（第63図、第6表、図版40）

本住居跡では土師器壺7点、壺7点を図示した。壺は口縁部が内側に「く」の字形に屈曲し明瞭な稜を形成し、口唇部内湾気味に直立するもの（61～64）、口縁部が内側に弱く屈曲し直線的に立ち上がるるもの（65）、口縁部が外傾気味に開くもの（66）、扁平な体部から口唇部が短く直立するもの（67）がある。61～64は内外面赤彩、65～67は漆仕上げがなされている。68～74は壺で、68・71は口縁部を強くヨコナデすることによって、体部との境に稜を作出している。70・72・73は口縁部が曲線的に外反し、胴部は球形を呈している。74は底部の破片である。

020号住居跡（第63図、第6表）

本住居跡は出土遺物が少なく、土師器壺1点を図示できたにすぎない。75は内外面に赤彩が施されている。

022号住居跡

出土遺物はきわめて少なく、土師器の小片のみで図示できるものはなかった。

第6表 古墳時代土器観察表

| 遺物番号 | 標図 番号 | 種類・器種 | 寸法(cm) 口・底・高 | 遺存度 | 成形・調整手法の特徴 | 胎 土 | 焼成 | 色 調 | 備 考 |
|-------------|----------|-------|------------------|-----|---|------|----|-----|-----|
| 009号 住居跡 | 1 | 土師器 壺 | 14.8 — 5.3 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 2 | 土師器 壺 | 13.3 — 4.7 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 3 | 土師器 壺 | — — | 3/6 | 体部外表面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 4 | 土師器 壺 | 15.6 — 6.1 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ | 長石粒 | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 5 | 土師器 壺 | 14.0 — 6.0 | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 6 | 土師器 壺 | 13.7 — 5.1 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ後ナデ、押圧 体部内面ヘラナデ | | 良好 | 赤褐色 | |
| | 7 | 土師器 壺 | 15.0 — 5.5 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 8 | 土師器 壺 | 15.5 — 5.3 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 9 | 土師器 壺 | 14.7 — — | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ナデ | 石英 砂 | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 10 | 土師器 壺 | 15.2 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ナデ | 石英 砂 | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 11 | 土師器 壺 | 16.9 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 12 | 土師器 壺 | 16.4 — 5.3 | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外表面ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |

| 造形番号 | 辨認番号 | 種類・器種 | 法寸(㎜) 口・底・高 | 造存度 | 成形・調整手法の特徴 | 胎 土 | 焼成 | 色 調 | 備 考 |
|-------------|------|--------|----------------------|-----|--------------------------------------|--------------|----|------|-------|
| 009号 住居跡 | 13 | 土師器 壺 | 14.5 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ | 石英粒 | 普通 | 赤褐色 | |
| | 14 | 土師器 鉢 | 19.7 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ | 酸化鉄粒 | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 15 | 土師器 鉢 | 23.3 — — | — | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ | 石英粒 | 普通 | 暗茶褐色 | |
| | 16 | 土師器 壺 | 13.0 7.0 15.8 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部内面ヘラケズリ後ナデ | 酸化鉄粒 | 不良 | 赤褐色 | 表面剥落著 |
| | 17 | 土師器 遺 | 8.3 5.4 9.4 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 18 | 土師器 壺 | 10.9 — 8.9 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | 雲母粒 | 不良 | 暗赤褐色 | 赤彩 |
| | 19 | 土師器 壺 | 22.7 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | 石英粒 | 普通 | 橙褐色 | |
| | 20 | 土師器 壺 | — — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | | 良好 | 暗茶褐色 | |
| 015号 住居跡 | 21 | 土師器 壺 | 13.8 — 5.2 | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ後下半部ナデ 体部内面ナデ | | 普通 | 暗赤褐色 | 赤彩② |
| | 22 | 土師器 壺 | 15.2 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ | | 良好 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 23 | 土師器 壺 | 15.8 — — | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 普通 | 赤褐色 | |
| | 24 | 土師器 壺 | 16.1 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ナデ | | 良好 | 赤褐色 | |
| 016号 住居跡 | 25 | 土師器 壺 | 14.2 5.6 4.9 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 26 | 土師器 壺 | 17.3 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部内外面ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 27 | 土師器 高壺 | — 11.3 — | — | 胸部内外面ヨコナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 28 | 土師器 高壺 | 19.9 15.3 16.2 | 2/6 | 体部内外面ハケメ 構成後ナデ | 石英 石 酸化鉄粒 | 良好 | 褐色 | |
| | 29 | 土師器 坝 | 5.3 — — | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ | 雲母粒 | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 30 | 土師器 坝 | 10.2 — — | 2/6 | 口縁部内外面ナデ 体部外側ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | 長石粒 | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 31 | 土師器 高壺 | 17.5 — — | — | 口縁部内外面ナデ | 雲母粒 | 普通 | 暗赤褐色 | 赤彩 |
| | 32 | 土師器 坝 | 18.9 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘミガキ 胴部内面ナデ | 石英粒 | 普通 | 赤褐色 | |
| | 33 | 土師器 壺 | — 6.7 — | — | 胴部外側ヘミガキ 胴部内面ヘラナデ | 石英粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 34 | 土師器 壺 | — — — | — | 口縁部ヨコナデ | 石英粒 | 普通 | 褐色 | |
| | 35 | 土師器 壺 | — — — | — | 口縁部ヨコナデ、下端カサミ目 | | 普通 | 赤褐色 | |
| 017号 住居跡 | 36 | 土師器 壺 | 15.4 — 7.0 | 5/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 普通 | 赤褐色 | 赤彩 |
| | 37 | 土師器 壺 | 15.0 — 6.1 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | | 普通 | 暗褐色 | 赤彩 |

| 遺物番号 | 種類 番号 | 種類・器種 | 法量(cm) 口・底・高 | 遺存度 | 成形・調整手法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|-------------|----------|--------|---------------------|-----|--|-------------|----|------|---------------------|
| 017号 住居跡 | 38 | 土師器 壺 | 13.3 — 5.6 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 良好 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 39 | 土師器 壺 | 13.6 — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 40 | 土師器 壺 | 19.9 — 6.0 | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナラナデ | | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 41 | 土師器 壺 | 13.5 — 5.3 | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | 石英粒 | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 42 | 土師器 壺 | 13.3 — 5.5 | 5/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナラナデ | | 普通 | 暗赤褐色 | 赤影 |
| | 43 | 土師器 壺 | 14.3 — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ | 石英粒 長石粒 | 不良 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 44 | 土師器 壺 | 13.0 — 5.4 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナラナデ | 石英粒 長石粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 45 | 土師器 高壺 | — — | 2/6 | 脚部外側ナデ 脚部内面シボリ後ナデ | 石英粒 | 普通 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 46 | 土師器 親 | 14.7 — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 脚部外側ヘラケズリ後ナデ 脚部外側ナラナデ | | 良好 | 赤褐色 | |
| | 47 | 土師器 親 | 14.0 — | — | 口縁部ヨコナデ 脚部外側ヘラケズリ 脚部内面ナラナデ | 石英粒 | 良好 | 暗赤褐色 | |
| | 48 | 土師壺 壺 | 13.5 — 3.5 | 6/6 | 口縁部一全体内面ヘラミガキ 体部外側ヘラケズリ | | 普通 | 茶褐色 | 擦仕上げ |
| | 49 | 須恵器 壺 | 8.9 — 4.4 | 6/6 | 体部内外面ヨコナデ 底部ヘラ切り後体部下端一底部回転 ヘラケズリ | | 良好 | 暗灰色 | 河西窯底部「X」 |
| | 50 | 須恵器 壺 | 9.4 — 3.5 | 6/6 | 体部内外面ヨコナデ 底部ヘラ切り後体部下一底部外周回 転ヘラケズリ | | 良好 | 白灰色 | 河西窯底 |
| | 51 | 土師器 高壺 | 14.2 9.5 11.6 | 6/6 | 口縁部一全体内面ヘラミガキ 体部外側一肩部外側ヘラケズリ後ヘ ラミガキ、脚部内面ナラナデ | 小石含む | 良好 | 暗橙褐色 | 赤影 |
| 018号 住居跡 | 52 | 土師器 高壺 | — — | 1/6 | 体部内面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナラナデ | 长石粒 小石含む | 良好 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 53 | 土師器 高壺 | 17.8 9.1 13.7 | 6/6 | 口縁部一全体内面ヘラミガキ 体部外側一肩部外側ナラナデ 脚部内面ナラナデ | 磨化鉄粒 | 不良 | 褐色 | |
| | 54 | 土師器 高壺 | 11.2 9.3 7.4 | 5/6 | 口縁部一全体内面ヘラミガキ 体部外側一肩部外側ヘラケズリ後ヘ ラミガキ、脚部内面ナラナデ | 磨化鉄粒 | 普通 | 褐色 | 赤影・内腹 口縁部底掌に打ち欠く |
| | 55 | 土師器 高壺 | 20.2 9.1 13.7 | 5/6 | 口縁部一全体内面ナラナデ 体部外側一肩部外側ヘラケズリ 脚部内面ヘラナラナデ | 长石粒 | 良好 | 暗褐色 | 赤影・脚部 底掌に打ち欠く |
| | 56 | 土師器 親 | 17.0 8.8 20.5 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 脚部外側ナラナデ一部底位ヘラミガキ 脚部内面ナラナデ | 长石粒 磨化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | 常轮型 |
| | 57 | 土師器 親 | 16.2 8.5 23.7 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 脚部外側一底位ヘラケズリ 脚部内面ヘラナラナデ | 磨化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 58 | 土師器 甌 | 28.0 — | — | 口縁部ヨコナデ 脚部内面ナラナデ | 石英粒 磨化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 59 | 土師器 親 | 12.7 6.5 15.2 | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 脚部外側一底位ヘラケズリ 脚部内面ナラナデ | | 普通 | 黑褐色 | |
| | 60 | 須恵器 親 | 22.4 — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 脚部外側横位平行叩き目 脚部内面押花 | 石英粒 长石粒 | 良好 | 暗灰色 | |
| | 61 | 土師器 壺 | 11.3 — 4.1 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナラナデ | 石英粒 长石粒 | 良好 | 暗赤褐色 | 赤影 |
| | 62 | 土師器 壺 | 11.5 — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナラナデ | 长石粒 磨化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | 赤影 |
| 019号 住居跡 | | | | | | | | | |

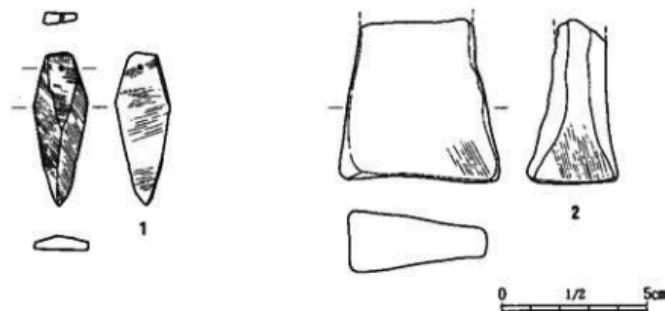
| 遺物番号 | 埋因番号 | 種類・器種 | 法量(cm) 口・底・高 | 遺存度 | 成形・調製手法の特徴 | | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|-------------|------|-------|------------------|-----|-----------------------------------|--|-------------|----|------|------|
| | | | | | | | | | | |
| 019号 住居跡 | 63 | 土師器 坯 | 11.7 — — | — | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 雲母粒 | 良好 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 64 | 土師器 坯 | 11.3 — — | — | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 雲母粒 | 良好 | 赤褐色 | 赤影 |
| | 65 | 土師器 坯 | 13.4 — 4.0 | 5/6 | 体部内外面ヘラミガキ | | 雲母粒 | 良好 | 暗褐色 | 擦仕上げ |
| | 66 | 土師器 坯 | 12.7 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ナデ | | 長石粒 酸化鉄粒 | 普通 | 黒褐色 | 擦仕上げ |
| | 67 | 土師器 坯 | 16.0 — — | — | 口縁部ヨコナデ 体部外側ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ | | | 普通 | 暗赤褐色 | 擦仕上げ |
| | 68 | 土師器 壺 | 14.8 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 69 | 土師器 壺 | 13.7 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ナデ | | 長石粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 70 | 土師器 壺 | 16.4 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | | 酸化鉄粒 | 普通 | 赤褐色 | |
| | 71 | 土師器 壺 | 17.5 — — | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | | 小石含む | 良好 | 暗茶褐色 | |
| | 72 | 土師器 壺 | 14.5 — — | 4/6 | 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ナデ | | 長石粒 | 普通 | 暗赤褐色 | |
| | 73 | 土師器 壺 | 17.7 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | | 酸化鉄粒 | 良好 | 暗褐色 | |
| | 74 | 土師器 壺 | 8.7 — — | — | 胴部外側ヘラナデ 底部ヘラナデ | | 小石含む | 普通 | 黒褐色 | |
| 020号 住居跡 | 75 | 土師器 壺 | 11.0 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外側ヘラケズリ 胴部内面ナデ | | 雲母粒 | 普通 | 暗赤褐色 | 赤影 |



第64図 017号住居跡(1)・B6-13グリッド(2)出土土製品

第7表 古墳時代土製品計測表

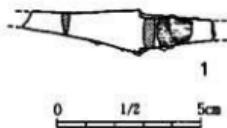
| 出土位置 | 埋因番号 | 種類 | 計測値(cm) | ()は遺存度 | 重量(g) | 備考 |
|-----------|------|-------|-----------------------------|---------|-------|----|
| 017号住居跡 | 1 | 土製模造品 | 長さ5.5 幅 0.9~1.3 厚さ0.5 | | 3.1 | |
| B6-13グリッド | 2 | 土製模造品 | 径 1.5 高さ1.6 | 孔径0.5 | 4.1 | |



第65図 016(1)-018(2)号住居跡出土石製品

第8表 古墳時代石製品計測表

| 出土位置 | 辨別番号 | 種類 | 石材 | 計測値(cm) | ()は遺存部 | 重量(g) | 備考 |
|---------|------|---------|------|-------------------------------------|---------|-------|----|
| 016号住居跡 | 1 | 剣形石製模造品 | 雲母片石 | 長さ 5.4 幅 0.95-1.8 厚さ 0.4-0.45 | | 6.8 | |
| 018号住居跡 | 2 | 砥石 | 砂岩 | 長さ(5.7) 幅 4.0-5.55 厚さ 2.0-3.1 | | 102.3 | |



第66図 016号住居跡出土鉄製品

第9表 古墳時代鉄製品計測表

| 出土位置 | 辨別番号 | 種類 | 計測値(cm) | ()は遺存部 | 備考 |
|---------|------|----|-------------------------------------|---------|----------------------|
| 016号住居跡 | 1 | 刀子 | 長さ(6.7) 幅 1.0-1.5 厚さ 0.25-0.4 | | 身から基にかけての 断片、木質付着 |

第4節 奈良・平安時代

1. 造構

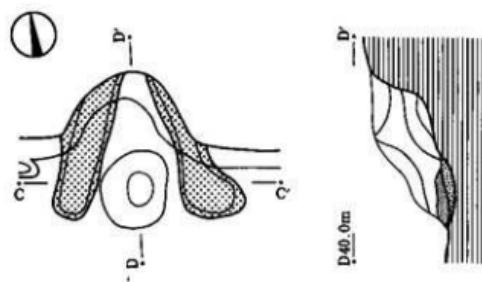
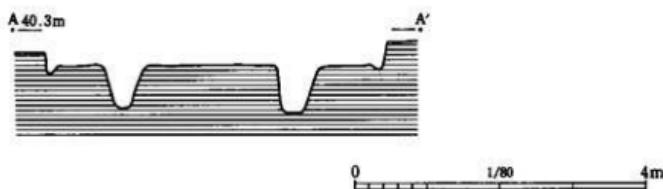
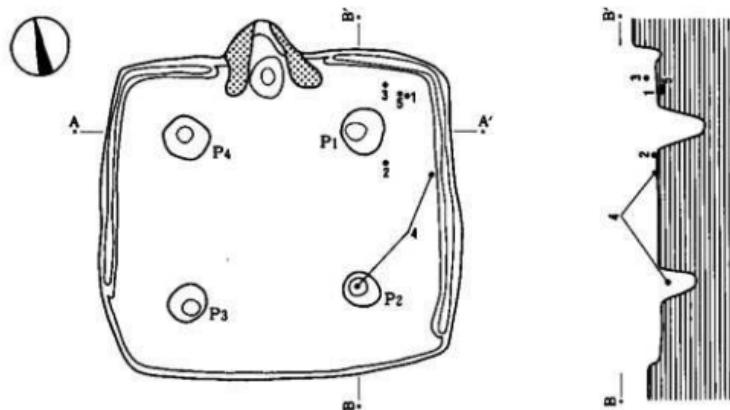
001号住居跡（第67図、図版16）

調査区南部、D13-30・31・40・41に位置し、南に面する斜面に立地する。所々擾乱を受けているものの遺存状態は比較的良好であった。規模は北壁が4.4m、東壁が3.8m、南壁が4.1m、西壁が4.1mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-10°-E。覆土はローム塊を少量含む暗褐色土が主体で、東壁中央部付近に若干焼土の堆積が認められた。床面はハードロームではほぼ平坦であった。壁高は北壁で32cm、南壁で16cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内と斜面下方の南壁～西壁1/4には施されていない。最大幅30cm、深さ12cmを測る。ビットは主柱穴が4か所検出された。 P_1-P_4 が径45~60cm、深さ25~30cmを測り、ほぼ均一な掘り方である。柱間寸法は P_1-P_2 が2.2m、 P_2-P_3 が2.4m、 P_3-P_4 が2.5m、 P_4-P_1 が2.4mを測る。配置は不整方形を呈し、各柱穴ともコーナーの対角線上に位置する。カマドは北壁中央やや西寄りに位置する。主軸方位はN-0°で、住居跡のそれよりやや西側に振れている。壁外には約50cm掘り込み、全長約1.1m、幅約1.3mを測る。底面の掘り込みは径約50cm、深さ約10cmを測る。袖部は壁外の掘り込みから「八」の字状に開き、壁からの長さ約1m、床面からの高さ約30cmを測り、構築材は山砂を主材とする。両袖部の内側は被熱によって赤色に硬化し、内部の覆土は山砂を多量に含む暗褐色土が主体であった。掘り込み上には、天井部と思われる赤変した山砂が落ち込んでいた。煙道部は約70度で立ち上がる。

遺物は、住居跡東側からまばらに出土した。北壁際覆土中層から出土した土師器壺（3）以外は床面直上からの出土であり、一括遺物と考えられるものである。土師器壺（4）は P_2 覆土中の破片と接合しており、柱抜き取りの後、流れ込んだ可能性が高い。

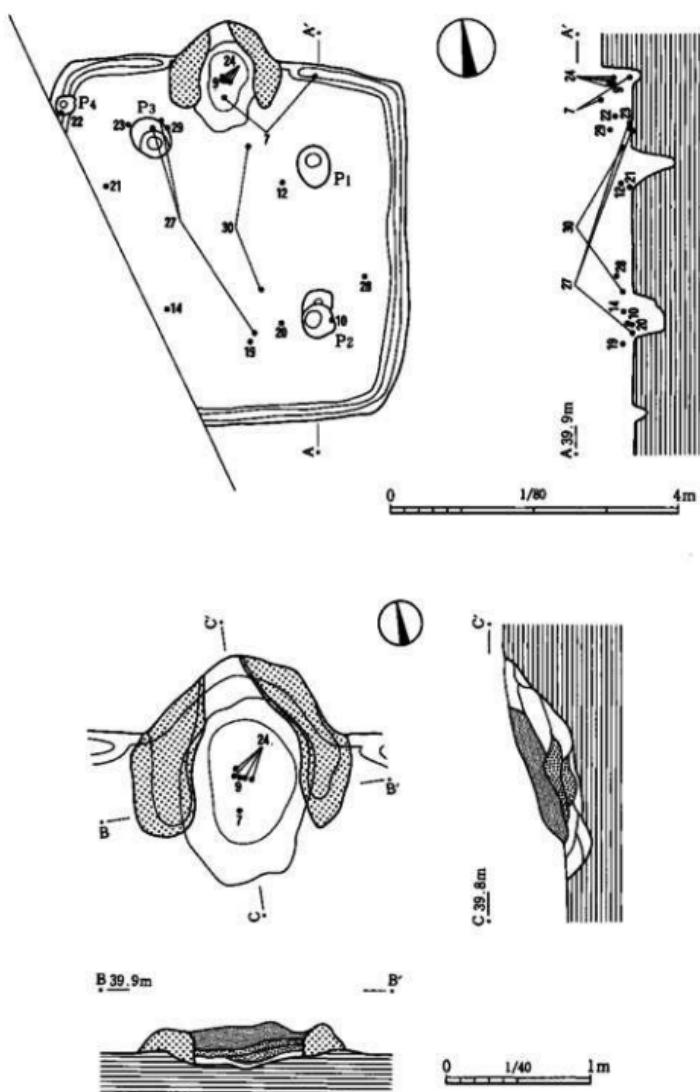
003号住居跡（第68図、図版16）

調査区南部、D13-44、E13-40、D14-04、E14-00に位置し、南側に面する斜面に立地する。斜面下方の南壁は欠失、南西側は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は北壁・東壁とも4.6mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-10°-E。覆土は上層がローム粒・焼土粒を少量含む暗褐色土、下層がローム塊を少量含む黄褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。床面はハードロームではほぼ平坦であった。壁高は北壁で約20cmを測る。周溝は検出部分ではカマド内を除いて全周しており、最大幅25cm、深さ10cmを測る。ビットは4か所検出された。 P_1-P_3 は主柱穴で径40~60cm、深さ35~60cmを測る。柱間寸法は P_1-P_2 が2.2m、 P_3-P_1 が2.3mを測る。配置は不整方形を呈すると推測され、 P_1-P_2 ラインは東壁にはほぼ平行、 P_3 はやや北壁寄りに位置する。未検出の南西側の主柱穴もコーナー寄りに位置すると考えられる。 P_4 は西壁周溝内に掘り込まれたビットで、径30cm、深さ10cmを測り、隅丸方形を呈する。



第67図 001号住居跡・カマド実測図

カマドは北壁中央に位置する。所々擾乱を受けていたが遺存状態は良好であった。主軸方位はN=0°で、住居跡のそれより西に振れている。壁外へは約50cm掘り込み、全長約1.5m、幅約1.5m



第68図 003号住居跡・カマド実測図

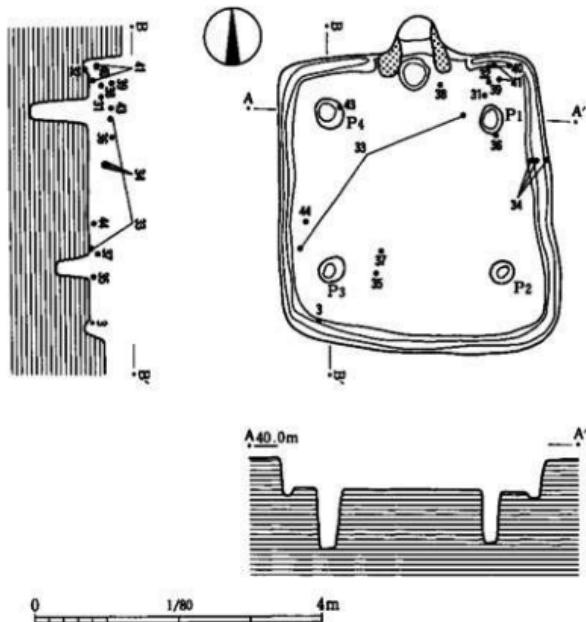
を測る。掘り込みは焚口から燃焼部奥まで及んでおり、長軸1m、短軸70cmの橢円形を呈する。底面はやや凹凸があり、焚口が最も深く約20cmを測る。袖部は壁面からの長さ1.1m、床面からの高さ15cmを測り、構築材には砂質粘土を用いている。袖部は壁外ではオーバーハングしている。内側の覆土は最上層に焼土粒を多量に含む山砂層、その直下に被熱し赤変した山砂が堆積しており、天井部のブリッジが落ち込んだものと考えられる。また、その直下の燃焼部直上には、焼土粒を少量含む暗褐色土が堆積していたが、赤色硬化面は認められなかった。焚口の産みにはローム塊・焼土粒を含む暗褐色土が堆積していた。煙道部には山砂・焼土粒・炭化物を含む黒褐色土が堆積し、約45度で立ち上がる。

遺物は、住居跡ほぼ全面覆土中層～下層にかけて土器、鉄製品が出土した。カマド内より出土した土師器壺(7)、土師質土器壺(9)、土師器甕(24)は被熱しておらず、使用時の遺物ではなく、廃絶時の何らかの行為に伴うものと考えられる。また、土師質土器壺(10)、須恵器甕(27)は柱穴検出面から出土したことにより、柱抜き取りないしは切断が行なわれた可能性が高い。墨書き土器(14)は南西調査区際覆土下層中から出土した。

004号住居跡（第69図、図版16）

調査区南部、E13-41・42、E14-01・02に位置し、南に面する斜面に立地する。遺存状態は良好であった。規模は北壁で3.5m、東壁で3.9m、南壁で3.6m、西壁で3.6mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-1°-W。覆土は主として2層に分かれ、上層がローム粒・塊を含む褐色土、下層がローム粒を少量含む暗褐色土で自然堆積と考えられる。床面はハードロームで、整高は北・東・西壁で約40cm、南壁で約20cmを測り、約85度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅30cm、深さ約10cmを測る。ピットはしっかりと掘り方の主柱穴が4か所検出された。規模は径30-40cm、深さはP₁が70cm、P₂が40cm、P₃が43cm、P₄が83cmと斜面下方の2柱穴は上方の2柱穴に比して浅い掘り方である。柱間寸法はP₁-P₂が2.2m、P₂-P₃が2.5m、P₃-P₄が2.2m、P₄-P₁が2.4mを測る。配置は不整方形で、P₁-P₂ライン、P₂-P₃ライン、P₃-P₄ラインはそれぞれ対する壁面に平行していた。カマドは北壁中央に位置する。遺存状態は良好である。主軸方位はN-3°-Eで、住居跡のそれよりやや東側に振れている。壁外へは約50cm掘り込み全長約1m、幅約1mを測る。底面の掘り込みは焚口から燃焼部にかけて施されており、床面からの深さは最大10cmを測る。袖部は壁面の掘り込みの側面から主軸ラインに沿って直線的に伸びており、壁面からの長さ約50cm、床面からの高さ約25cmを測る。構築材は砂質粘土を主材とする。両袖部の内側は被熱して赤変していた。焚口から燃焼部底面直上には焼土粒・炭化物粒を多量に含む暗褐色土が堆積し、その上には山砂・褐色土を多量に含む灰褐色土が煙道部まで堆積しており、天井部の落ち込んだものと考えられる。煙道部は段をなし、下段約50度、上段約45度で立ち上がる。

遺物は、北西側からやまとまて土器が出土した。本住居跡に確実に伴うものと考えられ

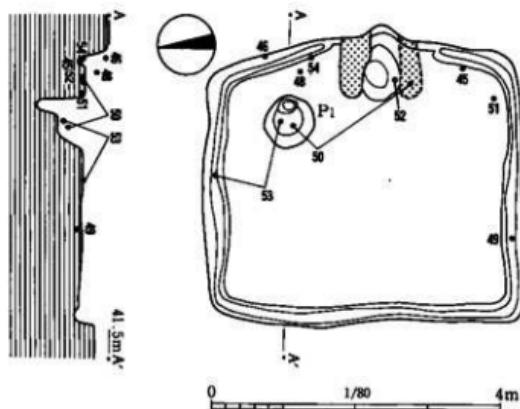


るのは北東周溝中から出土した土師質土器坏(32)のみであり、それ以外の北東コーナー側から出土した土器は流れ込みの可能性が高い。

005号住居跡（第70図、図版17）

調査区中央部、C8-02・03・12・13に位置し、西に面する緩斜面に立地する。所々に擾乱を受けていた他は、遺存状態は比較的良好であった。規模は東壁が4.1m、南壁が3.7m、西壁が4.2m、北壁が3.2mを測り、横長の方形を呈する。主軸方位はN-99°-E。覆土は主として2層に分かれ、上層にローム粒を少量含む暗褐色土、下層にはローム粒を多量に含む褐色土が堆積しており、自然堆積と考えられる。床面はハードロームではほぼ平坦であった。壁高は東壁で約30cm、南壁で約15cm、西壁で約20cmを測り、約70度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅約40cmを測る。床面西隅には径28cm、深さ28cmのピットが穿たれていた。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。遺存状態は不良で、擾乱によって右袖部は失われていた。主軸方位はN-99°-Eで、住居跡のそれと同じである。壁外へは約20cm掘り込み、全長約1m、幅約1.1mを測る。底面の掘り込みは焚口～燃焼部に施され、深さは最大12cmを測る。左袖部は壁からの長さ85cm、底面からの高さ約40cmを測る。構築材は山砂を主材とする。カマド内の覆土は焼土粒・山砂を多量に含む暗褐色土が主体であった。煙道部は約40度で立ち上がる。

遺物は、北東側からややまとまって土器が出土した。貯蔵穴中から横位でつぶれた状態で出土した土師器壺(50・53)は两者とも貯蔵穴外の破片と接合した。墨書き土器(46)は埋没後投棄されたものであり、内面黒色処理された土師質土器坏(48)も流れ込みの可能性が高い。その他の出土位置を図示した土器はすべて床面直上から出土したものであり、一括遺物と考えられる。



第70図 005号住居跡実測図

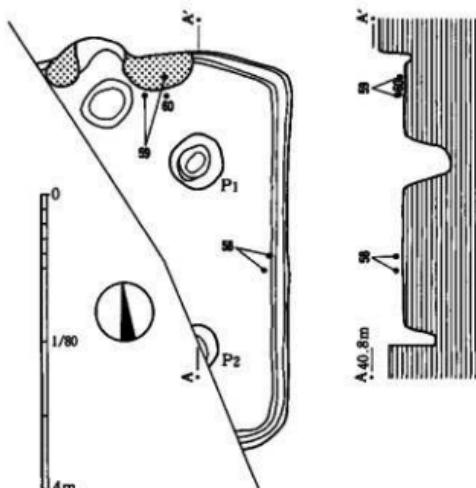
006号住居跡（第71図、図版17）

調査区中央部、C8-10・11・20・21・31に位置し、南西側に面する斜面に立地する。南西側約1/2は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は東壁で4.8mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-6°-E。覆土は主として2層に分かれ。上層はローム塊・焼土粒を多量に含む黒褐色土、下層にローム粒を多量、炭化物を少量含む暗褐色土が堆積しており自然堆積と考えられる。床面はハードロームでほぼ平坦であった。壁高は北壁で約40cm、東壁で約30cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出部分で北壁カマド東側～南東コーナーまで巡っており、最大幅25cm、深さ20cmを測る。覆土は底面中央から幅約20cm、高さ約40cm、筒状に褐色土が堆積しており、柱痕と考えられるものである。 P_2 は北東側約1/2のみしか検出できなかったが径約60cm、深さ40cmを測り、平面形は不整円形を呈すると推測される。覆土は2層に分かれ、上層に山砂・ローム塊・焼土粒をそれぞれ少量ずつ含む暗褐色土、下層に P_1 の柱痕と同質の褐色土が堆積していることから、こちらも柱痕と捉えられる。柱間寸法は2.6mを測る。配置は西側の2柱穴が未検出なので不明だが、 P_1-P_2 ラインは東壁とはほぼ平行である。カマドは北壁に位置する。耕作による擾乱を受けており、遺存状態は不良であったが、両袖部及び焚口の掘り込みが検出された。主軸方位はN-5°-Wで、住居跡のそれに比してやや西側に振れている。壁外には約25cm掘り込み、全長約1.3m、幅約2.1mを測る。袖部は壁からの長さ約50cm、床面からの高さは約15cmを測る。構築材は山砂を主体とした灰褐色土であった。掘り込みは焚口で床面より約8cm掘り込み、燃焼部でさらに10cmほど掘り込む。燃焼部底面には約10cmの厚さで焼土が、その上には炭化物を多量に含む黑色土が堆積していた。煙道部には焼土塊・ローム塊・炭化物を含む暗褐色土が堆積し、約40度で立ち上がる。

遺物は、覆土下層～床面直上にかけて少量の土器片が出土した。カマド右袖内の土師器甕(59・60)は横位で出土し、カマド袖部の補強材として用いられたものと考えられる。

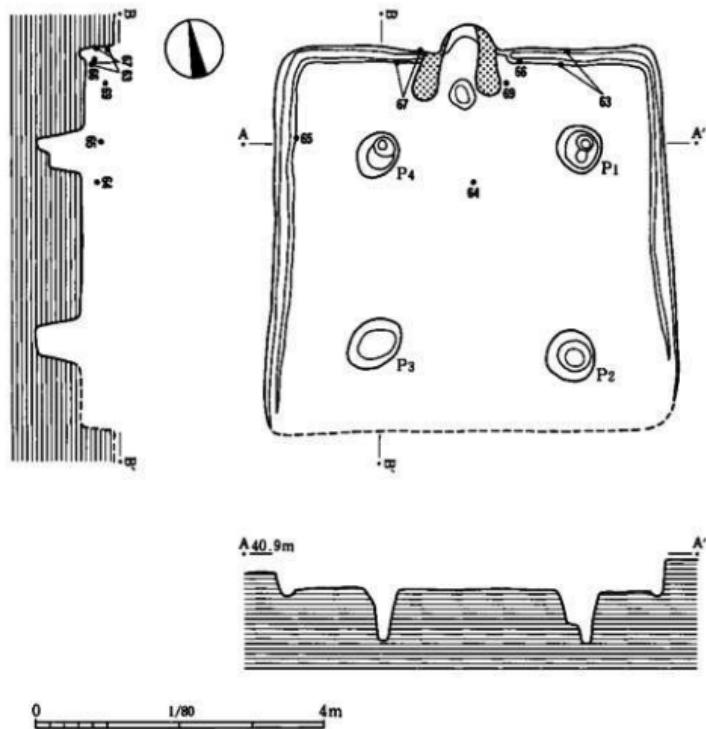
007号住居跡（第72図、図版17）

調査区中央部、C8-22・23・31・32・33に位置し、南西に面する緩斜面に立地する。斜面下方



第71図 006号住居跡実測図

の南壁は欠失。規模は北壁が5.2mを測り、ほぼ正方形を呈すると考えられる。主軸方位はN-12°-E。覆土は擾乱によってほとんど遺存していなかったが、ローム粒を多量に含む暗褐色土を主体とする。床面はハードロームではほぼ平坦であった。壁高は北壁で20cm、東壁で20cm、西壁で10cmを測り、約85度で立ち上がる。周溝はカマド内と南壁側を除いて検出され、最大幅25cm、深さ8cmを測る。ピットは主柱穴が4か所検出された。平面形は不整円形ないしは梢円形、径60-80cm、深さ約70cmのはば均一な掘り方である。この内P₁-P₃には柱痕が認められた。P₂-P₄は覆土についての記録を欠くため不明である。柱間寸法はP₁-P₂が2.9m、P₂-P₃が2.8m、P₃-P₄が2.7m、P₄-P₁が2.8mを測る。配置は不整円形でやや東側に振れている。カマドは擾乱によつて構築材のはほとんどが失われていたが、その痕跡から復元して図示した。主軸方位はN-15°-Eで、住居跡のそれに比してやや東に振れている。壁外へは36cm掘り込み、全長1.2m、幅1.2mを測る。掘り方底面はひじょうに凹凸が激しく、焚口ではさらに浅い掘り込みが検出された。袖部は壁面から60cm、床面から12cmの高さで遺存していた。構築材は山砂、ローム塊を用いて



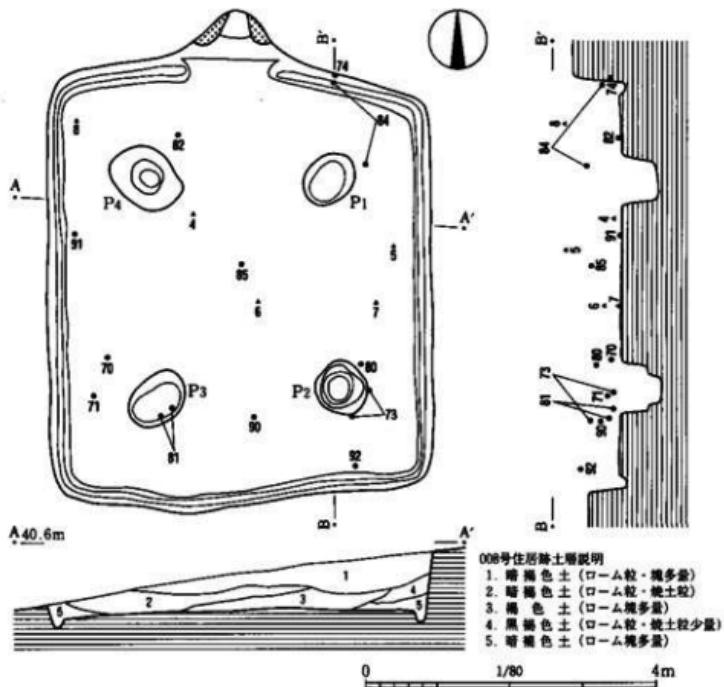
第72図 007号住居跡実測図

いた。カマド内覆土は擾乱が激しく、全面に焼土が散っているような状態であった。煙道部は約60°で立ち上がる。

遺物は、住居跡北東半分を中心として覆土上層～中層にかけて土器片が出土した。北壁周辺から出土した須恵器は大半が流れ込みによるものと思われる。

008号住居跡（第73図、図版18）

調査区中央部、C9-24・34・44、9D-20・30・40に位置し、南北に面する緩斜面に立地する。北東側は古墳時代の009号住居跡を破壊して構築されている。規模は北壁東壁で5.1m、南壁で5.2m、西壁で5.6mを測り、不整方形を呈する。主軸方位はN-0°。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土、ローム塊を多量に含む褐色土を主体とし、レンズ状に自然堆積していた。床面は貼床しており、ローム土・山砂・焼土の混成土を床材としており、住居跡中央付近～南壁下が特に硬く締まっていた。壁高は北壁で60cm、東壁で80cm、南壁で40cm、西壁で20cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド部分を除いて全周し、最大幅30cm、深さ約10cmを測る。ピットは主柱穴の4か所が検出された。P₁～P₄は径80cm～1m、深さ55cmを測るほか均一な掘り方である。



第73図 008号住居跡実測図

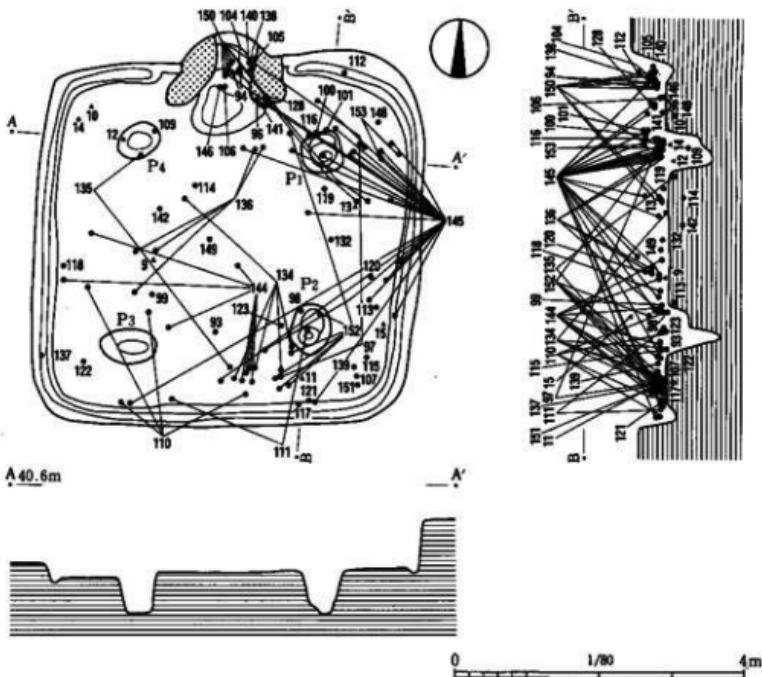
るが、P₂・P₄は掘り方中央が一段深く掘り込まれている。覆土は各柱穴ともローム塊を含む暗褐色土を主体とし、柱痕は認められなかった。柱間寸法はP₁−P₂が2.8m、P₂−P₃が2.6m、P₃−P₄が3m、P₄−P₁が2.5mを測り、配置はやや縦長の方形を呈する。カマドは北壁中央に位置する。袖部は基部のみしか遺存しておらず、住居跡の遺存状態から考えると廃絶時に故意に破壊している可能性が高い。主軸方位はN−0°で、住居跡のそれと同じである。壁外に約60cm掘り込み、幅90cmを測る。底面への掘り込みはなく、焼けた面も認められなかった。カマド内の覆土は山砂・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土が主体である。煙道部は約40度で立ち上がる。

遺物は、全面、全層にわたって多量に出土した。床面直上から出土した須恵器甕転用窯(91)、土師質土器塊(82)、鉄製品(4~8)は本住居跡に伴うものと考えられるが、その他の遺物、特に墨書き器(84・85)などは廃絶後流入もしくは投棄された可能性が高い。

010A号住居跡(第74図、図版18)

調査区中央部、C9−44、D9−40、C10−04、D10−00・01に位置し、南西に面する緩斜面に立地する。部分的に擾乱を受けていたが、遺存状態は比較的良好であった。規模は北・東・南壁で5m、西壁で4.8mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位はN−0°で真北を向いている。覆土は大きく2層に分かれ上層に焼土粒を含む暗茶褐色土、下層にローム粒・塊・焼土粒を少量含む黒褐色土が自然堆積していた。床面はローム粒・塊・山砂の混成土を用いて貼床しており、カマド手前から中央付近が特に硬く締まっていた。壁高は北壁で48cm、東壁で64cm、南壁で36cm、西壁で10cmを測り、70~80度で立ち上がる。周溝はカマド部分を除いて全周し、最大幅50cm、深さ15cmを測る。ピットは主柱穴の4か所が検出された。P₁−P₄は径50~80cm、深さ60~70cmを測る。そのうちP₁・P₂は掘り方中場で段をなし、南側がさらに深く掘り込まれている。柱間寸法はP₁−P₂が2.6m、P₂−P₃が3m、P₃−P₄が2.8m、P₄−P₁が2.6mを測る。配置は不整方形を呈し、P₁−P₂ラインは東壁、P₃−P₄ラインは西壁にそれぞれ平行している。カマドは北壁中央に位置する。遺存状態は良好であった。主軸方位はN−10°−Eで、住居跡のそれに比して東に振れている。壁外へは約40cm掘り込み、全長1.5m、幅1.6mを測る。焚口の掘り込みは不整円形を呈し、床面からの深さは最大16cmを測る。この掘り方はローム粒・塊を含む褐色土によって部分的に埋め戻して成形されている。袖部は壁面からの長さ約60cm、床面からの高さ約30cmを測り、山砂を主材としている。カマド内の覆土は山砂・焼土粒を含む暗褐色土を主体とする。赤色硬化面は認められなかった。煙道部は約45度で立ち上がる。

遺物は覆土全層中から多量に出土し、特に東半分に集中していた。鉄製品(9~11・13~15)、土師器甕(137)、土師質土器蓋(122)などは床面直上から、鉄釘(12)、内黒の土師質土器壺(109)はP₄の覆土中から出土した。須恵器甕(144・145)などは破片が広範囲に散らばっていた。その他の遺物も床面からやや浮いた状態で出土したものが多く、廃絶後流入もしくは投棄されたものが多いと思われる。

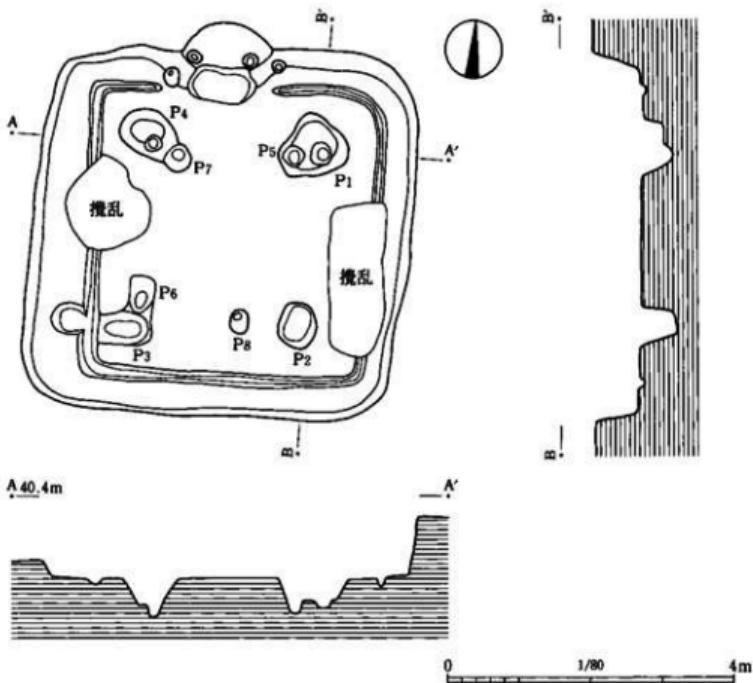


第74図 010A号住居跡実測図

010B号住居跡（第75図、図版18）

010A号住居跡の貼り床を除去した後、検出された住居跡で、床面・周溝・柱穴のみが検出された。規模は周溝から一辺約4m前後の住居跡であったと推測される。主軸方位は010A号住居跡と同じN-0°。覆土はすべて010A号住居跡の貼り床で、人為的に埋め戻されたものである。床面はハードロームで、特に硬く締まった部分はなかった。壁面は010A号住居跡構築の際に掘削され全く遺存していないかった。周溝はカマド部分を除いて全周し、最大幅28cm、深さ12cmを測る。ピットは010A号住居跡の柱穴の他に、新たにP₅～P₈の4か所が検出された。そのうちP₅・P₆・P₇は主柱穴と考えられるが、P₈は主柱穴にしては西側に寄りすぎており、南西側の主柱穴はP₂と重複していると考えられる。P₅～P₇は径30～40cm、深さ47～60cmを測る。P₈は径約20cm、深さ52cmを測り、出入口部施設に伴う柱穴と考えられる。カマドは010A号住居跡のカマドによって削平されており、浅い掘り込みの一部を検出したのみである。

遺物は、本住居跡出土遺物として取り上げられたものはないが、010A号住居跡出土土器の内、第74図114・142は床面下から検出されていることから、本跡に属する可能性が高い。



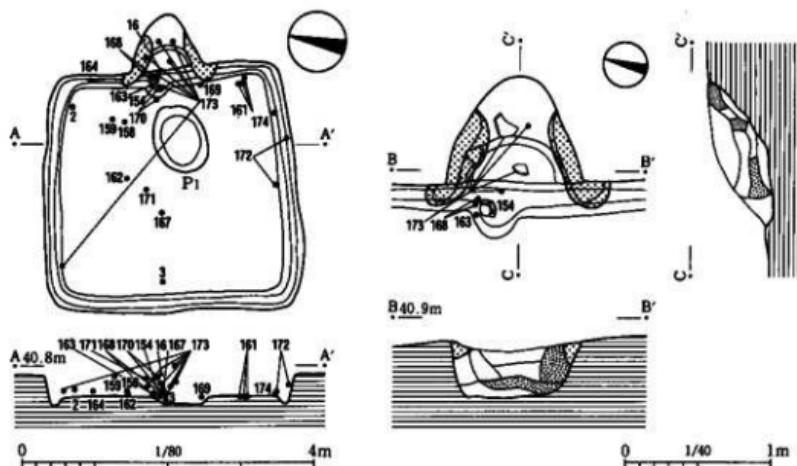
第75図 010B号住居跡実測図

011号住居跡（第76図、図版19）

調査区中央部、D10-01・02・11・12に位置し、西に面する斜面に立地する。遺存状態は良好であった。規模は東壁で3m、南壁で3.2m、西壁で3.3m、北壁で3.1mを測り、不整方形を呈する。主軸方位はN-78°-E。覆土は大きく2層に分かれ、上層はローム粒・焼土を含む黒褐色土、下層はローム粒・塊を含む茶褐色土を主体とする。床面はハードロームで、特に硬く締まった部分はなかった。壁高は東壁で35cm、南壁で30cm、西壁で15cm、北壁で30cmを測り、約75度で立ち上がる。周溝は全周し、最大幅28cm、深さ10cmを測る。ピットはカマド手前に浅い橢円形の土壟状のもの（P₁）が1か所検出された。規模は長軸1m、短軸70cm、深さ10cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。主軸方位はN-75°-Eで、住居跡のそれに比してやや西に振れている。壁外には約70cm掘り込み、全長1.1m、幅1.3mを測る。住居内への掘り込みは周溝から手前に約20cm突出する。燃焼部は壁外にあり、袖部が底面に接しているのは手前の周溝内の部分のみであり、壁外の燃焼部では掘り方側面から約15cm張り出し状となっていることから、本来は天井

部とつながりブリッヂを形成したと考えられる。構築材は山砂を主体とする灰褐色土を用いていた。両袖部の内側の覆土は燃焼部中層で焼土粒・塊を多量に含む暗褐色土が堆積していたが、底面の赤色硬化はみられなかった。煙道部は約40度で立ち上がる。

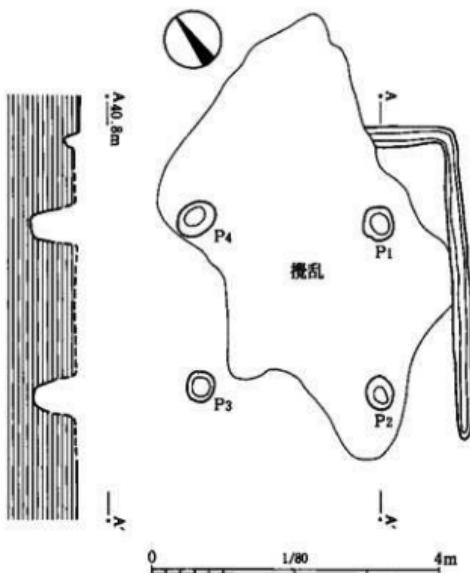
遺物は、南東コーナー付近から土師器壺（161）、須恵器壺（174）がカマド焚口前から、土師質土器壺（154）、灰釉陶器長頸壺（163）、須恵器壺（168・170）が出土した。いずれも床面直上からの出土で、一括遺物と考えられる。カマド内から出土した須恵器壺片（173）は被熱しており、天井部の補強材として使用されたようである。



第76図 011号住居跡・カマド実測図

012号住居跡 (第77図)

調査区中央やや南寄り、D10-22・31・32・33・42に位置し、西に面する斜面に立地する。農業用機械によって大きく擾乱を受け、周溝の一部と柱穴を検出したのみである。規模は全辺遺存の壁面がなく推測の域を出ないが、一辺4.4m前後の正方形を呈する住居跡であったと考えられる。主軸方位はカマドが検出されないので不明だが、南東壁はN-33°-E方向である。覆土は擾乱によってほとんど遺存していなかったが、南東壁際にローム塊を含む暗褐色土が若干堆積していた。床面はハードロームであるが、南東壁付近を除いてほとんど遺存していなかった。壁高は南東壁で最大20cmを測る。周溝は東側コーナー-南東壁にかけて遺存しており、最大幅25cm、深さ12cmを測る。ピットは4か所検出した。いずれも本来の開口部面は擾乱を受けており、平面形及び規模は不明であるが、径約40cm、深さ約60cmの均一な掘り方であったと推測される。柱間寸法はP₁-P₂が2.3m、P₂-P₃が2.5m、P₃-P₄が2.3m、P₄-P₁が2.5mを測る。配置は方形



第77図 012号住居跡実測図

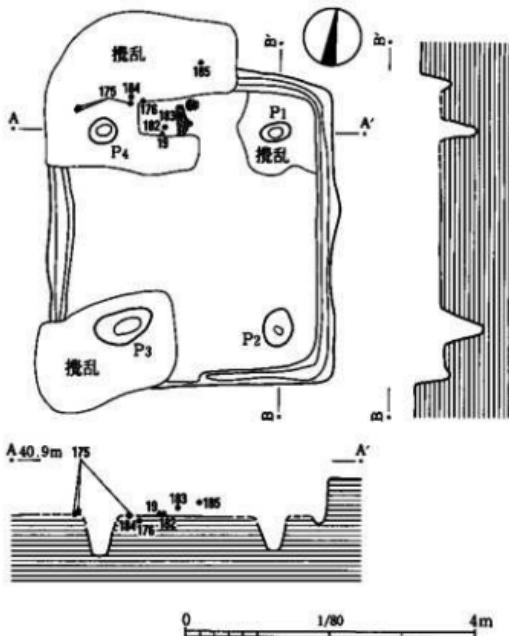
を呈する。

遺物は、覆土中から鉄製品（17・18）が出土したのみである。

013号住居跡（第78図、図版19）

調査区中央やや南寄り、D10-42・43、D11-02・03に位置し、西に面する緩斜面に立地する。所々に大きく擾乱を受け遺存状態は不良であった。規模は東壁で4mを測り、正方形を呈すると推測される。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、東壁はN-8°-W方向である。覆土はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土を主体とし、床面北半分直上には炭化物・焼土粒を多量に含む黒褐色土が堆積し、床面直上からは炭化材・焼土が検出された。このことから本住居跡は焼失住居と考えられる。床面はハードロームで特に硬く締まった部分はなかった。壁高は北壁で30cm、東壁で48cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は、南壁の東半分で途切れる他は、擾乱部分を除いて施されている。規模は最大幅32cm、深さ15cmを測る。ピットは主柱穴の4か所が検出されたが、本来の開口部面を留めているのはP₂のみであり、他は擾乱を受けていた。P₂は径約40cm、深さ60cmを測り、断面漏斗状を呈する。柱間寸法はP₁-P₂が2.7m、P₂-P₃が2.1m、P₃-P₄が2.7m、P₄-P₁が2.4mを測る。配置は南北方向に長い方形を呈する。

遺物は、北側炭化材周辺から土師器壺（182・183）、刀子（19）が出土した。いずれも床面直



第78図 013号住居跡実測図

上からの出土で一括遺物と考えられる。擾乱中の遺物も出土位置を図示したが、原位置は留めていないと思われる。

023号住居跡（第79図、図版19）

調査区中央部、C8-14・24、D8-10・20に位置し、西に面する斜面に立地する。北東側に溝状の擾乱が入っている他は遺存状態は良好であった。規模は南東壁で3m、南西壁で3.1mを測り、不整な方形を呈する。カマドが検出されないため主軸方位は不明だが、北西壁はN-25°-E方向に走っている。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土を主体とする。床面はハードロームで特に硬く締まった部分ではなく、西に向かってやや傾斜していた。壁高は北東壁で55cm、北西壁で10cmを測り、約85度で立ち上がる。周溝は周囲していたと推測され、比較的しっかりとしており、最大幅28cm、深さ12cmを測る。ピット及びカマドは検出されなかった。

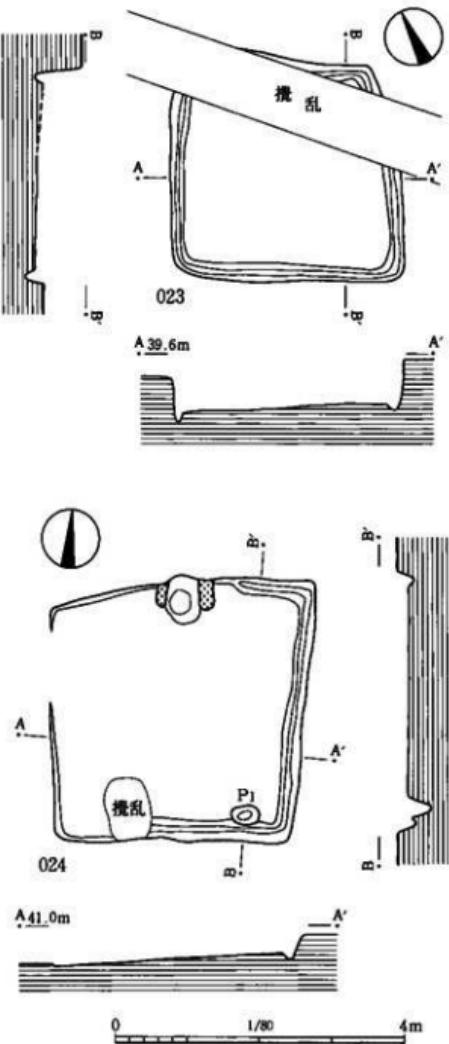
遺物は全く出土しなかった。

024号住居跡（第79図、図版20）

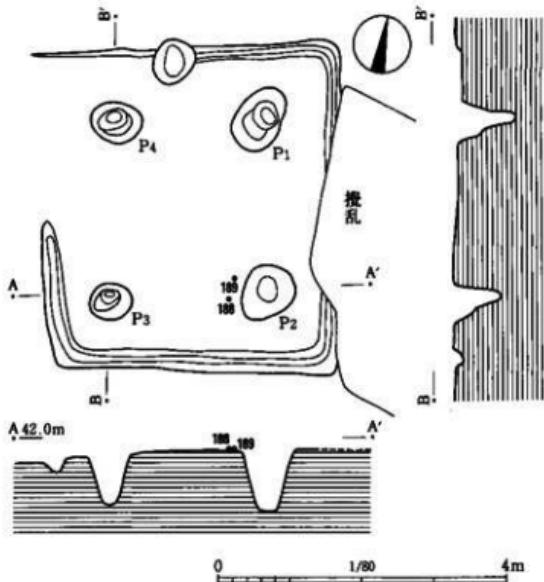
調査区中央やや南寄り、D11-12・13・22・23に位置し、南西に面する斜面に立地する。全体的に遺存状態が悪く斜面下方の西壁の一部は欠失していた。規模は北壁・東壁で3.6m、南壁で

3.2m、西壁で3.1mを測り、不整方形を呈する。主軸方位はN-1°-W。覆土はローム粒を少量含む暗褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。床面はハードロームで全体的に軟弱であり、西に向かってやや下に傾斜している。壁高は北壁で16cm、東壁で25cm、南壁で20cm、西壁で5cmを測り、約65度で立ち上がる。周溝は北壁カマド東側～南壁東側2/3まで施されている。最大幅23cm、深さ8cmを測る。ピットは南東コーナー付近の床面際に1か所検出された。平面形は橢円形を呈し、規模は長軸40cm、短軸25cm、深さ34cmを測り、出入口部施設に伴う柱穴の可能性が考えられる。主柱穴は検出されなかった。カマドは北壁ほぼ中央に位置し、上面が削平されており遺存状態は不良であった。主軸方位はN-0°。壁外に約10cm掘り込み、全長約60cm、幅80cmを測る。掘り込みは焚口から壁面まで浅く掘り込まれている。掘り込み底面上には焼土粒を含む茶褐色土が厚さ5cm堆積していたが、赤色硬化面は検出されなかった。袖部は壁面からの長さ約40cm、床面から約5cmの高さで遺存していた。煙道部には被熱して赤変したローム塊が堆積しており、約35度で立ち上がる。

遺物は、覆土中より土器の小片が数点出土したのみで、図示できたのは土師器甕(186)のみであった。



第79図 023・024号住居跡実測図



第80図 025号住居跡実測図

025号住居跡（第80図、図版20）

調査区中央やや南寄り、D11-22・23・32・33に位置し、西に面する斜面に立地する。東側に通る道路状の溝及び削平により、壁面はほとんど欠失しており、遺存状態は不良であった。規模は東壁で4.6m、南壁で3.9mを測り不整形を呈する。主軸方位はN-13°-W。覆土はほとんど遺存していなかったが、ローム粒を少量含む暗褐色土が堆積していた。床面はハードロームで、特に硬く締まった部分はなかった。壁高は北壁で最大12cmを測る。周溝は北壁カマド東側～西壁南半分まで施されており、最大幅32cm、深さ20cmを測る。ピットは主柱穴の4か所が検出された。 P_1-P_4 は径1m-50cm、深さ60-80cmを測る。柱間寸法は P_1-P_2 が2.5m、 P_2-P_3 が2.2m、 P_3-P_4 が2.5m、 P_4-P_1 が2.2mを測る。配置は継長の長方形を呈する。カマドは北壁に位置する。掘り込みが検出されたのみで袖部は遺存していなかった。主軸方位は住居跡のそれと同じN-13°-W。壁外へは10cm掘り込み、全長60cm、深さ6cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層に焼土、下層にローム粒を含む暗褐色土が堆積していた。下層は掘り方埋め土の可能性がある。

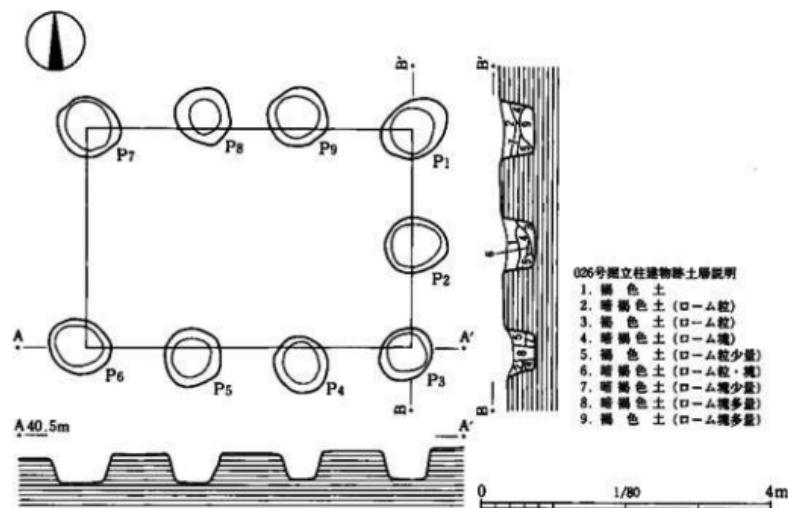
遺物は、 P_2 西側床面上から土師質土器壺(188)、土師器甕(189)が出土した。

026号掘立柱建物跡（第81図、図版20）

調査区南部、D13-14・24、E13-10・11・20に位置し、南に面する緩斜面に立地する。大形

でしっかりとした柱穴であり、遺存状態は良好であった。東側1/2は古墳時代の002号住居跡を切っている。周囲には奈良時代の001・003号住居跡、平安時代の004号住居跡が存在する。側柱式の東側梁行2柱間(3.1m)・西側梁行1柱間(3m)×桁行3柱間(4.5m)を呈し、面積は13.5m²。桁行主軸方位はN-85°-W。西側梁行の中間柱穴は検出されていない。梁行の柱間寸法はP₁-P₂が1.05m、P₂-P₃が1m、P₆-P₇が2m。桁行の柱間寸法はP₃-P₄とP₄-P₅が1m、P₅-P₆が1.05m、P₇-P₈とP₉-P₁が0.1m、P₈-P₉が0.5mを測り、ややばらつきがみられる。柱穴の配置は桁行の柱列の中間柱穴(P₄・P₅・P₈・P₉)がやや外側にはみ出し気味である以外はほぼ整然としており、平面形は矩形を呈する。柱穴は不整円形ないしは楕円形を呈し、径70cm~1m、深さは28~45cmを測り、大きさはほぼ均一であるが、深さは西側の方が浅い傾向を示す。柱穴の据え方は検出されなかった。覆土はローム塊を含む暗褐色土・褐色土を主体とし、P₃・P₅からは柱痕が検出された。柱痕から復元すると柱材のおおよその太さは18~22cmと推測される。

遺物は、P₆覆土中より底部に墨書のある土師質土器坏(190)が出土した。



第81図 026号掘立柱建物跡実測図

2. 遺物

001号住居跡 (第82・95図、第10・11表、図版41・49)

出土土器のうち図示できたのは土師器坏1点、壺5点、石製紡錘車1点である。1の壺は口唇部直下までヘラケズリが施される。2の壺は口唇部が肥厚し丸みをもっておさめるもので、それ以外のものは口唇部を上方につまみ上げている。

003号住居跡（第82・83・96図、第10・12表、図版41・50）

出土土器は比較的多く、土師器壺2点、甕6点、土師質土器壺9点、須恵器壺1点、甕4点、瓶2点、鉄製品2点を図示した。7・8は土師器壺で、7は口唇部が外反し、口縁部との境に弱い稜を有する。8は口唇部直下までヘラケズリが加えられ、さらに巻き上げ痕を消すための指頭痕が認められる。9～12は土師質土器壺で、9は口唇部が屈曲し外反する。12は体部内外面ヨコナナ後、外面上半には弱いヘラケズリが施される。14～18は墨書き土器で、14・16・18は「大」と記されている。15も「大」と判読できよう。17は文字下部が欠損しているため、下にまだ文字が続くのか完結しているのか不明だが、完結しているとすれば「土」と判読できる。土師器甕は19の口唇部は丸くおさめられ、21～24はつまみ上げられる。22は胴部下半にヘラミガキを施す「常総型」の甕である。25～30は須恵器甕・瓶で、25は酸化焰焼成、26は外面叩きの際に内面を押された当木痕が認められる。27は胴部外面を叩き後、下端にヘラケズリを加える。底部には胴部と同じ叩き目が施されている。28・29は瓶の把手付近の破片である。把手は胴部に継ぎの叩きを行った後、粘土塊を貼り付け、ヘラ状工具によって面取り成形を行ったものである。

004号住居跡（第84・96図、第10・12表、図版42・50）

本住居跡では、土師質土器壺9点、土師器甕3点、瓶1点、須恵器甕1点、鉄錆1点を図示した。土師質土器壺は底部が全面ヘラケズリ調整されるもの（31・34・38）と糸切り離し後、底部外周が手持ちヘラケズリ調整されるもの（32・33・35・36・37）がある。37は内面ヘラミガキ及び黒色処理が施されている。39は体部と底部の境が強くナデられている壺で、底部が突き出しているような形態を呈する。体部外面には「万」の墨書きが記されている。40・41の土師器甕は口唇部が上外方につまみ上げられている。43は土師器瓶の口縁部破片で、把手は強いナデによって貼り付けられている。口唇部は上外方につまみ上げられている。

005号住居跡（第84・85図、第10表、図版42・43）

本住居跡では、土師質土器壺5点、土師器甕4点、須恵器甕1点、瓶1点を図示した。土師質土器壺のうち47～49は、底部回転糸切り後、底部外周手持ちヘラケズリを加える。48・49は内面ヘラミガキ及び黒色処理が施されている。46は底部に「上万」と墨書きされている。50・51は土師器甕で、いずれも口唇部は上外方につまみ上げられる。50は外面に、51・52は内面に指頭痕が認められる。

006号住居跡（第85・86図、第10表、図版43）

出土土器は少なく、土師質土器壺1点、土師器甕3点、瓶1点、須恵器高台付盤1点、甕1点を図示できたのみである。56は墨書き土器で「田」と判読できる。57は須恵器高台付盤で口縁部は体部から上方に屈曲するものと推測される。表面は鉛色、断面は暗褐色を呈し、雲母粒・石英粒・長石粒・酸化鉄粒を多量に含んでいる。58～60は土師器甕で、58は内外面ナデ調整で仕上げられている。胎土に雲母粒・石英粒・長石粒を多量に含むことから、下半部にヘラミガ

キが加えられる「常絶型」壺と考えられる。

007号住居跡（第86図、第10表、図版43）

本住居跡では、須恵器壺5点、壺1点、土師器壺1点が図示できた。須恵器壺は形態、胎土共それぞれ異なる。63・66は内面体部と底部の境に明瞭な稜を有する。また両者とも体部外面に「十」の焼成後の線刻がなされている。

008号住居跡（第86・87・96図、第10・12表、図版43・44・50）

出土土器は比較的多く、土師質土器壺7点、高台付壺2点、土師器壺7点、壺2点、須恵器壺3点、壺2点、鉄製品5点を図示した。70の須恵器壺は底部ヘラ切り後、手持ちヘラケズリが施されている。74は体部外面下端をヨコナデすることによって、円盤状の擬似高台を作出している。77～80は土師器壺で、80は内面にヘラミガキが施されている。81・82は内黒の土師質土器高台付壺で、81は体部外面下端に手持ちヘラケズリを加える。83～87は墨書き土器で83・85・86は「福」と記されている。84は「福」に続く文字が欠損しているため判読できない。「福田」であろうか。87は「十」の墨書き、88は「十」の焼成後の線刻がなされている。91は須恵器壺を転用したもので内外面、特に内面がよく擦れている。墨痕は認められない。92の須恵器壺は外面叩き後、ナデによる横方向の沈線を施す。

010号住居跡（第87～91・96図、第10・12表、図版44～47・50）

出土土器は多く、土師質土器壺25点、高台付皿2点、壺1点、蓋1点、鉢1点、土師器壺2点、壺5点、須恵器壺8点、壺11点、瓶3点、綠釉陶器壺1点、灰釉陶器長頸壺1点、鉄斧、鉄釘、刀子他鉄製品7点を図示した。土師質土器壺は体部下端に手持ちヘラケズリが加えられ、底部より内湾気味に立ち上がり、その後直線的に外反するものがほとんどである。底部の調整は93・96・98・100・104が全面手持ちヘラケズリ、97・109が回転糸切り離し後、外周手持ちヘラケズリを施す。100・111は器肉が厚くヨコナデも弱く、体部に巻き上げ痕を残し胎土も精選されておらず、他のものとはかなり様相を異にする。112～118は須恵器壺で、112・113は全体の色調は橙褐色であるが、部分的に灰色を帯びており、焼成もかなり堅緻なことから須恵器と判断した。117は混入品の可能性が高い。119・120は高台付皿で、119は内面黒色処理が施され、高台の接地面には一条の沈線を有する。胎土は砂をほとんど含まない精選されたものである。120は内面にヘラミガキが施されるが黒色処理は施されていない。121の高台付壺も黒色処理はなされていない。122は擬宝珠形の蓋のつまみで、下面には接着のための螺旋状の条線が刻まれている。123～130は墨書き土器であり、123～127は「福」、128は「下」、129は「万」と記されている。131は体部外面に「十」の焼成後の線刻がなされている。132は綠釉陶器壺である。胎土は白灰色で軟質、施釉は底部外面を除く全面になされ、緑黄色を呈する。底部は回転糸切り無調整で、円盤状の高台となっている。なお、体部内外面ともミガキは施されていない。形態・胎土・釉調から京都産と判断した。133は灰釉陶器長頸壺の口縁部で、下方に張り出した口縁帯を作出している。

胎土は精選されており灰褐色を呈する。134は土師質土器鉢で、体部は底部から直線的に開き、口唇部でやや外反する。ヘラミガキは体部内面下端のみに施されている。底部外面には「□」の焼成前の線刻がなされている。135～139は土師器壺である。口唇部はすべて上方につまみ上げられている。135はかなり大形のもので胴部外面は指頭押圧で調えられている。140～153は須恵器壺・瓶で、145の須恵器壺は破片はかなり多く出土したがほとんど接合しなかった。表面は黒色、断面は褐色を呈し、焼成はかなり不良である。

011号住居跡（第91～93・95・96図、第10～12表、図版47・49・50）

出土遺物は比較的多く、土師質土器壺5点、高台付皿2点、土師器壺2点、灰釉陶器長頸壺1点、須恵器壺10点、瓶1点、石製紡錘車1点、砥石1点、刀子1点を図示した。154の壺は底部から内湾気味に立ち上がる。160は墨書き土器で「福」と記されている。163は灰釉陶器長頸壺の口縁部破片で、上方と下方につまみ出す口縁帯を作出している。164～170は須恵器壺である。169・170とともに酸化焰焼成で、169は胴部外面叩き後、縱方向のヘラケズリが加えられる。173は二次的に火熱を受け、部分的に橙褐色に変色し、器面は所々剥落している。

012号住居跡（第96図、第12表、図版50）

出土遺物はきわめて少なく、鐵鎌1点、不明鉄製品1点を図示した他は、土器は小破片のみで図示できるものはなかった。器形の全体を窺えるものはないが、土師質土器壺片があることから奈良時代以降の所産と考えられる。

013号住居跡（第93・94・96図、第10・12表、図版47・48・50）

本住居跡では土師質土器5点、土師器壺1点、壺4点、須恵器壺1点、刀子1点を図示した。175は体部が直線的に開き、口唇部が外方に屈曲する。176は体部下端をヨコナデすることによって円盤状の擬似高台を作出している。土師器壺はすべて口唇部はつまみ上げられている。刀子(19)は茎に木質が付着する。

023号住居跡

出土遺物はなかった。

024号住居跡（第94・96図、第10・12表、図版50）

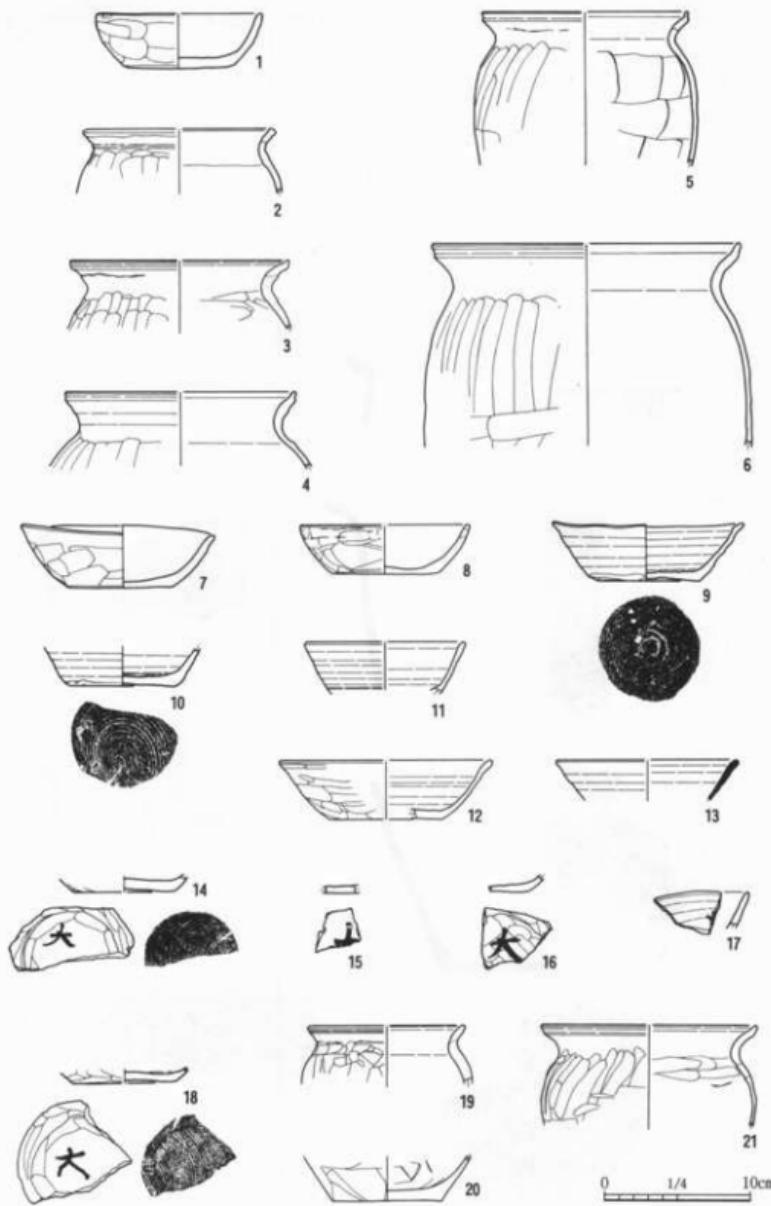
出土遺物はひじょうに少なく、土師器壺1点、刀子1点を図示できたのみである。

025号住居跡（第94図、第10表）

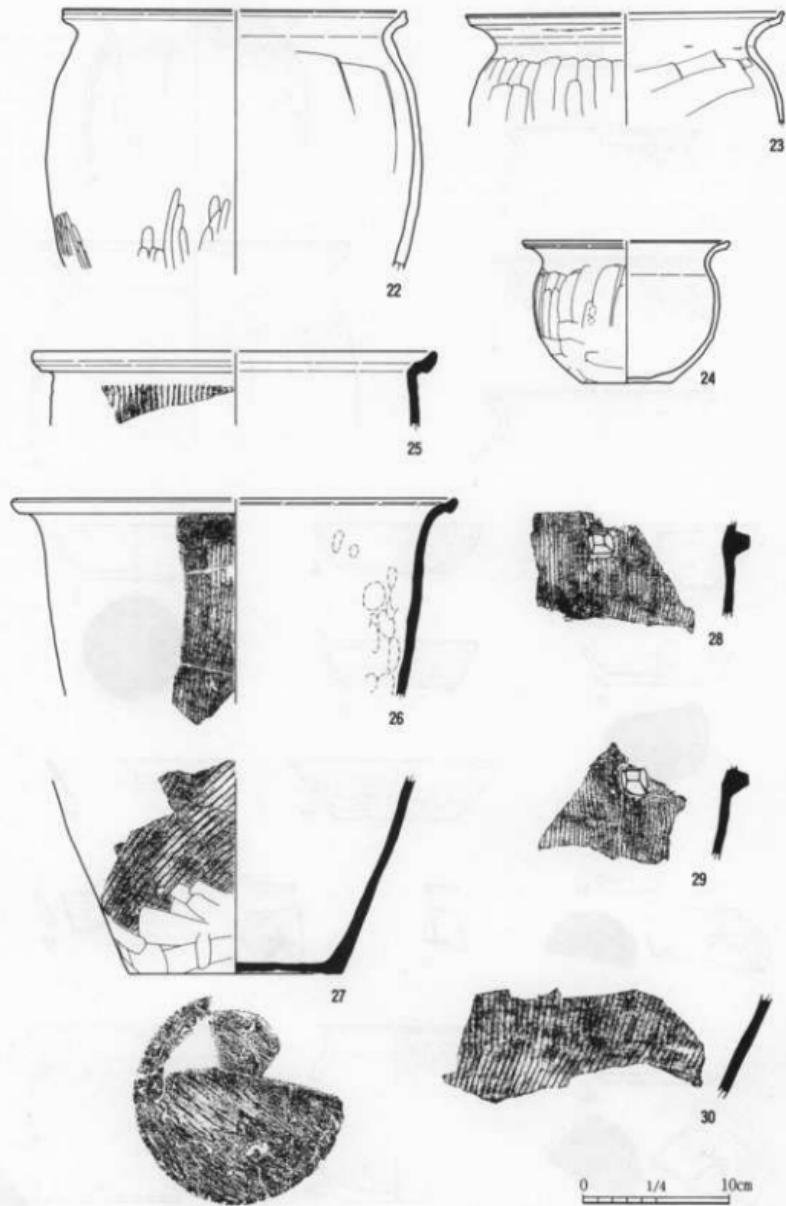
出土遺物は少なく、土師質土器壺2点、土師器壺1点を図示できたのみである。188は底部回転糸切り後、外周手持ちヘラケズリが加えられる。

026号壇立柱建物跡（第94図、第10表）

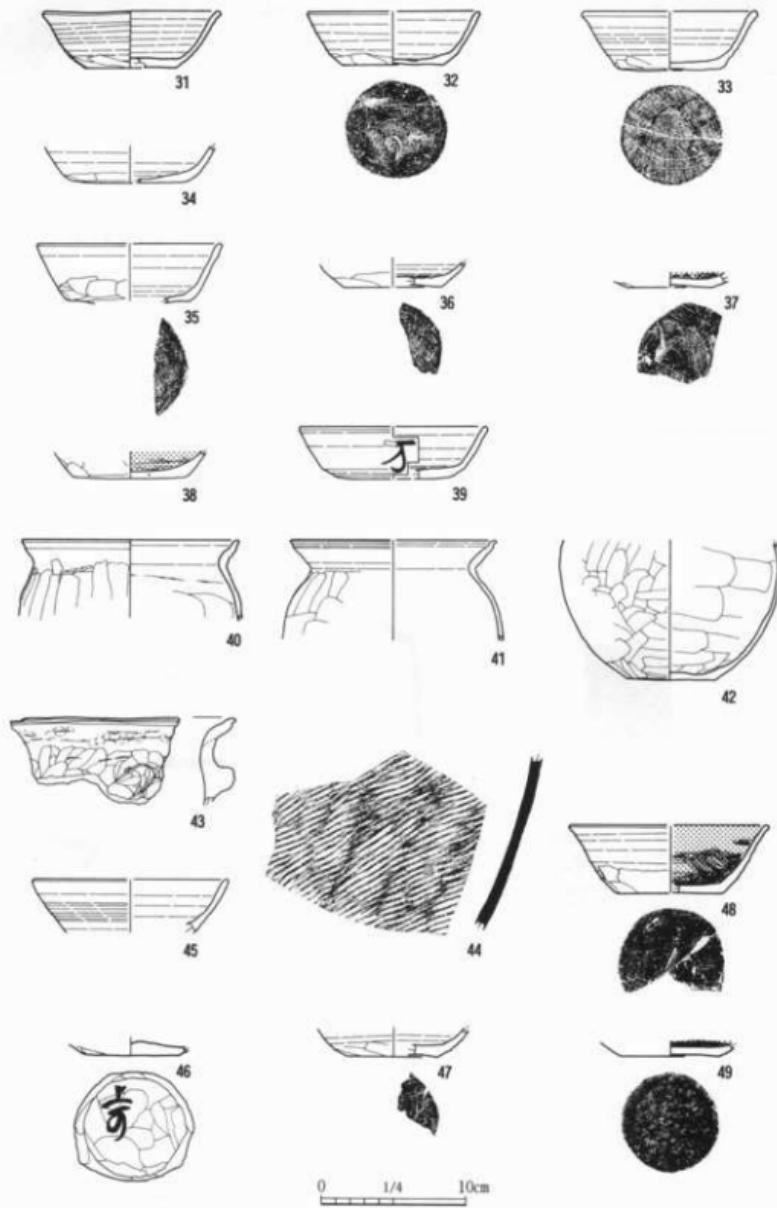
土師質土器壺1点のみが図示できた。190は体部は底部から直線的に開き、体部下端～底部には手持ちヘラケズリが加えられる。底部には判読不能であるが墨書きがなされている。



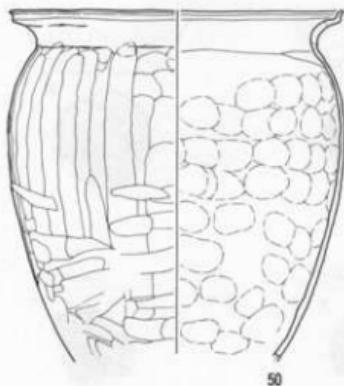
第82図 001(1~6)・003(7~21)号住居跡出土土器



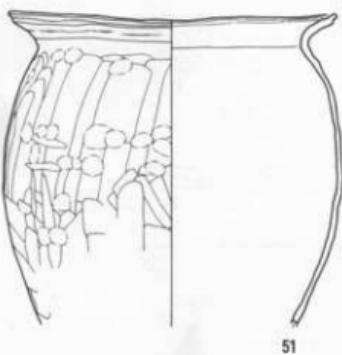
第83図 003号住居跡出土土器 (22~30)



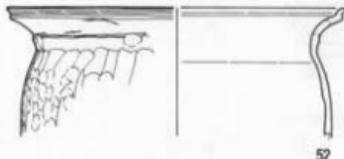
第84図 004(31~44)・005(45~49)号住居跡出土土器



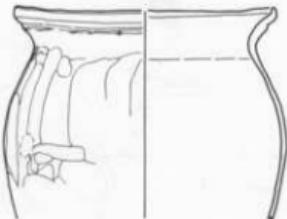
50



51



52



53



54



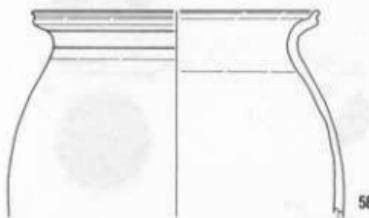
55



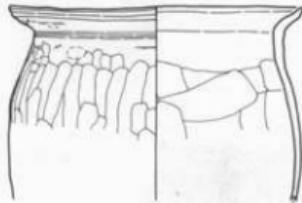
56



57

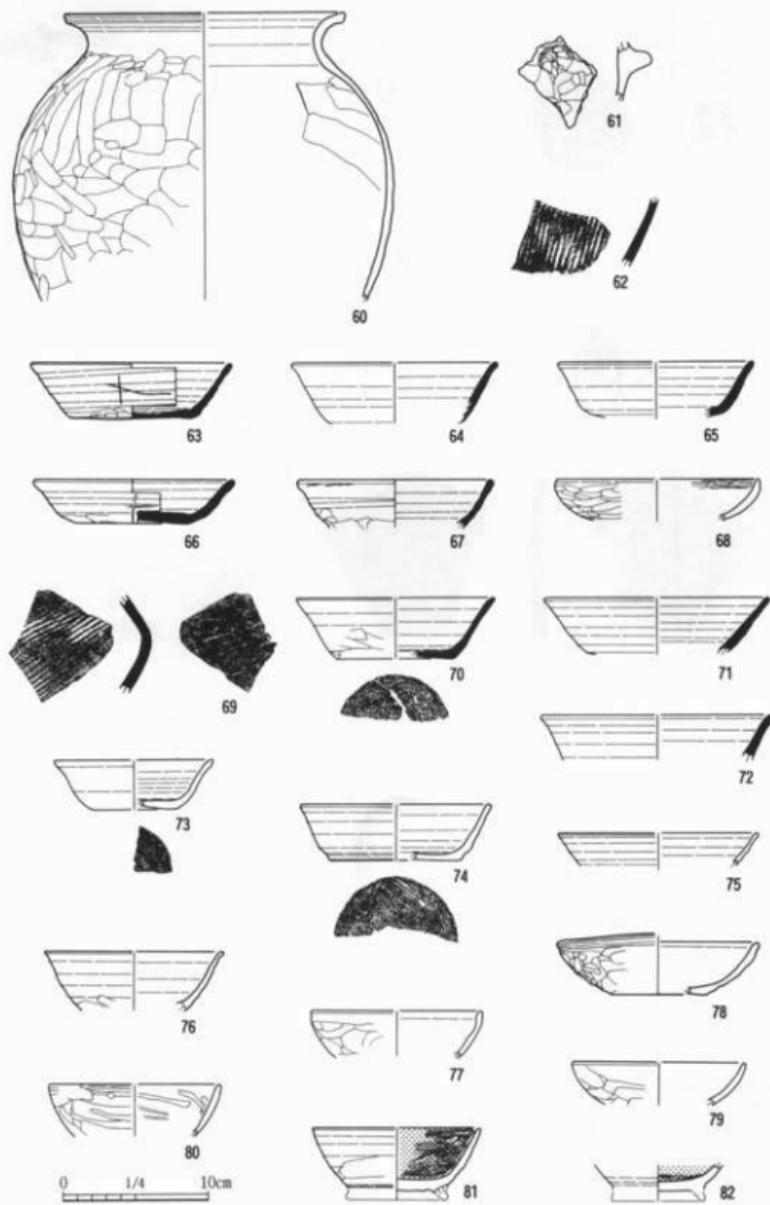


58

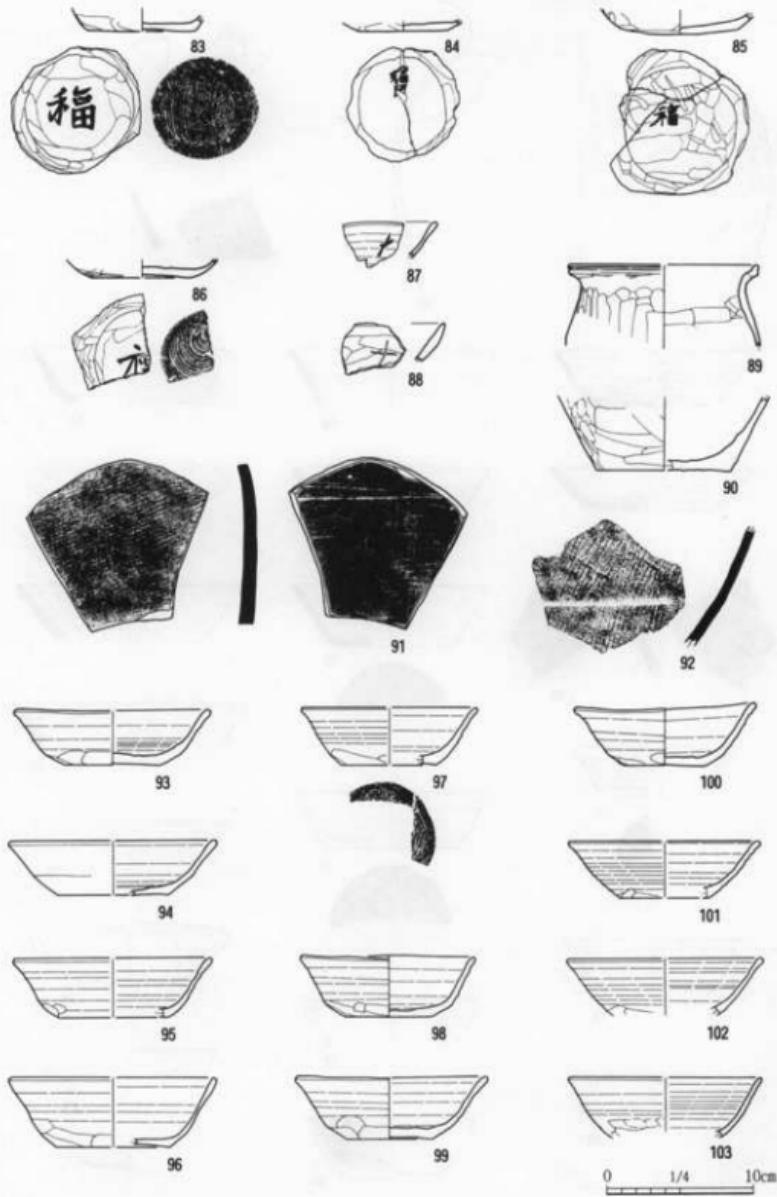


59

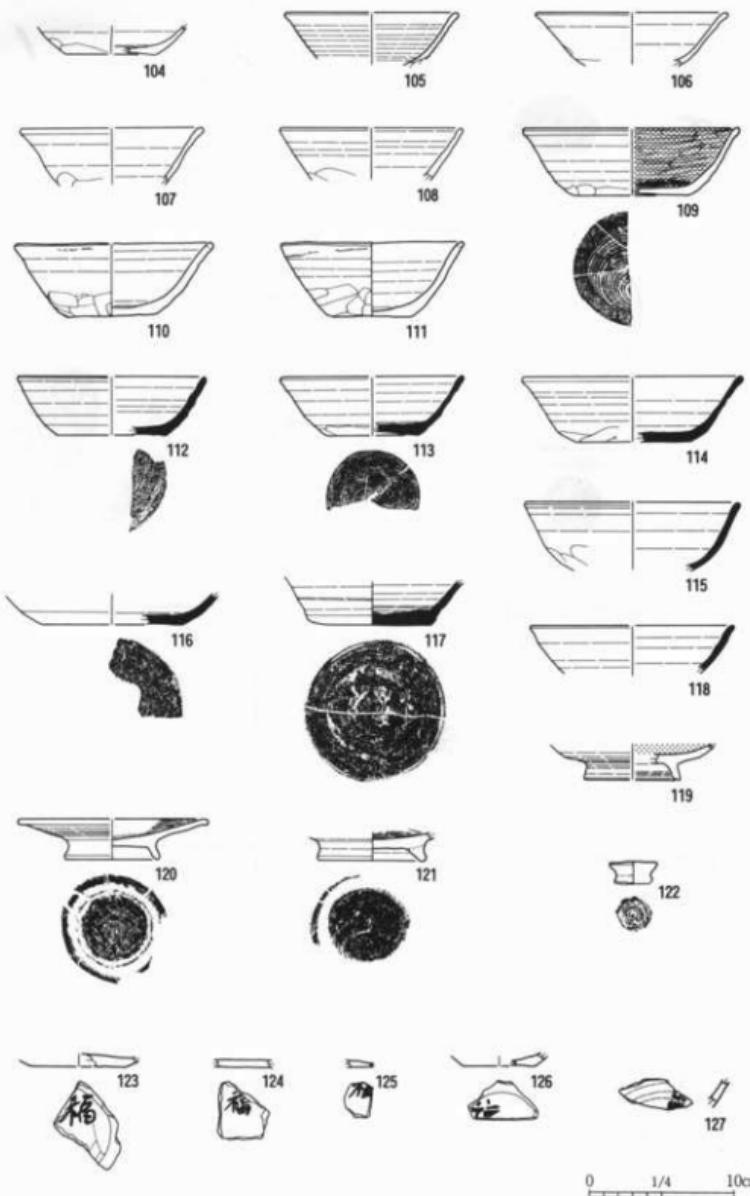
第85図 005(50~55)・006(56~59)号住居跡出土土器



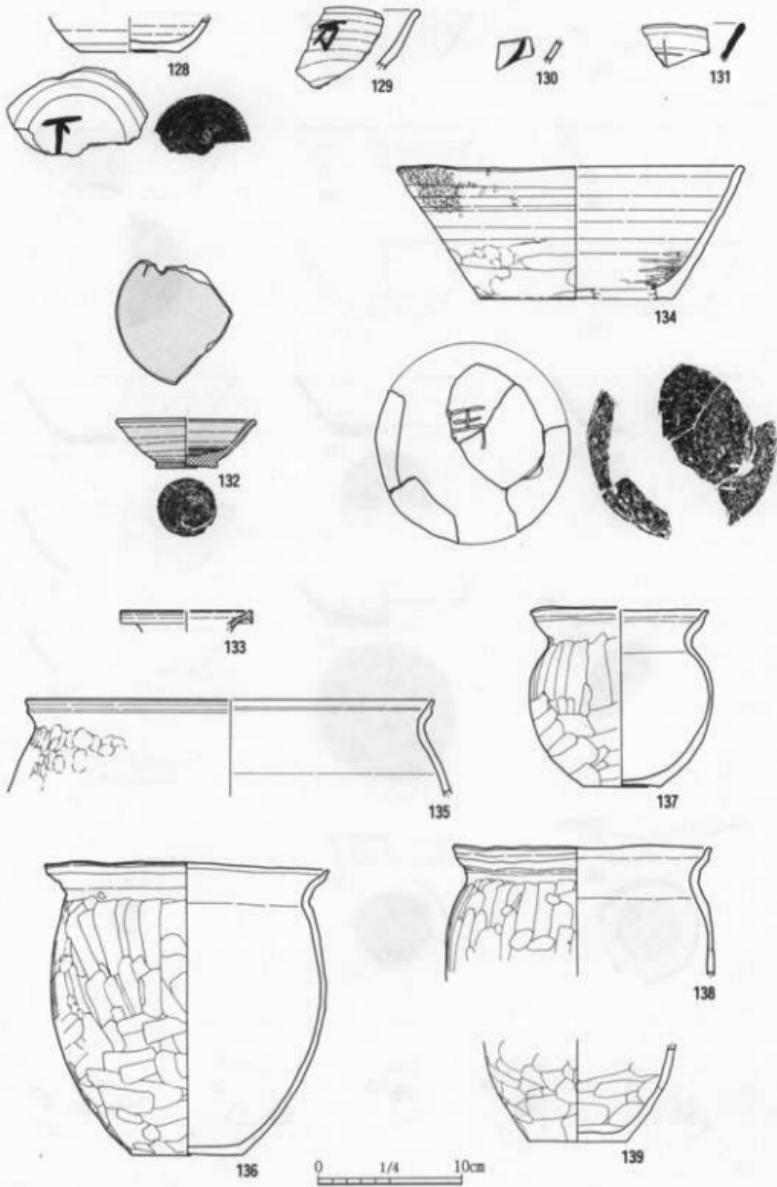
第86図 006(60~62)・007(63~69)・008(70~82)号住居跡出土土器



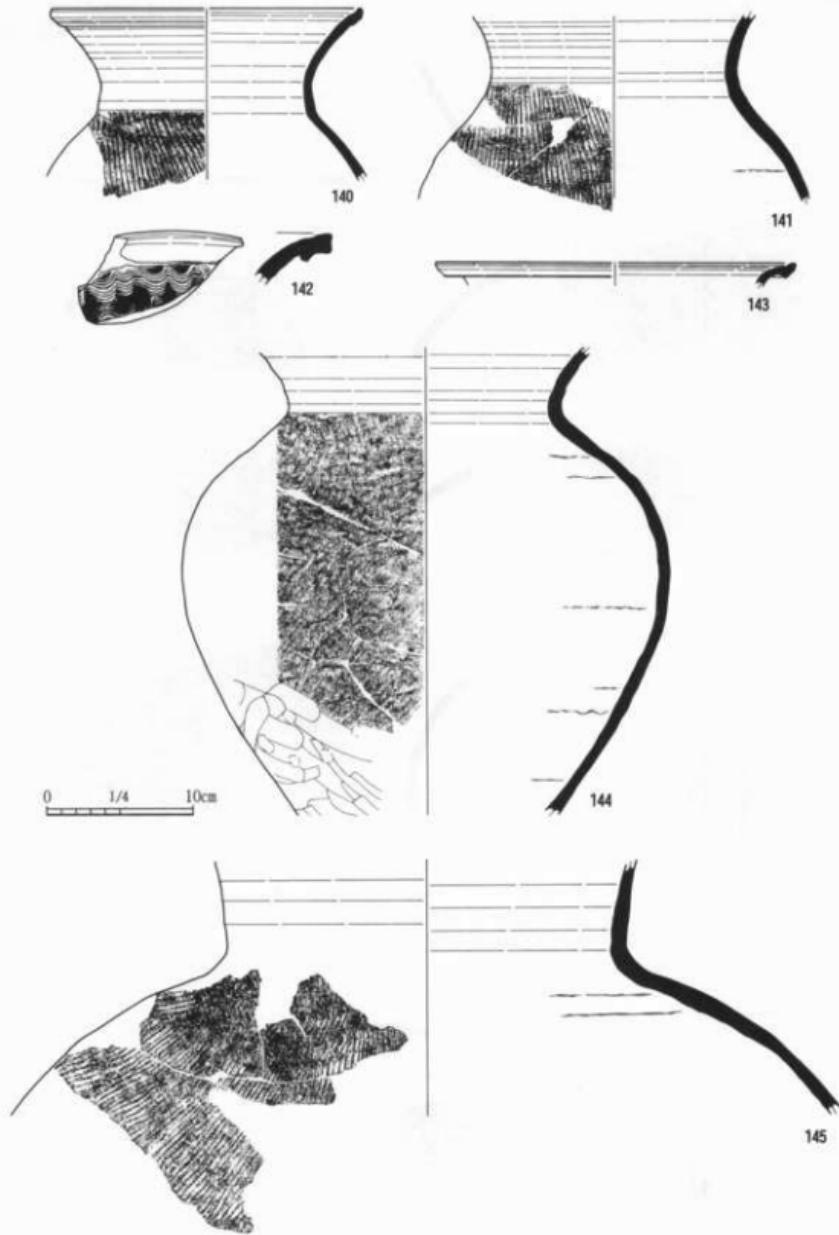
第87図 008(83~92)・010(93~103)号住居跡出土土器



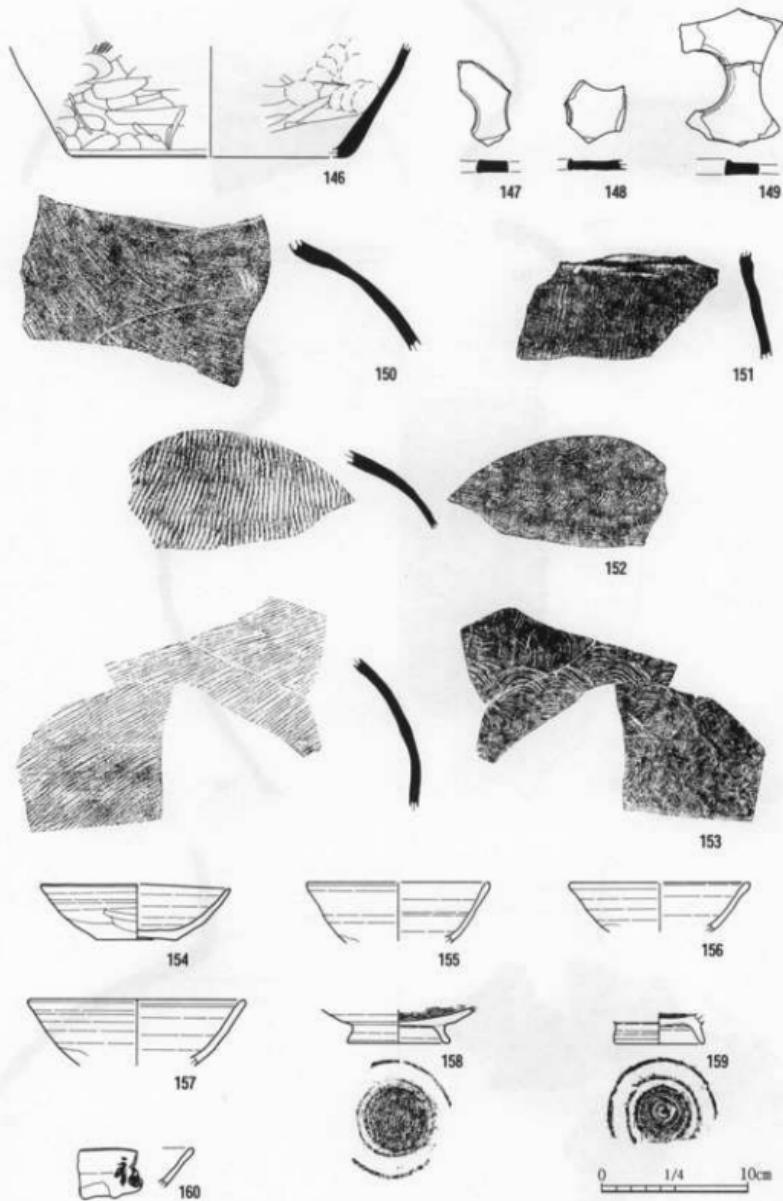
第88図 010号住居跡出土土器 (104~127)



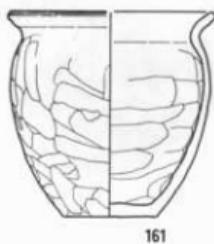
第89図 010号住居跡出土土器 (128~139)



第90図 010号住居跡出土土器 (140~145)



第91図 010(146~153)・011(154~160)号住居跡出土土器



161



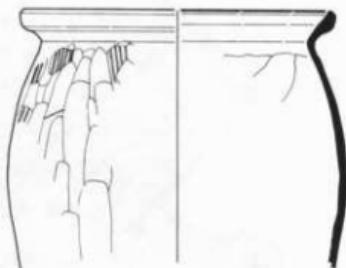
162



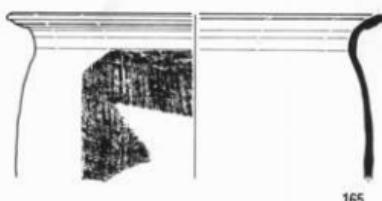
163



164



165

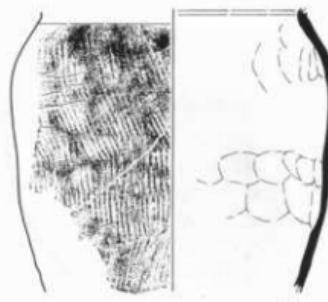


166

167

168

169



170



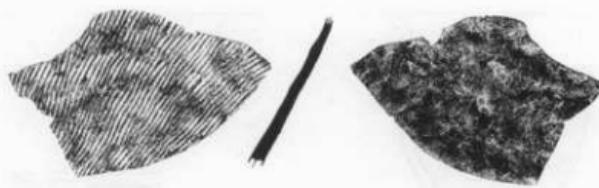
171

0 1/4 10cm

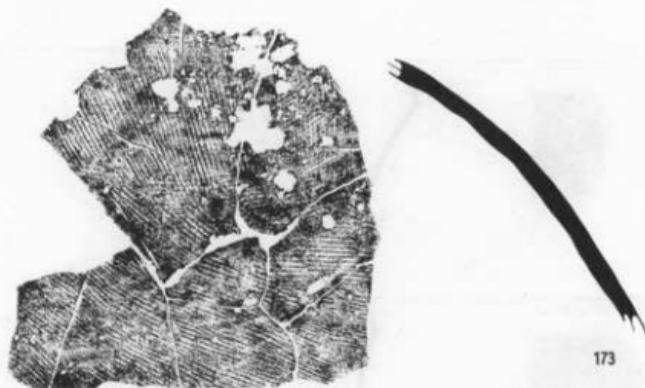


168

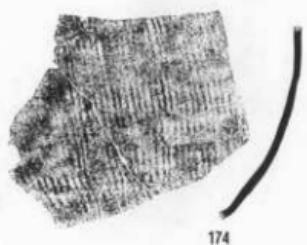
第92図 011号住居跡出土土器 (161~171)



172



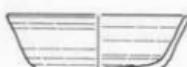
173



174



175



176



177



178



179



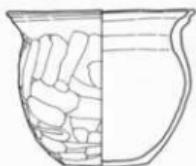
180



181

0 1/4 10cm

第93図 011(172~174)・013(175~181)号住居跡出土土器



182



184



183



185



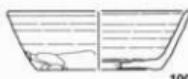
186



187



188



190



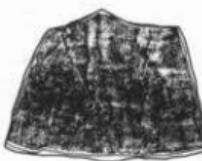
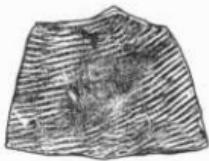
189



191



192



193

0 1/4 10cm

第94図 013(182~185)・024(186)・025(187~189)号住居跡・026号掘立柱建物跡(190)
C10(191)・C11(192)グリッド出土・表採(193)土器

第10表 泰良・平安時代土器観察表

| 遺構番号 | 博物館番号 | 種類・器種 | 法量(cm) 口・底・高 | | 造存度 | 成形・調整手法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|-------------|-------|---------|--------------------|---|-----|--|---------------|-----|------|------------|
| | | | 口 | 底 | | | | | | |
| 001号 住居跡 | 1 | 土師器 壺 | 11.0 7.2 3.8 | — | 4/6 | 口縁部一全体内面ヨコナデ 全体外面一底部手持ちヘラケズリ | 普通 | 青褐色 | 注連灰 | |
| | 2 | 土師器 壺 | 12.4 — — | — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ナダ | — | 良好 | 黑褐色 | |
| | 3 | 土師器 壺 | 14.8 — — | — | — | 口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ナダ | 石英 長石 粒 | 良好 | 暗赤褐色 | |
| | 4 | 土師器 壺 | 15.5 — — | — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ナダ | 碳化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | |
| | 5 | 土師器 壺 | 13.8 — — | — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ナダ | — | 良好 | 赤褐色 | |
| | 6 | 土師器 壺 | 20.8 — — | — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ナダ | — | 良好 | 赤褐色 | |
| 003号 住居跡 | 7 | 土師器 壺 | 13.0 7.2 4.3 | — | 6/6 | 口縁部ヨコナデ 全体外面一底部手持ちヘラケズリ 全体内面ナダ | — | 良好 | 暗赤褐色 | |
| | 8 | 土師器 壺 | 11.6 7.5 3.4 | — | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 全体外面一底部手持ちヘラケズリ 全体内面ナダ | 碳化鉄粒 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 9 | 土師質土器 壺 | 12.9 6.9 5.1 | — | 6/6 | 全体内外面ヨコナデ 底部下端一底部手持ちヘラケズリ、底 部ヘラ切り後外周手持ちヘラケズリ | — | 良好 | 赤褐色 | |
| | 10 | 土師質土器 壺 | — 7.1 — | — | 3/6 | 全体内外面ヨコナデ 底部回転糸切り無調整 | 石英 長石 粒 | 良好 | 深褐色 | |
| | 11 | 土師質土器 壺 | 10.9 — — | — | 1/6 | 全体内外面ヨコナデ | 碳化鉄粒 | 普通 | 褐色 | |
| | 12 | 土師質土器 壺 | 14.5 8.0 4.1 | — | 2/6 | 口縁部一全体内面ヨコナデ 全体外面一底部手持ちヘラケズリ | 石英 長石 粒 | 普通 | 暗黒褐色 | |
| | 13 | 須恵器 壺 | 12.4 — — | — | — | 全体内外面ヨコナデ | — | 普通 | 暗灰色 | |
| | 14 | 土師質土器 壺 | — 6.7 — | — | 2/6 | 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り後外周手持ちヘラケ ズリ | 石英 長石 粒 | 良好 | 橙褐色 | 底部墨書き「大」 |
| | 15 | 土師質土器 壺 | — — — | — | — | 底部回転糸切り後外周手持ちヘラケ ズリ | 碳化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | 底部墨書き「大」 |
| | 16 | 土師質土器 壺 | — — — | — | — | 体部下端一底部手持ちヘラケズリ | 石英 粒 | 普通 | 暗褐色 | 底部墨書き「大」 |
| | 17 | 土師質土器 壺 | — — — | — | — | 全体内外面ヨコナデ | — | 普通 | 暗褐色 | 全体外墨書き「土」? |
| | 18 | 土師質土器 壺 | — 7.1 — | — | 1/6 | 体部下端手持ちヘラケズリ 底部墨書き糸切り後外周手持ちヘラケ ズリ | 碳化鉄粒 | 良好 | 橙褐色 | 底部墨書き「大」 |
| | 19 | 土師器 壺 | 10.5 — — | — | — | 口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ナダ | 石英 長石 粒 | 普通 | 暗赤褐色 | |
| | 20 | 土師器 壺 | — 7.6 — | — | — | 底部外面一底部手持ちヘラケズリ 底部内面ヘラナダ | 碳化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 21 | 土師器 壺 | 14.8 — — | — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ナダ | — | 普通 | 暗灰褐色 | |
| | 22 | 土師器 壺 | 23.2 — — | — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 底部外面上半部ナダ下半部縦位ヘラ ミガキ、底部内面ヘラナダ | 石英 長石 粒 | 普通 | 暗褐色 | 常緑型 |
| | 23 | 土師器 壺 | 21.6 — — | — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ヘラナダ | 碳化鉄粒 | 良好 | 暗褐色 | |
| | 24 | 土師器 壺 | 14.3 6.1 9.9 | — | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 底部外面一底部手持ちヘラケズリ 底部内面ナダ | — | 良好 | 暗赤褐色 | |

| 送付番号 | 特許番号 | 機械・器種 | 法量(cm) 口・底・高 | 遺存度 | 成形・調整手法の特徴 | 粘土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|-------------|------|------------|--------------------|-----|---|--------------------|----|------|---------------|
| 003号 住居跡 | 25 | 便器器 実 | 27.4 — — | — | 口縁部ヨコナダ 胴部外面継位平行叩き目 胴部内面ナナ | | 不良 | 暗茶褐色 | |
| | 26 | 便器器 要 | 30.6 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナダ 胴部外面継位平行叩き目 胴部内面ナナ | | 良好 | 灰 色 | |
| | 27 | 便器器 実 | 14.6 — — | 3/6 | 体部外側位平行叩き目 胴部外面下端手持ちヘラケズリ 胴部内面ナナ、底部平行叩き目 | | 普通 | 褐 色 | |
| | 28 | 便器器 頭 | — — — | — | 胴部外面継位平行叩き目後一部ナナ 把手部貼り付け棒ヘラ状工具で面取 り、胴部内面ナナ | 石英粒 | 普通 | 黄灰色 | |
| | 29 | 便器器 頭 | — — — | — | 胴部外面継位平行叩き目 把手部貼り付け棒ヘラ状工具で面取 り、胴部内面ナナ | | 普通 | 黄灰色 | |
| | 30 | 便器器 実 | — — — | — | 胴部外面継位平行叩き目 胴部内面ナナ | 酸化鉄粒 | 普通 | 灰褐色 | |
| 004号 住居跡 | 31 | 土師質土器 环 | 11.9 5.1 3.9 | 4/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端一部手持ちヘラケズリ | | 良好 | 赤褐色 | |
| | 32 | 土師質土器 环 | 11.7 6.9 3.6 | 6/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部回 転系切り後外周手持ちヘラケズリ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 33 | 土師質土器 环 | 11.6 7.0 5.1 | 4/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部回 転系切り後外周手持ちヘラケズリ | 雲母粒 酸化鉄粒 | 良好 | 褐褐色 | |
| | 34 | 土師質土器 环 | — 8.0 | 2/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端一部手持ちヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 良好 | 暗褐色 | |
| | 35 | 土師質土器 环 | 12.5 8.4 5.0 | 2/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部回 転系切り後外周手持ちヘラケズリ | 石英粒 酸化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 36 | 土師質土器 环 | — 6.8 | 1/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部回 転系切り後外周手持ちヘラケズリ | 雲母粒 酸化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 37 | 土師質土器 环 | — 5.8 | 2/6 | 体部下端手持ちヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ、底部回転糸切 り後外周手持ちヘラケズリ | 石英粒 石英粒 | 普通 | 暗褐色 | 内黑 |
| | 38 | 土師質土器 环 | — 7.8 | 2/6 | 体部下端一部手持ちヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ | 石英粒 石英粒 | 普通 | 暗褐色 | 内黑 |
| | 39 | 土師質土器 环 | 12.5 8.2 3.6 | 2/6 | 体部内外面ヨコナダ 底部手持ちヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | 体部外面磨 「上方」 |
| | 40 | 土器器 実 | 14.6 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナダ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナナ | 酸化鉄粒 | 普通 | 暗茶褐色 | |
| | 41 | 土器器 要 | 14.0 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナダ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナナ | 酸化鉄粒 | 不良 | 暗赤褐色 | |
| | 42 | 土器器 要 | — 6.0 | 2/6 | 胴部外面一部手持ちヘラケズリ 胴部内面ナナ | 酸化鉄粒 | 良好 | 暗褐色 | |
| | 43 | 土器器 頭 | — — | — | 口縁部ヨコナダ 胴部外面ヘラケズリ後ナナ 胴部内面ナナ | 雲母粒 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 44 | 便器器 要 | — — | — | 胴部外面斜位平行叩き目 胴部内面ナナ | | 良好 | 黑灰色 | |
| 005号 住居跡 | 45 | 土師質土器 环 | 13.2 — — | 1/6 | 体部内面ヨコナダ | 石英粒 | 普通 | 暗茶褐色 | |
| | 46 | 土師質土器 环 | — 6.6 | 2/6 | 体部下端一部手持ちヘラケズリ | 雲母粒 石英粒 | 普通 | 褐色 | 底足墨書 「上方」 |
| | 47 | 土師質土器 环 | — 6.3 | — | 体部内外面ヨコナダ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部回 転糸切り後外周手持ちヘラケズリ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 48 | 土師質土器 环 | 13.3 7.2 4.5 | 3/6 | 体部外面ヨコナダ下端手持ちヘラケ ズリ、体部内面ヘラミガキ、底部回 転糸切り後外周手持ちヘラケズリ | 雲母粒 石英粒 酸化鉄粒 | 良好 | 明褐色 | 内黑 |
| | 49 | 土師質土器 环 | — 6.7 | 1/6 | 体部内面ヘラミガキ 底部回転糸切り後外周手持ちヘラケ ズリ | 雲母粒 石英粒 | 良好 | 明褐色 | 内黑 |

| 遺構番号 | 桝固 番号 | 種類・器種 | 法量(cm) 口・底・高 | 造存度 | 成形・調整手法の特徴 | 胎 土 | 焼成 | 色 調 | 備 考 |
|-------------|----------|----------|--------------------|-----|------------------------------------|-------------|----|------|---------------|
| 005号 住居跡 | 50 | 土師器 壺 | 23.1 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナダ | | 良好 | 明褐色 | |
| | 51 | 土師器 壺 | 22.3 — — | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナダ | 磁化铁粒 | 良好 | 暗赤褐色 | |
| | 52 | 土師器 壺 | 23.4 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナダ 胴部内面ナダ | 磁化铁粒 | 良好 | 茶褐色 | |
| | 53 | 土師器 壺 | 17.6 — — | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナダ | 磁化铁粒 | 良好 | 暗赤褐色 | |
| | 54 | 須恵器 壺 | 27.2 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外面側面平行叩き目 胴部内面ヘラナダ | 石英粒 | 普通 | 暗赤褐色 | |
| | 55 | 須恵器 瓶 | — — — | — | ヘラ状工具で面取り成形 | | 不良 | 黑褐色 | |
| 006号 住居跡 | 56 | 土師質土器 壺 | — — — | — | 体部外面ヘラケズリ | 磁化铁粒 | 普通 | 明褐色 | 底部墨書き「田」 |
| | 57 | 須恵器 高台付盤 | 14.0 — | — | 体部内外面ヨコナデ | 滑石粒 長石粒 | 不良 | 鉛色 | |
| | 58 | 土師器 壺 | 19.3 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部内面ナダ | 滑石粒 長石粒 | 普通 | 褐褐色 | 常規型 |
| | 59 | 土師器 壺 | 20.0 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナダ | 長石粒 磁化铁粒 | 良好 | 赤褐色 | |
| | 60 | 土師器 壺 | 19.4 — — | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナダ | 長石粒 | 普通 | 褐褐色 | |
| | 61 | 土師器 瓶 | — — — | — | 胴部外面ヘラケズリ後ナダ 胴部内面ヘラナダ | 石英粒 | 普通 | 茶褐色 | |
| | 62 | 須恵器 壺 | — — — | — | 胴部外面斜面平行叩き目 胴部内面同心円状叩き後ナダ | | 良好 | 灰褐色 | |
| 007号 住居跡 | 63 | 須恵器 壺 | 14.4 8.4 3.8 | 6/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端—底部手持ちヘラケズリ | 滑石粒 | 普通 | 灰褐色 | 体部外面燒成後墨書き「十」 |
| | 64 | 須恵器 壺 | 13.9 — — | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ | 滑石粒 | 不良 | 暗赤褐色 | |
| | 65 | 須恵器 壺 | 13.2 — — | — | 体部内外面ヨコナデ 底部圓軸ヘラケズリ | | 良好 | 灰褐色 | |
| | 66 | 須恵器 壺 | 13.6 7.8 2.9 | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端—底部手持ちヘラケズリ | 铁分粒 | 普通 | 青灰褐色 | 体部外面燒成後墨書き「十」 |
| | 67 | 須恵器 壺 | 13.1 — — | 3/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | 长石粒 | 良好 | 暗灰褐色 | 外面降灰釉 |
| | 68 | 土師器 壺 | 13.8 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ラミガキ | | 普通 | 赤褐色 | |
| | 69 | 須恵器 壺 | — — — | — | 胴部外面斜面平行叩き目 胴部内面同心円状叩き後ナダ | | 良好 | 白灰褐色 | 外面降灰釉 |
| 008号 住居跡 | 70 | 須恵器 壺 | 14.5 8.1 4.1 | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | 滑石粒 | 普通 | 黄灰褐色 | |
| | 71 | 須恵器 壺 | 15.2 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端—底部圓軸ヘラケズリ | 滑石粒 | 良好 | 暗灰褐色 | 火だしき痕 |
| | 72 | 須恵器 壺 | 15.8 — — | — | 体部内外面ヨコナデ | 滑石粒 | 不良 | 褐褐色 | |
| | 73 | 土師質土器 壺 | 10.7 5.6 3.4 | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ 底部圓軸水切り後外周手持ちヘラケズリ | 石英粒 | 普通 | 暗赤褐色 | |
| | 74 | 土師質土器 壺 | 12.9 8.9 3.8 | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ 底部圓軸水切り後外周手持ちヘラケズリ | | 良好 | 明褐色 | 凹盤状高台 |

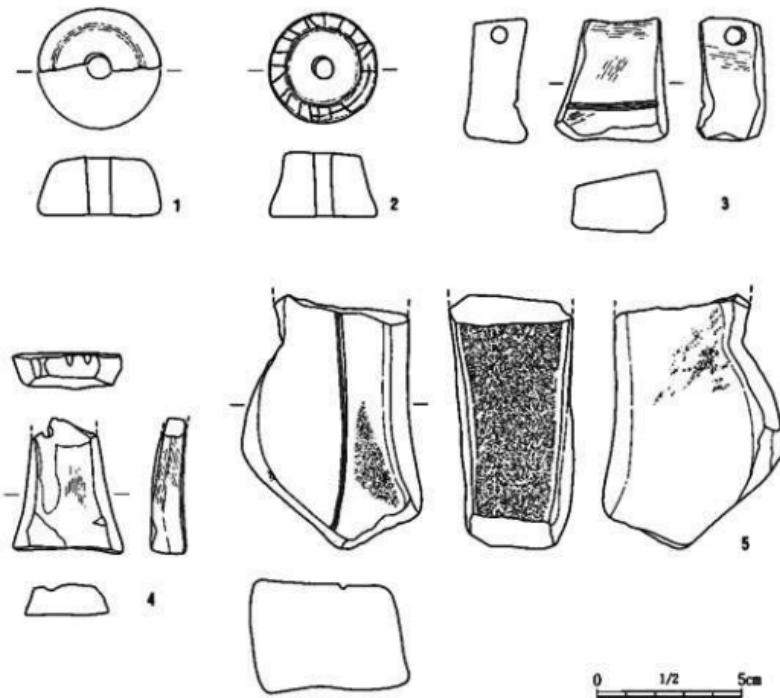
| 遺構番号 | 種類 番号 | 種類・器種 | 法量(cm) 口・底・高 | 遺存度 | 成形・調査手法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|-------------|----------|---------------|--------------------|-----|--|---------------------|----|------|-------------------|
| 008号 住居跡 | 75 | 土師質土器 壺 | 14.4 — — | — | 体部内外面ヨコナデ | | 普通 | 橙褐色 | |
| | 76 | 土師質土器 壺 | 12.0 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちハラケズリ | 酸化鉄粒 | 普通 | 褐 色 | |
| | 77 | 土師器 壺 | 11.6 — — | 1/6 | 口縁部一全体内面ヨコナデ 体部外面ハラケズリ 体部内面ハラミガキ | 青 磁 粒 長石粒 | 普通 | 暗茶褐色 | |
| | 78 | 土師器 壺 | 13.4 6.4 4.1 | 2/6 | 口縁部一全体内面ヨコナデ 体部外面一底部手持ちハラケズリ | 酸化鉄粒 | 良好 | 褐 色 | |
| | 79 | 土師器 壺 | 11.7 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ハラケズリ 体部内面ナデ | 長石粒 酸化鉄粒 海藻骨灰 | 普通 | 橙褐色 | |
| | 80 | 土師器 壺 | 11.7 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外面ハラケズリ 体部内面ハラミガキ | | 良好 | 茶褐色 | |
| | 81 | 土師質土器 高台付壺 | 11.4 — — | 2/6 | 体部外面ヨコナデ 体部下端一底部手持ちハラケズリ 体部内面ハラミガキ | 酸化鉄粒 | 普通 | 褐 色 | 内黒 |
| | 82 | 土師質土器 高台付壺 | — — — | 2/6 | 体部外面ヨコナデ 体部内面ハラミガキ 底部凹凸ハラケズリ | 酸化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | 内黒 |
| | 83 | 土師質土器 壺 | 7.4 — — | 2/6 | 体部下端手持ちハラケズリ 底部停止系切り後外周手持ちハラケズリ | 酸化鉄粒 | 普通 | 褐 色 | 底部墨書き 「福」 |
| | 84 | 土師器 壺 | 6.3 — — | 2/6 | 体部下端一底部手持ちハラケズリ | 青 磁 粒 長石粒 | 良好 | 橙褐色 | 底部墨書き 「福」 |
| | 85 | 土師器 壺 | 8.0 — — | 2/6 | 体部下端一底部手持ちハラケズリ 体部内面ナデ | | 良好 | 褐 色 | 底部墨書き 「福」 |
| | 86 | 土師質土器 壺 | 6.8 — — | 1/6 | 体部下端手持ちハラケズリ 底部凹凸系切り後外周手持ちハラケズリ | 石英粒 長石粒 | 良好 | 橙褐色 | 底部墨書き 「福」 |
| | 87 | 土師質土器 壺 | — — — | — | 体部内外面ヨコナデ | | 普通 | 橙褐色 | 体部外面墨書き 「十」 |
| | 88 | 土師器 壺 | — — — | — | 口縁部ヨコナデ 体部外周手持ちハラケズリ | | 普通 | 黑褐色 | 体部外周成形後墨書き 「十」 |
| | 89 | 土師器 壺 | 12.7 — — | 3/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外周手持ちハラケズリ 制部内面ハラケナデ | 酸化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | |
| | 90 | 土師器 壺 | 9.1 — — | 1/6 | 制部外周横位平行叩き目 制部内面ナデ | | 普通 | 赤褐色 | |
| | 91 | 須恵器 壺 | — — — | — | 制部外周斜位平行叩き目 制部内面ナデ | | 良好 | 灰白色 | 転用鏡 |
| | 92 | 須恵器 壺 | — — — | — | 制部外周斜位平行叩き目 制部内面ナデ | 石英粒 | 普通 | 绿灰色 | |
| 010号 住居跡 | 93 | 土師質土器 壺 | 13.0 6.5 3.6 | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端一底部手持ちハラケズリ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 94 | 土師質土器 壺 | 13.8 7.4 3.8 | 4/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端一底部手持ちハラケズリ | 酸化鉄粒 | 不良 | 黄褐色 | |
| | 95 | 土師質土器 壺 | 13.2 7.2 4.0 | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端一底部手持ちハラケズリ | | 良好 | 赤褐色 | |
| | 96 | 土師質土器 壺 | 13.7 7.7 4.7 | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端一底部手持ちハラケズリ | 長石粒 酸化鉄粒 | 不良 | 茶褐色 | |
| | 97 | 土師質土器 壺 | 11.8 6.5 3.8 | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちハラケズリ、底部回転系切り後外周手持ちハラケズリ | | 普通 | 灰褐色 | |
| | 98 | 土師質土器 壺 | 11.9 6.0 — | 6/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端一底部手持ちハラケズリ | | 普通 | 赤褐色 | |
| | 99 | 土師質土器 壺 | 13.0 5.9 4.2 | 4/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちハラケズリ | 酸化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | |

| 遺構番号 | 種別 器種番号 | 種類・器種 | 法蓋(cm) 口・底・高 | 蓋存度 | 成形・開製手法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|-------------|------------|---------------|--------------------|-----|---|--------------------|----|------|------------------|
| 010号 住居跡 | 100 | 土師質土器 坏 | 12.1 5.4 4.2 | 6/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端~底部手持ちヘラケズリ | 長石粒 | 普通 | 暗赤褐色 | 火だしき痕 |
| | 101 | 土師質土器 坏 | 12.8 6.1 3.9 | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端~底部手持ちヘラケズリ | | 良好 | 明褐色 | |
| | 102 | 土師質土器 坏 | 13.2 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | 長石粒 | 普通 | 褐色 | |
| | 103 | 土師質土器 坏 | 13.0 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 普通 | 黑褐色 | |
| | 104 | 土師質土器 坏 | — 6.2 | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端~底部手持ちヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 不良 | 黄褐色 | |
| | 105 | 土師質土器 坏 | 11.7 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ | | 良好 | 赤褐色 | |
| | 106 | 土師質土器 坏 | 13.1 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | 石英粒 酸化鉄粒 | 不良 | 褐色 | |
| | 107 | 土師質土器 坏 | 12.2 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 108 | 土師質土器 坏 | 12.5 — — | — | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 不良 | 暗赤褐色 | |
| | 109 | 土師質土器 坏 | 14.6 7.7 4.7 | 3/6 | 体部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ | 雲母粒 海綿骨灰 | 普通 | 暗褐色 | 内黒 |
| | 110 | 土師器 坏 | 13.5 6.2 5.0 | 5/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端~底部手持ちヘラケズリ | | 普通 | 暗赤褐色 | |
| | 111 | 土師器 坏 | 12.4 5.5 5.0 | 5/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端~底部手持ちヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 普通 | 赤褐色 | |
| | 112 | 須恵器 坏 | 12.7 7.4 4.0 | 3/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端~底部回転ヘラケズリ | | 良好 | 橙褐色 | 火だしき痕 |
| | 113 | 須恵器 坏 | 12.5 6.3 4.0 | 4/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ | 長石粒 | 良好 | 橙褐色 | |
| | 114 | 須恵器 坏 | 15.0 7.9 4.5 | 2/6 | 口縁部ヨコナデ 体部外周~底部手持ちヘラケズリ | 雲母粒 | 普通 | 暗青灰色 | |
| | 115 | 須恵器 坏 | 14.6 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちヘラケズリ | 長石粒 | 普通 | 暗灰色 | |
| | 116 | 須恵器 坏 | — 9.6 — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端~底部回転ヘラケズリ | 雲母粒 酸化鉄粒 | 不良 | 黑色 | |
| | 117 | 須恵器 坏 | — 8.0 — | 3/6 | 体部内外面ヨコナデ 底部ヘラ切り後ナガ | | 普通 | 暗赤灰色 | |
| | 118 | 須恵器 坏 | 13.8 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ | 石英粒 | 不良 | 暗灰色 | |
| | 119 | 土師質土器 高台付皿 | — 6.4 | 2/6 | 体部外周~底部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ | 雲母粒 石英粒 酸化鉄粒 | 良好 | 暗褐色 | 内黒 |
| | 120 | 土師質土器 高台付皿 | 12.8 6.2 2.7 | 3/6 | 口縁部外周~高台ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 底部回転糸切り後外周ヨコナデ | 長石粒 酸化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | |
| | 121 | 土師質土器 高台付皿 | — 7.4 — | 2/6 | 高台~底部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ | 酸化鉄粒 石英粒 | 普通 | 橙褐色 | |
| | 122 | 土師質土器 蓋 | — 1.6 — | — | 外面ヨコナデ | | 良好 | 褐色 | 接着のため 環状の条線あり |
| | 123 | 土師質土器 坏 | — 6.6 — | — | 体部下端手持ちヘラケズリ 底部回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ | 雲母粒 | 良好 | 褐色 | 底部墨書き |
| | 124 | 土師質土器 坏 | — — — | — | 底部手持ちヘラケズリ | 雲母粒 | 普通 | 明褐色 | 底部墨書き 「福」 |

| 遺物番号 | 埋蔵番号 | 種類・器種 | 注量(cm) 口・底・高 | 遺存度 | 成形・調査手法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|-------------|------|-------------|---------------------|---------------|--|--------------------|----|------|------------------------|
| 010号 住居跡 | 125 | 土師質土器 环 | — — — | — — — | 底部手持ちヘラケズリ | | 普通 | 明褐色 | 底部墨書き「福」 |
| | 126 | 土師質土器 环 | — — — | 5.0 — — | 底部下端-底部手持ちヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 不良 | 明褐色 | 底部墨書き「福」 |
| | 127 | 土師質土器 环 | — — — | — — — | 体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ | 酸化鉄粒 | 良好 | 茶褐色 | 体部外面墨書き「福」 |
| | 128 | 土師質土器 环 | 6.8 — — | 2/6 — — | 体部内外面ヨコナデ 底部内側回転ヘラケズリ 底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ | 石英粒 長石粒 酸化鉄粒 | 普通 | 明褐色 | 底部墨書き「下」 内面火打すき痕 |
| | 129 | 土師質土器 环 | — — — | — — — | 体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ 底部内面ヘラミガキ | 長石粒 | 良好 | 灰褐色 | 体部外面墨書き「万」 |
| | 130 | 土師質土器 环 | — — — | — — — | 体部内外面ヨコナデ | | 普通 | 橙褐色 | 体部外面墨書き「□」 |
| | 131 | 須恵器 环 | — — — | — — — | 体部内外面ヨコナデ | 铁分粒 | 普通 | 暗灰色 | 体部外面焼成後輪削? 十 |
| | 132 | 縁輪陶器 碗 | 9.4 4.2 4.3 | — — — | 体部内外面ヨコナデ 底部回転水切り無調整 | | 普通 | 綠黄色 | 京都産 内面糊附? |
| | 133 | 灰釉陶器 灰灰壺 | 8.9 — — | — — — | 口縁部-腹部内外面ヨコナデ | | 良好 | 灰色 | |
| | 134 | 土師質土器 杯 | 23.6 13.3 9.1 | — — — | 体部外面上半ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ 底部内面下端ヘラミガキ | | 普通 | 暗褐色 | 底部焼成前 墨書き「□」 油煙痕 |
| | 135 | 土師器 甕 | 28.0 — — | — — — | 口縁部ヨコナデ 体部外壁指頭押圧、ナデ 胴部内面ヘラナデ | 石英粒 | 普通 | 乳白色 | |
| | 136 | 土師器 甕 | 19.5 7.5 19.7 | — — — | 口縁部ヨコナデ 胴部外壁-底部ヘラケズリ 胴部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 良好 | 暗赤褐色 | |
| | 137 | 土師器 甕 | 12.6 5.3 12.1 | — — — | 口縁部ヨコナデ 胴部外壁-底部ヘラケズリ 胴部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 良好 | 赤褐色 | |
| | 138 | 土師器 甕 | 17.4 — — | — — — | 口縁部ヨコナデ 胴部外壁ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ | 酸化鉄粒 | 普通 | 暗褐色 | |
| | 139 | 土師器 甕 | 6.7 — — | — — — | 胴部外壁-底部ヘラケズリ 胴部内面ナデ | | 普通 | 橙褐色 | |
| | 140 | 須恵器 甕 | 21.2 — — | — — — | 口縁部ヨコナデ 体部外壁被壓印き目 胴部内面ナデ | 酸化鉄粒 | 普通 | 赤褐色 | |
| | 141 | 須恵器 甕 | — — — | — — — | 口縁部ヨコナデ 胴部外壁被壓印き目 胴部内面ナデ | | 良好 | 灰色 | |
| | 142 | 須恵器 甕 | — — — | — — — | 口縁部ヨコナデ、繊維波状文 | 雲母粒 | 普通 | 灰褐色 | |
| | 143 | 須恵器 甕 | 24.6 — — | — — — | 口縁部ヨコナデ | | 普通 | 暗灰色 | |
| | 144 | 須恵器 甕 | — — — | — — — | 口縁部ヨコナデ 胴部外壁被壓印き目 胴部内面ナデ | | 普通 | 暗灰色 | |
| | 145 | 須恵器 甕 | — — — | — — — | 口縁部ヨコナデ 胴部外壁被壓印き目 胴部内面ナデ | 長石粒 | 不良 | 黑色 | |
| | 146 | 須恵器 甕 | 19.2 — — | — — — | 胴部外面上半斜削平行叩き目 胴部内面ナデ | 石英粒 | 良好 | 綠灰色 | |
| | 147 | 須恵器 甕 | — — — | — — — | ヘラ状工具で面取り | 酸化鉄粒 | 不良 | 茶褐色 | |
| | 148 | 須恵器 甕 | — — — | — — — | ヘラ状工具で面取り | 長石粒 雲母粒 | 不良 | 茶褐色 | |
| | 149 | 須恵器 甕 | — — — | — — — | ヘラ状工具で面取り | 雲母粒 | 普通 | 暗青灰色 | |

| 遺構番号 | 井筒番号 | 種類・器種 | 法量(cm) 口・底・高 | 遺存度 | 成形・調製手法の特徴 | 胎 土 | 焼成 | 色 調 | 備 考 |
|-------------|------|---------------|---------------------|--------|--|--------------|----|-------|--------------|
| 010号 住居跡 | 150 | 須恵器 壺 | — — — — | — — | 腹部外面斜位平行叩き後一部ナデ 胴部内面ナデ | 長 石 粒 | 良好 | 青灰 色 | |
| | 151 | 須恵器 壺 | — — — — | — — | 腹部外面縦位平行叩き目 胴部内面ナデ | | 普通 | 暗赤褐色 | |
| | 152 | 須恵器 壺 | — — — — | — — | 腹部外面縦位平行叩き目 胴部内面同心内状叩き後一部ナデ | 長 石 粒 | 良好 | 暗灰 色 | 外腹降灰釉 |
| | 153 | 須恵器 壺 | — — — — | — — | 腹部外面斜位平行叩き後一部ナデ 胴部内面同心内状叩き後一部ナデ | 铁 分 粒 | 良好 | 灰 色 | |
| 011号 住居跡 | 154 | 土師質土器 壺 | 12.8 5.5 3.8 | 5/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちラケゼリ | 鐵化鉄粒 | 普通 | 褐 色 | |
| | 155 | 土師質土器 壺 | 12.6 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちラケゼリ | | 普通 | 暗褐 色 | |
| | 156 | 土師質土器 壺 | 12.1 — — | 2/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちラケゼリ | 雲母 粒 | 普通 | 褐 色 | |
| | 157 | 土師質土器 壺 | 14.7 — — | 1/6 | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちラケゼリ | 鐵化鉄粒 | 普通 | 灰褐 色 | |
| | 158 | 土師質土器 高台付壺 | — 7.0 | 3/6 | 口縁部外面～高台部ヨコナデ 胴部内面ヘラミガキ、底部圓板未切 り後外周回転ヘラケゼリ | 長石 粒 鐵化鉄粒 | 普通 | 棕褐 色 | |
| | 159 | 土師質土器 高台付壺 | — 6.0 | 2/6 | 体部内面ヘラミガキ 体部外面～底部ヨコナデ | 鐵化鉄粒 | 普通 | 棕褐 色 | |
| | 160 | 土師質土器 壺 | — — — | — | 体部内外面ヨコナデ 体部下端手持ちラケゼリ | 長石 粒 | 普通 | 暗褐褐色 | 体部外表面 「福」 |
| | 161 | 土師器 壺 | 13.9 6.3 14.2 | 4/6 | 口縁部ヨコナデ 胴部外面～底部ヘラケゼリ 胴部内面ナデ | 鐵化鉄粒 | 普通 | 乳 棕 色 | |
| | 162 | 土師器 壺 | 23.8 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケゼリ 胴部内面ヘラナデ | 石英 粒 長石 粒 | 普通 | 暗赤褐色 | |
| | 163 | 灰陶陶器 長頸壺 | 9.8 — — | — | 口縁部～頸部内外面ヨコナデ | | 良好 | 灰 色 | |
| | 164 | 須恵器 壺 | 19.2 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外面縦位平行叩き目 胴部内面ヘラナデ | | 普通 | 赤褐 色 | |
| | 165 | 須恵器 壺 | 25.4 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外面縦位平行叩き後一部ナデ 胴部内面ナデ | 铁 分 粒 | 良好 | 灰 色 | |
| | 166 | 須恵器 壺 | 24.6 — — | — | 口縁部ヨコナデ | 雲母 粒 | 普通 | 暗灰 色 | |
| | 167 | 須恵器 壺 | 23.2 — — | — | 口縁部ヨコナデ | 石英 粒 長石 粒 | 普通 | 暗灰 色 | |
| | 168 | 須恵器 壺 | 30.8 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外面縦位平行叩き目 | | 良好 | 灰 色 | |
| | 169 | 須恵器 壺 | 20.9 — — | — | 口縁部ヨコナデ 胴部外面縦位平行叩き後ヘラケゼリ 胴部内面ナデ | 鐵化鉄粒 | 不良 | 暗褐褐色 | |
| | 170 | 須恵器 壺 | — — — | 2/6 | 胴部外面縦位平行叩き目 胴部内面ナデ | 鐵化鉄粒 | 不良 | 棕褐 色 | |
| | 171 | 須恵器 瓶 | — — — | — | ヘラ状工具で面取り | | 普通 | 暗茶褐色 | |
| | 172 | 須恵器 壺 | — — — | — | 胴部斜位平行叩き目 胴部同心内状叩き後一部ナデ | | 良好 | 黑灰 色 | |
| | 173 | 須恵器 壺 | — — — | — | 胴部外面平行叩き後一部ナデ 胴部内面ナデ | 雲母 粒 | 不良 | 灰褐 色 | 2次火熱 |
| | 174 | 須恵器 壺 | — — — | — | 胴部外面平行叩き後一部ナデ 胴部内面ナデ | 雲母 粒 长石 粒 | 不良 | 黄褐 色 | |

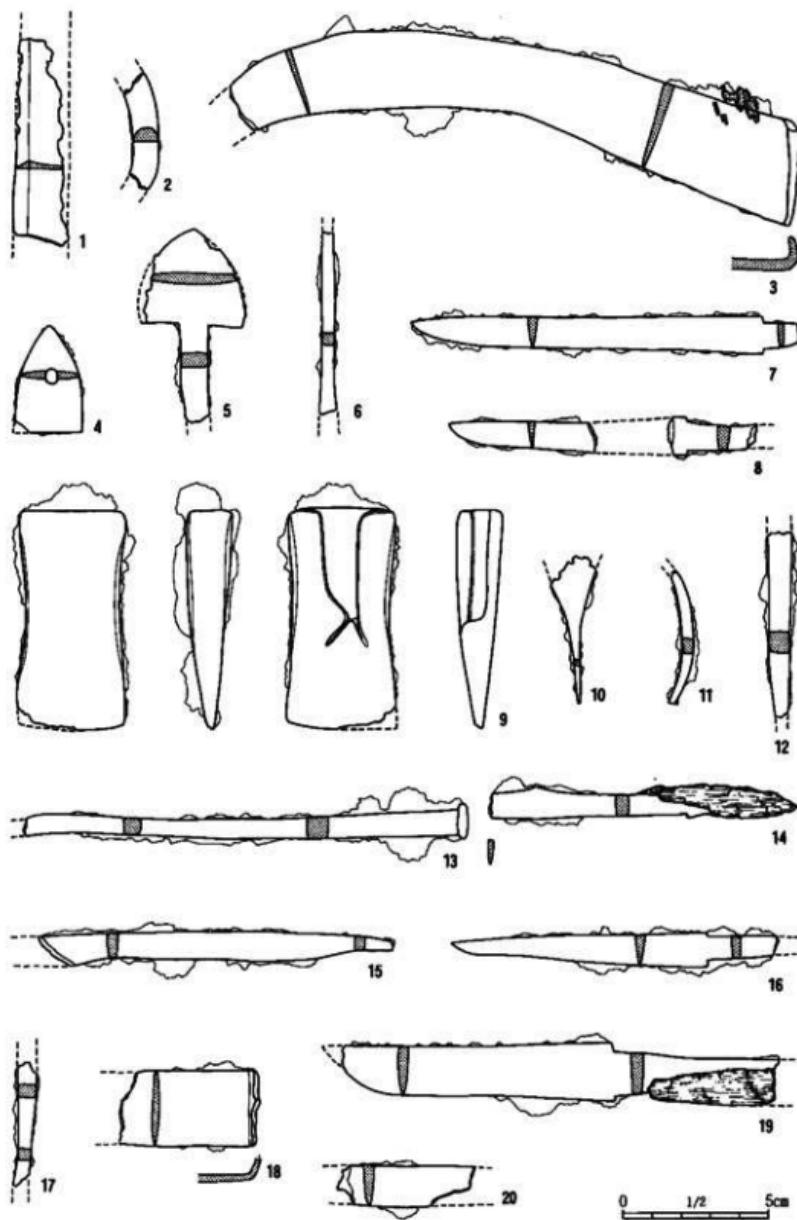
| 遺構番号 | 辨認番号 | 種類・器種 | 注意(㎝) 口・底・高 | 遺存度 | 成形・調整手法の特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|--------------------|------|------------|---------------------|-----|--|--------------|----|--------|----------|
| 013号 住居跡 | 175 | 土師質土器 环 | 12.1 6.8 4.0 | 4/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ | 焼化鉄粒 | 普通 | 明褐色 | |
| | 176 | 土師質土器 环 | 12.3 8.4 3.8 | 3/6 | 体部内外面ヨコナダ 底部手持ちヘラケズリ | 焼化鉄粒 | 不良 | 暗褐色 | |
| | 177 | 須恵器 环 | 12.3 — — | — | 体部内外面ヨコナダ | 雪母粒 焼化鉄粒 | 普通 | 暗茶褐色 | |
| | 178 | 土師質土器 环 | 14.8 8.4 4.6 | 2/6 | 体部外腹ヨコナダ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ | | 良好 | 橙褐色 | 内黑 |
| | 179 | 土師質土器 环 | 13.3 7.2 4.1 | 3/6 | 体部内外面ヨコナダ 底部回転ヘラケズリ | 焼化鉄粒 小石含む | 良好 | 赤褐色 | |
| | 180 | 土師器 环 | 12.7 7.5 3.6 | 1/6 | 口縁部ヨコナダ 体部外腹～底部手持ちヘラケズリ 体部内面ナダ | | 普通 | 橙褐色 | |
| | 181 | 土師質土器 环 | — — — | 1/6 | 底部回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ | 長石粒 | 普通 | 暗茶褐色 | 底部墨書き「福」 |
| | 182 | 土師器 壳 | 12.9 5.9 11.1 | 5/6 | 口縁部ヨコナダ 胴部外腹～底部ヘラケズリ 胴部内面ナダ | 焼化鉄粒 | 普通 | 暗赤褐色 | |
| | 183 | 土師器 壳 | 12.3 5.0 12.5 | 4/6 | 口縁部ヨコナダ 胴部外腹～底部ヘラケズリ 胴部内面ナダ | | 普通 | 暗赤褐色 | |
| 024号 住居跡 | 184 | 土師器 壳 | 21.6 — — | 1/6 | 口縁部ヨコナダ 胴部外腹ヘラケズリ 胴部内面ナダ | | 普通 | 暗褐色 | |
| | 185 | 土師器 壳 | 15.5 — — | — | 口縁部ヨコナダ 胴部外腹ヘラケズリ 胴部内面ヘラナダ | 石英粒 | 普通 | 暗赤褐色 | |
| 025号 住居跡 | 186 | 土師器 壳 | 16.7 — — | — | 口縁部ヨコナダ 胴部外腹ヘラケズリ | 石英粒 | 不良 | 橙褐色 | |
| | 187 | 土師質土器 环 | 12.5 — — | — | 体部内外面ヨコナダ | | 普通 | 暗茶褐色 | |
| | 188 | 土師質土器 环 | — 7.4 — | 2/6 | 底部内面ヨコナダ 底部回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ | 焼化鉄粒 | 普通 | 褐色 | |
| 026号 獨立柱 建物跡 | 189 | 土師器 壳 | — — — | — | 口縁部ヨコナダ 胴部外腹ヘラケズリ | | 普通 | 暗茶褐色 | |
| | 190 | 土師質土器 环 | 12.8 8.7 4.0 | 3/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ | | 普通 | 黄褐色 | 底部墨書き「□」 |
| C10 グリッド | 191 | 土師質土器 环 | — 5.6 — | 2/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り後外周手持ちヘラケズリ | | 良好 | 褐色 | 底部墨書き「福」 |
| C11 グリッド | 192 | 土師質土器 环 | — 6.8 — | 2/6 | 体部内外面ヨコナダ 体部下端～底部手持ちヘラケズリ | | 良好 | 褐色 | 底部墨書き「福」 |
| 表 採 | 193 | 須恵器 壳 | — 6.8 — | — | 胴部外腹斜位平行叩き目 胴部内面ナダ | | 良好 | 灰 色 | 軽用鏡 |



第95図 001(1)・011(2~4)号住居跡・B4-11グリッド(5)出土石製品

第11表 泰良・平安時代石製品計測表

| 出土位置 | 標図番号 | 種類 | 石材 | 計測値(cm) | ()は遺存部 | 重量(g) | 備考 |
|---------------|------|-----|------|---------|---------------------|-------|-----|
| 001号住居跡 | 1 | 筋縫車 | 滑石 | 径(4.2) | 厚さ 2.0 | 26.8 | |
| 011号住居跡 | 2 | 筋縫車 | 滑石 | 径 3.75 | 厚さ 2.2 | 47.5 | |
| | 3 | 砥 | 石流紋岩 | 長さ 4.15 | 幅 2.5~3.9 厚さ 2.1 | 51.8 | |
| | 4 | 砥 | 石流紋岩 | 長さ(4.6) | 幅 2.3~3.8 厚さ 1.0 | 27.1 | |
| B4-11 グリッド | 5 | 砥 | 砂岩 | 長さ(8.6) | 幅 4.4~6 厚さ 3.9 | 331.5 | 繩付着 |



第96図 003(1・2)・004(3)・008(4～8)・010(9～15)・011(16)
012(17・18)・013(19)・024(20)号住居跡出土鉄製品

第12表 奈良・平安時代鉄製品計測表

| 出土位置 | 標図番号 | 種類 | 計測値(cm) | | | ()は造存部 | 備考 |
|---------|------|-----|-----------------------|--|--|-------------|------------------|
| 003号住居跡 | 1 | | 長さ(7.2) 幅(1.9) | | | 厚さ(0.3) | 刀部(両刃)断片 |
| | 2 | | 長さ(4.05) 幅 9.9 | | | 厚さ 0.45 | 鉄製品断片 |
| 004号住居跡 | 3 | 鉄 鋼 | 長さ(19.3) 幅 2.1~3.65 | | | 厚さ 0.2~0.35 | 曲刃 看柄部に木質付着 |
| 008号住居跡 | 4 | 鉄 | 長さ 19.3 幅 1.8~2.3 | | | 厚さ 0.25 | 無茎両丸造り長三角形式 |
| | 5 | 鉄 鋼 | 長さ(6.55) 幅 0.9~3.5 | | | 厚さ 0.4~0.5 | 有茎両丸造り正三角形式 |
| | 6 | | 長さ(6.2) 幅 0.4~0.55 | | | 厚さ 0.4 | 鉄製品断片 |
| | 7 | 刀 子 | 長さ 13.3 幅 1.0~1.25 | | | 厚さ 0.2~0.3 | |
| | 8 | 刀 子 | 幅 0.8~1.3 | | | 厚さ 0.2~0.4 | |
| 010号住居跡 | 9 | 鉄 | 斧 長さ 7.5 幅 3.4~3.8 | | | 厚さ 1.5 | 袋状 |
| | 10 | 鉄 鋼 | 長さ(5.05) 幅 0.6~1.85 | | | 厚さ 0.2 | 身から茎にかけての断片 |
| | 11 | | 長さ(4.5) 幅 0.3~0.4 | | | 厚さ 0.5 | 鉄製品断片 |
| | 12 | 鉄 | 釘 長さ(6.3) 幅 0.7~0.8 | | | 厚さ 0.7 | 断片 |
| | 13 | 鉄 | 釘 長さ(14.5) 幅 0.6~0.85 | | | 厚さ 0.4~0.7 | 断片 |
| | 14 | 刀 子 | 長さ(7.9) 幅 0.7~1.05 | | | 厚さ 0.4 | 身から茎にかけての断片、木質付着 |
| | 15 | | 長さ(10.22) 幅 0.95~1.05 | | | 厚さ 0.3~0.35 | 鉄製品断片 |
| 011号住居跡 | 16 | 刀 子 | 長さ(11.2) 幅 0.75~1.1 | | | 厚さ 0.3 | 身から茎にかけての断片 |
| 012号住居跡 | 17 | | 長さ(4.2) 幅 0.5~0.7 | | | 厚さ 0.4~0.45 | 鉄製品断片 |
| | 18 | 鉄 鋼 | 長さ(4.8) 幅 2.6 | | | 厚さ 0.2 | 看柄部断片 |
| 013号住居跡 | 19 | 刀 子 | 長さ(15.0) 幅 1.4~1.95 | | | 厚さ 0.3~0.4 | 身から茎にかけての断片、木質付着 |
| 024号住居跡 | 20 | 刀 子 | 長さ(4.4) 幅 1.4 | | | 厚さ 0.35 | 身断片 |

第 3 章

ま と め

第3章 まとめ

第1節 繩文時代

検出遺構について

宮門遺跡では北側の台地中央部B6・C6グリッドの小堅穴状の土壙を主体に遺構の分布がみられた。住居跡は中晩期～加曾利EⅠ期の021号住居跡1軒のみで、土壙の総数は陥し穴状の1基を含め計31基である。遺存状態が悪く時期的には判然としないものが多いが、出土土器の時期と大差はないと思われる。調査範囲が約20m幅に制約されているので、宮門遺跡の集落構造の全容把握は困難であるが、昭和48年に調査された東に隣接する地点（平岡 1975）では堅穴状遺構2基と炉穴1基、土壙6基が検出されていることから、B6・C6グリッドからこの地点にかけて土壙を主体とした遺構群が存在していると考えられる。

良好な遺物の出土がみられた遺構は、102・126・127号土壙であった。102号土壙は、覆土中層に小形の深鉢形土器（54）が正位に置かれた状態で検出されたもので（図版11）、壙内がなかば埋められた後、土器が配されたことが想定される。126号土壙では完形の大形深鉢形土器（143）が底面から出土しており（図版12）、その土器が配置されたまま土壙の使用が廃絶されたとみられる。127号土壙では覆土下層に完形の広口壺形土器（147）を含む多量の土器が出土し、土壙の廃絶後あまり時期を置かないで遺物が集中投棄されたあり方が示されている。

遺構外での出土状況に関しては、調査区のほぼ全面が削平を受け、包含層の遺存状態は悪かったが、遺物分布密度は調査区北端部の台地北側縁辺部、及び南半部にあたる台地南西側の斜面のD10グリッド以南では遺物の出土はまばらであった。一方、繩文時代の遺構の存在する北半部では土器をはじめとする遺物が全面から出土しており、特にC9-02・04・24グリッドでの集中が顕著であった。この地点は南西から入る浅い谷の谷地頭部にあたる箇所で、包含層が深かつたために削平を免れ残ったということも言えるが、それを割り引いてもC9グリッドでの集中度は格段に高い。これらからみて、当時その地点から谷にかけての斜面部を土器廃棄場所としていた可能性が高い。

土器について

先述したように宮門遺跡の繩文土器の総量は整理箱で35箱にのぼった。時期的には中期所産のものでほとんど占められると言ってよく、中でも阿玉台式・中峠式・加曾利EⅠ式が主体となっている。大別は以下のとおりである。

第I群土器 勝坂式土器

第II群土器 阿玉台式

第III群土器 中峠式土器

第IV群土器 加曾利E式

第V群土器 後・晚期の土器

以上の5群の他、前期に属する可能性のある土器も若干あるが、細片で決め手に欠くため割愛した。阿玉台式土器はIb~IV式を主体とし、加曾利E式土器はI式が主体であった。中峰式土器を含めた3者の比率はほぼ同率であった。後・晚期の土器は小破片が極少量であり、大半は図示した。

土器で特筆すべき点は、量的にはわずかであったが他地域に源をもつものが出土したことである。そのひとつは、本来西関東および中部地方の土器である勝坂式土器である。時期的にみれば阿玉台IV式から中峰式に勝坂式の新しい段階の土器が伴うことは当然であるが、山武地域での検出例が僅少であるので、その意味では貴重な資料が得られたと言える。他に東北地方の土器である大木8式の系統を引くとみられるものも若干出土しており、これら中部系と東北系の土器の影響を受けつつ、南関東の中期土器群が形成されていったことを示すものであろう。また127号土壙出土の隆起線を有する耳付きの広口壺形土器も特徴のあるもので、勝坂式の有孔鉢付き土器の変形したものと捉えることができる。時期は他例（西山 1986）からみても中峰式の範疇で考えてよいと思われる。他に有孔土器は鉢状の隆起が入るもののが2点（59・104）出土している。周辺地域で報告されている縄文中期の遺跡のうち、横芝町東長山野遺跡（道澤 1990）は本遺跡と併行する時期に営まれたものである。両者を比較してみると、土器では東長山野遺跡で阿玉台IV式の典型的な大柄な山形突起を有する土器が欠落しており、その時期にはより中峰式に低い突起を有したものになる点が注目される。また中期後半の土器は本遺跡よりも出土量が豊富であると言える。それらの差異は遺跡の営まれた時期差によるものであろうか。いずれにせよ宮門遺跡は部分的な調査であって全容が把握されておらず、東長山野遺跡と単純に比較できないことは言うまでもない。

宮門遺跡の立地と周辺の遺跡

本遺跡は現在の海岸線から約15kmの位置にある。立地的に中期の遺跡としては台地の奥部に位置しているようである。しかしながら、当時の推定海岸線からは直線距離で8kmにあり、東には栗山川の支流である高谷川の広い谷が入り込んでおり、当然遺跡の付近まで海水も入り込んでいたことが想定されるので、立地条件は良好である。

周辺の遺跡をみてみると、まず北東部には晩期の遺物を出土した居合台遺跡（財團法人千葉県文化財センター 1986）が接している。⁽¹¹⁾ 南へ1km以内には本遺跡とほぼ同様の時期の集落跡である小池麻生遺跡（平岡・戸田 1976、萬崎他 1983）、小池地蔵遺跡（奥田 1985）、小池木戸脇遺跡（千葉県教育庁文化課 1990）などの、言わば小池遺跡群が分布している。北へ約4kmの芝山町岩山には加曾利E式の大規模な集落跡の検出された古宿・上谷遺跡（財團法人千葉県文化財センター 1985）、阿玉台式の包蔵地である空港No.2遺跡（川島・雨宮 1985）が位置している。さらに高谷川最上流部には五領ヶ台式の遺跡である空港No.10遺跡（川島・雨宮 1985）が位置している。前述の横芝町東長山野遺跡は大規模な集落であり、住居跡45軒、土壙240基が

検出されている。

一般的にみて、高谷川の右岸沿いには支谷により深く解析された尾根状の台地が多く、大規模な集落の展開には適さないためか中期の遺跡は少ないと言える。対照的に木戸川の左岸沿いには平坦な面が多く、本遺跡や小池遺跡群のような大規模な遺跡が分布している。しかしながら、これらは高谷川の支谷の最奥部に位置しており、木戸川ではなく、あくまで高谷川へのルートが志向されているようである。栗山川（高谷川）の支谷の奥部に位置するという点ではやや下流になるが、中期末から晩期にかけての遺跡である横芝町中台貝塚（宮 1987）も同様の位置にあると言える。さらに東長山野遺跡や後晩期の横芝町山武姥山貝塚（清水 1964、萬 1990）も南に連続した同じ台地上であり、谷が直接横芝の渓内に達なる点では若干異なるが、条件的にはよく似ている。一方、木戸川水系には中期の遺跡が少なく、ひじょうに対照的である。その理由は谷の幅が狭く、発達が弱いという魚撈基盤としての悪条件にあるとみられる。また、本遺跡と利根川水系の根木名川との分水嶺には北西へ約5kmの距離である。尾根沿い、あるいは木戸川に沿ったとルートをとったとしても、利根川水系や東京湾岸及び以西に近い位置にあると言える。本地域の縄文時代中期像の解明のために、勝坂式土器の出土からも示唆されるように、それらの地域との交渉のあり方に關しても考慮しなければならないであろう。

註1 平成2年度、財團法人山武都市文化財センターの調査により東側斜面部に、中期中頃の貝塚が検出された。

第2節 古墳時代

小池地蔵II遺跡では4軒の竪穴住居跡、1基の土壙が検出され、斜面のかなり下の部分にまで集落が展開していることが明らかとなった。宮門遺跡においては、9軒の竪穴住居跡が検出され、調査区北側の標高42m前後の平坦面に集中していた。昭和48年の調査区でも概期の住居跡が検出されていることから、南東方向に広がる平坦面に集落が展開していると考えられる。次に各住居跡の帰属時期を考えていく訳だが、両遺跡ともそれ自体で型式変遷を追えるほど各時期の土器が豊富に出土しておらず、年代を付与することも不可能である。よって、ここでは周辺遺跡で出土している概期の土器群との対比によって前後関係を考え、それらに共伴する須恵器によって年代を考えたいと思う。

I期 宮門遺跡016号住居跡が相当する。やや量的に少なもの特徴的な器種としては、見込みに放射状の赤彩を施す壺、内外面にハケメを残す高壺、壇形土器などがある。同様の壺は、横芝町振子上遺跡（平岡他 1983）から出土しているが、残念ながら遺構外からの出土なので、他器種との比較はできない。放射状ではないが、田あるいは田状の赤彩を施した壺で和泉期に

遷るものを出土した遺跡として、芝山町東台遺跡3号住居跡（大賀 1988）出土土器がある。この赤彩を退化したものと捉えることもできるが、形態的にも底部が丸底で口縁部の内湾度が弱いものが主体であること、高坏はハケメ調整が施されず、坏部の深いものがあること、小形の壺形土器がないことなどから、016号住居跡の土器群よりは明らかに後出と考えられる。なお、東台遺跡3号住居跡には陶邑編年のT K 208型式段階の須恵器の良好なセットが共伴しており、5世紀第3四半期に比定される。したがって本期は、それより遅く5世紀第2四半期という年代を与えておく。

Ⅱ期 宮門遺跡017号住居跡が相当する。坏は体部から一旦内側に屈曲し、「く」の字状に外反する和泉期の系譜を引くもの（第61図36～41）、須恵器坏蓋模倣と思われるもの（第61図41・42）などがある。本住居跡の土器群に比較的近い様相を持つものとして、芝山町大台西遺跡1号住居跡（平岡 1979）出土土器があり、第61図38・39のような、口縁部が外反するものが出土している。しかしながら、丸みをもった深みの体部から外反する短い口縁部が付される坏や、壺形土器の系譜上にあると考えられる小形壺が共伴しており、和泉期の色彩が濃い。したがって、017号住居跡出土例の方が後出と考えられる。大台西遺跡第1号住居跡では、T K 47型式段階の須恵器が共伴していることから、それより新しく本期を6世紀初頭と捉えておきたい。

Ⅲ期 小池地蔵Ⅱ遺跡002号住居跡・111号土壙、宮門遺跡009・015号住居跡が相当する。Ⅱ期の017号住居跡出土土器と連続すると考えられるが、坏は口縁部の屈曲度が弱くなり、全体的に大型化している。須恵器坏身模倣のもの（第12図11・第13図13）は、Ⅱ期まで出土していないが、たちあがりが高くしっかりしている。類例としては、芝山町小池新林遺跡010号住居跡、小池地蔵遺跡014号住居跡（奥田 1985）、三田遺跡037号住居跡（福間 1989）出土土器があり、三田遺跡例には、M T 15型式の大形の須恵器坏身を共伴している。よって、本期の年代は6世紀前半と捉えることができる。

Ⅳ期 小池地蔵Ⅱ遺跡001号住居跡が相当する。坏は一層小形化が進み、体部と口縁部との境の稜線がはっきりしないものもある。類例としては、小池地蔵遺跡008号住居跡、小池麻生遺跡017号住居跡出土土器があるが、小池地蔵Ⅱ遺跡には第12図2のような小形化した坏と共に、口径16.6cmを測る坏蓋模倣の系譜を引くと考えられる扁平な坏が出土しており、複雑な様相を呈している。同様な共伴関係は、三田遺跡043号住居跡でもみられる。なお、同例ではT K 43型式段階の須恵器坏蓋を共伴しており、6世紀後半の年代が与えられる。

Ⅴ期 宮門遺跡019号住居跡が相当する。坏では須恵器坏身模倣の系譜を引くものは、立ち上がりが短く、口径もさらに小さくなっている。その他に、稜を有さず内外面にヘラミガキが加えられる坏が新たに出現する。芝山町清水台No.1遺跡006号住居跡（柿沼他 1980）では、同様な土器群と共にT K 209型式段階の須恵器坏蓋・長脚2段透かしの高坏を共伴し、芝山町高田椎現遺跡第6号住居跡（平岡 1979）でも同型式段階の須恵器坏蓋・短頸壺を共伴している。よっ

て、本期は7世紀第1四半期の年代が与えられる。

VI期 小池地蔵II遺跡007号住居跡、宮門遺跡018号住居跡が相当する。両住居跡からは、須恵器模倣のものは出土していない。宮門遺跡018号住居跡では、TK217型式段階の湖西窯産と考えられる須恵器坏身が2点出土しており、身と蓋の逆転の前後の時期のものと考えられることから7世紀第2四半期～中葉の年代が与えられる。小池地蔵II遺跡007号住居跡の土師器坏は、金属器模倣形態のものと考えられる。

3節 奈良・平安時代

概期の住居跡は、小池地蔵II遺跡では4軒、宮門遺跡では、標高40～41mの南西緩斜面～斜面部にかけて15軒検出された。古墳時代と同様、遺構の遺存状態が悪く良好な土器は得られなかつたが、以下出土土器から各住居跡の帰属時期を考えてみたい。

I期 小池地蔵004号住居跡が相当する。年代決定できる資料はわずかに土師器坏1点のみであるが、この坏（第18図1）は体部と底部との境がやや屈曲するものの、底部は丸底を呈し、口径も14cm代とやや大きいことから8世紀前半でも古い時期に位置づけられると思われる。

II期 小池地蔵II遺跡006号住居跡、宮門遺跡007号住居跡が相当する。土師質土器坏は赤彩盤状坏の系譜を引くもので、体部に丸みをもった新しい様相をもつものである。また、土師器坏も平底化が進んでいる。宮門遺跡007号住居跡の須恵器坏（第86図63）は胎土中に雲母粒を多量に含んでおり、類例として我孫子市新木東台遺跡013A号住居跡（石田 1987）がある。本期の年代は、赤彩盤状坏が8世紀第2四半期に比定されることから、それより新しく幅を持たせて、8世紀第2四半期～第3四半期と捉えておく。

III期 宮門遺跡001・006・008号住居跡、026号掘立柱建物跡が相当する。土師器坏は口径が小さくなり、口縁部と体部との境が明確に屈曲するようになる。008号住居跡は資料的にやや混乱しているが、円盤状の擬似高台をもつ土師質土器坏、内面黒色処理を施す高台付塊などがある。本期の年代は、底径8cm台の須恵器坏があることから、8世紀第4四半期～9世紀初頭と考えられる。

IV期 宮門遺跡003・004・005・013号住居跡が相当する。土師質土器坏は、底径7センチ前後を測り、底部糸切り後、外周手持ちヘラケズリを加えるものが多い。須恵器坏、土師器坏は相対的に少ない。土師質土器坏は、法量的に南多摩窯編年の御殿山37号窯式に相当することから、9世紀第1四半期後半～第2四半期前半の年代が与えられる。

V期 宮門遺跡010号住居跡が相当する。供膳形態はほとんどが土師質土器で占められ、須恵器はわずかで土師器坏は姿を消す。底径は平均約6.6cmを測り、口径は底径のはば2倍を測る。よって、9世紀第2四半期後半～中葉の年代が考えられる。なお、京都産とした綠釉陶器塊（第89

図132) の故地での類例としては、平安京右京三条三坊三町地区 S X 07 (平尾 1990) 出土例があり、共伴する土師器によって、840~900年という年代が与えられている。

Ⅵ期 小池地蔵Ⅱ遺跡008号住居跡、宮門遺跡011号住居跡が相当する。土師質土器壊のうち、底径を知り得るものは口径が底径の2倍を上回っている点から、9世紀後半と捉えておく。

宮門遺跡出土の墨書・線刻土器について（第13表）

宮門遺跡において墨書・線刻土器が出土するのは、奈良・平安時代のⅡ期からである。第2章で触れたように、そのほとんどが住居跡廃絶後に廃棄されたものと思われる。Ⅱ期では墨書き土器はなく、007号住居跡の「十」の線刻土器のみである。これと同じ線刻はⅢ期の008号住居跡、Ⅳ期の010号住居跡にも出土している。3軒とも近接した位置にあって長期にわたって使用されたことが分かる。Ⅲ期では006号住居跡の「□田」、008号住居跡の「福」、「福□」、「十」がみられる。この「福」はこれ以後、本遺跡の墨書き土器の中心的な文字となる。続くⅣ期では003号住居跡の「大」、「土」？、004号住居跡の「万」、005号住居跡の「上万」、013号住居跡の「福」がある。調査区南側の001~004号住居跡は、全測図をみても中央部の住居跡群と隔絶した印象を受けるが、墨書き土器においても「福」がないことから、異なる分布域にあるようである。Ⅴ期では010号住居跡1軒のみであるが、「福」、「下」、「万」、「□」、「十」がみられ、数量的には「福」が圧倒的に多い。続くⅥ期の011号住居跡でも「福」が1点検出されている。このように、調査区中央部の住居跡群では「福」が約一世紀にわたって存続するようである。しかしながら、調査範囲が限られているせいもあり、この狭い範囲で「福」が完結するとは考えられない。本遺跡のある台地と北側の谷を隔てた台地にある高田権現遺跡第8号住居跡では、宮門遺跡のⅣ期に相当する土器に「上総家」、「上新家」、「福」、「寸小福」と壊の底部に墨書きされたものが検出されている。これによって、本遺跡の周辺が上総国に属することが分かるのだが、興味深いのは「上新家」の墨書きである。「和名類聚抄」によれば、上総国武射郡には11の郷があり、そのうちの新郷は現在の芝山町南西部の新井田・牧野・高田・小池一帯に比定されている（竹内1984）。よって、この墨書きの「上」は上総国、「新」は新郷を示すものと解釈するのが自然と考える。やや横道にそれたが、「福」は、宮門遺跡出土のものと筆運びもよく似ている（第87図85など）。「寸小福」は、「寸」、「小」はほぼ同義語で、両方を前に書くことによって、強調しようという意図がよみとれる。このことを拡大解釈すれば、「福」は固有名詞や屋号のようなものではなく、吉祥句のような何らかの意味をこめたものと理解される。筆者はそれを住居廃絶に際しての、何らかの行為に伴うものと解釈したいのだが、高田権現遺跡の墨書き土器が宮門遺跡のものと最も異なる点は、いずれも完形土器で、廃棄されたものではないということであり、一概にはそのように言えないようである。いずれにしろ「福」が宮門遺跡のみで完結しないことは確かであり、周辺に類例が増えた段階で再考したい。

第13表 宮門遺跡墨書・線刻土器一覧表

| 出土位置 | 博団番号 | 種類・器種 | 款文 | 記載位置 | 出土位置 | 博団番号 | 種類・器種 | 款文 | 記載位置 |
|---------|------|---------|------|------|----------------|------|---------|-----|------|
| 003号住居跡 | 14 | 土師質土器 坯 | 「大」 | 底 部 | 010号住居跡 | 123 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 |
| | 15 | 土師質土器 坯 | 「大」 | 底 部 | | 124 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 |
| | 16 | 土師質土器 坯 | 「大」 | 底 部 | | 125 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 |
| | 17 | 土師質土器 坯 | 「土」? | 体部外面 | | 126 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 |
| | 18 | 土師質土器 坯 | 「大」 | 底 部 | | 127 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 体部外面 |
| 004号住居跡 | 39 | 土師質土器 坯 | 「万」 | 体部外面 | | 128 | 土師質土器 坯 | 「下」 | 底 部 |
| 005号住居跡 | 46 | 土師質土器 坯 | 「上万」 | 底 部 | | 129 | 土師質土器 坯 | 「万」 | 体部外面 |
| 006号住居跡 | 56 | 土師質土器 坯 | 「口田」 | 底 部 | | 130 | 土師質土器 坯 | 「口」 | 体部外面 |
| 007号住居跡 | 63 | 須恵器 坯 | 「十」 | 体部外面 | | 131 | 須恵器 坯 | 「十」 | 体部外面 |
| | 66 | 須恵器 坯 | 「十」 | 体部外面 | | 134 | 土師質土器 鉢 | 「口」 | 底 部 |
| 008号住居跡 | 83 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 | 011号住居跡 | 160 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 体部外面 |
| | 84 | 土 鍋 器 坯 | 「福口」 | 底 部 | 013号住居跡 | 181 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 |
| | 85 | 土 鍋 器 坯 | 「福」 | 底 部 | 028号 櫛立柱建物跡 | 190 | 土師質土器 坯 | 「口」 | 底 部 |
| | 86 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 | C10グリッド | 191 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 |
| | 87 | 土師質土器 坯 | 「十」 | 体部外面 | C11グリッド | 192 | 土師質土器 坯 | 「福」 | 底 部 |
| | 88 | 土 鍋 器 坯 | 「十」 | 体部外面 | | | | | |

引用・参考文献

- 新井順二 1986『千葉県芝山町御田台遺跡発掘調査報告書』芝山町御田台遺跡調査会
- 石田守一 1987『我孫子市新木東台遺跡(旧相馬郡)』『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会
- 大賀健 1987『下吹入遺跡群』下吹入遺跡群調査会・芝山町教育委員会
- 奥田正彦 1985『主要地方遺伝松尾線』II 財団法人千葉県文化財センター
- 柿沼修平他 1980『清水台No.1遺跡発掘調査報告書』清水台No.1遺跡発掘調査会
- 上守秀明他 1985『房総考古学ライブラリー2 織文時代(1)』財団法人千葉県文化財センター
- 川島利道・雨宮龍太郎 1985『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書』V 財団法人千葉県文化財センター
- 越川敏夫他 1978『山武猪ノ堤遺跡』猪ノ堤遺跡発掘調査団
- 財団法人千葉県文化財センター 1985『古宿・上谷遺跡』『千葉県文化財センター年報』 No.10

- 財団法人千葉県文化財センター 1986 「千葉県埋蔵文化財分布地図(2) -千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区-」
- 藤 淳一 1990 「横芝町山武塙貝塚確認調査報告書」 財団法人千葉県文化財センター
- 清水潤三 1964 「千葉県山武郡蛇山・台貝塚」『日本考古学年報』12 日本考古学協会
- 竹内理三編 1984 「角川日本本地名大辞典12 千葉県」角川書店
- 田辺昭三 1982 「須恵器大成」角川書店
- 千葉県教育庁文化課 1990 「小池木戸脇遺跡」「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報-昭和63年度-」
- 西山太郎 1986 「有孔鍔付土器研究の現状と課題」『印旛郡市文化財センター研究紀要』1 財団法人印旛郡市文化財センター
- 服部敬史・福田健司 1981 「南多摩古窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号 神奈川考古同人会
- 平尾政幸 1990 「平安京右京三条三坊」 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 平岡和夫 1974 「宮門-千葉県山武郡芝山町宮門遺跡調査-」 芝山町教育委員会
- 平岡和夫・戸田哲也 1976 「小池麻生遺跡」 芝山町教育委員会
- 平岡和夫 1979 「成田用水」 高田権現・大台西・上吹入・林遺跡調査会
- 平岡和夫他 1983 「東京電力送電線鉄塔建設事業地内八日市場線発掘調査報告書」 東京電力山武・横芝町遺跡調査会
- 福間 元 1989 「三田遺跡発掘調査報告書」 芝山町教育委員会
- 高崎博昭他 1983 「主要地方道成田松尾線」 I 財団法人千葉県文化財センター
- 道澤 明 1990 「東・北長山野遺跡」 北長山野遺跡調査会
- 宮 重行 1987 「主要地方道成田松尾線」 V 財団法人千葉県文化財センター
- 村山好文 1983 「房総における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所集報』V 日本考古学研究所

写 真 図 版



図版 2

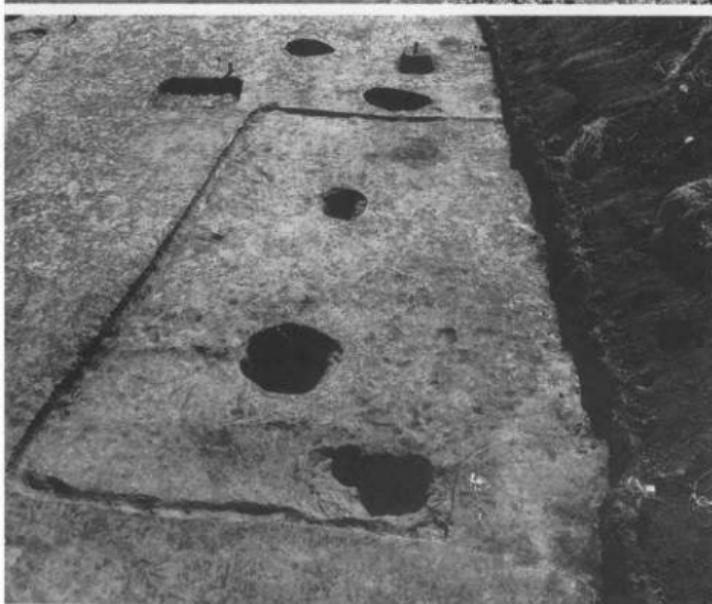
小池地蔵II遺跡



小池地蔵II遺跡
遠景



調査区全景



001号住居跡



002号住居跡



003号住居跡



007号住居跡



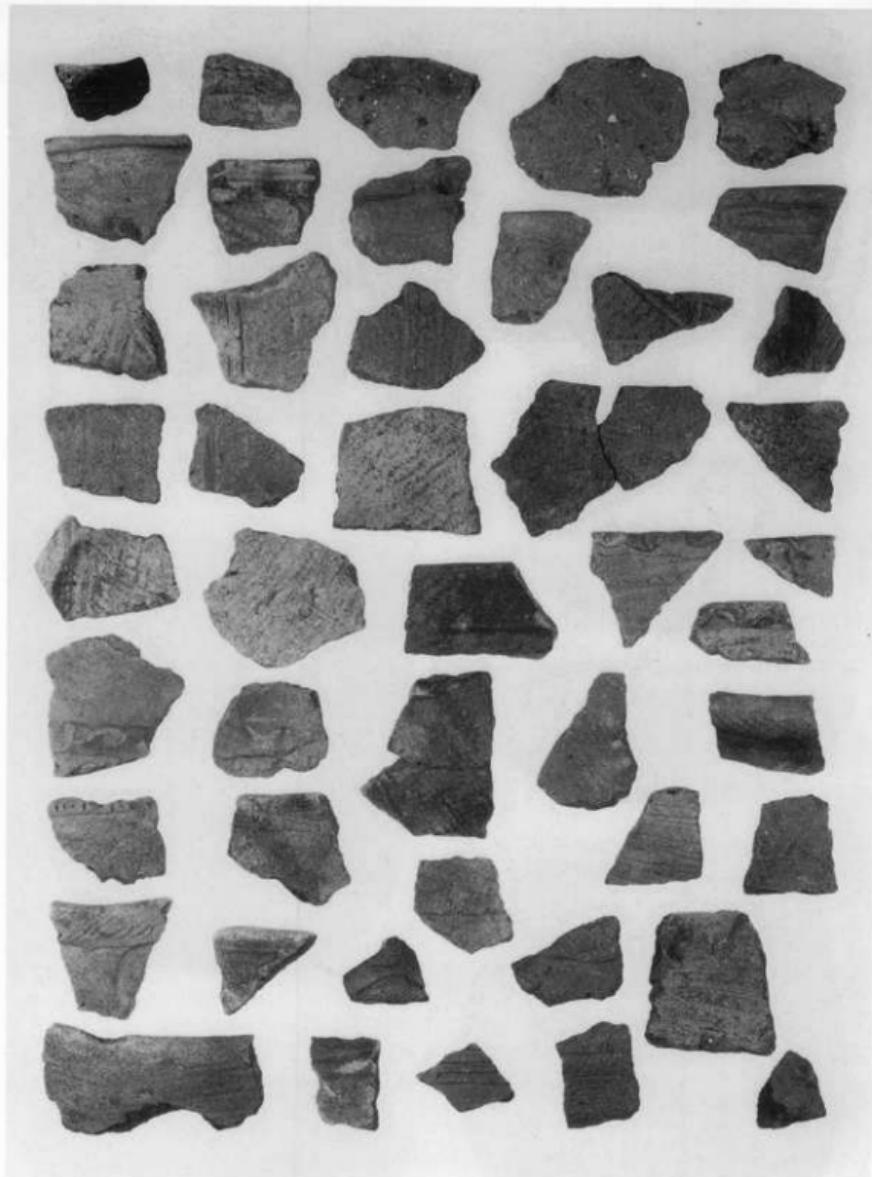
004号住居跡



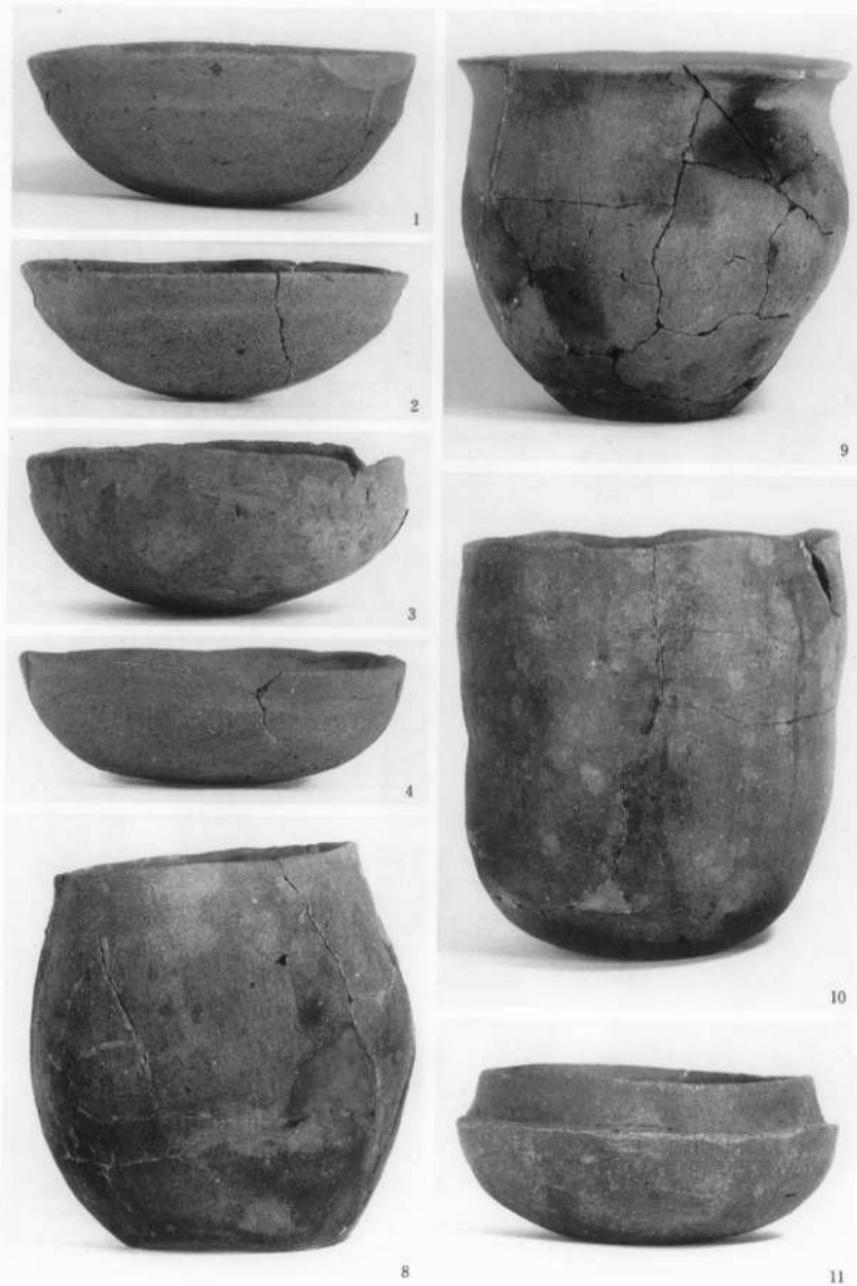
005号・008号住居跡



006号住居跡



グリッド出土縄文土器



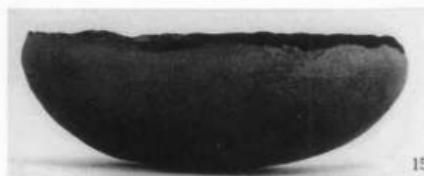
古墳時代土器（1）



12



13



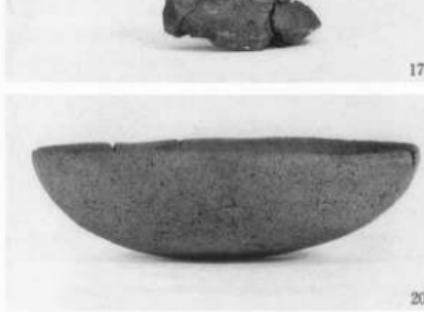
15



17



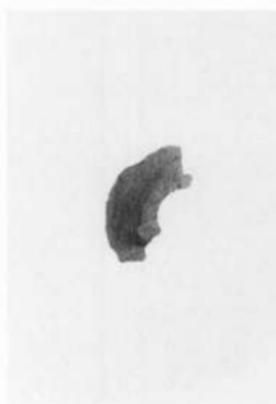
19



20



21



古墳時代土器(2)、古墳時代土製品

図版 8

小池地蔵II遺跡



1



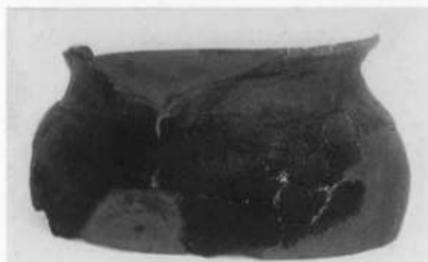
7



11



3



12



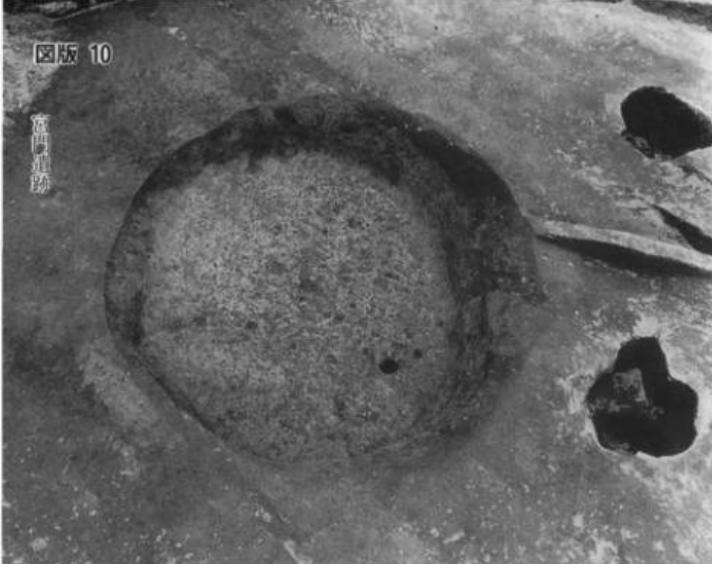
14

奈良・平安時代土器

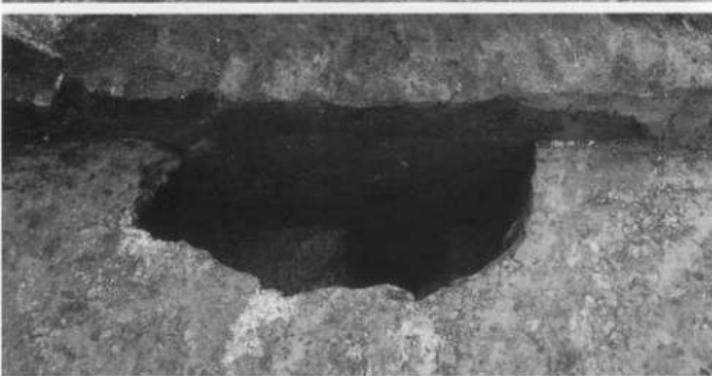
宮門遺跡



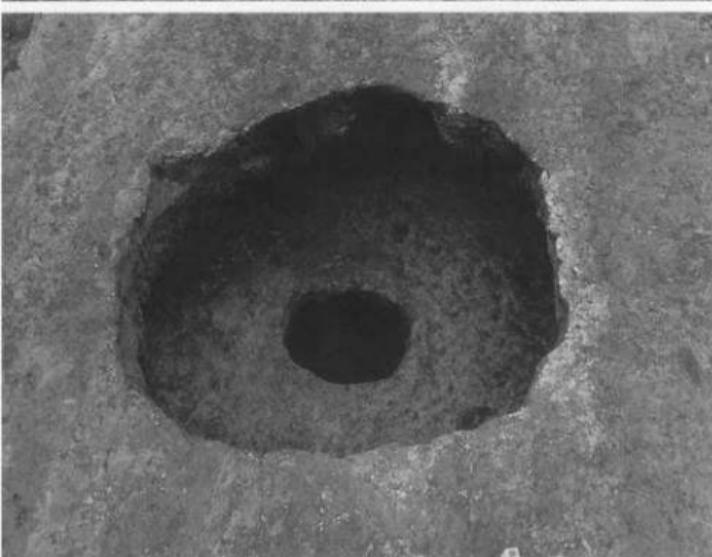
高田遺跡



014号土壤



101号土壤



102号土壤

高門遺跡

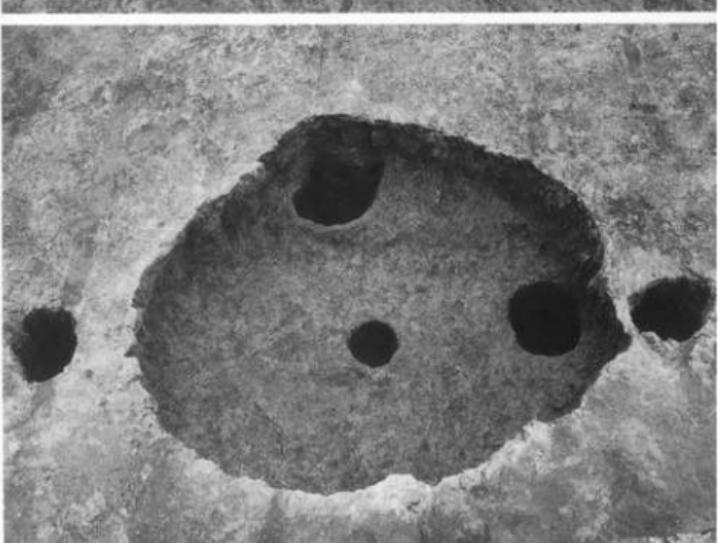
102号土壤
遺物出土狀況



103号土壤



125号土壤

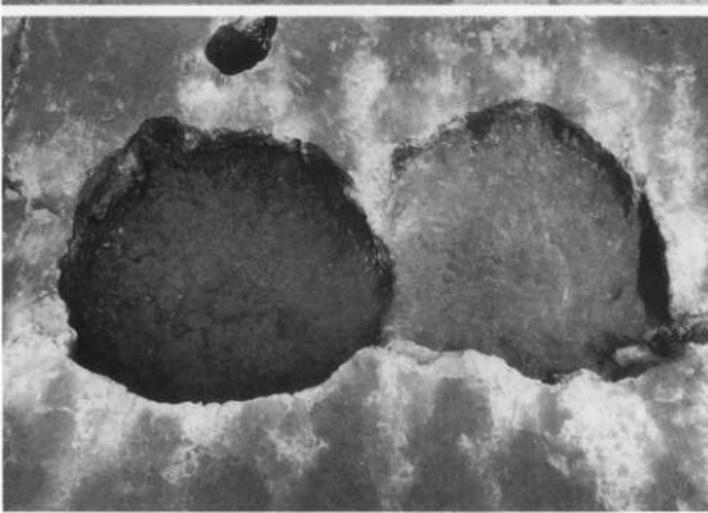




126号土壤



126号土壤
遺物出土状況



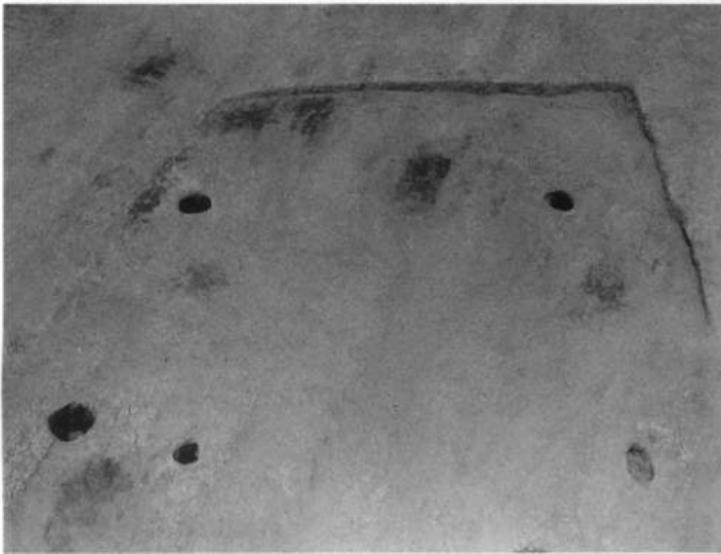
127・128号土壤



調査区南部全景



調査区北部全景



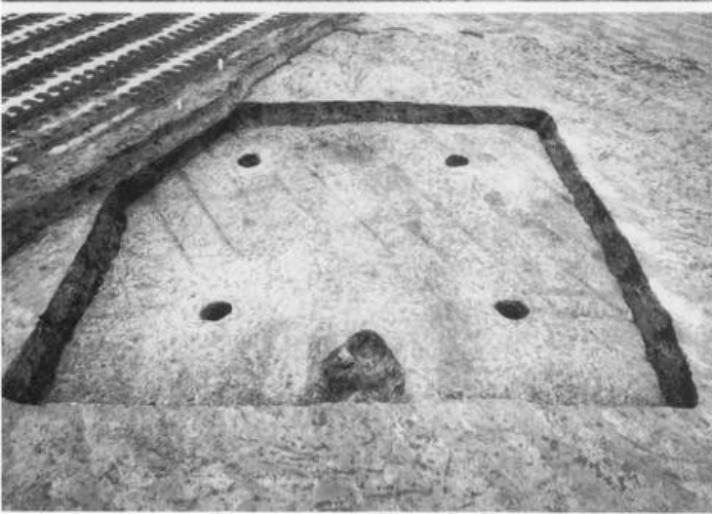
002号住居跡



009号住居跡



015号住居跡



016号住居跡

高
原
遺
跡



017号住居跡

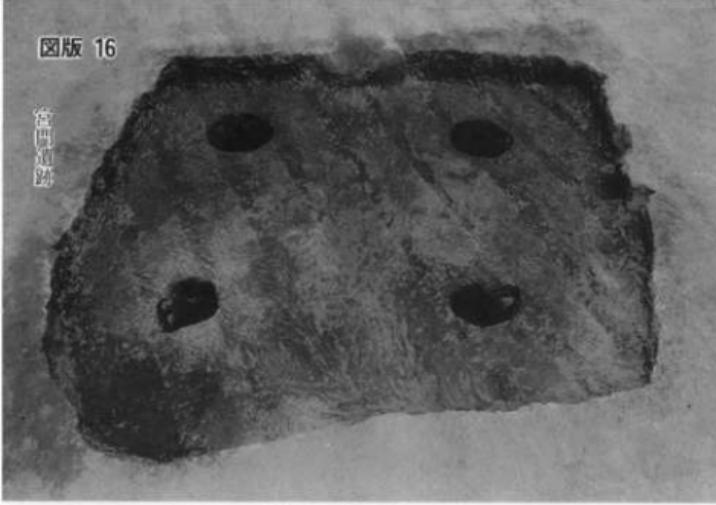


018号住居跡

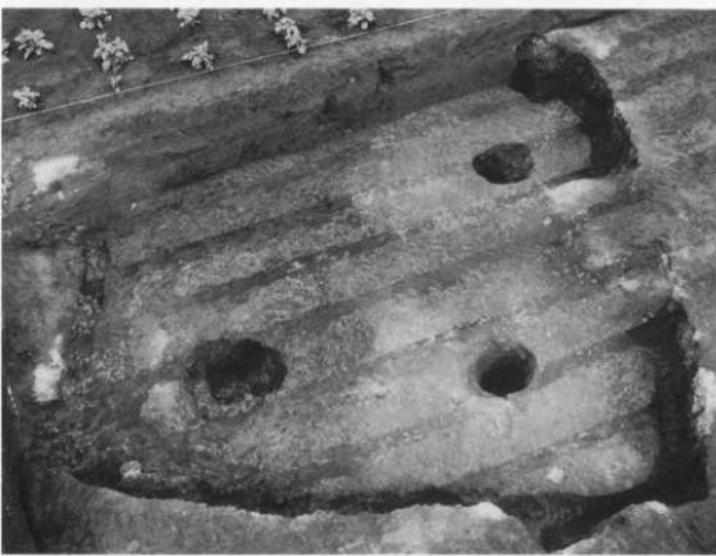


019号住居跡

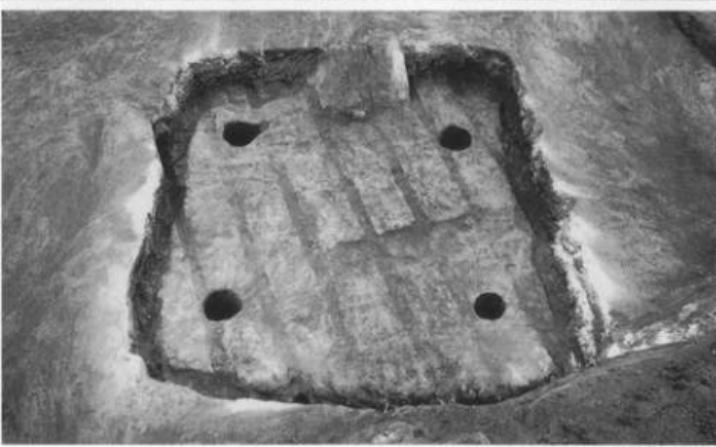
高脚屋跡



001号住居跡



003号住居跡



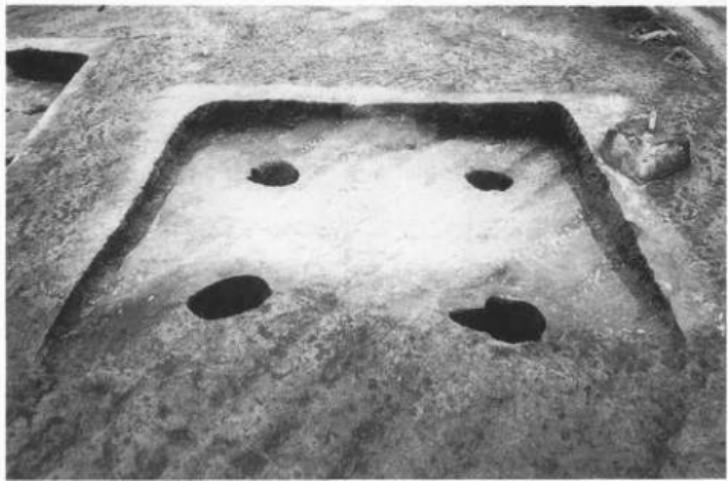
004号住居跡



005号住居跡



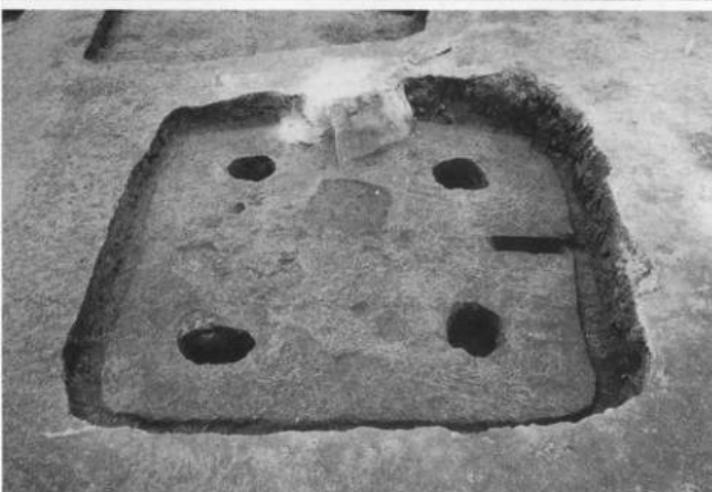
006号住居跡



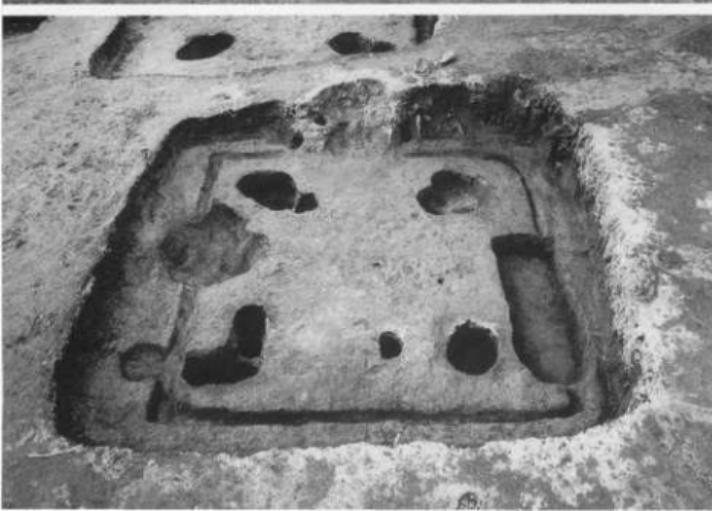
007号住居跡



008号住居跡



010A号住居跡



010B号住居跡

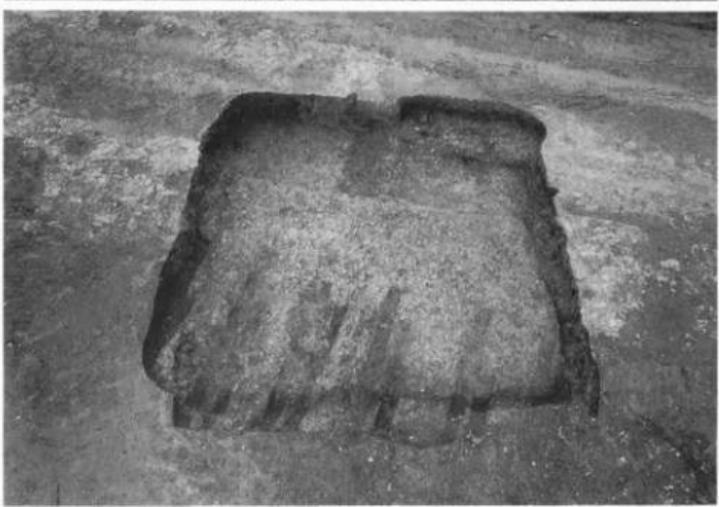
竪穴遺跡



011号住居跡



013号住居跡



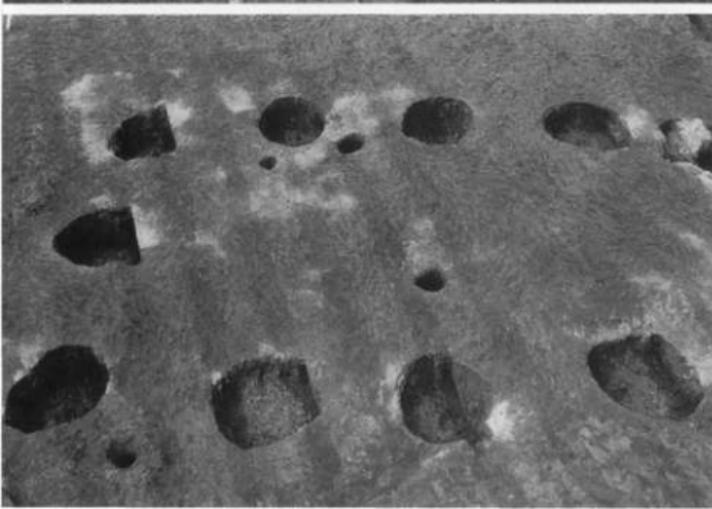
023号住居跡



024号住居跡

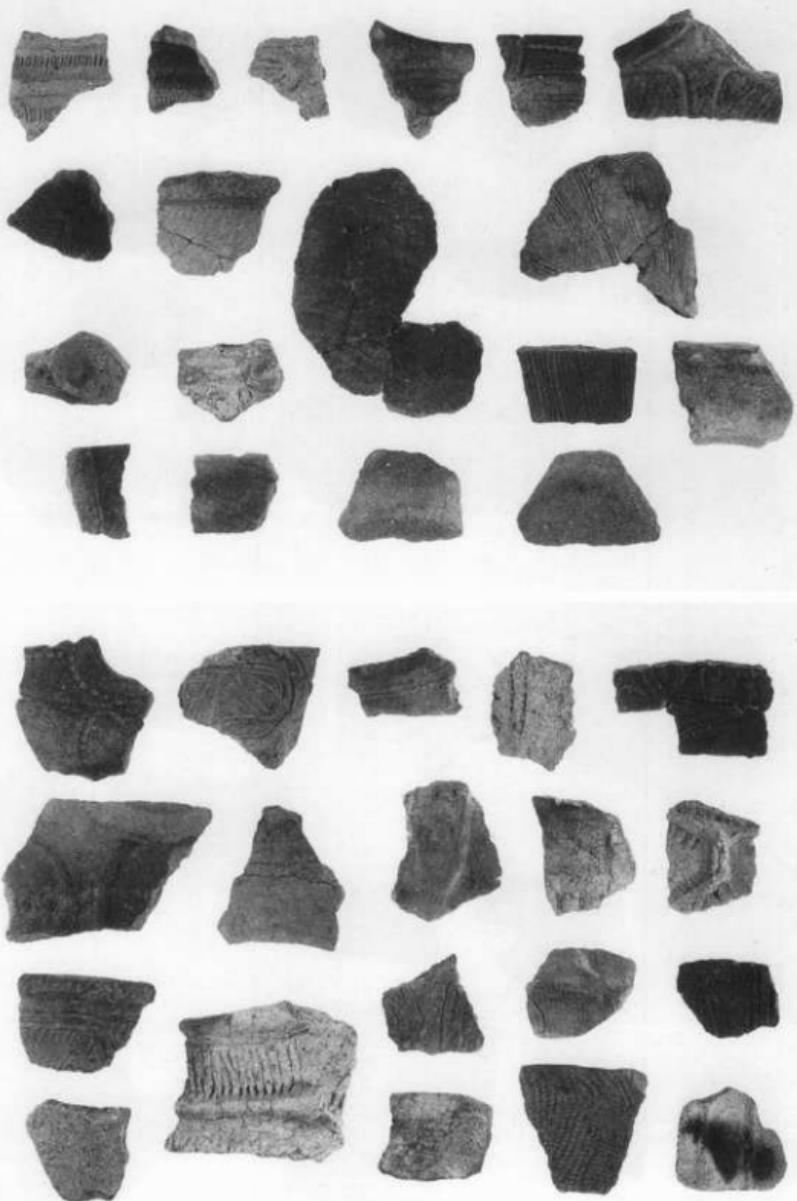


025号住居跡

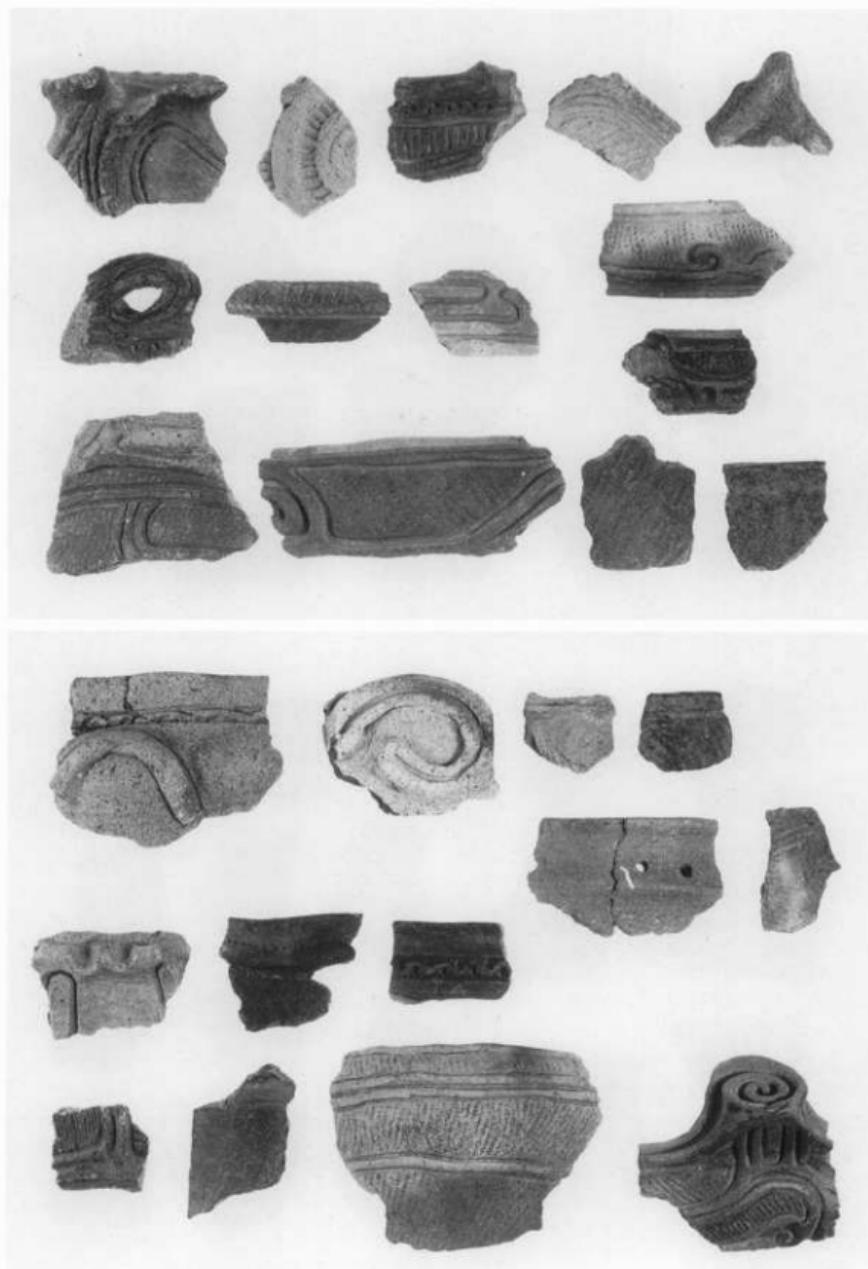


026号掘立柱建物跡

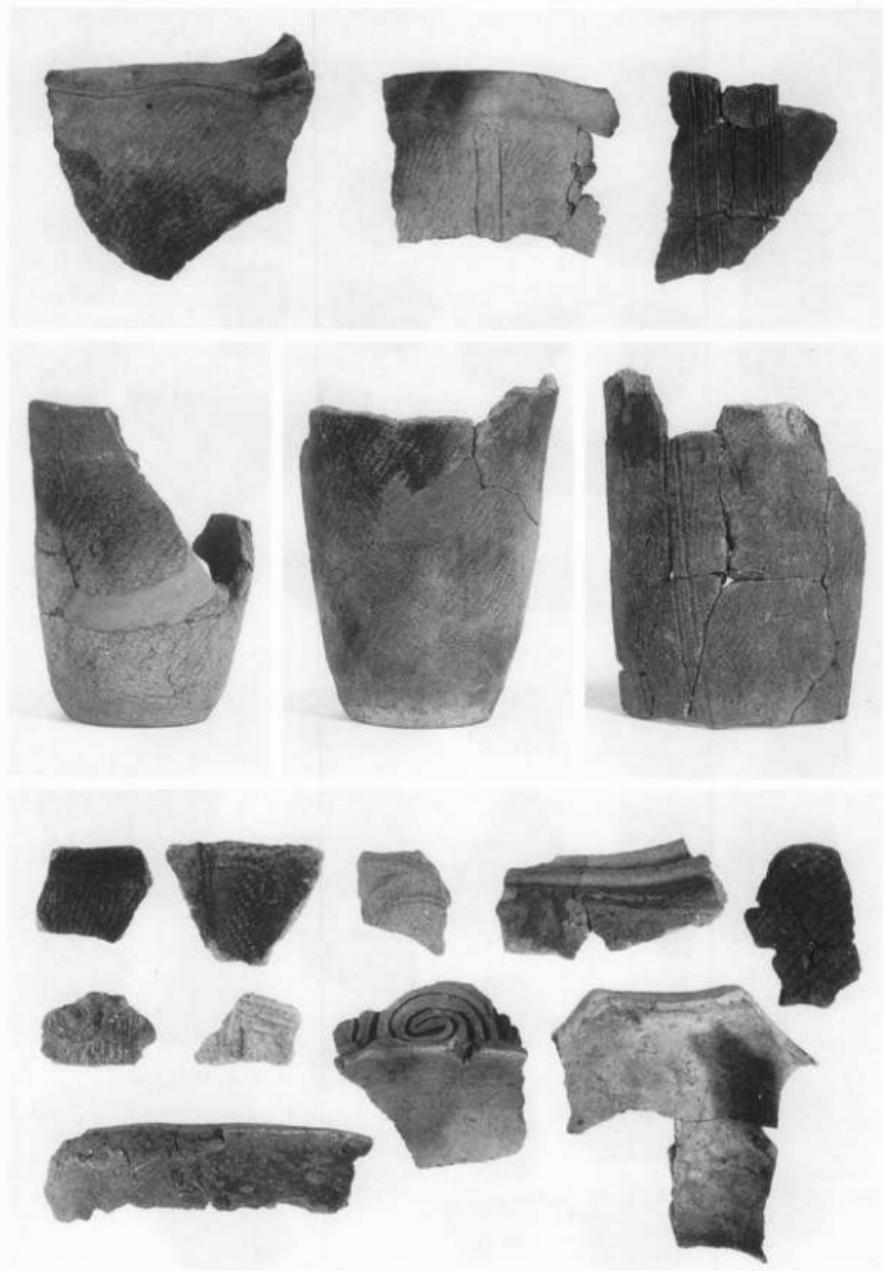
宮門遺跡



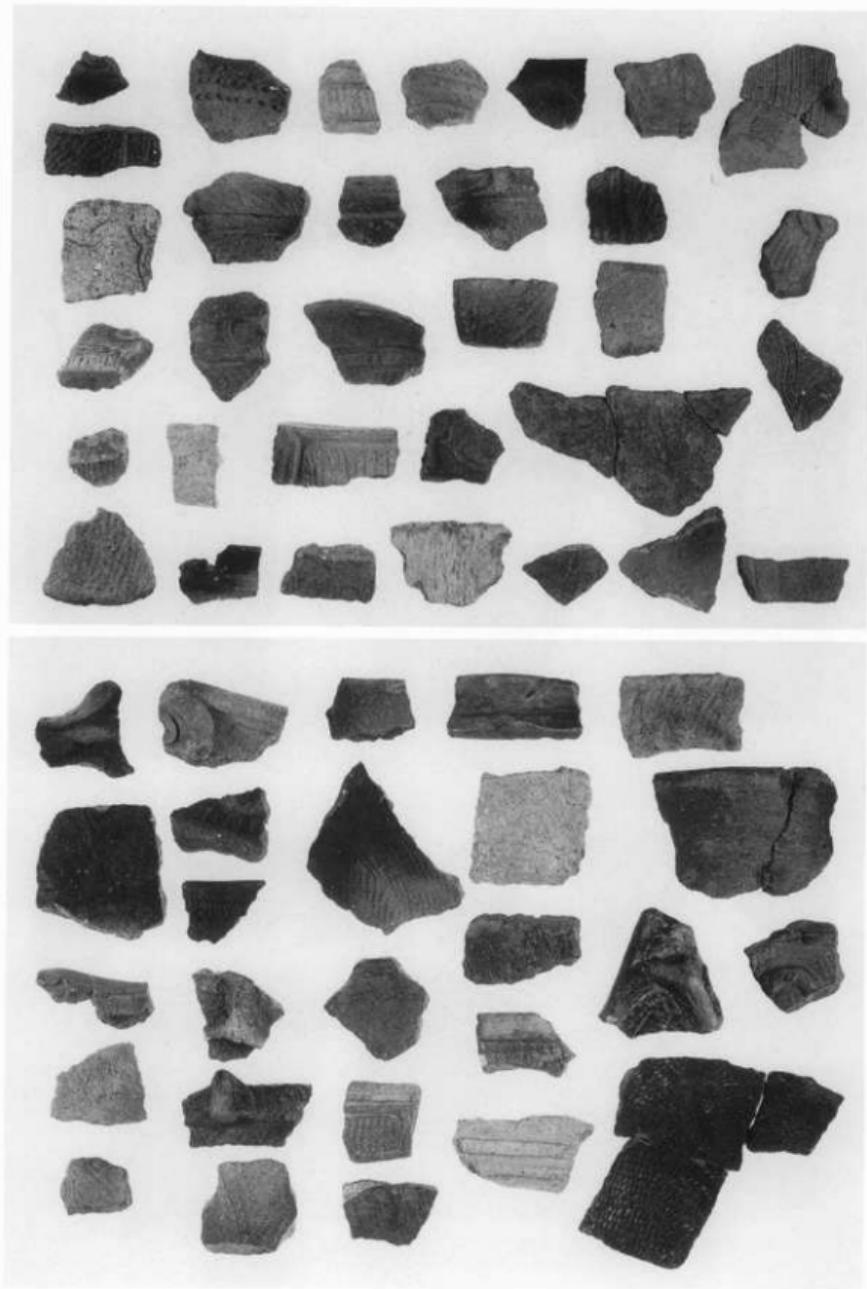
021号住居跡・014号土壤出土土器



102・104・105号土壤出土土器



102・105・106・108・110号土壤出土土器



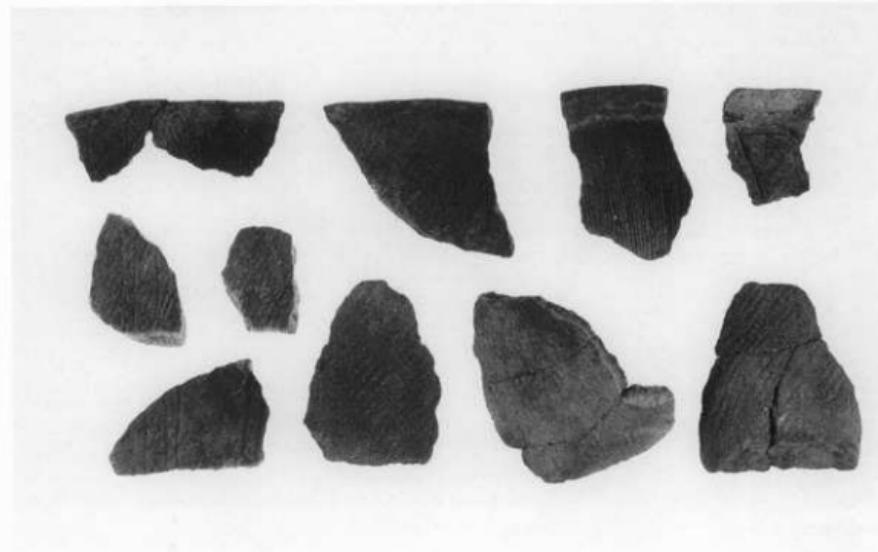
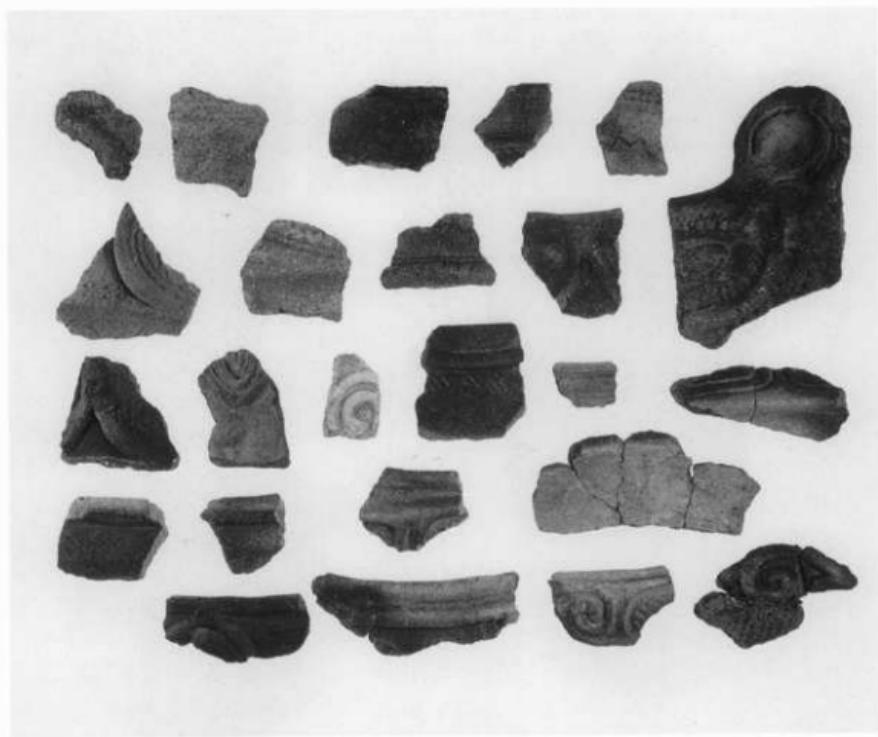
111・113・114・115・117・118・119

120・121・122・123・124・125号土壤出土土器

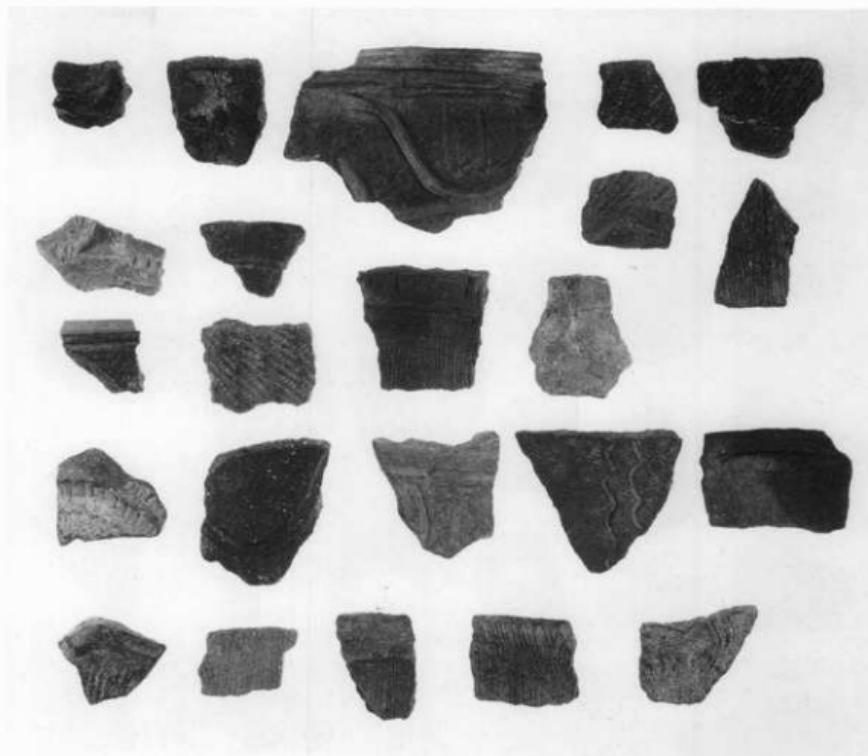
宮門遺跡



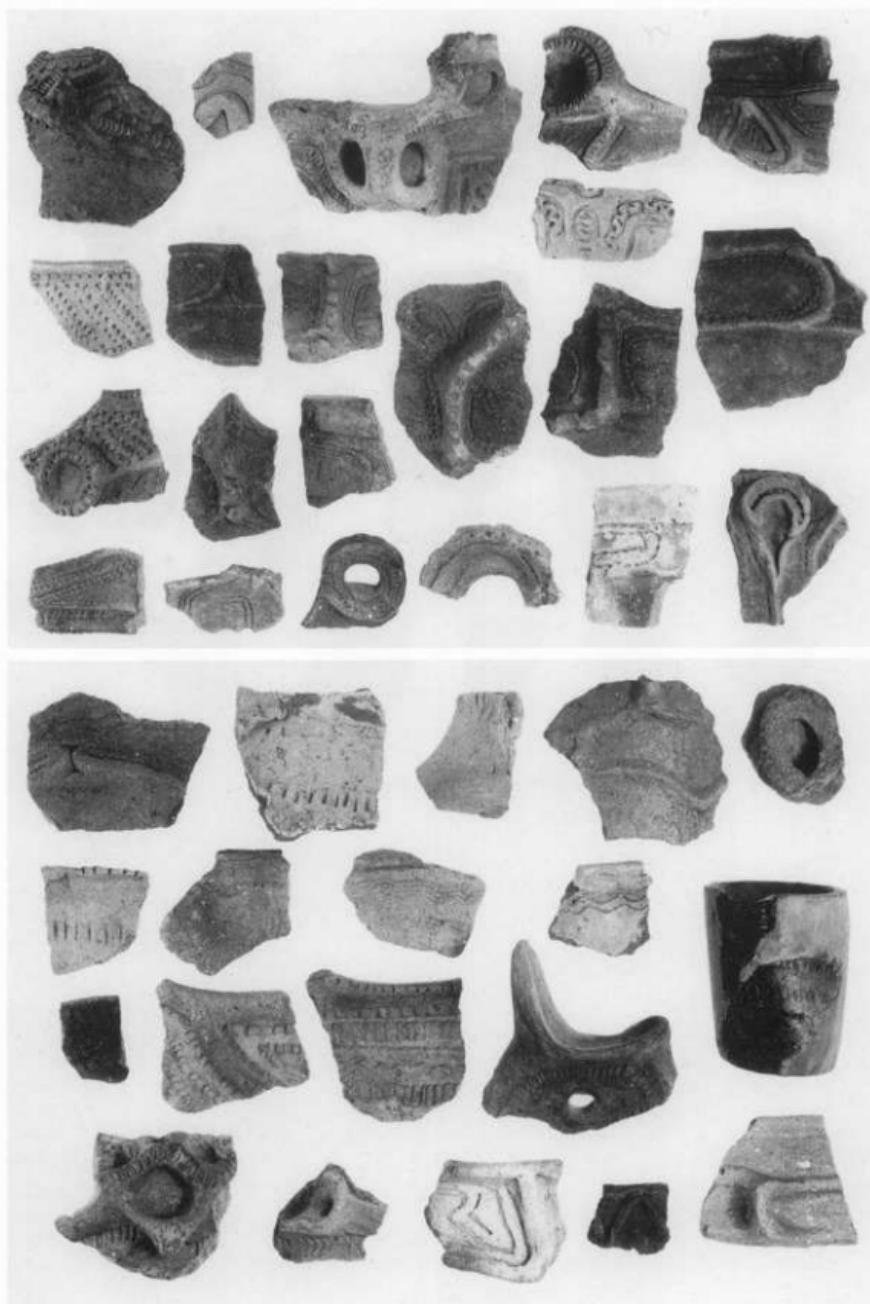
126・127号土壤出土土器



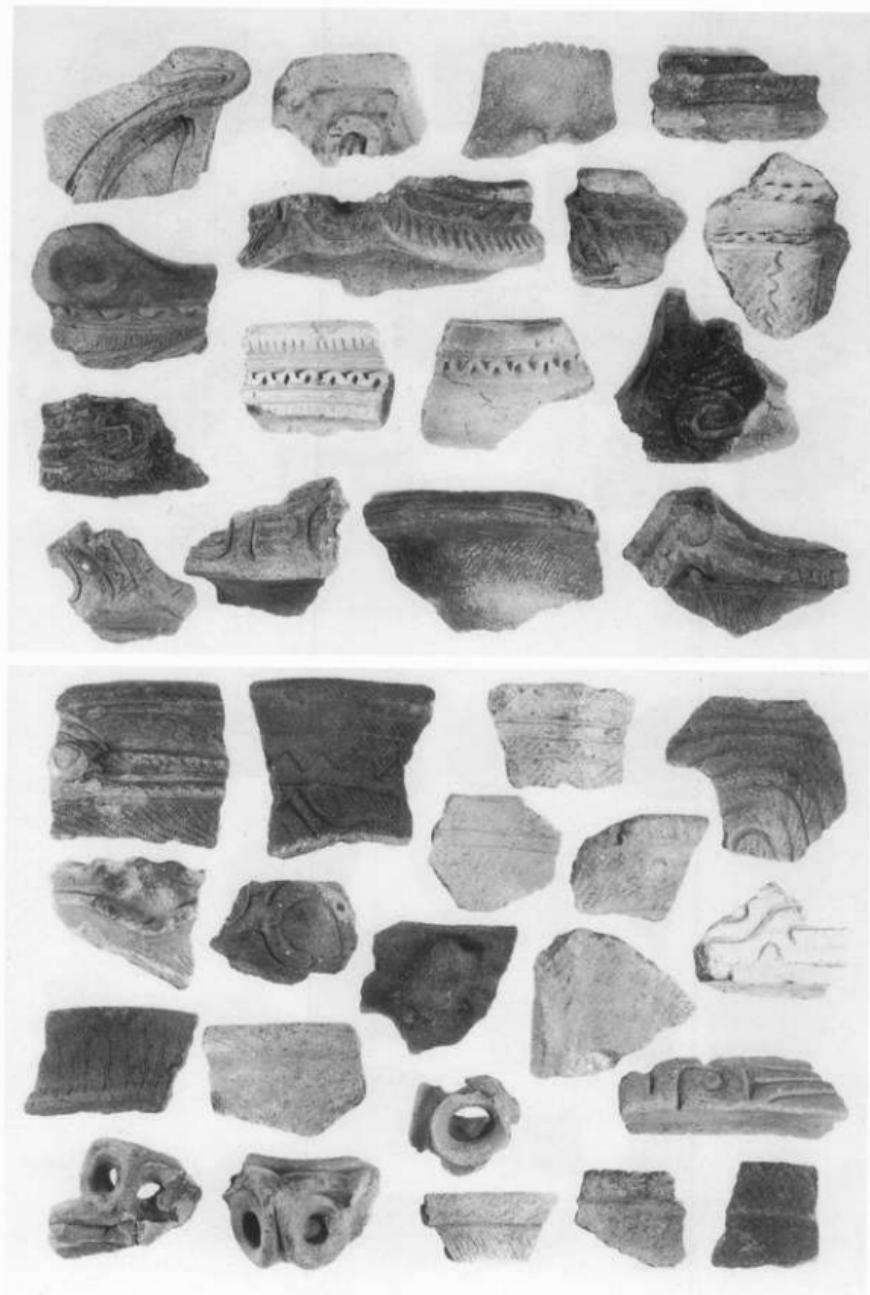
126・127号土壤出土土器



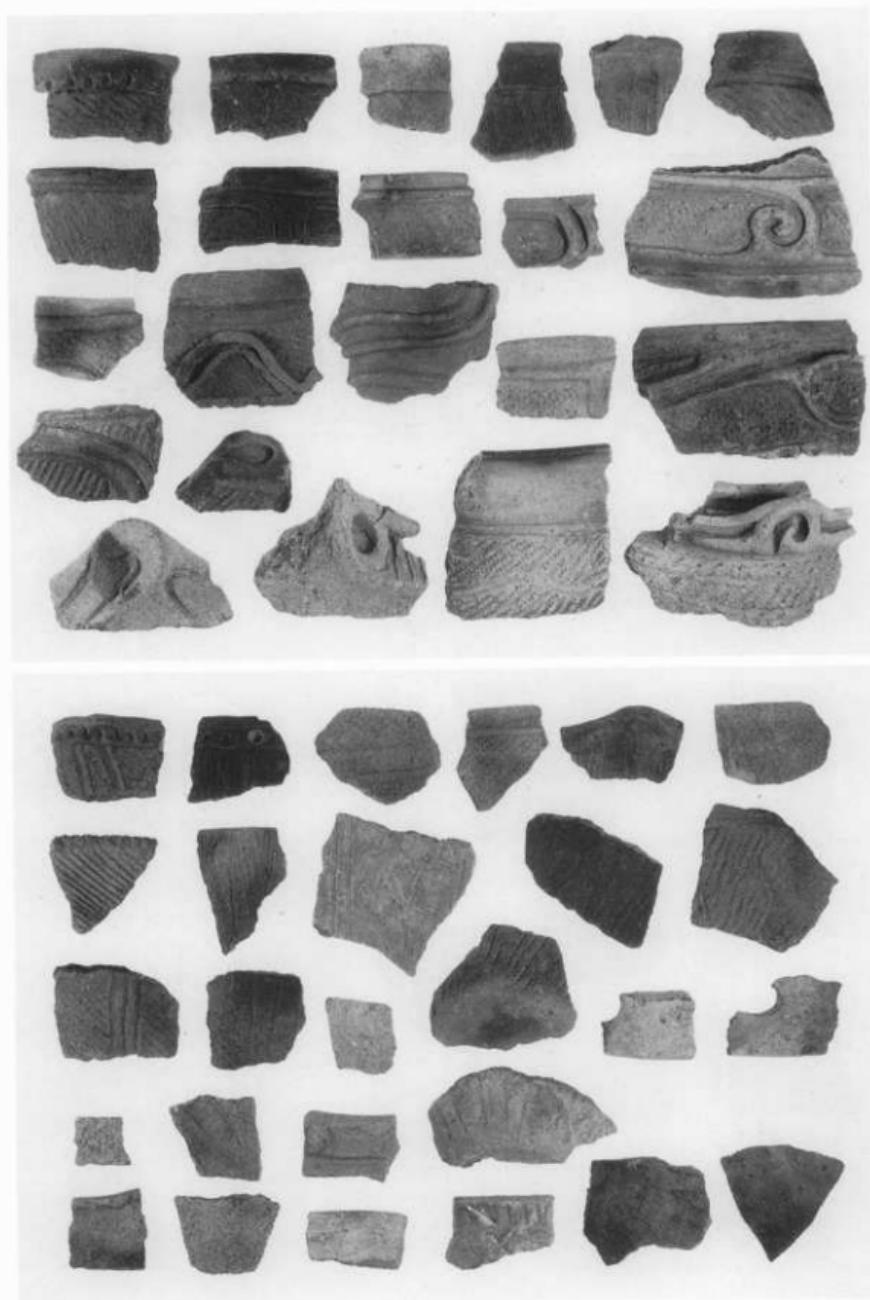
128・129・130号土壤出土土器



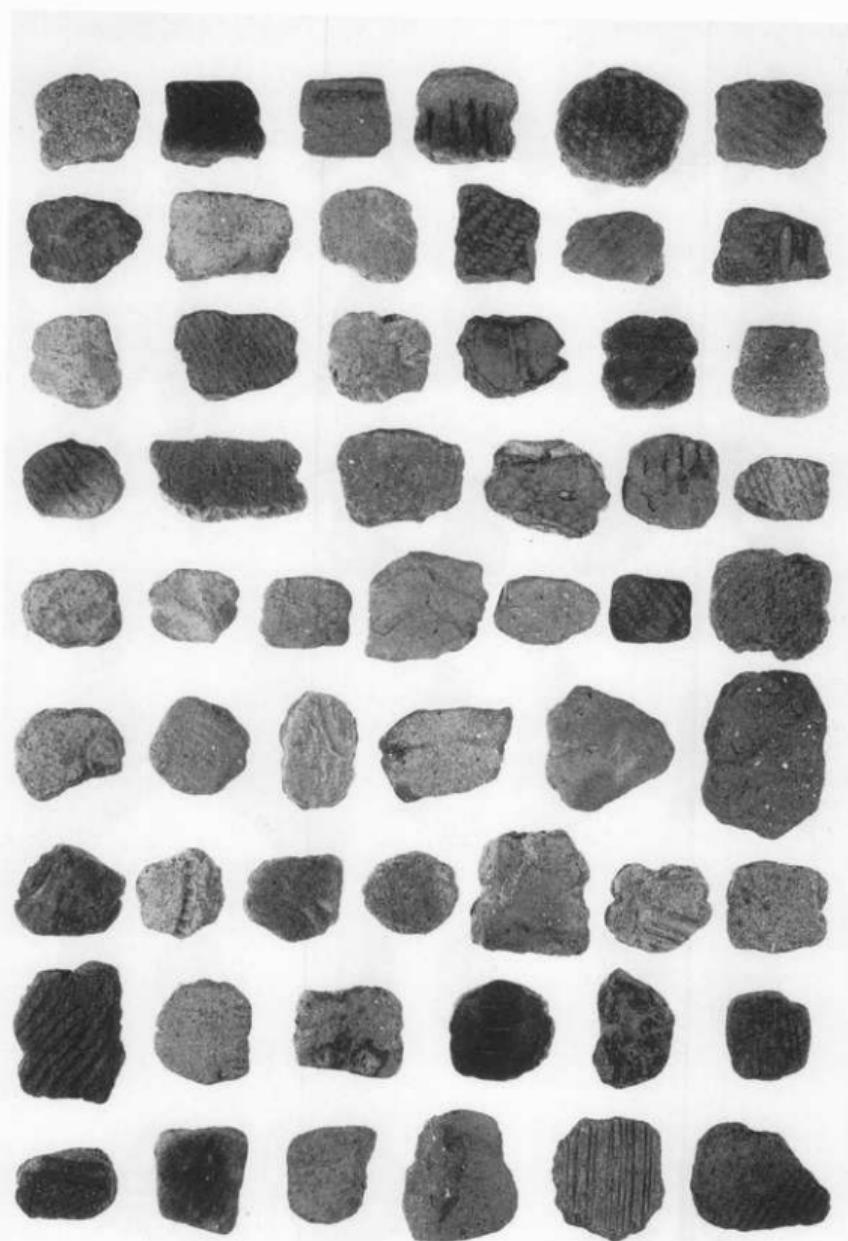
グリッド出土縄文土器（1）



グリッド出土繩文土器（2）



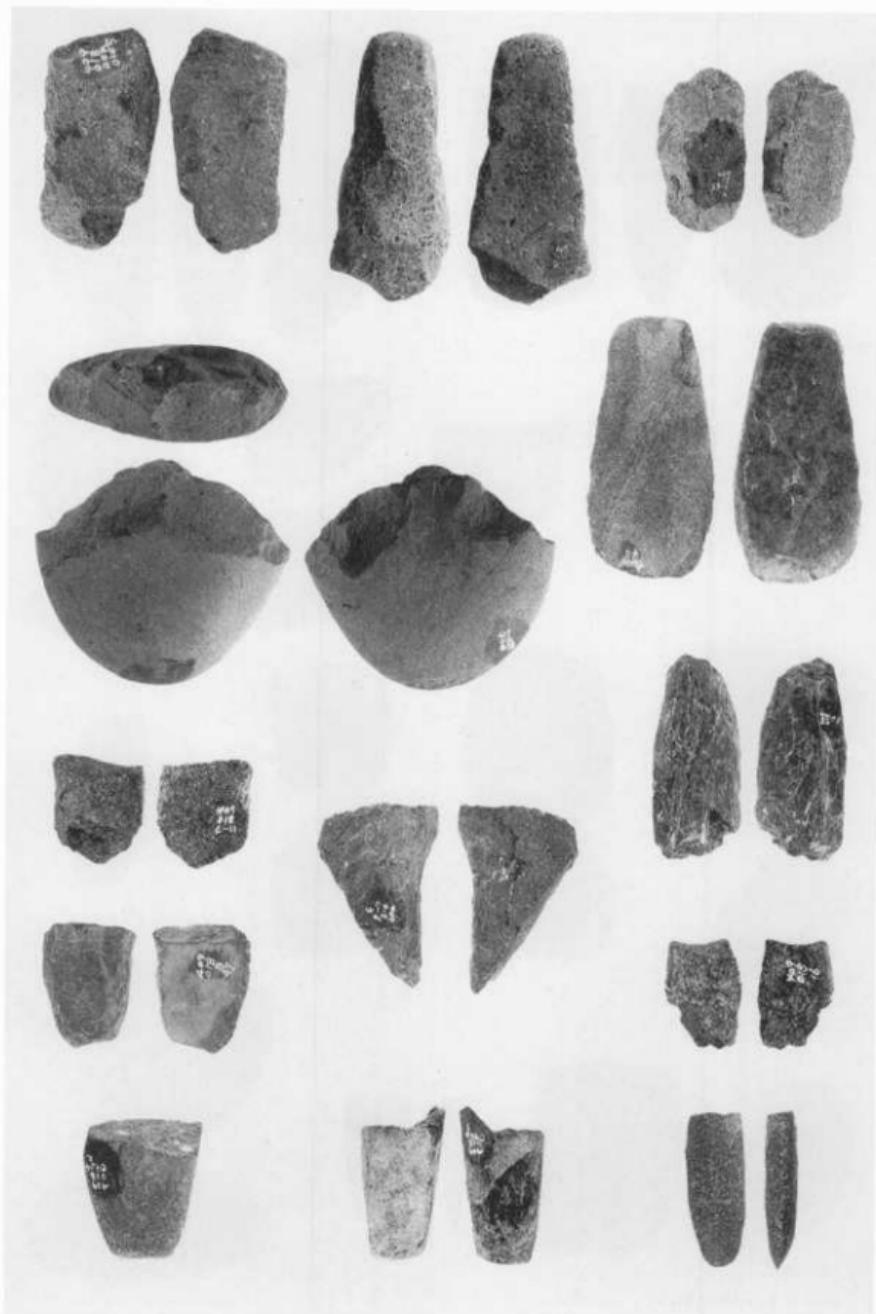
グリッド出土繩文土器（3）



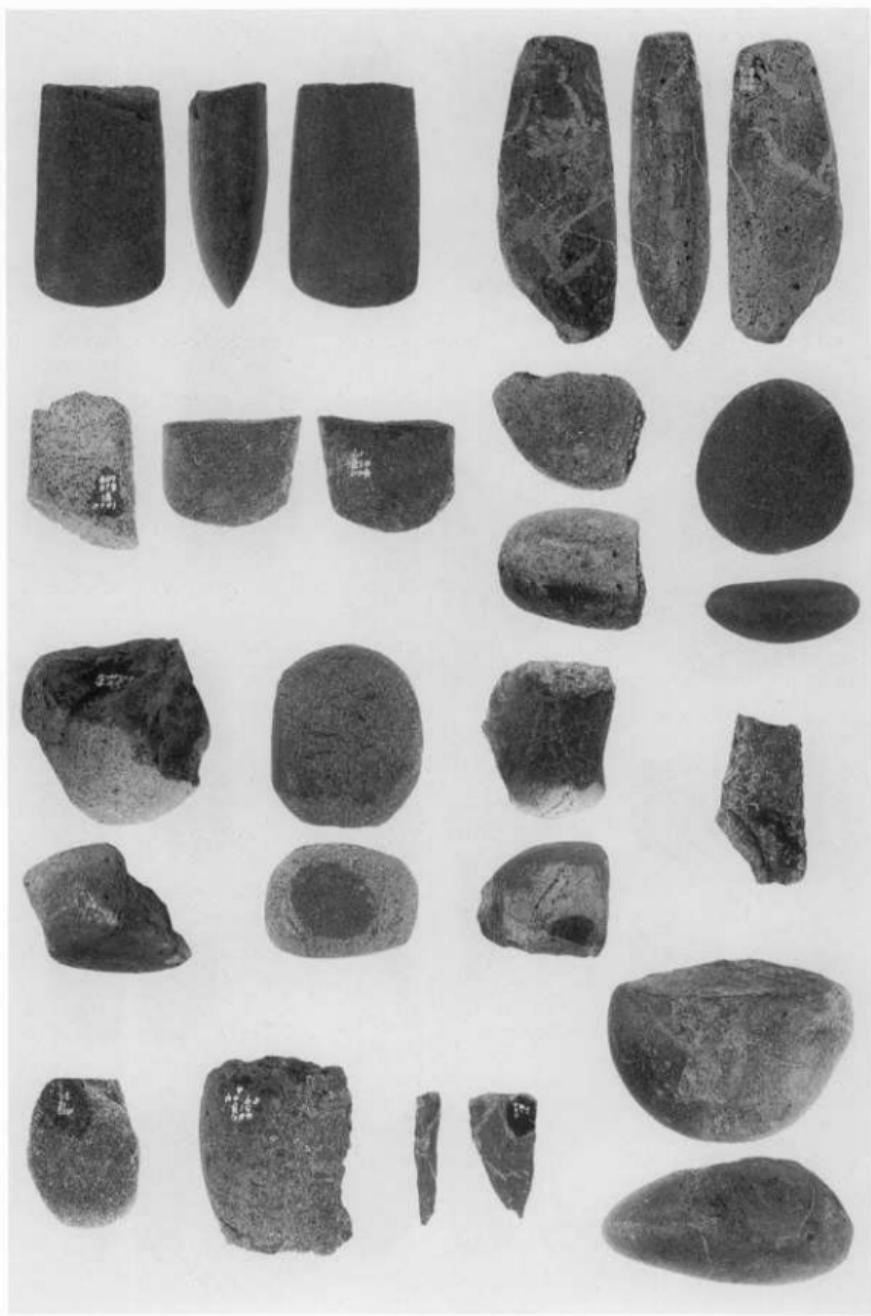
縄文時代土製品



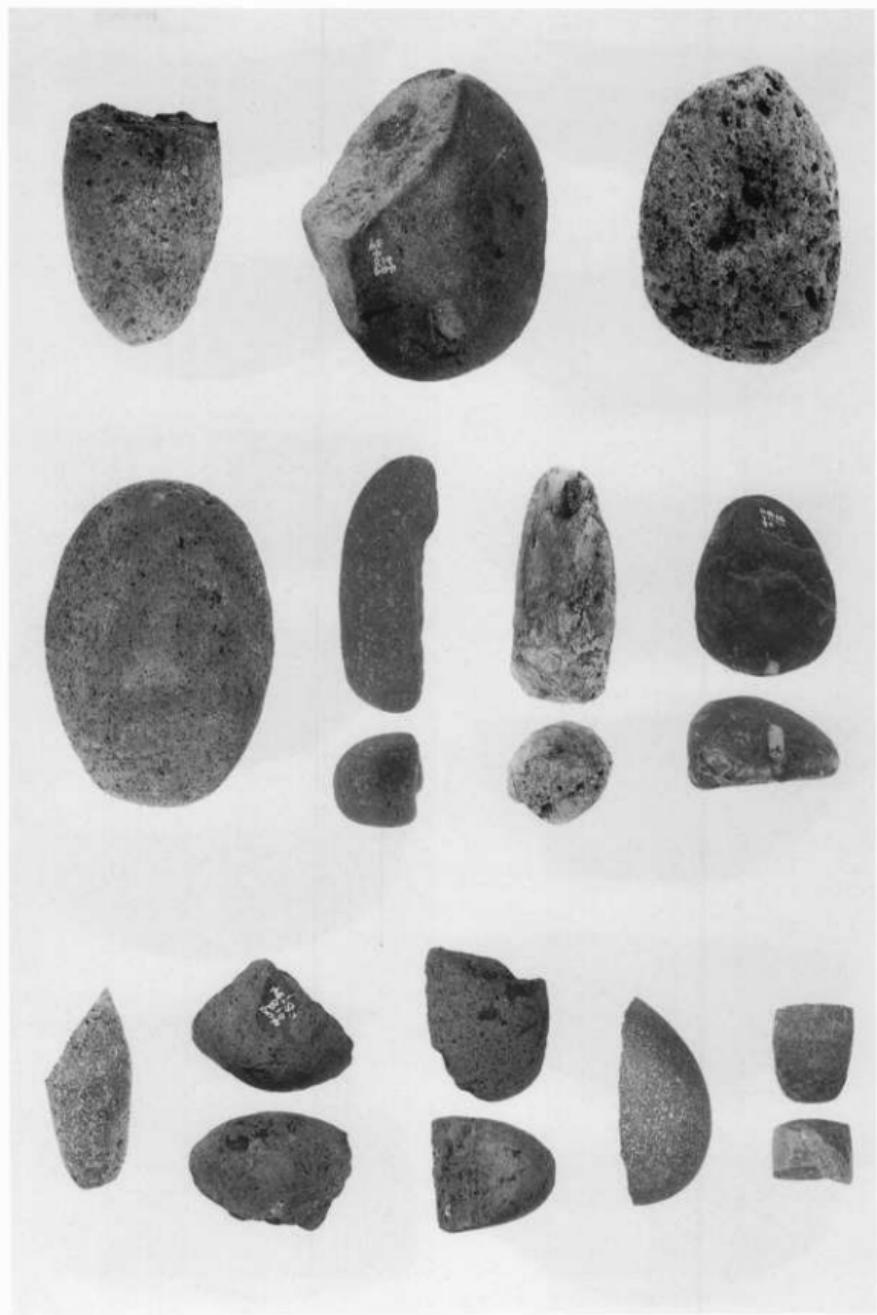
縄文時代石器（1）



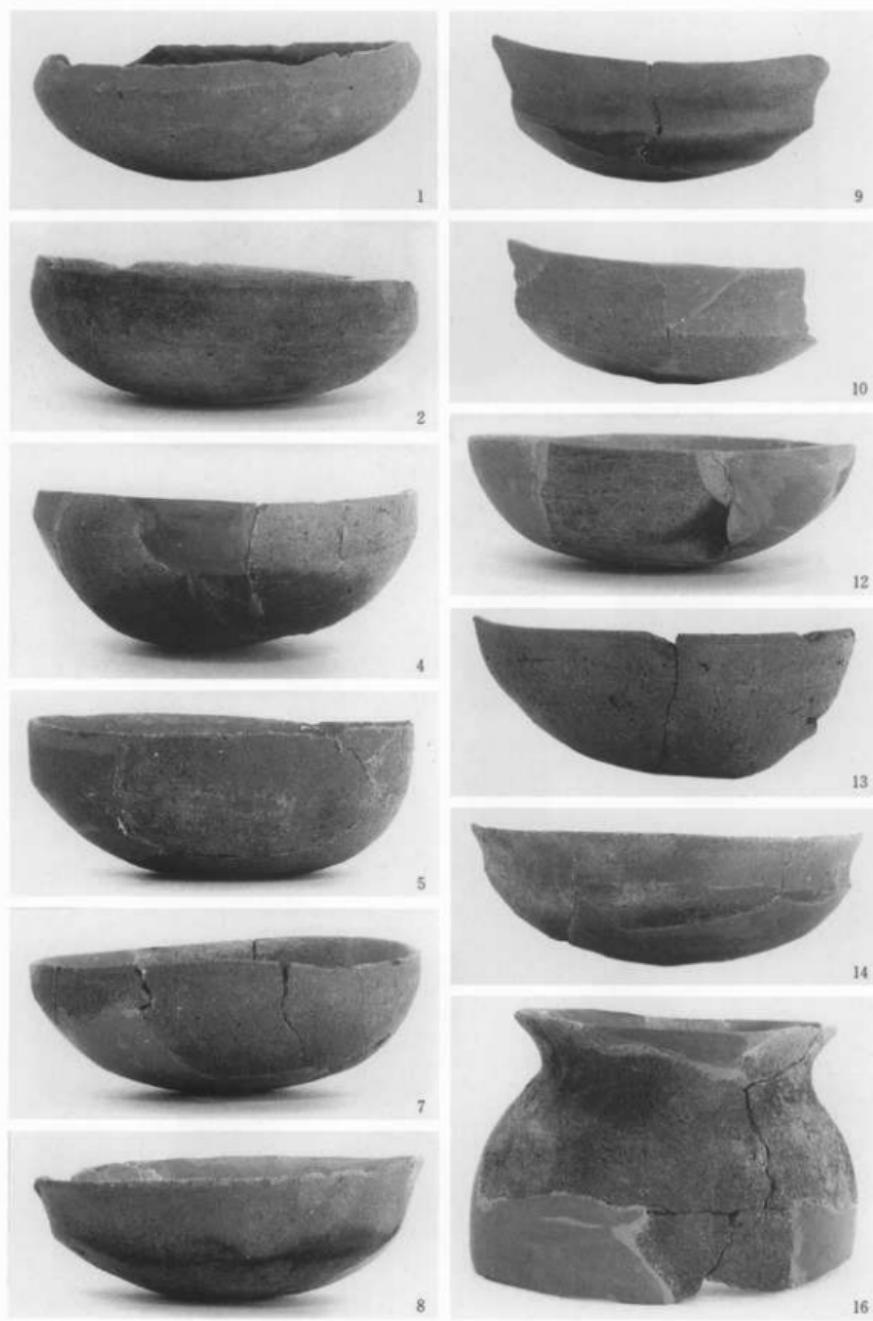
縄文時代石器（2）



縄文時代石器（3）



繩文時代石器（4）



古墳時代土器（1）



17



22



18



23



20



25



21



28



29

古墳時代土器（2）



36



44



37



45



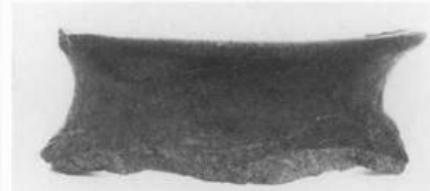
38



46



40



47



42



48



49



50



51



53



54



55



57

古墳時代土器（4）



56



71



73



59



65



72



奈良・平安時代土器（1）



31



32



39



40



42



48



46



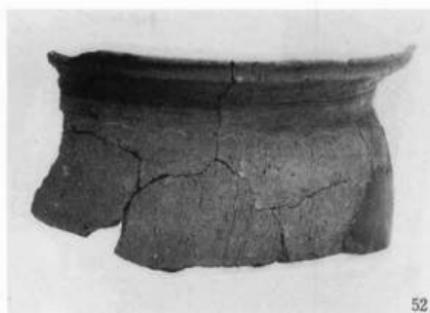
47



50



51



52



60



53



63



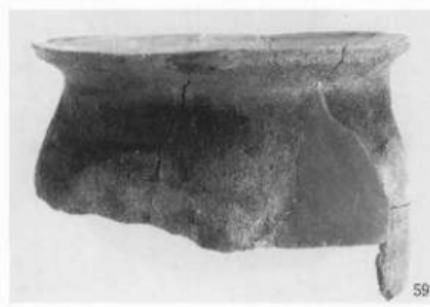
66



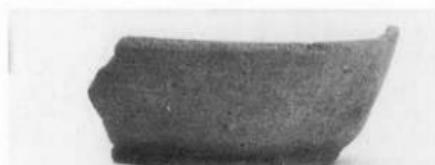
56



67



59



74



78



81



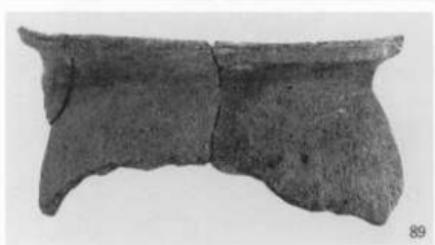
86



87



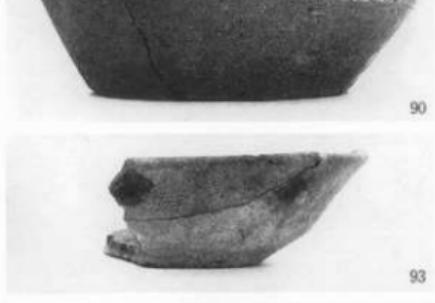
84



89



85



90



83

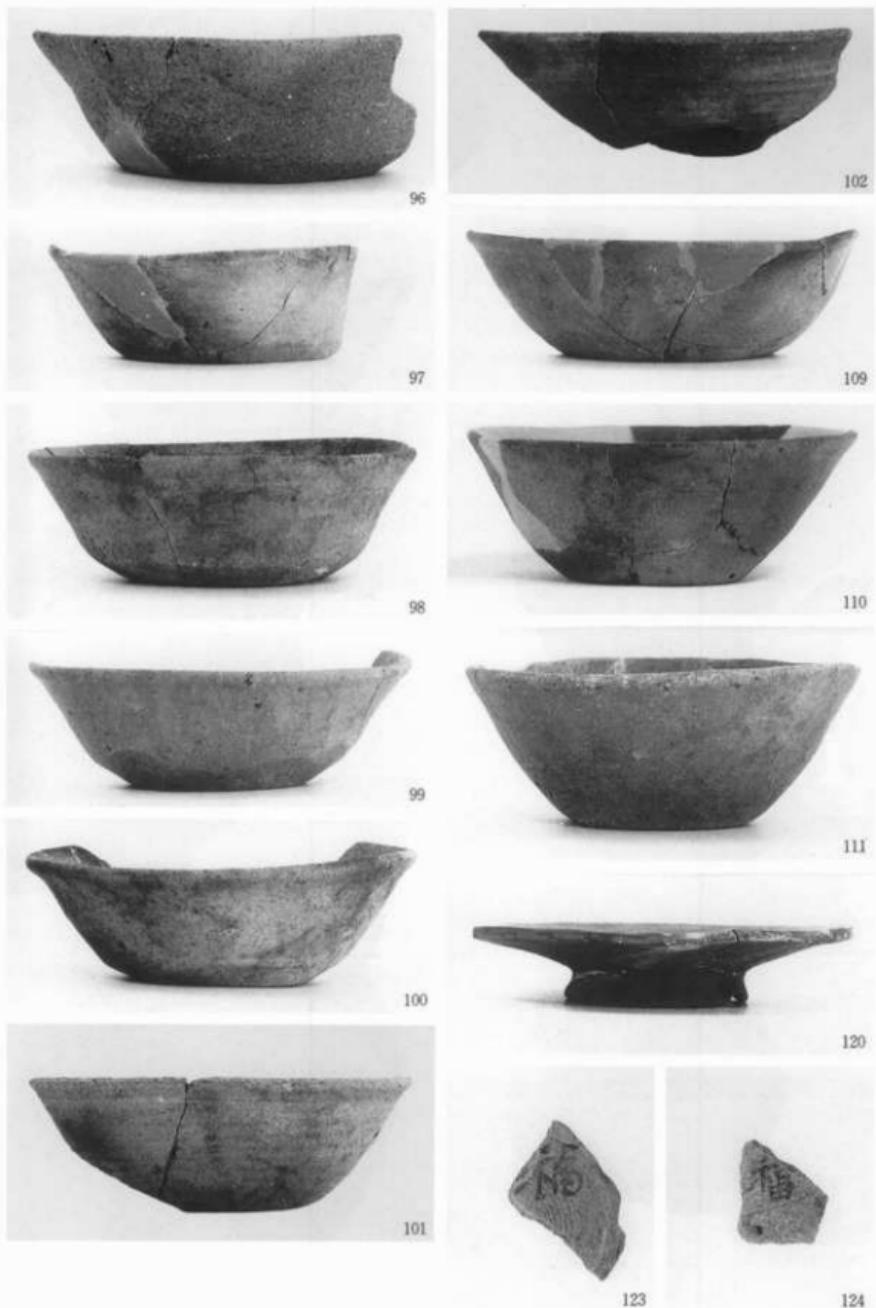


94



95

宮門遺跡



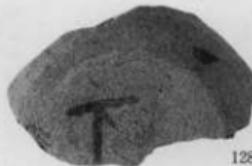
奈良・平安時代土器（5）



125



126



128



129



127



131



132



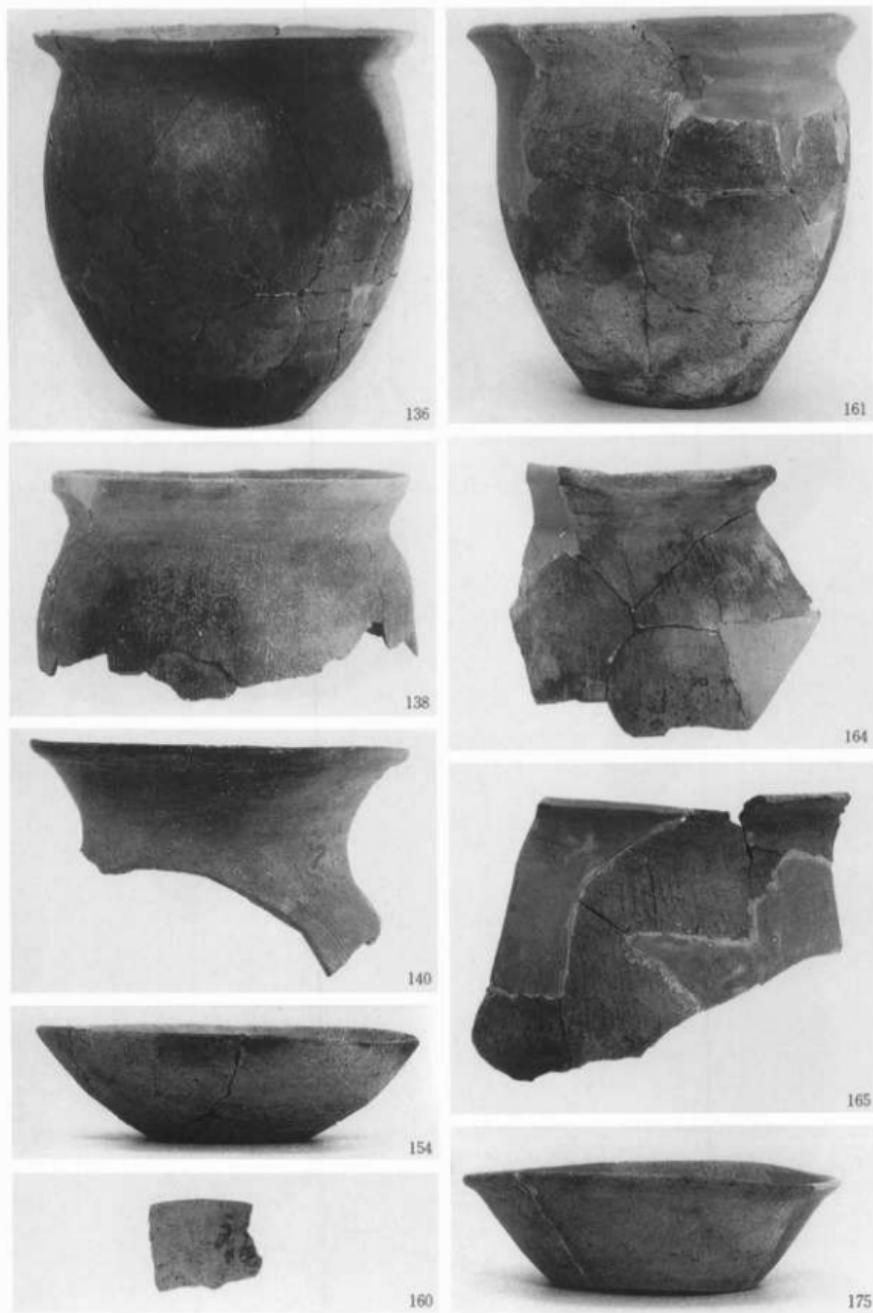
134



134



137



奈良・平安時代土器（7）



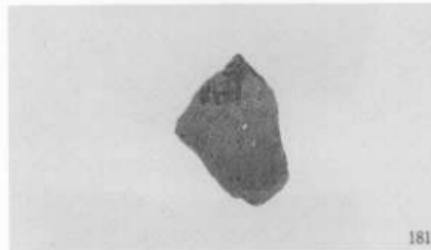
176



178



179



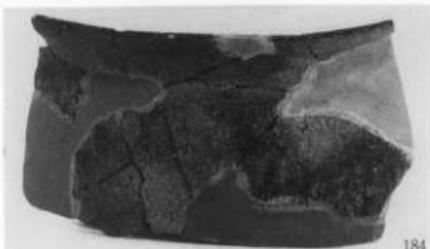
181



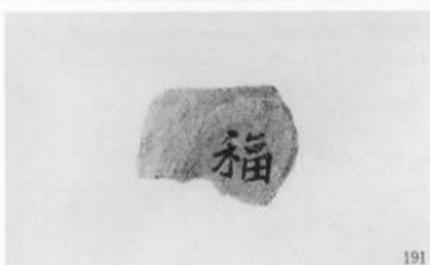
182



183



184



191



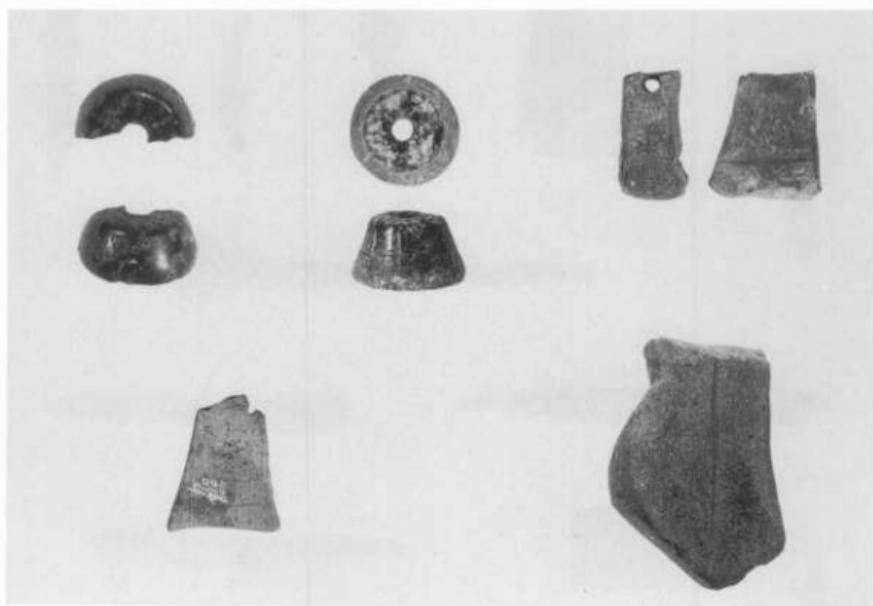
192



古墳時代土製品



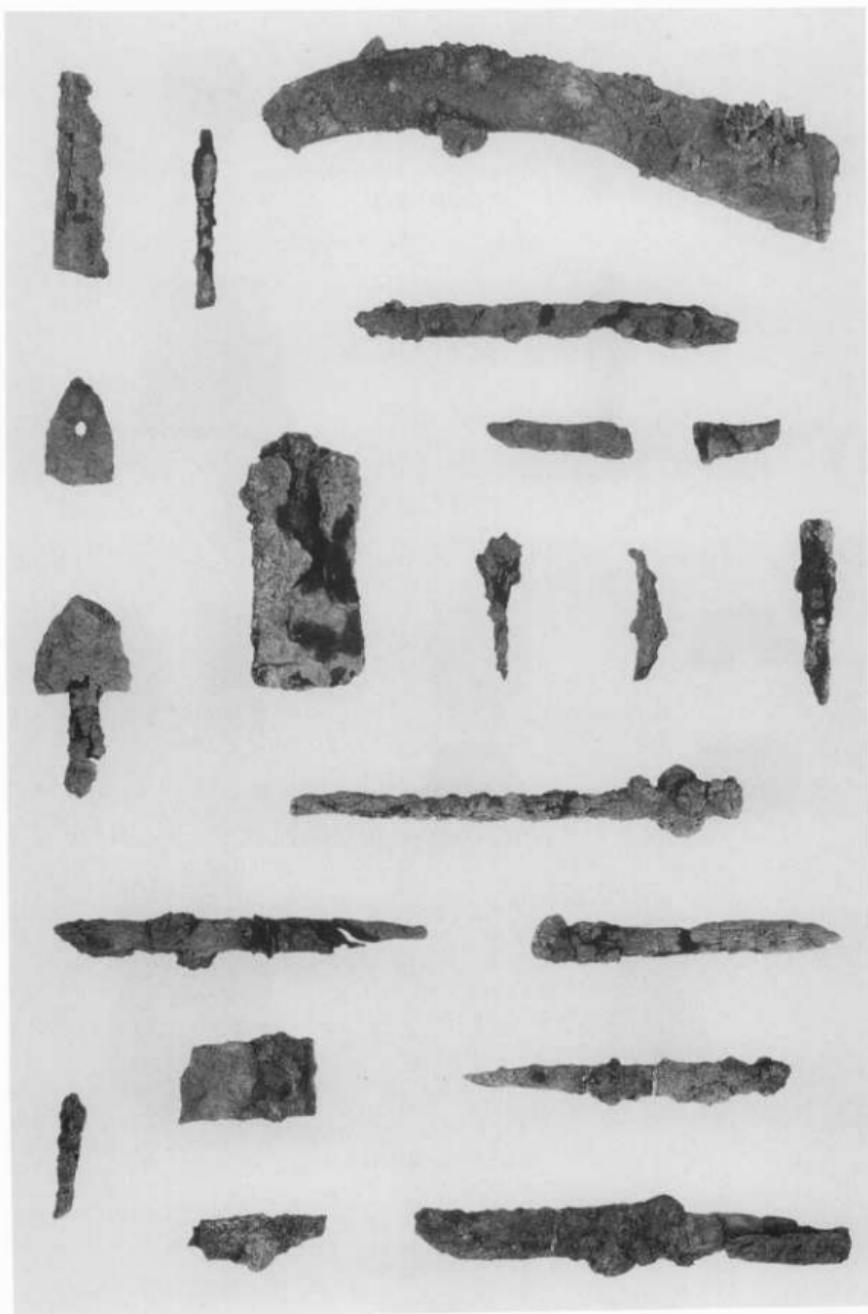
古墳時代石製品



奈良・平安時代石製品



古墳時代鉄製品



奈良・平安時代鉄製品

千葉県文化財センター調査報告第192集

主要地方道成田松尾線VI

—芝山町小池地蔵II遺跡・官門遺跡—

平成3年3月12日 印刷

平成3年3月20日 発行

発行 千葉県土木部
千葉市市場町1-1

編集 財團法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地

印刷 大和美術印刷株式会社
木更津市潮浜2-1-10
